
史書

風華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

史書

【Nコード】

N2812BA

【作者名】

風華

【あらすじ】

中華風と和風の間のような世界観のお話です。
双龍国と呼ばれる大陸には、いくつもの国があった。
あらゆる国が不穏な動きを見せる中、一人の少年が嘉国にやってきた。

紅い髪をもつ少年、紅貴は洸国を救うため、嘉国最高位の武官、二將軍と、嘉国で得た仲間と共に旅に出る。
(自サイトからの転載です)

第一章 北の青い空 1

双龍国と呼ばれる大陸。北の大国、洸に次ぐ大きな領土をもったその国は嘉と呼ばれていた。南にあるその国は、しかし、暑すぎず、1年を通して穏やかな四季があった。今は春。春の初めに都で開かれる祭りが終わり、微かに桜が散り始めている時期だ。

嘉の都李京は、南と西は、低い山で囲まれている。低い山であるが、その頂からは正方形の李京を見ることが出来る。その低い山々の隙間を、都に通じる道が通っていた。李周道と呼ばれるその道の入り口、李外門の入り口には兵士が立ち、横の検問所では役人が待機しており、身元の確認を行う。朱の門を通り抜けると、都に向かう人々の目には、春であれば、道の両端に植えられた桃色の桜の木が映る。人々がその桜の美しさに漏れるため息をつくという行為は、李周道のいたるところで見られた。やがて、李周道が終わり、李京の入り口に差し掛かると、鳳門と呼ばれる、李外門以上に大きな朱色の門が現れる。その柱には嘉を守ると言われる獣の一つ、鳳凰が彫られていた。鳳門を開けば、煌路と呼ばれる広い路が煌李宮に通じている。やはり両端には桜の木が植えられ、春には桃色の桜が咲く。そして、春も半ばを過ぎた今、都の南にある温かい海から吹く潮風に運ばれて、花びらが舞っていた。

煌路の脇の細い小道。昼であってもその小道は薄暗かった。桜と共に運ばれる潮風に、一枚の薄い紙が飛ばされた。一人の少年がそれを追いかける。

「あ、おい、ちょっと待てよ」

飛ばされた紙が、灰色の石畳の上に落ちた。それを見た少年は、紙をとらえようと手を伸ばすが、風が紙をさらに遠くへ飛ばしてしまった。風が止んだ頃には、紙は少年の手の届かないところへ行ってしまった。

「どうしよう……。俺、地図がなきゃわからないのに」

そういつてため息をついた直後、ちゃりんという音とともに何かが横を通り抜けた。少年は、一瞬何が起こったのかわからなかった。しかし、とっさ懐に手を入れてみると、そこにあったはずの財布がまるごと無くなっていた。目の前には走り去る男がいる。

「ちよつと待て！俺の財布を返せよ！」

少年はそう言いながら財布をとったと思われる男を追いかけたが、転んでしまった。

「いつて〜！おい、俺の財布返せ！」

男は少年の方を振り返った。着古した服を着たその男は嬉しそうに笑っている。

「それは俺の財布だぞ……！あ、その兄さんそいつ俺の財布取ったんだ！取り返してくれ！！」

偶然だろうか。財布をとった男の背後から、黒い服を着た青年が現れた。青年は、少年の声を聞いたのか、顔の表情一つ変えずに男を見る。

「だそうだ。盗ったなら返してやれ」

青年は低く淡々とした声で言った。

「だ、誰が渡すか！こつちだって生活かかってるんだ！」

男はそう言うのと短刀を取り出した。それを見た少年は思わず心の中で悲鳴を上げる。

「兄さん、やっぱり俺の財布なんていいから逃げて！」

少年の言葉は届いたのか届かなかったのか。青年は軽くため息をついただけだった。少年には、自分の言葉を見捨てられているように感じられた。青年は、相変わらずの無表情で言葉を続けた。

「馬鹿なことはいない方がいい。どうせしばらくしたら嘉の兵が駆け付ける。その前にあの餓鬼に財布を返してやったほうが賢明な判断だと思うが」

「わたしわけにはいかねえ！」

男は震える手で短刀を青年に向けようとした。少年が見たのはそこまでだ。思わず目を瞑ってしまったのだ。少年は、微かに震える

体を自分の手で抱きしめた。ドクドクという心臓の音が自分の体中に響いている。やがてドスツという音とともに辺りは静かになった。時間がたち、少年の耳に声が届いた。

「おい」

声は青年のものだった。おそろおそろ瞑っていた目を開けると、片手を腰に当て、見下ろしている青年の姿があった。その横にはたしかに紅貴の財布をとったと思われる男が気絶している。

「あ…」

青年はため息をつくと赤い布でできた財布を見せた。

「お前の財布はこれか？」

少年は大きくうなずいた。自分の財布を見てやっと安心することができたのだ。

「うん！ありがとう」

青年は、財布を投げてよこすと口笛を吹いた。何をやっているんだろうと不思議に思っていると、青年の背後から黒い馬が現れた。黒い馬の背中には翼が生えている。翼をもつ馬のことを天馬といい、すべての生き物の中でもっとも速い足をもっていた。が、同時にそれを扱うのは軍人であっても困難だという。振り落とされてしまえば、軽傷では済まない。そんな天馬を目の前にいる青年が扱えることが知って少年は驚いたのだ。それに、少年は黒い天馬を見たことがなかった。天馬はたいてい茶色の毛並みを持っているものだ。

「それ、お兄さんの天馬？ かつこいいな！」

少年は興奮を隠さずに弾んだ声で言った。しかし、青年は何も答えずに、天馬の手綱を手にとって背中を向けてしまった。少年にはそれがなんだか惜しいことに思われ、思わず声を出す。

「ちょっと待って！」

「何か用か？」

何か用があつて青年を呼んだわけではない。少年は口ごもる。

「そ……その…」

「用がないなら帰るが」

少年は急に何かを思い出した。李京内部の詳細が書かれた地図は先ほど飛ばされてしまったのだ。そして、自分はどんなことがあっても煌李宮に辿り着かなければならないのだ。だが、地図無しでたどり着ける自信はまったくなかった。青年に案内を頼めないだろうか。

「あの、俺李京の地図を無くしちゃって。そのさ、どうしても煌李宮に行きたいんだけど行き方がわからなくて。で、迷っていて……」
それまで変わらなかった青年の表情が微かに変わった。青年が疑わしげに見下ろしてくる。

「それ、本気で言っているのか？」

「うん。なんとか李京についたんだけど、煌李宮の行き方がわからなくて、しかもさっき地図まで飛ばさ……」

「お前馬鹿か？」

全て言い終わる前に青年が割り込んで言う。

「どうやってたら煌李宮に行こうとして迷子になるんだよ。鳳門からまっすぐ行けば良いだけだろう」

「それがさ、煌路の脇の小道っていっぱい店あるだろう。見惚れてたらいつのまにか道に迷っちゃって……」

青年はため息をついて、呆れたように言う。

「まあいい。どうせ、俺も煌李宮に行く。邪魔しないならついてこい」

少年は笑って頷いた。

「退屈だわ」

街道に面した茶屋の奥。人が少ないその場所で、一人の女性が座っていた。憂いを帯びたように見える女性の横顔を見て、店主はほおつと息をはく。その女性そこにいるだけで、見る者をくぎ付けにしてしまう。肩よりも長い黒髪は癖を知らず、そのまま零れ落ちていた。白く透ける肌はシミひとつ無い。憂いを含んだように見える黒い瞳はどこか遠くを見ていた。彼女こそが、李京一の美女と言わ

れる、白琳^{はくりん}だった。見た目が美しいだけでなく、幼いころからその頭脳の高さは周りを驚かせ、現在は医者として名高い。その、絶世といってもおかしくない女性、壮^{さう}白琳^{はくりん}は、人々の憧れの的だった。

「何が退屈なの？」

人が近づく気配はなかった。しかし、たしかに背後から声が聞こえた。店主は驚いて後ろを振り返った。そこにはにこやかにほほ笑む青年の姿。店主はその姿をみて目を見開く。肩まである黒い髪は柔らかそうだ。男性でありながら作り物のように整った容姿である。肌は白く優美であつたが、かといって不健康に見えるわけではない。背が高いその青年は細身ではあつたが、痩せすぎというわけでもなかった。軽装化した、紺色の軍服がよく似合う青年だ。腰に下げてある通常のものより大きな剣。その剣の鞘は白。細い銀で細工してあるその剣の持主の噂を店主は聞いたことがあつた。

「あなたはもしかして、駿様ですか？」

「そうですよ。俺の名前を知っているなんて驚きました」

駿はそういつて、面白そうに笑った。店主は早口で言う。

「それはそうですよ！駿様と言ったら、そのお年で麒麟軍に入られたお方！頭も良く、剣の腕も優れていると……！大変優秀な方だと聞いております！」

駿はかなり優秀な軍人だった。この嘉という国には禁軍と呼ばれる軍がある。王の持ち物であるこの軍が嘉国において上位に位置している。しかし、それを凌ぐ實力を持った者たちの軍が二つあつた。二將軍と呼ばれる、この国の宰相に並ぶ位を持つ武官がそれぞれ所有する軍だ。二將軍は慣例として、この国を守ると言われる獣、鳳凰と麒麟から一字取つて、王から名が与えられる。鳳凰の名をもつ將軍の軍を鳳軍と言い、麒麟の名をもつ將軍の軍を麒麟軍と言つた。その軍に入るのは狭き門であり、禁軍においても上位の實力を持つものしか入ることができなかった。二つの軍に所属する軍人は、それぞれ禁軍將軍に近い實力をもつただけだった。駿は、わずか

18歳でその麒麟軍に入ること許されたのだ。

「ありがとうございます。そんな風に言っていただいて光栄です」

駿は照れたように、笑みを浮かべた。

「期待に恥じないよう精いっぱい働かせていただきます。ところで、お茶と、芋羊羹をいただけますか？」

「はい！すぐにお持ちします！」

「ここの席座るね」

駿は白琳の前の席に座った。

「お仕事は良いんですか？」

「さすがにこんなに長い間休暇がないと疲れるから休暇もらったよ」

「麒麟も急がしそうですものね」

白琳はクスクス笑った。

「ところで、退屈って言ってたけどもしかして……」

「たぶん、あなたの予想通りよ。あなたの上司で、友人でもある翡翠様がいないと退屈だわ」

「麒麟様……いや、翡翠は……」

「良い暇つぶしだ」「良い玩具ですわ」

白琳と駿の声が重なった。麒麟という字を持つ、麒麟軍の將軍、本名翡翠は白琳と仲が良かった。世間一般の『優秀な將軍』という印象からは想像がつかないことだったが、翡翠は白琳に頭が上がりない。そして、駿は翡翠と子供のころからの親友だったのだが、駿はよく翡翠で遊んでいた。翡翠が駿の上司となった今でもそれは変わらない。

「翡翠様いつ頃帰ってくるんでしょうね」

「そろそろ帰ってくるんじゃないかな。でも、白琳、悪いけど、翡翠は当分事務処理で忙しくなると思うな。あいつも、部下に仕事押し付けしないで、たまには自分でやった方が良いと思うし、わざと仕事残して休暇もらったんだ」

「あら、翡翠様には当然の報いですわ。計算が苦手だと言って計算

が入ると全部部下の方に任せているのでしょうか？たまには翡翠様が自分でやるべきだと思うわ」

そう言っていると、白琳はクスリと笑った。そんな白琳に駿も笑みで返した。一見李京一の美男美女。二人がそこにいるだけでも場の空気が変わる。そんな二人がこういった会話をしているなど誰もが夢にも思っていなかった。

第一章 北の青い空 2

青年についていった少年は、日の光が当たる煌路に出た。温かい光の中に出てわかったことだが、目の前にいる青年は、茶髪だった。少年は、路の様子を見まわした。裏の小路の様子とは様変わりし、柔らかな昼の日差しで灰色の石畳が白く反射している。その中央を、小川のように水が流れていた。路の両端には桜の木。先ほどまでいた小路とは違い、幾人もの人が歩いていった。そして、やはり、時々吹く、南の海からの潮風が桜の花びらをはらはらと散らせていた。噂には聞いていたが、綺麗な都だとそう思った。今はもう終わってしまっているが、春の初めの桜祭ではもっと美しくなる、というのを少年は聞いたことがあった。

ふと少年が正面を見てみれば、少し長めの茶髪を下の方でしばっている青年は、だいぶ前の方へと進んでしまっていた。少年は小走りで青年を追いかけて、青年の横に並んだ。ふと、青年の横顔を見上げて、少年は驚く。今までくらい小道にいて気付かなかったが青年の瞳は翠色をしていた。少年は翠色の瞳をもつ人物を見たことがなかったのだ。思わずまじまじと青年の顔を見つめる。少年の視線を感じたのだろうか。少年より頭一つ分近く背が高い青年は少年を見下ろした。

「……俺の顔になんかついてるか」

相変わらずの落ち着いた声で青年が言った。

「あ、いや、ただ、翠色の瞳なんて珍しいなあって思って」

青年は、やれやれというように、軽くため息をついただけだった。慣れた反応なのかもしれない。

「嘉って綺麗な国だな。噂で聞いた通りだ」

「……お前は外の国から来たのか？」

少し間を置き青年が問う。

「あ、うん」

「…お前の髪の色、珍しいな」

少年はああ、と頷くと癖のある赤い髪を手を取った。少年の髪は、赤みがかった茶色でも、何かで染めた赤でもなく、純粹な赤だ。

「この髪の色が目立ったからかな？今、双龍国でもっとも安全な嘉にいるのに、財布をとられそうになったのは」

少年はふと思いついた疑問を口にする。双龍国といわれるこの大陸には、北の洸を始め、八つの国が存在しているが、嘉以外の国は落ち着かなかった。ある国では貧困にあえぎ、また、国同士で何年も戦争をしている国もある。そんなご時世に、嘉だけは違々と聞いていた。

「…お前、名はなんだ」

「紅貴」

兄さんは？そう問う前に、青年の言葉がそれを遮った。

「紅貴、確かに嘉は双龍国の中ではもっとも安全な国だ。だが、昔ほど治安は良くない。周りの国があれば荒れていて、嘉も昔のようにのんびり平和っていうわけにはいかない」

赤い髪の少年——紅貴は、青年が言おうとしていることがつかめずに首をかしげる。そんな紅貴を見てか、青年は呆れたようにため息をついた。

「ある程度落ち着いている国はここら辺だと、嘉だけだろう？逃げるとしたら嘉以外の選択肢は考えられない。……当然だが他国から嘉に来た難民が増える。嘉の国民とそれ以外の難民とで、格差が生まれる。この国で成功する奴は良いが、そうじゃない奴もいる。すると、そいつらの中には罪を犯す者もいる。あの、薄暗さじゃ、紅貴の髪の色は目立たない。髪の色のせいなのかもしれないだろう…紅貴、お前、見た目に違わず馬鹿だな」

青年が、輕蔑しているような気がし、紅貴は微かに怒りを感じた。「そんな言い方ないだろう。たしかに、兄さんと違って、髪の色以外特徴ないし、平凡な容姿だし、弱いけど、そんな冷たい言い方しなくたって良いじゃないか」

目の前にいる青年は確かに、並以上、いや、かなり端正な顔立ちをしていた。天馬を扱えると知って、憧れにも似た感情を覚えていた。しかも青年は紅貴の目の前で、財布泥棒を倒して見せていた。しかし、人が話していてもにこりともせず、この冷たい言い方。この青年は性格が悪いのではないだろうか、紅貴は思った。先ほどまで持っていた憧れに似た感情も、消えていくのを感じた。

「紅貴はただの難民というわけでは無さそうだな。……嘉、いや、煌李宮にいったい何の用だ」

青年は紅貴の心の内を知ってか知らずか、相変わらずの口調で続けている。紅貴は、不機嫌な様子を隠さずにそれに答えた。

「兄さんには関係ないだろう」

「いつておくがそう簡単に煌李宮には入れないと思うぞ。一般人が進めるのは煌北門の先、煌李宮の正面、麒麟までだ。……一応、王が住む場所だからな」

「そんなことはわかってる！それでも俺は何が何でも煌李宮に行かなきゃいけないんだ！」

紅貴は、青年を睨んだ。紅貴が叫びにも似た声を上げた直後、その声に共鳴するかのように、穏やかだった風が急に強くなった。はらはらと漂っていた桜も、吹雪のように舞い散った。青年は何を思っているのだろうか。口の端をほんの少しだけ緩めて微かに笑うと、淡々と言う。

「……俺の名前を言っていなかったな。翡翠だ。煌李宮にいる兵は強い。財布一つまともに守れないような餓鬼一人じゃ煌李宮の侵入は無理だ。俺が手伝ってやっても良い」

翡翠の意外な言葉に紅貴は目を瞬いた。

「でも翡翠さん……」

「翡翠で良い。それはそうと、もうじき煌李宮に着く」

翡翠が指を指した方を見ると、白い石でできた城のようなものが見えた。白は二層に別れており、上層にも下層とも数人の兵士が待機していた。下層には人が通り抜けられるような空間がある。

「煌北門だ」

紅貴は、絵でしか見たことがないその門の名をつぶやいた。紅貴の目で、はっきりと兵士の顔をはっきり見ることが出来る位置まで近づくと、こちらに気づいたのか兵士が、頭を下げた。ちらりと紅貴が横を見ると、翡翠はなぜかため息をついている。紅貴にはそれが少し不思議に思えたが、考えてもきつと翡翠の考えていることなどわからないだろうなと思った。

煌北門を通り抜けると、細かい彫刻があしらわれた門が現れた。この国を守ると言われている獣の一つ、麒麟の彫刻だ。ゆえにこの門は麒麟と呼ばれた。

紅貴は麒麟を正面から見ると、あの門を通れば、その先は煌李宮だ。紅貴はこれからしようとしていることを思い、喉をぐくりと鳴らした。

「……言ってなかったが、俺は嘉国の軍に務めている。お前が煌李宮に入れるように話をつけてくるからその辺でまっっている」

無理やり煌李宮に侵入する覚悟をしていた紅貴は、気が抜けるのを感じ、そして同時に安堵のため息をついた。だが、と彼は思う。これから成そうとしていることの重さは変わらない。

第一章 北の青い空 3

煌李宮の北、煌龍門と呼ばれる門がある。天に昇る龍の形がかたどられたその門の先は、内廷と呼ばれ、この国の王族の生活の場となっている。煌龍門を抜けた先には、やはり、白い石でできた路。その左右は、池と呼ぶには大きく、水だまり。小さな湖のようになっている。東の湖の上には、季節の花が咲く、庭園のようなものが浮いている。西の湖には、林が浮いていた。その林の上を今は、黒い翼をつけた馬が飛翔している。それを、内廷の内から見つめる少女がいた。

「烽国の首長が、津国の者に倒されたという情報が入りました。二国の争いはますます激しくなるで……」

「天之助だ」

内廷の西の一室、黒漆でできた円卓を囲んで、二人の男と、一人の少女により、会議が行われていた。先ほどから、ずっと話をしている、黒に近い青い官服を身につけた男の本名は、康莉こうりといい、嘉国の文官の最高位である、宰相の位についていた。宰相は、嘉を守るといわれる、獣、靈龜れいきより、龜かめという字をとって、王より名を与えられる。故に、康莉の字は康龜こうきという。

康莉が話している途中で声を上げたのは、桃華という少女。淡い桃色の丈が短い服を着て、茶髪をお団子にした少女は、まだ、十代半ばだった。顔立ちも幼く、綺麗というよりも愛らしいという言葉が似合う。踊り子などをやっているようなその少女は、実際にはその出で立ちからは想像しにくいことだが、武官だった。たしかに、その腰には黒い鞘に入った刀と、脇差しが帯刀されている。そして、鳳凰から一字とった名を少女はもっていた。鳳華という字を持つこのあどけない少女は、武官としての最高位、二將軍の位についていた。桃華は、飲みかけのお茶を円卓に置くと、窓の方へ駆け寄った。

「やっぱり天之助だわ」

窓の方へ駆け寄り、桃華を、父親のように温かい眼差しで、着流しの男がむける。茶色い瞳に、はしゃぐ少女の姿が映り、男は柔らかく笑んだ。

「天之助っていうと、翡翠の天馬だったかな？確か桃華が名付け親だったね」

男は顎に生えた少量のひげをなでながら、柔らかい声で言った。着流しを着たその男は、たしかに、二將軍の名を本名で呼んだ。親しい間柄ではその限りではないが、字をもつ人間にたいして本名で呼ぶのは無礼とされている。本名で呼ぶことが許されているのは、その親と、そして、王族だけだ。この四十に入ったあたりの長身の男こそが、嘉国の国王、龍孫だった。

「翡翠は名前なんていらなくて言っただけで、それじゃあ、あの子が可哀そうでしょう？だから、私がつけてあげたんです。最初、翡翠はなぜか嫌がってたんだけど、白琳が説得してくれて、あの子の名前天之助になったんです」

桃華はそういうとにつこりわらった。何の屈託もないと言っさしつかえのない明るく愛らしい笑顔だ。

「天之助が帰ってきたということは、麒麟は弄国から帰ってきたということですね」

康亀がそう言うと、ちょうど扉が開き、翡翠が中へ入ってきた。

「翡翠お帰り〜お土産は？」

桃華はそう言って手を出す。翡翠はそんな桃華を無視し、まっすぐ王のところへやってきた。

「王、ここに帰ってくる途中に会った餓鬼に会って欲しいのです。多分、王に用だと思うので」

龍孫は、突然そんなことを言う翡翠を不思議に思い、微かに首をかしげた。不思議に思ったのは、康莉も同じだったのだろう。

「麒麟、子供を王に会わせたいとはいいたい……」

翡翠はそれには答えずに、王の目をまっすぐに見た。翡翠の視線

を受けて、——その内に潜む真剣な目の輝き——それに、王は気づいた。

「その餓鬼……真っ赤な髪を持つその餓鬼は、おそらく洸国から来たと思われます」

王は頷くと、先ほどまでとは口調を改め、言う。

「……わかった。その子どもに、玉座の間で会おう。康亀、玉座周辺の人払いを頼む。その子供と二人だけで話したい。私は、着替えたら、玉座に向かう。翡翠はその子を玉座に案内してくれ。弄国の報告は後ほど聞こう」

王がそういったその直後だった。ボタンという音が部屋中に響いた。音の中心にはうつ伏せに倒れている青年。確かに先ほどまで王と話をしていた青年が倒れている。康莉は、目を丸くして翡翠の方へ駆け寄った。

「麒麟、大丈夫か!？」

「翡翠どうしたの？眠いの？」

早口で言う康莉に続き、この場では場違いなのんびりとした桃華の声が続いた。

「多分、貧血だな。康莉、桃華」

龍孫はいったん言葉を切ると、割と背が高い康莉と、背が低く、細身の桃華を見比べる。うん、と頷くと、再び口を開いた。

「まず、桃華は、翡翠の代わりに赤い髪の子供を玉座まで案内してくれ。慣れない宮中で、子供をいつまでも待たせておくのも可哀そうだから、着替えたらすぐ行く。康莉は翡翠を頼む」

駿は、山のような書類を片手に内廷の回廊を歩いていた。回廊の上部にはめ込まれた硝子の窓は、開けられていた。春のやわらかな風と陽光が差し込み、駿を照らしている。耳に心地よい小鳥のさえずりが聞こえ、駿は上を見上げた。

「気持ち良いな」

そう、目を細めてつぶやきながら歩いているうちに、目的の部屋の

前にたどり着いた。宮中での翡翠の私室だった。駿は、書類を持っていない方の手で扉を開き、中に入った。

「相変わらず何もない部屋だな」

駿は、部屋を見回した。部屋の奥には大きな窓。そこにかかけられている簾は上げられ、煌李宮の湖が見渡せる。陽光が入る明るい部屋ではあるが、それ以外に特徴はなかった。生活に必要な最低限な物しか置いておらず、殺風景な部屋だ。部屋の主の性格を表しているようだ、駿は感じていた。

入って右の寝台をちらりと見ると、この部屋の主が眠っている。

駿はそれを見て微かに笑うと、入って左の机に書類の山を置いた置いた。その直後、紙が一枚ヒラリと床に落ちる。拾おうと腰をかがめた丁度その時、駿はもともと動く音を聞いた。そちらを見ると、翡翠が上半身だけ起こしていた。

「お前、俺の部屋で何しているんだ」

微かに眉間に皺を寄せている翡翠をみて、駿は質問に答えずに笑って見せた。代わりに、違う話題を切り出した

「久しぶり、といっても二週間ぶりくらいかな？」

「……」

翡翠は相変わらず、眉間にしわを寄せているままだ。

「翡翠が弄国にいつている間に、何回か白琳に会ったよ。いつみても綺麗だよ」

白琳の名前を聞いた翡翠の眉が微かに動いた。ほんの少しの変化だったが、駿はそれを見逃さない。一瞬の沈黙の後、翡翠が言った。

「駿……お前はわざわざそれを言いにきたのか……？」

翡翠のあからさまな不機嫌な声に、今度は微かに声をあげて笑った。

「そうじゃないけど、あれ？もし、そうだったら何か問題でもある？」

「……いや……あ！この忙しい時に兵士が、暇潰しに喋りしに来てたらまずいだろう。仕事に戻れ！」

突然思いついたように言う翡翠が可笑しい。駿は微かに笑いながら答える。

「翡翠、俺はどこかの將軍と違って、半年ほど無休だったんだよ。それで、今日休み貰ったんだ。だから休みの日に俺が何やっても自由だろう？翡翠の方こそ今日は休みじゃないだろう？こんなところで寝ていて良いのか？」

「……昼寝ぐらい問題ないだろう」

プイッと壁の方を向いてそう言った翡翠に対し、駿は『確信』を口にする。

「なんだ。昼寝か。俺はてっきり翡翠が貧血かなんかで倒れたのかと思ったよ」

そう、にこにここと笑っていると、駿の背後の扉が開き、髪をお団子にした少女が顔を覗かせた。

「翡翠、貧血大丈夫？」

そう言いながらも、桃華の声からは心配している様子を感じられない。花が咲いたように明るく笑うと、翡翠は深いため息をついた。「翡翠が連れてきた赤い髪の子……紅貴だっけ？玉座連れて行ったよ」

「あれ、翡翠が子供連れてくるなんて珍しいね。子供嫌いだろう？」

「たまたま目的地が同じだったから一緒に来たっただけだ」

「ふん……？常に仏頂面の翡翠に声かけるなんて、そんな勇氣ある子いるんだね」

「……お前ら無駄口叩きに來ただけならすぐこの部屋から出る」

「違うよ！ちゃんと用事があつて來たんだもん」

桃華は口を尖らせて言う、手のひらを上に両手を出した。

「おみやげ」

「は？」

「だからお土産っ」

桃華はにっこりと笑った。

「なんで俺がそんなのを買わなきゃいけないんだ」

「えゝ？だつて、仕事とかで遠くに行つたときはお土産を買つ決まりでしょう？」

「そんな決まり作つた覚えはない」

桃華は、翡翠の声を聞きながらも部屋のはじの戸棚に近づき、革でできた翡翠の鞆を漁りだした。しばらくたち、目的のものを見つけたのか、嬉しそうに桃華は笑った。

「これ、お土産でしょう」

竹の皮で包まれた物を取り出し、桃華は翡翠の許可を得る前に開け出した。部屋に、ほのかな桃華の香りが漂う。

「桃饅頭だゝ。私、桃饅頭大好き」

嬉しそうに桃饅頭を頬張る桃華と、溜息をつく翡翠を見比べ、駿は静かに言う。

「翡翠も桃華ちゃんに甘いんだな」

「は？」

「宮中の人間は皆鳳華様に甘いからね」

駿はそう言つてほほ笑んだ。二將軍の一人、鳳華、本名桃華は、その容貌のためか、性格の為か可愛がられる傾向にあつた。十六歳になるのだが、その容姿は十三歳程度にしか見られなかった。駿が初めて桃華に会つたのは四年前。駿と翡翠が十七歳、桃華が十二歳だったのだが、実際、その頃からほとんど桃華の容姿は変わっていない。昔から大きな黒い瞳はいつもきらきら輝いており、桃色の口元はいつも笑顔を象っている。どんなささいなことでも素直に喜び、天真爛漫という言葉が似合う、そんな子供だった。

でも――駿はちらりと桃華の黒い刀を見た。一度刀を抜けば、その実力は他者を圧倒する。たまたま王族と親交が深かつたとか、前二將軍が恩師であるとからいつた理由で桃華は二將軍に命じられた訳ではないことを駿は知っていた。

「おい、駿も桃華もいい加減この部屋から出る」

翡翠が腕を組んだまま、機嫌の悪さを隠さずに言った。

「そうしたいところだけど、俺も遊びに来たわけじゃないから、伝

えたいことだけ伝えたら出るよ」

駿は机を指差した。机の上には先ほど駿が置いた書類の山。

「仕事を持ってきたんだ。明日までに頼むね」

「ふざけるな」

「さて、ここにいっても邪魔だろうし出ようかな。桃華ちゃんも部屋でようか」

駿は柔らかに笑うと、最後に言う。

「どうせ、翡翠のことだから、お金の計算を間違えたんだろう。旅の資金を前半でほとんど使い切って、後半はほとんど金なくなつて食事できなくなった、つてことが前にもあったしね。そんな自業自得の奴の仕事を代わりにやる優しさは持ち合わせてないから仕事頑張れよ」

駿はいったん言葉を切るとにやりと笑う。

「まあどうしても大変だったら白琳にでも手伝ってもらうんだね」

俺は休みを満喫するよ、と、軽口を言つて駿は部屋を出て行った。

第一章 北の青い空 4

洸嘉十三小国戦国期。圧倒的な力を持っていた洸は当時の嘉の真ん中に、位置する凜河まで兵を進めていた。洸は、大陸征服まであと、一歩だったのである。当時の嘉王は、洸の思想に危機を感じていた。これ以上洸の領土を広められるわけにかなかったのだった。だが、洸は秘密の戦闘力をもっていた。その力は絶大だった。戦国期、最強の武人、嘉の『二勇士』でさえ、その戦力に抵抗することは出来なかった。嘉王は、苦渋の決断の末、あることを交わす。『凜河の盟』。これにより、凜河を互いの国境とし、お互いそれ以上領土を推し進めないことが決定した。同時に、戦国期の終わりを告げた。

『史書』天の巻より

煌李宮、玉座の間につれてこられた紅貴は、無人の玉座を見つめた。塵一つ見当たらない黒い石でできた階段の先に、それはある白を基調としたその椅子には銀がちりばめられていた。しかし、眩しすぎず、それが美しい華を描いていた。今は、そこに座るべき人物の姿はまだ見えない。誰もいない玉座の間は当然、静かだった。自分の存在はこの場ではあまりにも異質だと、紅貴は感じた。目のやり場に困った紅貴は自分が立つ床を見る。まっ平らな黒い石でできた床は、上部から差し込む日の光を受け、わずかに反射していた。床の上に、銀で描かれた絵は、その特徴から、この世界を作り出したと言われる妖龍と神龍だろうと、紅貴は推測した。

（そういえば、翡翠はなんで、俺が国王に会いたいつてことがわかったんだろう）

紅貴は煌李宮に行きたいと言ったが、王に会いたいと思っっているとは翡翠に話してはいなかった。でもたしかに……紅貴はふと、ここまで案内した少女を思い浮かべる。翡翠に頼まれたというその

少女は、確かに「紅貴が王様に会えるように、翡翠が説得したんだよ。あその玉座の間にいれば王様来るからちよつと待つてて」そう言ったのだ。やがて、かつかつという音が玉座の間に響いた。足音は紅貴がいる正面からだった。ゆつくりと顔をあげると、暗い紫の衣をまとった中年の男が玉座に腰かけるところだった。優しげな茶色の瞳が、紅貴をまっすぐに見た。その視線とぶつかり、紅貴は自分の心臓が、緊張のためにときどきと高鳴るのを感じる。震えそうになる自分をなんとか抑え、膝について頭を下げた。そして、ゆつくりと言葉を紡ぎ出す。

「私は、紅貴。わたくし いや、——です。これが証拠です」

紅貴は懷から、赤い巻物を取り出した。金糸を解くと、巻物は金色の光を發した。

「洸より、嘉王様をお願いをしたく、参りました」

「話を聞く。顔を上げよ」

王に促され、紅貴はゆつくりと顔を上げた。巻物もしまい、再び元のほのかな日の光が照らすのみの玉座になった。紅貴は、再び王の顔を見る。優しそうに見える国王は、やはり、それだけでなく王としての威厳を漂わせている。——やっぱり王なんだ。逆らうことができない何かをまとっているように、紅貴には感じられた。しかし、紅貴は言葉を続ける。

「現、洸国皇帝、紫淵しえんは、行きすぎる悪政を敷いています。……まだ表立った活動はしていませんが、民の中には悪政しか行わない皇族を誅し、洸国の民を救おうと考えている者がいます」

「そなたはどうするつもりだ」

「私は民の味方をします」

「ほう」

王は、髭を撫でながらおもしろそうに笑う。

「……洸国皇帝の軍と、一介の民の軍。その戦力にはだいぶ開きがあります。とてもではありませんが、今のままでは戦うことなどできません。そこで、お願いがあります」

紅貴は手から汗が流れおちるのを感じていた。——これを言うために嘉へやってきたのだ。

「嘉の援助をいただきたい」

「凜河の盟は知っているか？」

「……存じております。表立った支援は要求いたしません。ですが、内密に、ある人材を貸していただきたいのです」

「人材？」

「個人の単位で戦える人間はいても、それを指揮できる人間がいま
せん」

「いや、正確にはいるのだ。いるのだが……彼には他の役目をやって
もらう必要がある上に、その前に片づけなければならない問題があ
る。」

「戦略を練り、それを指揮できる人間……それを貸していただきたい
い。それから、嘉には『癒し』の力を使える方がいると聞いており
ます。その方に救っていただきたい人がいます」

「そなたのいう要求を聞いて、嘉に良いことはあるのかな」

王は、変わらず笑みを浮かべている。それに対して、紅貴も笑みを
作った。知将と呼ばれた、今は亡きかけがえのない人物の表情を心
に描いて。

「もちろんです。私は、お願いだけでなく、提案しに参ったのです
から。洸の皇帝を倒したら、嘉に多大なる利益が与えられることを
知らぬ私ではありません」

李京の南は港になっている。白い石でできた波打ち際に、それほ
ど強くない波が打ち寄せ、繋がれた何艘もの船が波に揺れていた。

その上を通り抜ける風が——夕暮れの　かすかに冷たい風が、港
の縁で、海に向かって足を投げ出して座っている女性に向かって吹
きつけた。

「さすがに夕暮れの海は寒いわね」

そう言って、十代後半の女は、蒼い瞳を水平線の西にむけた。日

はすでに半分ほど沈み、蒼い海を金色こんじきに変えている。美しいのと同じ時にどこか切なげな情景だと、女は思っていた。

「考え事ですか？瑠璃」

紺色の着物を、片手で撫でつけていると、背後から聞きなれた女性の声が聞こえた。振り返ると、20代前半の女性が、優しい笑みを浮かべている。夕日に照らされたその顔はひどく美しい。

「白琳こんなところでどうしたの？」

白琳は瑠璃にほほ笑むと、柔らかい声で言う。

「考え事する時、瑠璃はいつもここに居ますから。何かあったんですか？」

「ちよつとね」

少しの間、二人は何も言わない。波の音だけがそこにあった。やがて、白琳が静かに口を開く。

「……やっぱり洸に行くおつもりですか？」

「さすが白琳ね。考えていることはお見通しつてわけね」

「何回か相談受けていましたし、それに、私は瑠璃の親友でしょう？」

ほほ笑む白琳の笑顔は、不思議と瑠璃を安心させた。白琳自体がそういう人柄だというのもあったが、白琳とは長い付き合いだったのだ。幼い頃は、兄、翡翠の友人だった。やがて何度も会い、時が経つうちに、いつしか親友と呼べる関係になったのだ。

「洸にはいつか絶対行かなきゃいけないわ。それが今のような気がするんだけど……でも」

瑠璃は噂でしか知らない洸の様子を思い浮かべる。双龍国の北にあるその国は、荒廃が酷いという。皇帝の圧政が続き、治安は最悪。双龍国の各地で起こっている戦争の背景には洸があるという噂もあった。

「わたしみたいな一般人が行って、無事で済む国だとは思わないわ……傭兵を雇うっていう手もあるけど、いくら傭兵でも、洸には行きたがらないと思うし、嘉国公認の武官……郷兵や禁軍兵、二將軍

の兵士が、洸に行くのは『凜河の盟』で禁じられているでしょう？」

凜河の盟とは『史書』天の巻に記された嘉と洸の盟約だった。嘉の子供であれば、その重要な部分は塾で習う決まりになっている。また、凜河の盟が記されている『史書』天の巻、この世界の創世が書かれた『史書』創世の巻は、文官、武官問わずに、この国の役人であれば暗記しているのが当然だった。それほどまでに重要なきまりなのだ。それを破れば嘉と洸は戦争になる、というのを瑠璃は聞いたことがあった。

「こうなるんだったら桃華に剣の使い方を教えてもらっていればよかった」

瑠璃は友人の名前を出してため息をついた。いや——妹ともいうかしら？友人というより、妹のようだと思っていた。昔から言動が幼く、一人でできることは少ない。部屋の片づけもまともにできず、髪を結ぶのも苦手な桃華の世話をするのはいつも瑠璃だ。しかし、そんな瑠璃でも、桃華に敵わないものは武道だった。どんなに言動が幼くとも、彼女は、二將軍であり、それ相応の実力があるのだ。

「ねえ瑠璃、洸行く時にき桃華様も連れて行ったらどうでしょう」
瑠璃は目を瞬いた。桃華、いや、二將軍が洸の国境門を超えることは禁じられている。『凜河の盟』を破ることは、世間一般の常識ではありえない。しかし、白琳がそう言った時の声色は、冗談が混ざっているように思えなかった。

「白琳、それ、本気で言ってるの？」

「はい」

白琳は即答した。

「洸国に干渉することは禁止されているし、兵士が洸に行くことなんてできるはずないと思うんだけど……」

白琳はクスクスと笑っている。

「桃華様なら、洸国に乗り込むくらいなんでもないと思いますし、用心棒にもってこいです。瑠璃の友人でもあるし、叶うならこれ以

上の適役はいないでしょう？それに、私は聞いたことがあります」
「え？」

「桃華様、嘉と洸の国境門を通る以外にも、洸に向かう方法を知っているようですよ」

瑠璃は驚ろき、白琳をみつめた。白琳は、なぜか楽しげに微笑んでいる。

「どうやら、実際に、洸に行ったことがあるようです」

瑠璃は、塾や書院にいけばいつでも見ることができる、双龍国の地図を思い浮かべた。双龍国の中央、凜河と呼ばれる大河が東西にはしっているが、その河は流れがやく、船でも渡ることができない。凜河のところどころに橋が架けられており、その先は洸の領土になるが、橋の入り口と出口には、国境門と呼ばれる門が据えられ、その門を武官が越えることは『凜河の盟』で禁じられている。嘉の南から船で洸に行ったところで、港は監視されている。洸国に行くことは不可能なことに思えた。しかし、こういう表情の時の白琳は嘘をついていない、と瑠璃は知っていた。

「でも、仮に桃華が洸に行けたとしても、桃華はあれでも二將軍だし……。どれくらい時間がかかるかわからないような旅に桃華をつけていったら、桃華の周りの人に迷惑かけちゃうでしょう？」

「大丈夫です。桃華様の仕事は私が責任を持って翡翠様にやらせますから。それに、鳳軍、麒麟軍の方たちは將軍たちがやり残した仕事を処理するなんて日常茶飯事だと思いますわ。ですから、瑠璃と、桃華様、それから私で洸に参りましょう」

「え、白琳も行くの！？」

瑠璃は驚き、思はず目を見開いた。

「医者がいた方が心強いとは思いませんか」

「それはそうだけど……」

「お願いします。私も洸に連れて行ってください。女三人洸国旅行しましょう」

白琳はそう言うてにつこり笑う。白琳は瑠璃に対してはめったに

無理な頼みはしない。しかし、こうしてまれに突拍子もない頼みを瑠璃にするのだ。そして、一度そうと決めた白琳は瑠璃が頷くまで、諦めないだろう、というのを瑠璃はそれまでの経験から知っていた。首を微かに傾けて美しい笑顔でほほ笑む白琳を見た瑠璃は軽くため息をついた。

日はすっかり沈んでしまった。代わりに現れた白銀の月が、呆れながらもどこかほっとした風な瑠璃と、それを見て微笑む白琳を柔らかに照らす。澄み切った夜の海は、今宵の満月を映していた。

第一章 北の青い空 5

宮中での翡翠の一室からは湖が見渡せた。日がすっかり沈んだ今、湖は夜空を映し、澄み切った黒へと変化している。今宵は満月。黒に浮かぶ白銀の満月はため息が出るほど美しかったが、この部屋の主がついたため息は別の意味を含んでいた。

黒無地の着流しを、少々だらしなく着た翡翠は、座卓の前で胡坐をかけたまま駿に押し付けられた仕事を終わらせようとしていた。しかし、夕焼けの頃からやっているのにもかかわらず、積み重なった紙の山はほとんど減っていなかった。いつのまにか、日はすっかり沈み、代わりに月が姿を現している。紙の山と、月を交互に見た翡翠は思わずため息をつく。

（こんなのいつになったら終わるんだよ……）

翡翠は再び紙の山をみると、気分転換をしようと立ち上がった。寝台の方へ向かい、その横で、膝をつく。そうして、寝台の下に手を伸ばすと、そこから、酒瓶を取り出した。瓶には『恵明月』とある。嘉国の隣の恵国で醸造される高級純米酒である。翡翠は、改めて座りなおし、胡坐をかけた。慣れた手つきで瓶の口を開けると、『恵明月』の芳醇な酒の香りが漂った。

（これが桃華にみつかったら確実に奪われるな）

見かけによらず酒好きの同僚を思い出し、ふうっと息をはくと、香りに誘われるようにして、酒瓶に口をつけようとした。しかしちょうどその時、戸が開き、一人の女が入って きた。女――白琳は、微笑みを浮かべて翡翠を見た。ちょうど、月明かりに白琳の白い顔が照らされた。つややかな黒い髪がさらりと零れ落ちる。一瞬、言葉をなくした翡翠であったが、何をしにきたんだと、尋ねることにした。しかし、それより先に、白琳が柔らかい声で言う

「仮にも二將軍の翡翠様が、宮中でそんな服装で、しかも胡坐をかいて、自室でお酒を煽っている姿をみたら、みなさんきつと怒りま

すよ」

「知るか。着流しの何が悪い」

いつもどおり、軽口をいうと翡翠はプイッと窓の方を向いた。

文官であれ、武官であれ、宮中で官職についている以上、役職に応じた官服というものは存在する。仕事が終わった後まで、官服を身につけていなければならないという決まりはないものの、いつ招集されるかわからないのが煌李宮である。宮中で過ごすほとんどの官は寝るとき以外は官服を着ていた。しかし、翡翠と言えば、官服を着たとしても、どこかだらしなく、官服をきちんと着るのは何かの宮中行事の時ぐらいだった。そして、普段はと言えば、専ら着流しという有り様だった。

白琳はクスクスと笑うと言葉を続けた。

「翡翠様らしくて私は好きですけど。とてもよくお似合いですし」

翡翠はわずかに頬が朱色になるのを感じたが幸い白琳の方からは見えない方に顔を向けていた。

「でも、これが二將軍だと知ったら嘉の民は悲しむでしょうね」

そう言った白琳の声はどこか可笑しそうだった。翡翠は、白琳の方を向いて言う。

「……ここに何の用だ？」

「実は、翡翠様にお願いがありまして、煌李宮に侵入してきちゃいました。」

「お願い？」

「ええ。……でも、見たところ、お酒飲んで現実逃避している割にはお仕事たまっているようですし、お仕事が終わってからお願ひすることになります。翡翠様は、やろうと思えば事務処理もできる方ですし、そんな翡翠様がこれだけ処理できないお仕事です。きつと相当大変なお仕事なんですね」

翡翠は机に乗った紙の山を見るとため息をついた。翡翠とて、事務処理が苦手なわけではない。むしろ得意なほうである。しかし、例外はある。それが今回のような仕事だった。駿が翡翠に押し付け

た仕事にはすべて計算が含まれていたのだ。翡翠は、いわゆる数学というものが大の苦手だった。実際、翡翠は武科挙と言われる国家試験には史上最年少で通ったものの、三元というものを取り逃がしていた。三元とは、科挙の三つの段階である、郷試、会試、殿試の全ての試験において首席だった者のことだったが、翡翠は、数学が含まれる郷試で首席を取り損ねていた。数字をみるのも嫌なほどに嫌いだったため、これまでそういう仕事が入った時にはすべて部下に押し付けてきたのだ。

「あら」

机上の紙を一枚手に取った白琳は小さく声を上げた。

「どうした？」

「これ、仕事じゃありませんわ」

「……仕事じゃない？ いったいどういうことだ」

「これ、仕事でもなんでもないただの数学の問題集です」

「なんだと……！？」

駿はたしかに仕事だといって紙の山を翡翠に渡した。しかも明日までの期限付きだ。

「あいつ、いったい何考えてるんだ……！」

「暇つぶしではないでしょうか」

「ということだ！」

翡翠が声を荒げて言ったちょうどその時、部屋の戸が開いた。翡翠とは対照的に、きちんと官服を着ている駿だった。

「翡翠、王が呼んでるよ」

駿は部屋に入ると、いつもの頬笑みを浮かべて言った。

「駿！ そんなことより、これはどういうことだ！」

「そんなこと？ 王のことよりも大切なことがあるの？ 相当大変な問題があるんだろうねえ」

「これ」

翡翠は紙の山を指差す。

「これ、仕事じゃなくてただの数学の問題集だっていうじゃないか

「これのどこが仕事なんだ！」

駿は、クスッと笑うと、何でもなしのように淡々と言う。

「別に間違っではないだろう？数学が常識では考えられないほど苦手なひゝ君にとっては数学は仕事だろう？学生の仕事が勉強っていうのと同じだと思うよ」

「同じなわけあるか！第一、俺は、もう、学生じゃない！この期に及んで数学をやる必要がどこにある！」

「うゝん……そんなこと言われてもなあ……。これ、覇玄さまがわざわざ文付きで送ってくれたものだし……。なんだったかなあ。ああ、いくら武道だけできて、数学で合格点とってないって周りに知れたら足元巢食われるかもしれない。だから、これを翡翠にやらせてくれとか書いてあった気がする。二將軍になった後も心配してくれるなんて覇玄さまは良い方だね」

「あの、覇玄様って、もしかして元二將軍の？」

翡翠と駿の会話を聞いていた白琳が不思議そうに尋ねた。

「うん。元二將軍で、俺たちの恩師の……「恩師じゃない」」

駿が白琳に答えていると、翡翠が割って入った。翡翠はそのまま言葉が続ける。

「あんなじじい、恩師でも何でもなし。タダのくそじじいで十分だ」

「そんなこと言ったら、覇玄さま悲しむよ」

「あいつはくそじじいだ。それ以上でもそれ以下でもないだろう」

「まったく、恩ある年長者を尊ぶことができないようなこんな奴が二將軍につくなんて世も末だね。……『ただの』数学の問題集って言うくらいだから、すぐ解き終わるだろうけど、さすがに王に呼ばれて時間がないのに明日までが期限っていうのは可哀そうだ。一日延ばしてやるよ。だからすぐ王のところに行くんだね。いつものところだつてさ」

「俺は何があっても数学はやらない。無駄口叩いてないでさっさとここから出る。……お前、俺が帰ってきたら覚えてろよ」

「何だかんだ言っただけ痛い目にあったことはないけど、一応、忠告通

り気を付けさせてもらうよ。そうだ、ちょうど良かった。王は白琳も呼んでたよ」

「私もですか？」

「白琳もつていたいということだ？」

「おれも詳しくは知らないけど、桃華ちゃんと、翡翠、それから白琳を呼ぶように頼まれたんだ」

翡翠と桃華が王に呼ばれるのはわかるが、白琳は有能な医者ではあるものの、官ではない。王に呼ばれるなど、普通では考えられなかった。もつとも、白琳の父親の圭貴は、宮中に務める医者であるため、あり得ないことではないが、白琳はまだ宮中で務める気はないことを翡翠は知っていた。その白琳が王に呼ばれるということに、翡翠は本能的に嫌な予感を感じていた。

李京の北、北区と呼ばれる場所に一軒の酒場があった。その酒場に入るには少々コツが必要だった。石畳でできた路地、その石畳の一つを決まった手順で叩くと、がこんと音が響く。塀の一つを指で押すと石畳が外れ、代わりに鍵穴が現れるのだ。その鍵穴を開けた先に酒場はある。

「白琳に翡翠、待つてたよ。王様が、好きなお酒つくつてくれるって」

翡翠と白琳が酒場に入ると、お猪口を片手に桃華が嬉しそうににっこりと笑っていた。その横ではどこか呆れた風な康莉が椅子に座っている。部屋の奥ではこの国の王、龍孫が酒場の店主よろしく、酒瓶を手に、柔らかい笑みを浮かべていた。

「翡翠、白琳なにが良い？古今東西のお酒を揃えてあるから、希望に答えられると思うよ」

翡翠がちらりと横にいる白琳の方を向くと、白琳はわずかに驚いた様子でいた。

「龍孫様、白琳殿が困っておられますよ。私たちは慣れてるので良いですけど、王が自ら酒を注ぐなど常識では考えられないことです」

翡翠と白琳の心中を察したのか、康莉が言う。白琳のほうに向き直り、康莉は言葉が続けた。

「驚かしてしまって申し訳ございません。王と言えど、普段は人の良いおじさんだと思って、好きなお飲物を言ってください。龍孫様も喜ばれると思います」

「え、ええ」

「俺は輝石水」

「麒麟、いくらなんでも遠慮がなさすぎるだろう。輝石水って言うたら、恵国の最高級の酒じゃないか」

「康莉、構わないよ。翡翠、今、出すから待ってくれ」

龍孫はそう言う、棚の下の方に手を伸ばし、輝石水と呼ばれる酒を取り出した。

「白琳はなにが良い？」

お猪口に透明の輝石水を注ぎながら龍孫は、優しい声で言った。

「えっと……私は、お酒弱いので緑茶で結構です」

「わかった。飲みたくなったらいつでも言うんだよ」

龍孫の言葉を聞いた翡翠は、桃華と康莉がいる円卓についた。それに倣い、白琳も少し戸惑った様子を見せながらも席に着いた。

「輝石水と、緑茶だよ」

龍孫はそういうと、コトリと音を立てて、それぞれ翡翠と白琳の前に置いた。翡翠は、視線を落とし、輝石水の透明な液を見る。濁りが一切ない輝石水にはわずかに、金粉が漂っていた。一般人には――例えば、將軍職についている翡翠ですら輝石水はなかなか手に入らない。翡翠はお猪口に手を伸ばす。酒の冷たさが、翡翠の右手にわずかに伝わった。口をつけると、翡翠好みの辛口が口の中に広がる。……美味しいな」

思わず感想が口から洩れた。

「ねえ翡翠、白琳、私、見せたいものがあるの」

桃華はにっこりと笑うと、腰から鞘ごと脇差を抜きとり翡翠に渡した。刀がどうした、と言おうとしたが鰐につけられたものを見て

顔をしかめる。そこには小さな龍の縫いぐるみが括りつけてあったのだ。水色の柔らかい生地で作られた龍はつぶらな瞳を翡翠に向けている。

「お前、基本的に刀じゃなく脇差で戦うんだろ？こんな鐔につけたら邪魔じゃないか？」

「大丈夫だよ。それよりね、龍孫様と康莉にも名前教えたから、翡翠と白琳にも教えてあげようと思って」

桃華は満面の笑みを浮かべると、明るい声で言う。

「龍乃助^{りゅうのすけ}って言うの。可愛いでしょう？」

翡翠は自分の黒天馬を思い出し、溜息をつく。

「お前のその名前の感覚なんかならないのか？」

翡翠が呆れて言うと、桃華は頬を膨らませた。白琳はクスクスと笑うと、子を諭すように言う。

「私はとてもかわいらしいお名前だと思います。それを否定する翡翠様のほうがよっぽどどうかしていると思いますわ」

「それ、もらったのか」

「うん！買ってもらったの。この子のお友達で、梅っちゃんもいるんだよ」

誰に、と聞かなくても察しのついていた翡翠はこれ以上何も聞かないことにし、話題を変える。

「話は変わるが、輝石水なんて高級な酒、どうやって手に入れたんですか？」

「前に、恵王の使者が嘉にいらした時にもらったものだよ」

「恵王…… 翡^ひ菱^{りや}か。そんな高級な酒を快く注いでくださるなんて、もしかして、何かとんでもない命令でもするつもりですか？」

「…… やっぱ翡翠は鋭いな。まず、勝手に呼んでおいて申し訳ないがこれが終わったら、白琳には席をはずしてもらいたい。そして、君たちにとんでもない命を下そうとしている私を許してほしい」

王はそう言うと言翡翠たちが座る円卓の前にやってきた。そういえば、と翡翠は思った。いつも、着流しの王が今は紫の正装を着てい

る。

「康莉」

王が真剣な様子でそういうと、康莉は静かに立ち上がった。いつのまにか康莉の手には三つの巻物が握られている。

「白琳」

王が静かに声をあげると、白琳は緊張した様子で立ち上がる。

「まず、ここでのこと、これから下す命については、父親と、君の親友の瑠璃、嘉の二將軍以外の誰にも口外しないでほしい。約束できるか？」

急に空気が変わった。慣れた者どうしが集まった時独特の温かい空気がから、この国の王が支配する圧倒的なそれへと。白琳は静かに口を開く。

「はい。約束します」

「壮 白琳に勅命を下す」

龍孫はそう言うのと、康莉から巻物を受け取り、白琳に手渡した。白琳は一礼してそれを受け取り、巻物を開いた。開いたそこには流れるような龍孫の達筆。さらに文末には御名御璽が押されていた。翡翠と桃華も同じように巻物を受け取り、巻物を開く。やがて、中身を確認した翡翠は眉間に皺を寄せる。

「龍孫様、俺と桃華がこの命を受けるのはわかります。ですが……白琳までというのは危険ではないでしょうか」

これに答えたのは王ではなく、白琳だった。

「翡翠様、私なら大丈夫です。私にしかできないこともあるので一緒に行かせてください」

「でも……」

「大丈夫です。桃華様、それに、翡翠様がいるなんて心強いですわ」「翡翠、良いじゃん。白琳いた方がきつと楽しいよ」

仏頂面の翡翠に桃華は笑顔で言った。

「それとも、翡翠には白琳を守りきれない自信無いの？」

「そついうわけじゃ……」

「ふ〜ん……？まあ、翡翠が無理ならいざとなったら私が白琳を全力で守るから良いもん」

「あのなら、桃華そうじゃなくて……」

王に下された命令はあまりにも危険すぎる。できたら白琳を巻き込みたくない、というのが翡翠の本音だった。

「だって、私や翡翠じゃ無理で、白琳にしかできないことがあるんでしょう？そしたら仕方ないじゃん」

桃華はなんでもないのでこのように言った。

「翡翠様、これ、勅命ですよ。拒否できるものではありませんわ。翡翠様がとやかく言っても仕方ないと思いますわ」

意気投合している白琳と桃華を見た翡翠はため息をつく。なぜか笑いあう二人をみて、疲労のようなものを感じてしまったのだ。

「龍孫様、この命―洸国の民と共に洸に入り、洸国を救うという命、謹んでお受けいたします」

翡翠の心境を知ってか知らずか、白琳は美しい声でそう宣言した。一切の揺らぎがないように翡翠には感じられた。これ以上は何も言うまい。そう決め、翡翠はため息をつく。

「ですが、受ける代わりにひとつお願いがあります。瑠璃も一緒に同行してもらっては駄目でしょうか？」

「瑠璃……芳 瑠璃か」

王は鬚をなでるような仕草をし、白琳を見つめた。

「よかるう。瑠璃も同行すると良いだろう。それは瑠璃の宿命のよなものだからな。白琳と桃華、翡翠に瑠璃、それから洸の民、紅貴と共に、洸へ向かうのだ」

王はそう言ってこの場にいる翡翠、桃華、白琳の目を一人ずつ見つめた。

「では私は失礼いたします」

白琳が退席すると、王は静かに言った。

「翡翠、桃華、そなたたちにはもう一つ頼みたいことがある」

そう言つて王は、臣であるはずの翡翠と桃華に頭を下げてしまった。
王のどこか悲しげな低い声は、いつまでも翡翠と桃華の耳から離れなかった。

第一章 北の青い空 6

李京の東、商業区と呼ばれる一角はいくつもの店が並んでいる。

石畳の路地の両端には桜の木。その横には歩道があり、歩道に沿うようにして、店がたち並んでいた。商業区の目覚めは早い。日が完全には上りきっておらず、朝靄がかかる早朝、店の中から一人、二人と人が姿を現す。日がすっかり登る頃には、店を開けなければならないのだ。そんな商業区の中ほどに位置する『福屋』と呼ばれる、都一の呉服屋から、一人の女が現れる。簪を片手の持った綺麗な女の瞳は蒼い色をしている。

「瑠璃ちゃんおはよう」

呉服屋の隣のお香屋の店主の女に声をかけられた瑠璃は、にこやかな笑顔を向けた。

「明喜おばさんおはよう。今日も早いですね」

「瑠璃ちゃんこそ。若いのによく働くって評判だよ。瑠璃ちゃんなら、嫁について声は多いんだろうね」

瑠璃はこれには答えず、微笑みを返しただけだった。

「顔も綺麗だし、元気でよく働く。商人の鏡だって評判だよ。家に来てほしいくらいさ」

実際、瑠璃を嫁にという声は多かった。歳も18。この国ではそれくらいで嫁ぐのは普通だった。幼いころから、よく働き、利発。しかも顔が綺麗とあっては、嫁に欲しがる声が多いのは当然だった。しかし、瑠璃は結婚する気はなかった。その前にまだやらなければならぬことがあるのだ。

「やだねえ瑠璃ちゃん。冗談だよ。家のバカ息子に瑠璃ちゃんはもつたいないさ。瑠璃ちゃんにはもつといい男がいるってもんさ」

「おばさんったら」

そう言っただけで笑む瑠璃は、ふと、見慣れた人こちらに向かってくるのを見つけ目を見開く。

「馬鹿兄翡翠!？」

「誰が馬鹿兄だ」

翡翠の実家がここだとはいえ、めったに帰ってくることはない。突然の兄の帰還に、瑠璃は声を上げる。

「どうしたの？首にでもなったの？」

「なわけないだろう。用があつて戻ってきたんだ」

「珍しいね」

「俺、昨日ねてないから今から寝る。起こすんじゃねえぞ」

翡翠はそう言つと、店の中に入つていった。

「まったく……」

瑠璃は腰に手をあてて、呆れたとばかりにため息をついた。

「ハハハハ」

「おばさんったら、急に笑つてどうしたんですか？」

「いやねえ」

笑いが少し治まつたらしい明喜は翡翠が入つて行つた呉服屋の入り口を見たまま言う。

「麒麟様……翡翠は、子供のころは、この辺近所じゃ悪ガキつて評判だつたらう？それが、国立学校に入つて、禁軍に入つて、今じゃ二將軍になつたつて言うんだ。立派になつたもんだと思つてたんだよ。あの小さな悪ガキが二將軍つていうんだからさ。でも、今の翡翠の口ぶり聞いてたら、性格は変わっちゃいないんだな、と思つてね」

「そりやそうですよ。あの性格の悪さはそう簡単には治りませんよ」
明喜は何がおかしいのか、もう一度笑つた。

店の前の掃除を終えた瑠璃は、呉服屋の二階の住居部分に向かつた。居間では、ちょうど朝食を作り終えたらしい、母親の珊瑚が、食卓に茶碗を運んでいることろだった。瑠璃同様に美人だと、また、よく働くと評判の母親だ。

「瑠璃、ご苦労だったね」

瑠璃と同じく、早朝の仕事を終えた父親の銀がいつもの穏やかな声で言った。

「ありがとう、お父さん。そういえば、翡翠が戻ってきたけどいったいどうしたのかしら」

「ああ、それなんだけどね、実は夜が明ける少し前に、康亀様がいらしゃってね、私に巻物を預けていったんだ」

「康亀様……って、あの康亀様！？大物じゃない！」

「そうだね。でね、その巻物というのが、王からの手紙でね」

「王！？」

次から次へと出てくる大物の名に瑠璃は驚きを隠せなかった。

「なんでも、翡翠が私たち家族に話があるだろうから、実家に戻させた。話をきいてやってほしい。そんなようなことが書いてあったんだ」

「実際翡翠が戻ってきて、いったん寝て起きたら話があるから聞いてほしいっていったわ。まったく困った子だわ。寝るなら、せめて朝ごはんを食べてからにしたらっていったのに、それより寝るんだって言うてきかないんだから」

珊瑚はそう言つて瑠璃と銀の湯のみにお茶を入れた。銀が好きな嘉緑茶だ。嘉緑茶特有の香ばしい香りが居間に広がった。銀は、珊瑚が入れたお茶を一口飲み、湯呑を置いて言う。

「それから、王からの手紙には瑠璃のことについても書いてあったんだよ。瑠璃も私たちに話さなければならぬことがあるはずだね。もし、瑠璃が話さないのだとしたら、勅命という形で後押しをしなければならぬかもしれないって。……瑠璃、それは本当かい？」

父親の銀の口調は責めるようなものではなかった。いつもの温かい、諭すような柔らかい口調だ。まるで、銀の性格そのもののような。瑠璃は昨日の港での白琳との会話を思い出す。もう、自分がどうするかは決めてあるのだ。だとしたら、やるべきことは両親にその決意を話すことだけだ。

「そうね。私、お父さんとお母さんに話さなきゃいけないことがあるわ。……翡翠が起きたらお話しします」

「こんな朝から押しかけてしまつて申し訳ありません」

煌李宮の一角の武官のための鍛錬場。本来誰もいないはずの早朝、この場所には白琳と、駿が居た。

「かまわないよ」

駿はにこやかに笑つてそう言う。

「……実は、翡翠様をお願いしようと思つていたことがあるんですけど、状況が変わりましてので、あなたをお願いすることにしました」

「俺に？」

「ええ。あなた位の地位でしたらもう知つていると思いますが、翡翠様と、桃華様、瑠璃と私は洸国の民と共に、洸に赴き、洸国を救うことになりました。でも、実は私、その命が下る前は、所用がありました、桃華様と瑠璃、私で、洸に行こうとしていたんです」

「随分と大胆なことをするんだね」

「最初、桃華様がいなくなる分の仕事を翡翠様をお願いしようとしていました。でも、翡翠様も一緒に行くことになったので、翡翠様と桃華様の分、よろしくお願いします」

「大丈夫。それは、いつも俺がやっていることだから。翡翠も桃華ちゃんも数学が大の苦手だね……計算が入ると、いつもやらされるのは俺だったから、今まで通りだよ。それより白琳、本題はこれじゃないだろう」

白琳は微かに笑んだ。

「あなたに隠しても無駄ですし、隠すようなことでもないのです、そのまま言わせていただきます。瑠璃……あなたにとって大切な瑠璃はいざとなったら私が守りますのでご安心ください」

「知つてたんだね」

駿は微笑む。翡翠の親友、駿は、翡翠の妹の瑠璃に密かに想いを

寄せていた。しかし、その思いを瑠璃に伝える気はなかった。駿には駿の思惑があるのだ。

「それにしても、知られていたなんて驚きだよ。完璧に隠していたつもりだったんだけどね」

「多分、他の方は気づいていないと思うのでご安心ください。ただ、私が翡翠様を見る目と、あなたが瑠璃を見つめる目が似ていたものですから。……瑠璃はいざとなったら私が守ります。翡翠様や桃華様はもしかしたら、やらなければならないことがあって、瑠璃の事までは回らないかもしれません。その時は私がどんな手を使っても……」

駿は白琳を見た。白い肌も、艶やかな黒髪も、桃色の唇も、どこをとっても美しく、それは総じてきつい印象ではなく、柔らかい印象を与えるものだった。しかし、今、彼女の中には強い意志で溢れているように感じられた。だが、それは、ある一面では儂い。駿は、少し低い声で言う。

「あんまり、桃華ちゃんと、瑠璃ちゃん、それから翡翠が悲しむようなことを言うもんじゃないよ」

「え……？」

駿は、今度は笑顔を作る。そして静かな温かい声で言った。

「麒麟と鳳華……嘉の二將軍は強いって言ったんだ」

努力で補えるものではないほどに、麒麟と、鳳華は強い。それを駿は良く分かっていて。自分の武術の腕が上がれば上がるほど、その実感は強くなっていった。諦めではなく、あの二人に追いつくことは、天地が引っくりかえっても無理だろうと漠然と感じていた。

「洸国のお土産を持って、全員で戻ってくるのを、俺は待ってるよ」

「……あなたは性格が良いんだか、悪いんだか、いまだによく分りませんわ」

「それは、君も似たようなものだろう」

「ところで、その洸の民は、今どこにいるんだろうね」

駿は、いつものように考えをめぐらしていた。

翡翠が実家の呉服屋に帰ってきた夕方、呉服屋の芳家は、卓を囲んでいた。

「私、洗でやることがあるから洗に行きます」

瑠璃は静まった居間ではつきりとそう宣言した。

「瑠璃、洗がどういう国が分かっているのかい？」

銀が優しく言い、瑠璃は静かにうなづく。

「噂程度しか知らないけど、酷いってことは間違いないみたいね」

「それがわかっていて、どうしても行きたいというなら止めはしない……ただ、一つ約束してくれないか」

「約束？」

「絶対に生きて帰るという約束だ」

銀にしては珍しく、強い口ぶりだった。

「……約束する」

「銀、珊瑚」

翡翠が瑠璃に続いた。

「俺も、洗に行くことになった」

驚いたのは瑠璃だった。

「ちよつと翡翠！それ、どういうこと？なんで、翡翠まで行くことになってるの？」

驚いている様子の瑠璃を余所に、翡翠は淡々とした口調で言う。

「俺は、王に勅命を下された。……洸国に赴き、洸を救へという命だ。向こうの軍と戦うことになるだろう。洸国に行くということは、もしかしたら死ぬ可能性もある」

瑠璃は目を見開く。目の前でなんでもないことのように言い、呑気にお茶を飲む兄に対して、これまでにない怒りを感じる。

「翡翠！何、馬鹿なこと言ってるのよ！」

「瑠璃、落ち着きなさい」

「これが落ち着けるわけじゃないでしょう？なんで私は絶対に生きてかえってくるって約束をさせられて、翡翠は死ぬかもしれないってい

う宣言なの！？そんなのおかしいわ！翡翠も洸に行くって言うなら私と同じように絶対に生きて帰ってくるって父さんと母さんに約束するのが筋ってモンじゃないの？」

「瑠璃、そういうことじゃないんだよ。翡翠と瑠璃は違う」

「違う？何が違うの！？私たち二人とも父さんと母さんの子供でしよう？父さんと母さんは翡翠のことなんてどうでも良いの？」

「そんなことはない。二人とも大事な私たちの子供だ」

「じゃあ、どういうこと……？」

瑠璃の声は震えていた。

「……俺が説明する。俺は一応……「翡翠……私が説明するから、部屋に戻っていなさい」」

翡翠の言葉を、銀が遮った。

「私が説明したほうが良いと思うんだ」

銀は囁くように翡翠に言う。翡翠はため息をつく、瑠璃の方を見た。

「瑠璃、安心しろ。俺は死ぬ可能性はあるとはいえ、死ぬ気はない上に、そこまで弱くない。多分生きて帰れる」

翡翠はそういうと、自室に戻っていった。

「瑠璃、話をつづけようか」

「うん……」

「翡翠はね、武官なんだよ。武官であれ、文官であれ、官は国のために働くものなんだ。それはわかるね？」

「うん」

「武官の場合、国のために働くその職務に、命の危険が伴うものがあるんだよ。それが今回のような命だ。王は、国のために、時に勅命を出すことがある。国のための王の勅命に、官は逆らうことができない。そして、基本的に、いかなる時も優先されるべきものは、国のための命を遂行することなんだよ。たとえ、それが命を失う可能性のあるものでもね。その見返りに官はたくさんのお給料をもらっているだろう？」

「そうね……」

「翡翠は、それをわかった上で、武官になったんだ。しかも、わたしたちも翡翠が武官になることを受け入れた。翡翠は官だけど、瑠璃は官じゃない。そこが二人の違いだよ。そしたら、私たちがやれることは、翡翠の実力を信じて、それを受け入れることじゃないかな」

「うん……」

「瑠璃、大丈夫よ。翡翠があんな性格でも二將軍になれたのは、実力あつてのことなんだから。強いんだからきつと大丈夫。今日は久しぶりに家族4人、全員がそろつたんだし、おいしいご飯でも食べましょう」

「銀悪かつたな。あんなことを説明させて」

すっかり夜も更けた夜中、翡翠は、居間で酒を飲む銀にそう言った。

「良いんだよ。……それが翡翠が逃げずに選んだ道ならね」

翡翠は何も言わずに、銀の笑顔を見た。その優しい笑顔を見ると不思議と、申し訳なく思えてしまう。心の中でもう一度謝罪をして、立ち去ろうとすると、銀が声をかけた。

「たまには、男同士で親子水入らず、一杯どうだ？」

銀はそういうと、翡翠にお猪口をさし出した。

「悪くないな」

翡翠は銀から酒を受け、一気に飲み干した。

その夜瑠璃は月を見ていた。あの、ただの馬鹿兄だと思っていた翡翠が実はそんな覚悟で官になったというのは意外な気がしていた（でも、あの馬鹿兄ばかりが見せばあるなんてなっとく行かないわ私だって、同じくらいの覚悟はあるんだから）

ただ、翡翠や桃華とは違う。自分がする覚悟は違う種類のものだ。「絶対に生きて帰る……！」

瑠璃は、自分が洗へ旅立った後に、嘉で待っているであろう人々

の顔を思い浮かべ、誓った。

第一章 北の青い空 7

王に無事奏上することができた紅貴は、煌李宮、賓客殿に案内され、そこで一夜を過ごした。目が覚めた頃には、すっかり日は昇り切っていた。明るいう陽光が一杯に差し込んだ部屋を見渡すと、入口近くに、女官の少女が、笑顔を浮かべて立っていた。歳は、紅貴と同じくらいに見える。

「もうすっかり昼ですよ。何度起こしてもお目覚めにならないんですから」

「すみません。朝弱くて……」

少女はにっこりと笑うと、年相応の明るい声で言う。

「長旅でお疲れだったんでしょね。龍孫様が、昼食がすんだら、会いたいとおっしゃってましたよ」

「そうか」

「それから、駿様が、紅貴殿がお目覚めになり次第会いたいと……」

そう言うのと、女官の少女は、紅貴でもはつきりとわかるほどに、顔を赤らめた。

「お通ししてよろしいでしょうか？」

「構わないけど、駿様ってどのような方なんですか？」

少女の顔はますます赤くなる。

「それはもう、かつこよくって……。あの笑顔、優美な仕草……堪りませんわ！しかも、今、21歳でいらっしゃるんですけど、わずか18のころに麒麟軍に入られたって言う、とても優秀なお方なんです。紅貴殿は、嘉の武官で、もっともかつこいい三人をご存じ？」

大人しいと思っていた少女の突然の豹変に、紅貴は圧倒させられる。紅貴の返事を聞くより先に、少女の話は続いた。

「麒麟將軍、二將軍の翡翠様に、皇太子付きの直属護衛官で、駿様の弟の豹馬様。それから……麒麟軍の、若き天才駿様！どのかたもかつこ良いんですけど、私は駿様が一番好きですわ。翡翠様も豹馬様

も無愛想でいらつしやるけど、駿様だけは違います！あの爽やかな笑顔！なんて素敵なのかしら」

「……たしかに18で麒麟つてすごいですね。鳳軍と麒麟つて、嘉でもつとも強い軍なんですよね？」

挙げられた三人の中に、聞いたことがある名があつた気がしたが、紅貴はあえて気にしないことにし、話を続ける。

「それはもう。素敵ですわ……！」

「その、駿という方呼んできてもらつていいですか？」

紅貴が淡々とした口調でいうと、少女は嬉しそうに部屋を去つて行った。

少女が去つた後、紅貴は急に疲労感を感じた。

（いまどきの女の子つてすごいな……）

たかがかつこい男の話であそこまで熱くなれるとは……と、紅貴はため息をついた。たまたま用意されていたお茶を口に含んだ紅貴は肩をなでおろす。

（そつえばあの子、翡翠が麒麟將軍つて……）

改めて考えると衝撃的な事実だ。紅貴は、驚きのあまり持つていた湯呑を落としてしまった。

（嘘だろ……！あんな性格悪そうなやつが將軍なんて…… いや、ちよつとまてよ。もしかしたら同じ名前の翡翠がいるのかもしれない。うん、きつとそうだ。あんな性格の奴が將軍なわけないよな）

嘉の官位は、頭の良し悪し、武道の優劣だけではなく、立ち居振る舞いや、言葉づかい、その者の持つ品格などが問われるというのを、紅貴は聞いたことがあつた。だとすれば、翡翠が將軍だというのは考えにくい。そう思おうとしたが、翡翠が、上官の命令を、不満も言わずに聞いている様子がどうしても想像できなかった。

（やめよう……これ以上考えるのは。翡翠が何者だろうと、俺には関係ないし）

そう考え、溜息をついて、溢したお茶を片づけていると、先ほどの少女が頬を赤らめて戻ってきた。

(……花が飛んでる)

少女を見た紅貴はまず最初にそう思った。顔を赤らめ、にっこりと笑い、これ以上の幸せはない、というような雰囲気を出していた。少女の桃色の着物が余計にそれを際立たせている。しかも、真昼の明るい陽光が、少女を効果的に演出している。人によっては、こういう少女をかわいらしいというのもかもしれないが、紅貴はこういう少女の対応の仕方を知らなかった。はつきり言ってしまうばかりだった。

「駿様をお連れしました」

少女がそう言っていると、部屋に一人の青年が入ってきた。

(たしかに、これじゃあもてるだろうなあ……)

紅貴は駿をみて妙に納得してしまった。背はすらりと高く、顔はどこか中性的な印象だった。筋が通った鼻も、涼やかな黒い瞳も、柔らかな唇も、男性にしては白い肌も、並の男にはないものだった。どちらかというと、細身の青年は、武官というより、文官といったほうが似合うような気もしたが、服はまぎれもなく麒麟のものであり、腰に大きめの剣があった。

「ここまで案内してくれてありがとう」

駿は爽やかに笑ってそう言っていると、少女は、今にも卒倒しそうなように紅貴には感じられた。

「あの……あなたが駿様ですか？」

「そうだよ。俺の名は駿。ここで武官をやっているんだ」

「俺は、紅貴。俺にいったい何の用でしょうか？」

「ちよつと話をしてみたいと思ってね」

駿はそう言って笑った。

駿は、近くにあつた椅子を引き、そこに座る。しばらくの沈黙を楽しんだあと、駿は、静かに、さりげない感じで紅貴に話しかけた。

「その髪の色珍しいね」

「はい。よく言われます」

「翡翠にも言われた？」

駿は友人に話しかけるように、軽い調子で紅貴に話しかける。紅貴は、なんでもない様子で、それに答えた。

「はい。言われました」

駿は、会話を楽しんでいるそぶり、笑顔で相槌を打つ。彼の中で考えを巡らせながら。

「あの、駿様は翡翠を知っているんですか？」

「知ってるよ。彼とは昔からの友人で、今は俺の上司だからね」

「上司ってことは、翡翠は本当に麒麟軍の將軍、二將軍なんですか？」
驚いている様子の紅貴に、駿は笑顔を作った。

「そうだよ。そういう紅貴君こそ、翡翠とは知り合いなの？」

「えっと……実は道に迷ってた俺を煌李宮に連れてきてくれたのは翡翠で……」

「そうか。あいつと一緒になんて、大変だっただろう。無愛想だし、冷たいし」

「友人の駿様に言うのもなんですが、それはもう……」

駿は、やっぱり自分の考えは合っていたと確信する。翡翠が紅貴を煌李宮に案内した理由は、おそらく自分の推測で合っているだろう。それを確認するために、駿は、態度を変えることなく、切り札とも呼べる言葉を使うことにした。

「紅貴君、君とは話が合いそうだね。翡翠は、ほんと、どうしようもないやつだよ。君とは良い友達になれそう。同じ友人として、駿様なんて呼ぶのやめてもらえるかな？俺、汐せき駿しゅんのことは、駿って呼んでよ」

駿はそう言って、爽やかに見える笑みを浮かべた。

「え……あ、はい」

駿には紅貴の動揺が手に取るようにわかった。何も知らない人間なら、駿の今の言葉に動揺する要素はないはずである。しかし、紅貴は動揺している。それは、おそらく、駿の姓『汐』に。しかし、『汐』の意味を知っている人物は限られている。紅貴が『汐』の意

味をしつているとすれば、やはり、予想は的中したということになるだろう。駿は話を続けた。

「ごめんね。驚かせちゃった。いきなり今日知り合って、そんなこと言われても困るよね。しかも、『石』（いし）って書いてせきって読む名字なんて変わってるんだし、それは驚くよね」

「そんなことないです。俺も新しく友人ができるなんて嬉しいです」
紅貴の顔からは安堵の様子が窺われた。やはり、紅貴が驚いたのは『汐』という、姓にたいしてだったのだ。だとすれば、話したいことが駿にはあった。

「紅貴君は、洸に行つ洸国を救うんだろう？」

駿は、真剣な様子に聞こえるように、少しだけ声の調子を変えた。
「……なんでそれを知っているんですか？」

「仕事がらね。……あとで、龍孫様から聞くと思うけど、紅貴君に同行するのは、嘉国の二將軍、翡翠と、桃華ちゃん。それから、医者白琳、翡翠の妹の瑠璃ちゃんだよ。……いずれも俺の友人だ」

駿はそう言つて、少しだけ悲しげに見える表情を見せた。目線を少し下に下げる。駿は、自分の容姿がこういう場面出で役に立つことを知っていた。駿は静かな声で言葉を続ける。

「洸って言つたら、生きて返れるかわからない場所らしいね。そこに行くとなると、みんな生きて返れるか……。翡翠も、桃華ちゃんも二將軍だし、王の勅命は絶対だけど、凜河の盟を破ることになるそれが洸に見つかれば、どんなに二人が強くても、どうなるかわからない。もしかしたら、その影響で嘉に大きな被害をもたらすかもね」

「はい……」

「4人を送り出す友人、知人、家族もつらい思いをしているだろうねえ。実際俺もつらいしね」

駿はそういつて悲しげな笑みを見せる。

「官は王の命に逆らえないし、誰かが洸を救わなきゃいけない……！それはわかっているんだ……。でも、俺と、俺じゃなくても、

あいつらを洗に行かせるのはつらい。もしよかったら……王にした願いを下げてもらえないかな……」

「駿……」

紅貴は、明らかに動揺が見える様子で駿を見た。

「ごめん！俺、なんてことを……今の言葉は忘れてくれ」

駿はそう言つて、賓客殿を去つて行つた。

駿が去つたあとも、紅貴の脳裏から、駿の悲しげな顔が離れなかった。駿の言う通り、自分がやろうとしていることは、たくさんの人の悲しみを生む行為なのだ。駿のような思いをしているのは、駿一人ではないだろう。しかし……

紅貴は故郷を思い出す。このままいけば、故郷でたくさんの方が死ぬかもしれない。それに……。紅貴は自分の手を握つた。ある、かけがえのない人物が死んだ。それをとめられなかった自分。それを償わなければならない。

時に、残酷な決断をしなければならない。それが、自分の置かれた立場なのだ。それができなくて、あのようなことになったのだから。

「駿悪い……。」

許してくれ、というつもりはない。時に非情な決断をし、何を最優先にするかを考えなければならない。それができなければ、もっと酷い事態が起こるかもしれないのだ。だとすれば、やるべきことは一つだった。

「せめて、洗をなんとかしよう……。まってるよ、聡翔」

紅貴は故郷で待つ人物に向かって、そう宣言した。

「お人が悪いですね。駿殿」

「お話聞いていたんですか？康亀様」

「気づいていたでしょう？」

「一応、武官やっていますから、人の気配には鋭いつもりです」

「あの少年には酷ですが、周りの悲しみや、苦しみ、そう言うものを踏襲してまでも突き進まなければならぬ、そうですね？」

「優しいだけでは、無理ですからね。ごく、軽く試練を与えたまでです」

「名演技でしたね」

駿は、くすりと笑みを浮かべる。

「たまには『汐家』の仕事をしないと、罰があたりますから」

そう言って、汐 駿は、いつもどおりの麒麟の仕事に戻って行った

第一章 北の青い空 8

「きゃー！」

煌李宮のとある一室、ガタガタという音とともに、少女の甲高い悲鳴が上がった。ちょうど部屋の外の回廊では、宮中に勤める数人の女官が掃除をしているところだったが、女官たちが驚いた様子はない。

「またですね」

「まだ前回の雪崩から一日しかたっていないのに……」

「鳳華様ったら相変わらず困った方ですわ」

「私、様子を見てきます」

一人の少女がやれやれというように桃華の部屋に向かった。

「いったーい！」

桃華の部屋では、宮中ではなかなか見ることができない光景が広がっていた。床には大量の巻物と、ぬいぐるみがばらまかれ、本来見えるはずの床が見えなくなっている。本来巻物が入っているはずの黒い漆でできた書棚には、なぜか巻物ではなく、飲みかけのお茶が入った湯のみが置かれている。そんな部屋の中心……床の上というよりは、巻物でできた小山の上に、この部屋の主、桃華は座っていた。

「桃華様大丈夫ですか？」

部屋に入ってきた女官の少女を見た桃華は、へらりと笑う。

「うん、大丈夫」

「ところで、さっきの物音どうしたんですか？」

「なんかねー、探し物してたら物が降ってきたの」

女官の少女は首をかしげる。

「探し物をしていて、どうしてこうなるんですか？」

「わかんないけど、普通に探し物してたら、巻物がたくさん落ちて

きたの」

「そうですか。ところで、その探し物見つかったんですか？」

桃華は首を横に振る。それをみた女官の少女は桃華に優しく微笑みかけた。

「わかりました。私も探し物を手伝います。でも、まずは、ここを片づけないと探し物は見つからないと思いますよ。ですから、まずは片づけてから探しましょう」

「でも、片づけなんてしてまにあうかなあ……」

桃華は床を見てうつむく。

「どういことですか？」

「あのね、午後に、翡翠が実家から帰ってくるから、帰って着次第話し合いんだけど、その探し物ね、翡翠からの借り物で、その話し合いで使うの……」

「探し物って翡翠様からの借り物なんですか……！？それ、見つからないと翡翠様に怒られますよ！」

「うん……どうしよう！可憐」

桃華はそう言って、自分の桃色の着物を握る。可憐と呼ばれた女官の少女は、桃華のほうを見て、少し早口で言う。

「桃華様、落ち着いてください。片付ければ必ず見つかりますから。その、翡翠様からの借り物っていったいどういったものなんですか？」

「あのね、巻物」

「巻物ですか！？」

可憐は桃華の部屋を見渡した。そこにあるのは、大量の巻物だ。

「桃華様、巻物に特徴とかないんですか？」

「えーと……とにかく深い緑色で、内容は弄国正史と、弄と嘉の盟約についての写し。全部翡翠が書いたやつだから、筆跡は翡翠のだよ」

「わかりました。片付けながら探してみます」

数十分後、可憐に、部屋の隅で、動かないように言われた桃華は隅で、猫の縫いぐるみを抱いて座っていた。暇を持て余した桃華は、可憐に話しかける。

「ねえ、可憐、紅貴って知ってる？」

「紅貴殿って、赤い髪の方ですか？知っているも何も、今、私が紅貴殿の身の回りのお世話をしているんですよ。そして昨日、それがきっかけで駿様に会えたんです……！あの、素敵な笑顔……！堪りませんわ……！」

「駿かあ。なんであんなに人気あるんだろうねえ……。たしかに顔はカッコいいのかもしれないけど、えーと、私にとっては良いお兄ちゃんのようなものだけど、駿性格悪いでしょう。なんで人気あるの……？」

桃華は猫の縫いぐるみの手をふにやふにやと動かしながら、なんでもないことのように可憐に話しかけた。可憐はといえば、信じられないというように、驚いた様子で 桃華を見る。

「桃華様！駿様は性格悪くありません！きっと、優しくって、頼りになる方です！そうじゃなきゃ、あんな素敵な笑顔が似合うわけがありませんわ」

「素敵な笑顔、か。なんか友達の可憐がそういうこと言うと、やだな……。なんか可憐が騙されているみたいで」

「駿様は人を騙したりはしません！……ところで、話変わりますが、紅貴殿っていったいどういう方なんですか？紅貴殿に直接聞いてもあんまり詳しいことを教えてくれないんです……。桃華様し知りますか？」

「紅貴は、洸国の難民だよ」

可憐は、種類別に巻物を分ける手を止め、桃華の方を見た。

「洸って、あの洸ですか？」

桃華は頷いた。

「ずいぶん遠くからいらしゃったんですね。長旅をしてきたとは聞いていましたけど予想以上ですわ」

洮国と言え、双龍国の最北部に位置する国だ。南の嘉からみれば確かに遠い。

「ところで、なんか、こうして何もしないの悪いし、私に手伝えることない？」

「いいです！桃華様はそこで大人しくしててください！」

可憐はそういうと、再び部屋の片づけをはじめてしまった。

「あ、深緑の巻物一つ見つかりましたよ。中身確認してみてくださいいい」

桃華は可憐から受け取った巻物を開く。書道の手本のような見事な達筆は間違ひなく翡翠の筆跡だ。桃華が、翡翠を尊敬する唯一の部分だったため、間違えようがなかった。

「可憐、ありがとう！これで間違ひないわ！」

「よかったですわ」

「私、今から話し合い行ってくるね。ここの片づけ可憐にお願いして良い？」

可憐はにつこりと笑った。

「おまかせください。桃華様が戻る頃には見違えるように綺麗にしてみせます」

「後で遥玄ようげんの所いってこようつと」

部屋を出た桃華は鳳軍で一番信賴置ける部下の名前をつぶやいた。

煌李宮の内廷の西の一室。桜の模様が彫られた茶色の扉を開くと、円卓を囲んで四人の男が座っていた。お茶を飲んでいたのか、部屋には香ばしいお茶の香りが広がっている。

「桃華、普通のお茶で良いかね？」

「うん。龍孫様ありがとう」

龍孫は、いつものように柔らかい笑顔を浮かべると、ひとつあいていた席の椅子を引いた。桃華が椅子に座ると、慣れた手つきで桃色の湯のみにお茶を注ぎ、桃華の目の前に置いた。

「翡翠、これ」

桃華はにつこりと笑い、たまたま横に座っていた翡翠に巻物を渡した。

「……埃まみれになってないか？」

「そ、そんなことはないよ」

翡翠はため息をつく、巻物を円卓の上に置いた。

「おや、麒麟様、女の子に冷たい態度取っているともてませんよ？」

桃華の正面に座る、少し長めの髪を後ろでお団子にした中年の男はくすりと笑って言った。

「俺には関係ない話だ」

翡翠はそう言って表情を変えずにお茶を飲む。

「つれないですねえ。そうそう、私の娘の噂知ってますか？」

中年の、医者証である白い衣を身にまとった男は笑みを浮かべたまま続けた。

「白琳の噂？圭貴様、教えて」

桃華は、話の続きを、白琳の父親に促した。圭貴は、桃華にむかってにこりと微笑むと、話を始めた。

「看護師や、女官、はたまた官吏……煌李宮中の人々が噂しているのを聞いたのですがね、私の娘、白琳と、麒麟の若き天才、駿殿ができていますよ」

圭貴は、そういうとおもしろそうに笑った。桃華はちらりと翡翠の方を見たが、相変わらず表情を変えずにお茶を飲み続けていた。

「その噂なら私も聞いたことがある。宮中どころか、李京中で噂になっているよ。まあ、それでも駿殿と、白琳殿が好きな方は相変わらず多いようだけど」

康莉が圭貴に続いた。

「へえ、知らなかった。見た目はすっごいお似合いで、すっごく絵になる二人だね。おとぎ話の皇子様とお姫さまみたい」

桃華はそういつて翡翠にはほ笑みかけるが翡翠は、何も言わずにお茶を飲み続けている。

「そういえば、鳳華様は、国境の様子を見にいついて二週間ほど煌李宮を留守にしていましたし、麒麟様は、花祭りのあとすぐに弄国に行きましたからお二人ともご存じないんですね。なんでも、私の娘と駿殿はその間に、頻繁に会って仲を深めていたそうで、二人の仲睦まじい姿がいたるところで目撃されていたそうですよ。父親の私としても、あの、駿殿なら安心です。腕も立ち、頭脳明晰、後輩の面倒見も良く、駄目な上司……おっと失礼しました。尊敬する上司の後始末……失礼、右手となって働いている。あんなに出来た方の嫁になってくれれば父親としても幸せです」

桃華が再び、翡翠の方をちらりと見ると、今度は湯のみを円卓に置いてため息をついていた。そして、翡翠が口を開く。

「とりあえず、くだらない話は後だ。本題に入ろう」

「そうですね。私の娘の自慢話はまたあとで。弄国はどうでした？」

「結構まずいかもしれない」

「まずい……？ いったいどういうことかな？」

王は怪訝そうに翡翠のほうを見る。

「確認するまでもないが、嘉は弄国に防衛のための兵を貸し出している。嘉はその代わりに弄国から軽玉を輸入しているが……」

翡翠はここでいったん言葉を切り、お茶を飲んだ。桃華は、自分の頭の中にある常識を思い出す。恵玉とは透明な石だが、特定の場所でしか取れない。その貴重な石は、特殊な加工を施せば、いかなる硬さにも調節ができ、いかなる形にも変化することができる。弄国は、そんな貴重な軽玉の産出地だ。貴重な玉を所有することは恵まれていたことではあるが、同時に波乱を呼び起こす可能性もあった。国同士の公正な取引ではなく、他国の侵入という、一方的な形で弄国が支配される可能性もあるのだ。弄国は元々、兵力が少ない。軽玉が取れるその土地は、聖域のような意味を持っており、もともととは神官が建てた国、戦いは厳禁だったというのがその原因だった。とはいっても、このご時世、そうも言ってられない。しかし、弄国が兵力を持とうとすると、ひとつ問題があった。突然兵力をもった

ならば、戦争を仕掛けようとしているとし、それを理由に弄に攻め入る可能性がある国があった。北の大国、洸だ。嘉は、そんな弄を守るために、嘉の武人を弄に派遣しているのだ。嘉と洸の間には凜河の盟がある。数百年前、嘉と洸が戦争している時代、嘉は劣性だった。時の嘉の国主、要王は何かと引き換えに、国境を定め、互いに干渉しないことを洸に約束させた。これが凜河の盟である。この盟約がある以上、洸は嘉の兵に手出しができないのだ。

「弄国が、兵を増やして欲しいと言ってきた」

「なんか嫌な感じだな」

「しかもだ、一緒に行った文官のやつによると、弄が提示した軽玉の計算が合わないらしい」

「どういうこと？」

「軽玉っていうのは、弄国の特定の土に埋めると、増える。弄でその年取れた軽玉のうち、3割は再び土に埋めて、2割が嘉にもらえることになっている。普通に考えれば年々嘉がもらえる軽玉は増えていくはずだ。実際今までは、軽玉の量が年々増えてきていた。だが、今年提示された軽玉の量は去年よりも少ない。いやな予感がする」

「他国に脅されて、軽玉がとられてたりしてな」

康莉が腕を組んだまま静かにいった。

「それとも、弄が危ないって言うことを弄自身が知らせたくて、そう言ってるのかもよ」

「どちらにしても、もっと細かく調べてから弄国と約束するべきだろうな。で、二將軍に、弄国を調べる許可を王にもらおうとしたら、そのどこぞの王は俺たちにめちゃくちゃな命令をして、それができなくなった」

桃華、康莉、圭貴の三人は笑った。王は、少し気まずそうに咳払いをする。

「仕方ないだろう。紅貴があまりにも必死だったんだから」

「……で、とりあえずその役を駿と遥玄あたりに頼もうと思ってる

「何か問題あるか」

「ないよ」

「ないな」

「良いと思いますよ」

翡翠は、同意する桃華、康莉、圭貴の答えを聞くと、王の方を見た。

「駿と、遥玄には私から話しておこう」

「あと、圭貴様にお願ひがあります」

圭貴はにやっと笑うと、口を開く。

「だいたい察しがつきます。軽玉をうまく調整して使い、もし軽玉がたりなくて、嘉の医者が騒ぎだしたら、黙らせてほしいんですね？」

「はい」

嘉では、軽玉を、主に医療の現場で使っている。様々な硬さ、形に変化できるそれは、注射、あるいは点滴などに形を変える。しかし、弄との約束が保留になった今、その軽玉が足りなくなる可能性があった。白琳の父親、壮 圭貴は煌李宮で医学を司る、典藥寮の長だった。実質、嘉国の医者 of 頂点に君臨しているといっても良い。「策はあるのでご安心ください」

「それにしても双龍国は荒れてるな。弄国も怪しい、津と烽は相変わらず争っている。恵は何考えているかわからないし、洸からはくそ餓鬼がくる。…… 嘉の緩さが異常なのかもな。まあ

難民の問題はあるが」

そう、淡々という翡翠にたいし、桃華はにっこりと笑って言う。

「嘉もそんなに平和じゃないかもよ？もしかしたら、目的はわからないけど、煌李宮にどこかの間諜が紛れ込んでるかもしれないし、でも対策は打ったわ」

「お前のその言い方は、予想じゃなくて、確信だろう。誰だ？……いや、予想はつくが……」

「翡翠が予想付いてるんならそれで多分正解でしょう。大丈夫。遥

玄にお願いしてきたから」

「それ、お前は何かやってないじゃないか」

翡翠はため息をついて言った。

「だってわたし、こういうの向かないもん。で、話し合いはもう終わり？ 終わりなら、明日に備えてお昼寝するから、私は部屋戻る」

桃華はそういつて席を立った。周囲の大人は呆れた様子で桃華を見ていたが、桃華は軽やかに笑っただけだった。

第一章 北の青い空 9

まだ夜明け前だった。春とはいえ、夜明け前の風は、さすがにまだ肌寒い。しかも、港のそばに腰かけているとあつては尚更だ。駿は、冷たくなった手を口の前にそつと当てると、温かい息を吐いた。ほんの少ししか温かくはならなかったが、こういう時間を、駿は嫌つてはいなかった。愛しい女性を待つ時間は、彼にしては珍しく、『素』の自分でいられる時なのだから。

「こんな時間にごめんね。待たせちゃった？」

瑠璃の温かい手が、駿の肩にふれた。

「大丈夫だよ。俺がこんな時間しかあいてないのがいけないんだから。……瑠璃ちゃん、夜が明けたら洗に発っちゃうのに」

駿はそう言つて柔らかい笑顔を作つた。瑠璃の蒼い瞳が駿を見つめる。駿には、その瞳に一切濁りはないように感じられた。

「あの、……私、どうしてもやりたいたことがあつて洗に行ってくるから……でも、どうしても駿にはお別れを言いたくて……」

瑠璃はそういうと目を下げた。濁りのない瞳は、しかし、どこか悲しげだった。

「そんな悲しそうな顔しないで。戻ってくるんだろ？ここに」

駿がにこりと笑つと、瑠璃はこくりと頷く。——そう頷いたものの、瑠璃はどこか不安そうのように駿には感じられた。駿は、右手で瑠璃の肩を抱き寄せた。その、細い肩が、愛おしい。

「大丈夫。瑠璃ちゃんは絶対ここに帰つてくるから。やらなきゃいけないことをやって、ここに帰ってくるのを俺待ってるし」

「うん、ありがとう。でもね、私、それもそうなんだけど、単純に駿とはなれちゃうのが寂しいなあつて思つて……。自分で行くつてきめたのに、駄目ね」

瑠璃はそう言つて笑つた。駿にとっては意外な言葉だった。しかし、しばらくして気づく。自分にとって、その言葉……その瑠璃の

純粹さが、たまらなく愛おしいということに。駿が知っている限り、瑠璃は一番純粹な女性だった。世間でそう思われているかは分らないが、瑠璃は心が綺麗な女性だと、駿は思う。そして、それは自分にはないものだ。——もしかしたら、そこに惹かれたのかもしれない。昔からの癖なのか、職業柄なのか、いつも物事を計算していた。目的のためには手段を選ばず、時と場所によって、性格を変え、人を利用する。それが駿の日常だ。幸か不幸か、それが完璧にできてしまうのだ。そんな駿にとって、真っ直ぐな心を持つ瑠璃はかけがえない存在だ。

「そんな風にいつてくれてありがとう」

駿は思わず小声でぽつりとつぶやいた。その声が瑠璃耳に届いたかは駿には分らなかった。

「私、絶対戻ってくるから、だから……駿、ここで待っていてくれる？」

駿は、いつもどおりの笑顔を作って言う。

「もちろん待ってるよ。だから、瑠璃ちゃんは、……いざとなったら翡翠を盾にしても無事戻ってきてね。大丈夫、翡翠なら盾にしても死なないから」

それを聞いた瑠璃は声をあげて笑った。

「わかった。いざ、敵がおそってきたら翡翠を盾に逃げるわ」

「……夜が明けるね。もうそろそろ時間かな？」

「そうね。そろそろ行かなきゃいけないわ。李外門でみんなと待ち合わせしてるの。……駿、最後に私と会ってくれてありがとう」

「お礼を言うのは俺のほうだよ。俺のほうこそ会ってくれてありがとう」

駿はそう言って綺麗な笑顔を作って笑った。

瑠璃が去った後も、駿はしばらくその場で座っていた。月が隠れ、地平線の彼方から朝日がのぞいている。

「翡翠の奴…瑠璃ちゃんを死なせたら殺してやるからな……」

それから駿は軽く眼を閉じて心の中でつぶやく。

(ごめんね……瑠璃ちゃん)

このとき、謝罪の意図を知るのは駿自身だけだった。

クシユン

「翡翠、風邪？」

くしゃみの音を聞いた紅貴は翡翠を見上げた。

「いや」

「誰か翡翠の噂でもしてるのかな」

「さあな」

翡翠はそう言って肩をすくめた。紅貴は李外門の内方を見た。李外門を出たすぐ横の検問所で、旅の仲間と合流することになっているのだが、まだ紅貴と翡翠しかきていない。人が来る気配もなかった。

「ほかの人たちまだかなあ。俺、眠いよ」

紅貴は目をこする。寝坊しそうになったところを、女官の少女に無理やりたたき起こされた紅貴は、まだ完全には目が覚めていなかったのだ。

「そうだ、その黒天馬触っていいか？」

「やめておけ。こいつは初対面のやつに触られると噛む癖がある」

「噛むって……犬や猫じゃないのに!？」

「飼い主ににってるんじゃないかな」

気配はなかった。しかし、そこにはいつの間にか白い天馬を引き連れた桃華がいた。

「桃華いつの間に!？気配なかったぞ」

桃華はにっこり笑う。

「今来たの。それより、さわるならこの子触ってあげて。天テンって言うんだよ。かわいいでしょう？」

紅貴は、天テンと呼ばれた白い天馬をみる。普通の天馬より小さく、仔馬と同じくらいの大きさだ。羽は、やわらかそうで、風が吹

くと、毛がフワフワとなびいていた。紅貴をみつめるまん丸の瞳は、水色をしており、とても愛くるしい表情をしている。紅貴は天テンを触った。普通の馬より柔らかい毛並みをしている。触られるのが嬉しいのか、天テンは、気持ち良さそうにしていた。

「わあゝ！すっげゝ！こいつ、かわいいな！俺の……もこれぐらいかわいいければ良いのに」

「あれ、紅貴も何か飼ってるの？もしかして、翡翠の天馬の横にいる茶色いお馬さんは、借りものじゃなくて紅貴のやつ？」

「あ、いや、あれは、龍孫様から借りたやつなんだ。なんでも、この国の皇太子様の馬らしいんだけど、皇太子様は天馬を持ってるから、馬を貸しても問題ないだろうって。よく躑けてあるから、しっかり乗せてくれるんだってさ」

「そっかゝそれなら安心だねゝ」

紅貴が桃華と会話していると、李外門の内側から、馬の足音が聞こえてきた。足音の方向をみると、茶色い馬と、白い馬が近づいてきている。

「瑠璃ゝ白琳ゝおはよう！」

桃華が嬉しそうに挨拶をすると、馬に乗っていた、瑠璃、白琳と呼ばれた女が降りてきた。

「おはよう桃華」

綺麗な蒼い瞳をもつ女が、眠気を一切感じさせないはつきりとした声で言った。

「おはようございます。桃華様。昨日はよく眠れました？」

絶世、といっても差支えがないほどの綺麗な女性が、自分の白馬をなでながら、やさしい声で言った。桃華はにっこりと笑う。

「うん、たくさん寝たよゝ。あのね、横にいるのは紅貴。たぶん白琳瑠璃も会ったことないでしょう？」

「はい。はじめて会います」

白琳はそういうと、目線を紅貴に合わせる。背が高い白琳は、腰を少し折ると、ちょうど紅貴と同じくらいの目の高さになった。

「私は、壮　白琳です。よろしく願います」

そう言って上品に笑う白琳を直視してしまった紅貴は、自分の顔が火照るのを感じる。

「あら、紅貴っていったけ？もしかして白琳に惚れた？」

紅貴のほうを見た、透き通った海のような綺麗な蒼い瞳をもつ女は笑いながら言った。どうやら、見た目通りの明るい性格らしかった。

「そんなんじゃないよ……ただ、あまりにも綺麗だったからつい。

それに、白琳さんみたいな綺麗な人には当然彼氏がいるんだろうし、俺なんかじゃ全然……って、俺何言ってるんだろう」

「あら、私、彼氏なんかいませんわ。特に気になっている方もいませんし」

白琳は先ほどまでの柔らかい口調とは一変、きっぱりと言った。

「どちらにしても、ただの迷子の紅貴じゃあ、役不足だろう」

翡翠が、腕をくんだまま淡々とした口調で言う。

「だから、そんなじゃなくて、ただ、白琳は綺麗だな、って思っただけだって」

「まあ、白琳は綺麗だからしかたないよね。私も初めて会ったとき、びっくりしたし。あ、私の名前は芳　瑠璃。一応、馬鹿兄芳　翡翠の妹。白琳と桃華とは友達だよ」

駿という青年に瑠璃が翡翠の妹だとは聞いていたが、改めて二人を見比べると、似ていない兄妹だと紅貴は思った。どちらも美形なものにはかわらないが、切れ長な瞳を持つ、どこか近づきたい印象の翡翠に対し、大きな瞳を持つ瑠璃は、明るく、親しみやすい印象だった。性格の方も、無口で無愛想な翡翠とは違い、瑠璃はよく笑う明るい性格のようだった。

「全員そろったところで、これからの目的地について話したい。洸にむかう道筋だが、まず李仙道を通って、嘉国と恵国の国境の街、明陽に向かって、恵国に向かう。そのあとのことは桃華が知っているらしいから、桃華についていけば洸に着くはずだ」

「うん、その後は私についてきて。ちょっと大変な道だけど、私と翡翠がいるから仕方ないよね。ごめんね」

「それから、その途中、嘉の北の都市、慶で、ちょっと時間が欲しい。王に命令されてな、『星の皇子様』に会わなきゃならないらしいんだ」

「……星の皇子様って誰？」

紅貴が感じた疑問を、紅貴に代わり、瑠璃が翡翠に質問した。

「星の皇子様は星の皇子様だ。王が考えた別名みたいだな……。ふざけた別名の割に、知ってればその別名だけで、すぐそれが何者かわかる。今本名を明かすわけにはいかないが、会えばわかるから安心しろ」

「うん、わりとそのままだよね。星の皇子様」

「桃華も知ってるの？」

紅貴がたずねると、桃華はこくりと頷く。

「星の皇子様とは仲が良いお友達だよ」

「じゃあ、簡単に説明したところで、さっそく出発だ」

翡翠はそういうと、天馬にまたがろうとしたが、紅貴は翡翠の服の裾をひばった。

「ちょっと待つて！出発する前にみんなに言わなきゃいけないことがあるんだ」

他の4人からの視線を、紅貴は感じる。冷めた感じの目で、紅貴を見る翡翠。少し不思議そうな目で見る瑠璃と白琳。興味津津、といった感じで見る桃華。四人の視線が集まり、心臓がすこしどきりとしたが、これだけは言わなければ気が済まなかった。

「こんな大変なことに巻き込んでごめん！……でも、俺どうしても、洗を救わなきゃいけないんだ！だから……よろしくお願いします！」

紅貴は頭を下げる。

穏やかだった風が、急に強くなった。

何か、ただならぬものがそこで生まれたことを紅貴はきづいてい

ただろうか

一瞬、沈黙が包んだが、それを破ったのは桃華のいつも通りの明るい声だった。

「紅貴、顔あげてよ」

紅貴が顔をあげると、桃華がにつこりと笑っていた。

「自分が生まれ育った所助けたいなんて当たり前だよ」

確かに、そうなのかもしれない。しかし、現実的にそれをやろうとするのは大変なことだと、紅貴は知っていた。それを当たり前だという桃華の言葉が心強かった。

「ありがとう」

「私にできることなんて少ないかもしれませんが、お手伝いしますから、大丈夫ですよ」

白琳は優しい笑顔で言う。

「国が大変なことになって、それを救おうとして実際に動くなんて、かつこいいじゃない！私は手伝いしかできないけど、やれることはなんでもやるわ」

「白琳、瑠璃、今日会ったばかりなのにありがとう」

「……礼を言うのは少しはやいんじゃないか？俺たちはまだ何もやっていない。お前がやろうとしていることは無謀なことだ」

翡翠は腕を組んだまま抑揚のない口調で言った。紅貴はこくりと頷く。

「じゃあ、今度こそ洩に出発しよう」

五人はそれぞれ馬にまたがった。馬の背の上で、紅貴は心の中でもう一度、他の四人に礼を言った。

「庚莉、清熾せいし私はずりいのではないだろうか」

王の私室には、三人の人影。龍孫と、康莉、そして龍孫の、唯一にして最愛の王妃清熾だ。

「私は、結局王として、国のためではなく、ただの私情……今は亡

き親友の為にあの四人を紅貴と共に行かせただけなのではないだろうか」

龍孫は自分の拳をぎゅっと握った。

「…… 龍孫様は王として適切な判断をされていると思いますが。あの任に適任なのは、どう考えても麒麟と鳳華です。そして、白琳瑠璃殿には瑠璃殿の役割がある。洸を救うことは私情だと思います。んし、王として適切な判断だと思いますよ。そして、それに適しているのはやはりあの四人です。翡翠と桃華を二將軍にしたのもあの二人の力を見込んでのこと」

康莉はきっぱりとした口調で言った。

龍孫は静かに頷く。

「龍孫様、あなたは王として適切な判断をしたと思います。自信を持ってください」

龍孫が黙っていると、王妃、清織が、部屋中に聞こえる音でため息をついた。

「まったく。何くだらないことで悩んでるのよ。たまたま下した、『王としての』判断が自分のこうなっただけっていう『私情』と重なってなやむなんて、馬鹿みたい。重なって運が良かったってぐらいに思わなきゃ」

「清織様の言うとおりですよ。清織様はいつも的確なおっしゃいますね」

康莉は、微かに笑いながらそう言った。

「当たり前でしょ。何年この人の妻やってると思ってるのよ。まったく、こんなことで悩むなんて大した王よね」

清織は、座っていた椅子から立ち上がると、龍孫の横に立った。

「悩むなどと言わないけど、もっと自信もったら？…… 嘉国は良い国よ。あ、そうそう、あの四人をもっと信頼してあげたら、もっと最高よ」

清織は龍孫のほうを向くと、鮮やかな笑みを浮かべた。その笑顔を見た龍孫は思わず吹き出してしまふ。

「清熾と話していると悩みなんて吹っ飛んでしまっね」

「だって龍孫が暗い顔しているところなんて見たくないもの」

まるでなんでもないことのように、そう言う清熾を見た龍孫は温かいまなざしを向けた。

「ありがとう。……さて、私は外の空気でも吸ってこようかな」

「清熾様さすがですね」

本当に感心したようにいう康莉に、清熾は笑った。

「さすがも何も、私はあの人をちよつと励ましただけよ。……龍孫は、王だし、国を背負うつていうの、並大抵の覚悟じゃできないと思うわ。それが出来て、しかも世間では賢君なんていわれてる龍孫は、やっぱりタダ者じゃないんでしょう。でも、それでも龍孫は、人なんだし、悩んだりもするわ。人である以上、その悩みを聞いて、激励したりするのは当然でしょう」

「そうですね」

「龍孫は王だし、しかも賢君なんであれば誰もがそういう目でみるのは当たり前だと思うわ。でも、一番近くにいる私たちは王の龍孫ってだけじゃなくて、かけがえのない人の龍孫として、支えなやいけないと思うの。実際、好きな人がつらい思いするのは見ていてつらいしね」

龍孫は、煌李宮の中庭にいた。日は昇っている。――あの四人、それから今は亡き親友にとつてのかけがいのない人物は、もう李京を発っているはずだ。龍孫は北の空を見た。かの五人が向う方角の空は、綺麗な青空だった。五人が向かう道は、想像を絶するほど陰しいものかもしれない。この澄み切った青い空のような綺麗な道では、決してないだろう。でも、最終的には、この空のように、綺麗な場所にたどり着けるように、五人が無事であるようにと、雲ひとつない澄んだ天空に、嘉国王、龍孫は祈った。

第二章 旅の始まり 1

李外門を出た先も、石畳は続いている。辺りは、朝も早く人通りが少なかった。5頭分の馬の足音が石畳に響いているだけで、辺りは静かだ。紅貴の前には、翡翠、白琳、瑠璃があり、紅貴はその後を付いて行っていた。紅貴のうしろには桃華がいる。ちらつと後ろをみると、桃華に先ほどのまでの元気な様子はなく、手綱を片手に、眠そうに眼をこすっていた。

「おい、桃華、大丈夫か？」

きちんと手綱は操っているものの、眠そうな桃華の様子を心配に思った紅貴は声をかける。

「うんゝだいじょうぶゝ眠いのゝ」
キュン……

桃華がそういうと、天馬の天テンは心配そうに鳴き声を上げた。その時だった。紅貴がのっていた馬が急に立ち止まった。急に止まったため、落馬しそうになった紅貴だったが、なんとかこらえる。もしかしたら、よく躰けてあるという、皇太子の馬がうまく支えてくれたのかもしれない。前を見ると、翡翠、白琳、瑠璃も止まっていた。ちょうど見張り台へ差し掛かるうという場所だ。

「ちよつと翡翠！急にとまるなんてどういうこと？」

どうやら、止まった原因は、先頭を走っていた翡翠にあるらしいかった。

「嫌な予感がする」

瑠璃に聞かれた翡翠は、見張り台の二階を睨むと、ぼそりと呟いた。やがて、天テンから降りた桃華もやってきた。いつものにこやかな表情で、先ほどのまでの眠そうな様子はない。

「みんな急にたちどまってどうしたの？」

につこりと笑って桃華がいうと、白琳が答えた

「みなさんを置いていこうかという勢いで走っていた翡翠様でした

のに、嫌な予感がすると言って急にとまったんです」

「ふん。いやな予感かあ。……。確かにするね」

何気ない口調で言う桃華だが、眼だけは翡翠同様に鋭かった。李外門と、李仙道のあいだのこの路には、二階建ての見張り台がある。一階は、人が通り抜けられるようになっており、二階は普段であれば、兵士が見張りをしている。桃華と翡翠はその二階を睨みつけていた。

翡翠は、何も言わずに見張り台へ向かって歩き出した。紅貴たちもあわてて追いかけた。

見張り台の階段を昇りきろうかというところだった。先頭を歩いていた翡翠が急に立ち止まった。

「ちよつとどうした……!?」

最後まで言う前に、翡翠のすぐ後ろについていた紅貴は何が起きているか気づいた。翡翠の目の前に、一人の、中年の兵士が立っている。兵士が持つ刀の先は、翡翠の首の横に当てられていた。嘉国の兵士らしい男は、眼で威圧しているように感じる。紅貴に向けられた物ではなく、前をにている翡翠に向けられているものだと解っていたが、兵士の氷のように冷たい黒い瞳に、紅貴は震えそうになった。

「ここに何の用だ。貴様が戦いに身を置くものであるというのは、見ればわかる。あれが貴様の仕業だというのなら、俺が相手をするから覚悟をしろ！」

兵士の激しくまくしたてるような声に、思わず紅貴がびくりとする。しかし、言われた当の翡翠は、わざとらしく大きなため息をついただけだった。

「貴様、いったい何を考えている！」

「何か誤解していないか。俺たちは、ただここを通りかかっただけにすぎない。嫌な予感がしたから様子を見に来た」

「信じられるか！貴様がどんな事情で来ようと怪しすぎるお前を通

すわけにはいかない！さつさと引け！」

「わかった。それなら、武器をあずけるからそこを通せ。……何かあつたんだろう？」

翡翠のその言葉に、兵士が驚いたように紅貴には感じられた。

「一般の方を巻き込むわけには……」

兵士は、力なく刀を下ろす。先ほどまでとは一変した兵士の態度に、紅貴は驚いたが、当然の反応なのかもしれない。翡翠は、もう一度ため息をつき、言う。

「気にするな。今は休暇中だが、これでも一応、嘉の兵の端くれだ」
翡翠はそう言つて、腰にさしていた刀を鞘ごと外すと、兵士に押し付け、見張り台の二階に押し入った。紅貴は、なんとなく申し訳なく思え、呆然としている兵士に軽く頭を下げた。白琳、瑠璃、桃華も後ろからついてきた。紅貴は目の前の光景に啞然とする。一人の男が、倒れていたのだ。男は全身を包帯が巻かれていたが、かすかに、その包帯が赤く染まっているところがあつた。その横で座っている若い兵士の手には包帯が握られていた。倒れている男の応急処置をしていたのだろう。座っている兵士は、驚いた様子で、紅貴を見た。

「あなた方は……？」

紅貴が答えに困っていると、瑠璃が代わりに答えた。

「緑の目の人、うちの馬鹿兄なんですけど、馬鹿兄が嫌な予感がするとか言い出して、急にこちらに押し掛ける形になってしまったんです。お騒がせしてごめんなさい。ところで、これはいったい何があつたんですか？」

「実は私にもさつぱり……。私の役目はこの見張り台での見張りなのです。昨晚から、朝までが私の担当でしたので、仕事をしていました。そしたら、今は気絶しているこの男……多分、服装からして文官だと思うのですが、血だらけでここにやってきて倒れたんです。とぎれとぎれの声でしたが、覆面の男にやられた……って言っていて、とりあえず俺は応急処置をして、孝雅様は、李京に知らせ鳥をだそ

うとしたのですが……」

孝雅と呼ばれた男。先ほど、翡翠を威圧していた、中年の兵士が静かに口を開いた。

「鳥かごを見たところ、知らせ鳥は絶命していたのです。怪我はなく、息だけしていなかったところを見ると、恐らく毒のせいかと」

知らせ鳥とは、虹色の羽をもつ鳥だった。瞳の色は鳥により異なる、とても綺麗な鳥だ。その美しい鳥は、洞察力、嗅覚、視力、記憶力にすぐれ、人の言葉も理解すると言われていた。一度行ったところがある場所であれば、迷わずにたどり着くという習性を生かし、嘉では、主に伝令に使われていた。知らせ鳥は、能力が高いのと同じ時に、気位が高いという。そんな知らせ鳥を使うのは、一般人にとつては難しいことだったが、嘉の兵であればつかえて当然だというのを、紅貴は聞いたことがあった。

「一刻も早く都に知らせなければなりませんし、応急処置しかしておりませんので、この方を医者にも見せなきゃいけません。見張りを孝雅様にお任せして、私はこの方を連れて、馬に乗ろうとしたのですが、馬が逃がされていて……。おぶつて李に行こうと思い、その準備をしていたところに、あなた方がきたのです」

「様子をみにきてくださったというのに、先ほどはあのような無礼な態度、失礼いたしました。兵たるもの、嘉国の民のためにあらなければなりません。それなのに私は、とり乱してしまい……。」

孝雅はそういうと、膝を折って頭を下げた。——その姿がある人物の姿と重なる。……兵士たるもの、洗のためにあの方をお守りしなければならなかったのに……。——紅貴が茫然としてみると、瑠璃が言う。

「孝雅様、顔を上げてください。もとはと言えば、突然押し掛けた私たち、というより、あの馬鹿兄が行けないんです。ちよつと、その馬鹿兄、話聞いているの？謝りなさいよ」

瑠璃がそう言ったのをきいた紅貴が、翡翠のほうを見た。倒れている文官の横に翡翠は座っていた。その横には、白琳が立っている。

「こいつ、漣じゃないか」

翡翠が小声でつぶやくと、白琳もうなずく。

「漣さんですね」

「白琳、この人のこと知ってるの？」

瑠璃がそういうと、白琳はうなずいた。

「私たち三人、同じ年ですし、同じ寺子屋でしたから」

嘉国には義務教育という物があるという。9歳から12歳までの三年間、寺子屋と言われる学校に行き、学問を学ぶ。その後は、各種の専門の学校、家業を継ぐものなど、様々だという。

「あ、あの、あなたは白琳様ですか？」

応急処置をしていた男は、驚いた様子で言う。紅貴がそれを不思議に思っていると、それに気付いたのか、瑠璃が紅貴に話しかけていた。

「友達だからつい忘れちゃうんだけどね、白琳は、壮家っていう、医者の名家のお嬢様だし、その中でもとび抜けた医療技術をもっているの。だから、都で白琳を知らない人はいないっていうわけ」

紅貴は言われて気づく。考えてみれば当然のことだった。紅貴は王に、癒しの力をつかえる人物の同行をお願いしたのだ。白琳がそうだとすれば、有名なのは当然だった。しかも、あの美貌に家柄が加われば、その名を知られていないほうが不自然だった。

「なんか、みんなすごいんだね……」

翡翠や桃華は、あんな性格でも言わずと知れた、武官の最高位の二將軍であり、白琳は、李京でその名を知らない人はいないほどの名医。瑠璃は瑠璃で、綺麗な容姿と、あの、翡翠と桃華を扱いなれているという意味で、やはり只者ではないのだろう。なんだか、すごい人たちと旅をすることになったなあと改めて紅貴は思う。

「白琳様、この方を救えますか」

孝雅が言っと、白琳はやさしい笑顔で笑う。

「もちろんです」

翡翠は、白琳のために場所をあけた。白琳は、漣の手を取った。

その時、急に漣の周りが柔らかい光に包まれた。紅貴を含め、その場にいた全員が、白琳と漣に釘付けになる。軽く眼を閉じ、光の中にいる白琳はあまりにも美しかった。手を握っている様子は、何かを祈っているようにも見え、白い服をきたその姿は、天女のようなといっても差支えないのではないかと紅貴は思う。やがて、光が消えると、白琳はにっこりと笑う。

「終わりましたよ。この程度の傷なら、これで全身の傷はなくなっているはずですよ」

白琳は、確認することがあるのか、漣の横にしゃがんだ。これほどまでの力とは、と紅貴は目を見開く。数十年に一度、『癒し』の力を持つ人間が生まれるという。その人間はあらゆる傷をいやすことができ、あらゆる病を治せるという。話では聞いていたが、目の前でその力を見せつけられて、紅貴はおどろかずにはいられなかった。

「……白琳、おれは納得しないぞ」

なごやかな雰囲気壊したのは翡翠だった。突然、白琳の前に立つたかと思うと、いつもよりも低い声でそう宣言した。

「ちよつと何言ってるのよ。せつかく助かったのに」

「瑠璃、今度ばかりは私も翡翠に同意」

桃華にしては珍しく強い口調だった。

「だって……」

次の瞬間、翡翠と桃華の声が重なった。

「俺に対して治療するときは、あんな、優しいやり方じゃないだろう」

「私が怪我すると、白琳はすぐく怖いもん！」

紅貴の知っている限り、翡翠は常に同じ口調で話していた。それが、こつと感情的になるとは珍しいと、紅貴は思った。桃華にしても、あの笑顔がなく、のんびりした口調ではもない。早口だった。

「やっぱりそう思うよな」

「うん、絶対おかしい！なんであんなに優しいの！私たちに治療す

るときは殺されそうになるのに！」

「ああ……あれは、一度体験すると、しばらくはうなされるな……」

「うん、すつごく怖いよね」

「あれは生き地獄だな」

先ほどの、天女のような様子を見た紅貴は、どうしても翡翠と桃華が言う様子が想像できなかった。そもそも常識で考えても、そんなに恐ろしい医者か世の中に存在するのかは疑問だった。

「……お二人とも良いんですね」

翡翠の背に隠れて、座っている白琳の表情は見えなかった。しかし、その声だけで背筋がぞくりとするのはなぜだろう。

翡翠と、桃華は黙ってしまった。

「先程、言いましたよね？ 漣さん程度の怪我ならこれで事足りると……お二人はいつも、あり得ない怪我や常識では考えられないような症状が出るでしょう？ しかも、その後のお二人の、馬鹿とは思えない行動……。そこから命を助けるのはあの方法しかない上に、当然の報いだと思います」

翡翠と桃華は何も言わない。いや、言えないのかもしれない。

「普通であつたらこの場にはお二人ともいません。とつくに地獄に落ちてます。生きているのは誰のお陰かを肝に銘じておいてください。今後、そのようなことがあつて、いや、普段のお二方の行動を見ている限り、確実にありますね。……死にたいというなら話は別ですが、誰がお二人の命を握っているか忘れないように気を付けてください」

白琳はそう言つて立ち上がると、瑠璃の横に並んだ。

「白琳お疲れさま」

「たいしたことはしてませんよ。普通に治療して、どこかの子供の言い分を正論で返しただけですから」

そう言つて、につこりと笑う白琳は、やっぱり恐ろしい人物なのかもしれないと、紅貴は思った。翡翠と桃華はというと、呆然とした様子で立っていた。

やがて、もそもそと動く音が聞こえたと思うと漣が上半身を起こしていた。

「翡……麒麟……！なんで、こんなところにいるんだよ！」

漣は起きて早々そうそう叫び、傍にいた翡翠に掴みかかるうとした。

「そんな急に叫ぶと、お体に障りますよ。私が見た限り、かなり血を流していたようですから」

白琳が言ったとおり、漣は、叫んだ直後、ヘタリと倒れこんでしまった。

「……ダサイな」

「なんだと……！」

「お二人とも馬鹿な争いはやめてください。翡翠様は、漣さんに詳しい状況を聞きたいのではなかったのですか？」

翡翠はため息をついた。

「おい漣、話せ」

「なんで俺が話さなきゃいけないんだ」

「命令だ、命令。さっさと話せ」

「くそ……！普通に出勤しようとしたら、覆面の奴に襲われたんだよ。おれも持っていた刀で応戦したが、折られてこの様だ。悔しいが、相手はかなりの腕だ」

「やつぱりダサイな……まあいい。とりあえず桃華、こいつを李京まで送ってやれ。俺達は先に靖郭で待っている。場所は桜亭で良いな？」

桃華はこつくりとうなずいた

「ちよつと待て！俺が女に送られるだと！？ふざけるな」

「ふざけるなはお前だ。ここの知らせ鳥は殺されていて連絡手段がない。誰かが李にいかないといけないんだ。しかも、馬は逃がされた。桃華は天馬をもってるから、乗せてもらえば良いだろう？官吏なら仕事しろ。考雅、それで良いな？こいつは、桃華に送らせる。俺たちは先に行くから、そのついでに、もし、敵を見つけたら倒し

ておく。考雅たちはこのまま見張りを続けてる」

「はい……！」

考雅はそういうと、突然頭を下げてしまった。考雅の部下だと思われる青年もそのまま頭を下げていた。

「二將軍の麒麟様とは知らず、とんだご無礼を……」

「二人とも、こんな馬鹿兄に頭を下げる必要なんかないと思います。迷惑をかけたのはこちらなんだし」

瑠璃は、頭を下げる二人にそう言った。しかし、二人が頭を上げる様子はない。

「……別に頭を下げる必要なんかないだろう。たまたまが俺たちここを通りかかっただけなんだから」

それを聞いた二人はやっと顔を上げた。

「麒麟様のご好意、感謝いたします」

翡翠は、軽くため息をついていた。

桃華と別れた紅貴達は、見張り台を出ることになる。先に見張り台を下り、馬にまたがる翡翠を見た紅貴は先ほどから気になっていたことをこっそりと白琳に尋ねる。

「翡翠と漣つてもものすごく仲悪いみたいだし、翡翠がいつもとは違くなる気がするんだけど、あの二人、なんかあったのか？」

「寺子屋時代、あの二人は犬猿の仲だったんです。口を開けばいつも喧嘩ばかりで……。元々漣さんは禁軍に入りたかったんですよ」

「でも、漣さんって文官なんじゃ……」

白琳は頷いた。

「漣さんはあの頃は禁軍に入りたがっていました。男の子ですから、禁軍はあこがれだったのでしょう。実際、頭も良いですし、子供にしては、剣も強いようでした。ただ、翡翠様には剣では勝てなかったんです。漣さんは最初、翡翠様のことを馬鹿にしていた、その翡翠様に負けたのは悔しかったと思いますよ。しかも翡翠様はあの性格ですから……」

あの翡翠の性格であれば、漣の神経を逆撫でさせるのは普通にやりそうだと、紅貴は想像した。

「漣さんも漣さんで、翡翠様の数学の出来の悪さを馬鹿にしてました。まあどっちもどっちですね」

数学が苦手だという事実を知らなかった紅貴は、意外に思う。

「でもその漣さん、詳しい事情はわかりませんが、夢が変わったんです。結局、科挙にも三元を取って受かりました。あの年はすごかったです。武科挙主席で通ったのは駿さんですし、普通の科挙での三元は数十年ぶりだったそうですから。でも、そうなくても昔からの癖なのでしょうが。あの二人が会うといつもあんな風に喧嘩するんです。まったく困った方たちです。」

「漣さんってそんなすごい人だったんだ。なんか、そう見えないな」「この国の上位の官なんてみんなそんな感じですよ。漣さんは謎が多い方なんですけど、有能だという噂です。」

言われてみればそうだと、紅貴は感じた。紅貴がこれまでに会った嘉の上位の官は変わった人物が多い。でも洸国の官よりもずっと優秀なのではないかと紅貴は感じた。世の中が荒れている中で、これだけ平和な嘉を作っている嘉の官吏は優秀なのに違いないと。それを登用する王もまた、只者ではないのかもしれない。

第二章 旅の始まり 2

「紅貴、そういえば身分証明書はもってるの？李仙道を通るには、横の関所で身分証明書を見せる必要があるはずだけど」

見張り台から李仙道まではほとんど距離はないらしい。馬に乗っているとはいえ、速度を緩めていたため、会話がし易かった。少し心配そうに瑠璃に尋ねられた紅貴は、軽く頷くと、瑠璃の問いに答える。

「それなら、俺が煌李宮に滞在しているときに、煌李宮の人が用意してくれたんだ。これから洸に行くのには、何かと必要だろうからって。本当はたくさんの審査や手続きが必要らしいんだけど、すぐ用意してもらえたんだ」

「そう、それならよかった。ほら、あそこ、李仙道入口が見えてきたわ」

瑠璃が指をさした方角を見ると、大きな白い門が開かれていた。人も馬も荷馬車も、通るには十分な広さだ。門の内側、紅貴からみてその左側から出てくるのは、これから煌李宮に向かおうとする人々だろう。紅貴が見た時は、ちょうど、馬車が門の内側から出てくるところだった。大きな馬車に、たくさんの荷が積まれ、馬車を守るかのように馬に乗った人々がその左右にいたが、そんな大所帯でありながらも、門には人が通れる通れる余裕があった。門の両端には兵士が立ち、紅貴からみて右の関所の前には、数人が列を作っていた。

「いつもより検問に時間がかかってるようね」

馬を降りた瑠璃は、そう呟いた。

「そうなのか？」

「うん。あの程度の人通りだったら、数人とはいえ、列を作るほど待たされないはずよ」

「やはり、漣さんが襲われたせいではないでしょうか。犯人を捕ま

えようとして、慎重に検問を行っているのかもしれませんが。そうしないと、李仙道の安全は守れません」

白琳の言う通りだろう。李仙道は、元々、嘉を行きかう商人が安全に主要な都市を行き来できるように作られたのだという。李仙道そのものは、大きな橋のような造りになっており、その周囲は城壁のようなもので囲まれているため、族に襲われる心配もない。しかも李仙道の内側は、嘉の兵が見回りをしている。そのため、物が盗まれたり、人が襲われるということはめったにないらしい。そもそも李仙道に入るには、関所を通過する必要がある。そこで、李仙道を通過する許可が出なければ、通行できないのだ。李仙道が安全だといわれるのは、そのためだった。だが、その李仙道の入口近くで、人が襲われた。検問がいつもよりも慎重になるのは当然なのかもしれない。

「なあ翡翠、漣さんを襲ったやつ、捕まえられそうか？」

「さあな。ああ、念のため言っておくが、漣を襲ったやつを捕まえるために寄り道する気はない。たまたま見つけたら捕まえるかもしれないが、だが、寄り道する気はない」

「ちよつと待てよ！翡翠は強いんだろう？翡翠なら捕まえられるはずだろう！？友達が襲われたのに、いいのかよ！俺、てつきり、翡翠が犯人を捕まえると思ってたのに！」

翡翠の冷たい言い方に、ムツとした紅貴は、思わずそういうが、翡翠は、態度を変えることなく、なんでもないことのように言う。

「俺の仕事はお前を洗に連れていくことで、漣を襲ったやつを捕まえる事じゃない。第一、俺は漣と友達になった覚えはない」

「なんだよその言い方！考雅さんにも捕まえらるって約束してたじゃないか！」

「『ついで』だと言ったはずだ。ついでに見つけたら捕まえらるが、見つからなかったら捕まええない。俺じゃなくても、捕まえることができるはずだから問題ないだろう」

「なんだよそれ！」

紅貴は、思わず翡翠の胸倉をつかみたい衝動に駆られたが、背が低い紅貴は、それが叶わない。一方翡翠は、面倒だというように溜息をついていた。紅貴は、その態度に苛立ちを覚え、言葉を続けようとするが、翡翠の静かな口調がそれを遮った。

「だいたい、お前自身は犯人を捕まえる技量はないだろう？ 自分じやできないくせに文句言うな」

「ちよつと翡翠言いすぎよ！ 紅貴の気持ちを考えなさいよ」

瑠璃はそう言ったが、紅貴は瑠璃の声をほとんど聞いていなかった。翡翠の言葉が突き刺さる。確かに、自分では、できないのだ。紅貴は能力がある人間は、それを生かし、弱い立場を助けるべきだと思っていた。だからこそ、力があるのに何もやろうとしない翡翠に苛立ちを覚えたのだ。しかし、紅貴自身は頼むだけで、何もやろうとしていなかった。それに、気づいてしまった。結局、何もやらない翡翠と同じではないだろうか。

「そんなにやりたきやおまえがやれ、と言いたいところだが技量がないのに無理にやると、お前の身が危ないだけだから辞めておけ……恨むなら、何もできない自分を恨むんだな」

「……そうだな、翡翠の言う通りだ。でも、やっぱりずるい！ 翡翠はできるのにやらないじゃないか……」

紅貴は俯いた。思わず拳を強く握り締める。できるのにやらない翡翠にも、口だけで何もやれない自分自身に対しても腹立たしい。どうしたら、いいか分からずに、黙っていると、柔らかい手が紅貴の肩を叩いた。ゆっくりと顔をあげると、白琳が優しい笑みを浮かべていた。

「自分の力でできなくてくやしいお気持ちわかります。でも、これから、人を助けられる強さを身につければ良いのではないのでしょうか。これから強くなって、でも、翡翠様のような性格にならないければ良いと思うんです。ですから元気出してください」

そう言う白琳の声色はどこまでも温かかった。瑠璃の声がそれに続く。

「それもそうね。とりあえず、漣を襲った犯人は翡翠とは違って、真面目な嘉の兵士が捕まえると思うわ。紅貴が強くなった時は、今度こそ紅貴ができることをやれば良いと思う。紅貴はこれからよ」
「うん、ありがとう」

紅貴がそういうと、白琳と瑠璃はにっこりと笑った。

「翡翠様が先に関所の方へ行ってしまってますね。私たちも急ぎましょう」

白琳に言われ、関所の方を見ると、翡翠はすでに門の入口の列に加わろうとしていた。

「まったく！なんで馬鹿兄はいつも、あんな風に勝手なの！？白琳、紅貴、行くわよ」

紅貴は、そういつて歩き出した瑠璃を追いかけた。

列に並んで、10分ほど経った頃、やっと紅貴達の検問の番が回ってきた。人が好きそうな、大柄な男が顔をのぞかせている。

「時間かかって申し訳ありません。順番に、身分証明書を出してください」

役人の男は、微かに笑みを浮かべて言った。先頭にいた翡翠が身分証明書を出した瞬間、役人の男は目を見開いた。

「これはこれは……麒麟様でしたか！お会いできて光栄です！」

役人の男は、感動したようにそう言っていたが、当の翡翠は、無関心な様子だった。白琳はクスクスと笑いながらそれに続き、瑠璃も身分証明書を見せた。紅貴も、煌李宮で用意された身分証明書を見せるが、役人の男の手が止まる。

「紅貴君……かな？この身分証明書、偽物じゃないかな？」

驚いたのは紅貴だ。これは確かに、煌李宮で用意ものだ。偽物なはずがない。驚きのあまり、紅貴はとっさに声を出すことができなかった。

「ちよつと待ってください！そんなはずありません！確かにこれは本物なはずです！」

茫然としている紅貴の代わりに、瑠璃が言った。

「瑠璃さん、よく見てください。あなたの身分証明書と、紅貴君の身分証明書、少し違いますよ」

役人の瑠璃の証明書と、紅貴の証明書を裏返した。そこには国名である「嘉」が象形化されたものが描かれている。紅貴はそれをみて、はっとする。明らかに紅貴の「嘉」は全体的に細い字体になっているのだ。

「何か事情があるのかもしれないけど、これはいったいどういうことかな？いつもは話をきいて、理由によってはここを通すんだけど、今日は物騒な事件がおこっているからね、中で詳しく調べたい」

「でも……」

紅貴が動揺していると、翡翠が口を開いた。

「俺の権限でなんとかならないか」

紅貴にとっては意外な言葉だった。翡翠の性格なら、助けるはずはないだろうと思っていたのだ。

「残念ですが麒麟様、麒麟様のお願いとあっても、規則は規則ですのでお通しできません。ですが、取り調べが終わりましたら悪いようにいたしません。その様子ですと、今夜はどこかにお泊まりになるようですね。なんでしたら、そちらの宿まで、用が済み次第紅貴さんをお連れします。規則ですので、このままここを通すわけには行きませんが、それでよろしいですか」

翡翠はしばらく考えるそぶりを見せた。

「それなら助かる。うるさい餓鬼一人、今日だけとはいえないなくなるのは、良いことだからな。湖北村の亮ってやつの屋敷にいるから、頼んだ」

紅貴は愕然とする。そんな紅貴のことを知ってか知らずか、翡翠は、背中を向けてしまった。瑠璃と白琳がそんな翡翠を止めようとしていたが、翡翠が足を止める様子はなく、ついに翡翠の姿は見えなくなってしまった。やっぱり翡翠は翡翠だったと、拳を握りしめていると、役人が申し訳なさそうに言う。

「なんだか悪いことをしてしまったね。ごめんな。取り調べが終わったらすぐ麒麟様のところへ連れて行くよ」

「いいんです。悪いのは全部、翡翠なんだから」

紅貴はそう言って、俯いた。

「翡翠、紅貴を置いて行くなんてどういっつもり!？」

瑠璃は、平然とした顔をしている翡翠を睨みつけた。

「置いていってなんの問題があるんだ？」

「問題あるでしょう!もし、あのまま紅貴が捕まったらどうするつもり!?あの役人さん、一見人はよさそうだけど、何考えているかわからないわ!でも二將軍麒麟の名前を使って、諦めないで押せば、紅貴がああなることもなかったはずでしょう?」

「普通はな」

翡翠は腕を組んだまま抑揚のない声で言う。

「白琳も何か言って!この馬鹿兄、本当に馬鹿なんだから!」

瑠璃に言われた白琳は笑みを浮かべた。

「本名を名乗るなんて珍しいですね。ああいう関所とかですと、翡翠様はいつもでしたら、麒麟という名前だと何かと面倒だという理由で偽名を使うそうですね。今回の旅でも、『偽名』の身分証明書もっているはずですよ?本名を名乗るなんて、どういった心境の変化なんでしょうね」

「白琳、いったいどういうこと?」

白琳はにこにこ笑いながら続ける。

「私にはわかりません。翡翠様はいったい何をたくらんでるんでしょうね」

「……とにかく、紅貴を『桜亭』に連れてくるのは桃華の仕事だ。俺たちは先を行こう」

「もしかして、翡翠と桃華、何か企んでるの!？」

翡翠はため息をつき、何も言わずに歩きだしてしまった。

役人に関所の内部に案内された紅貴は、椅子に座るように言われた。木で出来た椅子に座った紅貴は、あたりを見回す。壁も、床も天井も全てが灰色の石で出来ており、冷たい印象に感じられる。

「お茶持つてくるから少し待っててね」

関所内部ににいる、もう一人の役人が、にこやかに笑いながらそう言った。その後ろ姿を見送りながら、紅貴はため息をついた。翡翠には怒られ、身分証明証はなぜか偽物。そして、旅の仲間には置いて行かれる。旅の初日から、あまりにも不運すぎると紅貴は感じていた。やがて、役人の男がお茶を持って戻ってきた。

「私が淹れるお茶は美味しいと評判でね、じっくり味わってくれ。さて、いくつか質問しようかな」

紅貴は緊張して喉が渴いていた。何も悪いことをしていないのだから、緊張する必要はないのだが、不思議と心臓の鼓動がいつもより早い。紅貴は、心を落ち着かせようと、お茶を一口飲んだ。

「さて、まず君の名——」

紅貴は最初の質問を最後まで聞くことができなかった。男が質問を言い終わるより先に、紅貴は、椅子から力なく落ちた。

「さて、用が済むまではしばらくは眠ってもらおうでしょうか」
お茶を持ってきた男はすでにその声が紅貴には届いていないことを知っていた。

第二章 旅の始まり 3

紅貴は、目を覚ました。まだ完全には冷めていない眼で、辺りを見回そうとするが、暗くてよく見えない。誰か、と声を上げようとするが、できなかった。布をかまされており、口を開くことは不可能だった。立ち上がるうとするが、それもできない。どうやら、後ろ手で、何かに縛り付けられているらしかった。

俺……捕まったんだ……いったい何で……

身分証明書が偽物だと言われて捕まった。実際、瑠璃がもっている身分証明書と紅貴がもっているものは違っていた。

——もしかして、俺を捕まえるために仕組まれた……？ いったい何のために……

煌李宮にいる時、周りは紅貴に親切にしてくれていた。しかし、煌李宮に用意された身分証明書が偽物だと知った以上、煌李宮側に、紅貴を仕組んだ人物がいると考えるのが自然だろう。

——いったい何のために？……まさか巻物か……？

あの巻物であれば、とられてもおかしくない代物である。だとすれば、まずい。

——なんとかしてここから脱出しなきゃ……。

頼りの翡翠は紅貴を置いて行ってしまった。自分でなんとかするしかないのだ。——あの頃のように、なんでもないことのように自分を助けてくれる人はもういないのだから。

日は沈みかけ、もうじき閉門という時刻、瑠璃、白琳、翡翠の三人は靖郭に着いた。李京よりは小規模だが、それなりに栄えた都市だ。本来、馬の足でも二日はかかるところを、一日で着いてしまったことに、瑠璃は驚いていた。昼食のための休憩をしなかったとはいえ、まさか本当に一日で靖郭に着けるとは思っていなかったのだ。「本当に着いちゃったね」

「ええ……途中、李仙道を降りて、私たちが知らない道を使つたとはいえ、驚きました」

瑠璃と白琳は、翡翠についてここまで来たのだが、途中で翡翠は李仙道を降りてしまったのだ。李仙道を外れた先は、路は整備されておらず、ひたすら草原が広がっていた。不便といえば不便だったが、李仙道とは違い、人がいなかったため、一気に進むことができた。途中、山の側も通り、少しでも馬が足を滑らせれば、怪我では済まないような場所もあったが、馬の扱いに長けている瑠璃、白琳、翡翠には問題ではなかった。

「ねえなんでこんなに急いでまで靖郭に行こうとしたの？」

「靖郭にどうしても今日中につかなくやいけない事情があったからだ」

翡翠は、足早に歩きながらそう言った。翡翠は、基本的にいつも早足だが、今日はいつもの以上ではないかと瑠璃は思った。そんな翡翠を不思議に思い、ふと周りを見回すと、周囲の人々の視線がこちらに集まっているように感じられた。瑠璃は、横を歩く白琳と、前を歩く翡翠を交互に見た。その二人を見た瑠璃は妙に納得してしまった。

（白琳は、絶世の、っていつでもおかしくない美女だものね）

瑠璃は声にださずに心の中でそうつぶやいた。李京でも白琳の美貌は有名である。求婚者も後を絶たないが、それを全部断っているのだ。一時期、あまりの美しさに、絵師が白琳の顔を描き、売り出したこともあったという。それほどまでに美しい白琳が通るのだから、人の視線が集まるのは当然なのかもしれない。おそらく、翡翠はそれが気に入らなくて、早足になっているのだらうと、瑠璃は思った。

実際には瑠璃も注目の的になっていると、ことを瑠璃本人は気付いていなかった。

「ここだ」

翡翠は急に足を止めた。目の前にある石でできた物体が『桜亭』

なのだろう。路をしきる灰色の石の壁と同化し、建物には見えない。

「ここが桜亭だ。今晚は、ここに泊まる」

翡翠はそう言ったが、宿屋には見えなかった。普通宿屋の前では、客を入れようと呼び込みが行われ、宿屋だと一目でわかる看板が置かれているものだが、それもない。そもそも建物というよりは壁にしか見えないそれは、翡翠に言われなければ見向きもしないだろう。翡翠は壁を触った。動くようには見えない壁は、不思議なことに簡単に押され、三人を中へ導いた。

「馬小屋以外何もありませんね」

壁の内側には建物はなく、馬小屋があるだけだった。馬小屋には、馬が一頭いるだけだった。

「まさか馬小屋に泊まるの!？」

「いや、ここには馬をあずけるだけだ」

翡翠はそう言うと、自分の天馬を馬小屋にあずけた。瑠璃も、それにならい、馬を連れた。そこで、もともと馬小屋にいた馬を見た瑠璃は気付く。

「これ、紅貴が乗ってた馬？」

「ああ。多分桃華の指示でここまで自力で来たんだろう。……皇太子の馬ならこれぐらいできて当然だろうな」

「この子頭良いのね」

「こいつがいるってことは、天テンもそろそろ来るか」

翡翠がそうつぶやいた時、瑠璃は上空で、羽音を聞いた。瑠璃が上を見ると、白いふわふわとした羽をもつ生き物がいる。間違いなく天テンだった。天テンはゆっくりと下降し、馬小屋の前に着陸した。

「天テンお疲れさま。あら、それ桃華の刀？」

天テンの口には桃華の刀が咥えられていた。少し長さが短い脇差には水色の龍のぬいぐるみがくりつけられている。こんなことは桃華以外はしないだろう。もう一つの黒い鞘の刀には、銀の細工がなされている。鍔には細かい桜の彫刻。そこから延びた赤い紐が、鞘と唾の間をきつく結んでいる。

「なんで天テンが桃華の刀なんかもってるの？まさか桃華に何かあったの？」

「……刀が邪魔だったただけだろう。たぶんそれで天テンに刀を預けたんだと思うが」

瑠璃は改めて天テンを見た。天テンは瞳を下に向けており、口でくわえている刀はかすかに震えている。息も荒く、ひどく疲れているようだ。

「本当に何も無いって言える？天テンもこんな状態なのに……」

「ああ。桃華も紅貴も無事だ。断言できる」

翡翠はそう言うと、天テンに近づくと、手を出した。天テンは刀を翡翠の手に落とした。落とす、というよりは落ちてしまったという方が適当かもしれないと、瑠璃には感じられた。刀を受け取った翡翠は無言で歩きだした。三歩進んだところで翡翠は立ち止まる。左手で刀をきつく握ったまましゃがむと、右手で石畳の上に手を置いた。そんな翡翠の様子を不思議に思っていると、再び羽音が聞こえた。天テンが空を飛んでいる。

「天テン疲れているでしょう？休んで！」

しかし、白い天馬はキュンと鳴くと、あっというまに遠くへ飛んで行ってしまった。

「もしかして、桃華様を向いに行ったのではないのでしょうか。そうですね？翡翠様」

白琳がそう言ったのを聞いた瑠璃は翡翠の方を見るが、先ほどまでいた翡翠の姿はない。瑠璃はあわてて、翡翠が先ほどまでいたところへ走った。

「え……」

「どうしたんですか？」

「ここ、地下に続いているみたいなの」

翡翠が先ほどまでいた場所はぽっかりと穴があき、階段が地下につづいていた。穴の横には、石が置かれている。どうやら一見馬小屋しかないこの場所に、宿屋の入口が隠されていたようだ。

「白琳、行きましょう」

「ええ」

階段は長かった。壁にはろうそくの火が灯っていたため、視界には困らなかったが、地下に続く終りがなさそうな階段は不気味だった。地下牢にでも繋がっているみたいだと、瑠璃は思う。しかし、続いている場所は地下牢ではなかったようだ。ほのかな明かりが漏れている。

「もうすぐつくみたいね」

やがて、開けた場所に出た。壁に埋め込まれる形でろうそくがあり、明るかったため、はっきりと様子が分かる。木でできた台に手を乗せた、老人がにっこりと笑ってこちらを見た。

「麒麟様の連れかな？」

「あ、はい」

「まずこのきまりを説明しよう」

「ここ、『桜亭』はいろんな奴が来る。だが、互いの身元は聞いてはならん。それをしたら、すぐにここから追い出す。あとは普通の宿屋と同じだ」

老人はそう言くと、部屋の鍵を瑠璃に手渡した。

「ところで、翡翠様はどちらへ？」

「この下の道場だが、誰にも邪魔されたくないと言ってたから、貸し切りにした。翡翠の連れだといっても行くことは許さん」

「道場？馬鹿兄翡翠、いったい何考えてるの？」

「瑠璃、翡翠様のことなんか考えても、仕方ないですわ。部屋に行きましょう」

そういった白琳の口ぶりはいつもより早口だった。心なしか、微かにおこっているのではないかと、瑠璃には思えた。

「ねえ、お願いがあるの」

李仙道の入口にやってきた少女がそう言う。歳は12、3歳だろうか。肩より少し長い黒髪は、毛先のほうがくるくると巻かれています。

た。とても可愛らしい少女だ。首を少し傾け、大きな瞳で見つめられた男は、優しい声で言う。

「どうしたんだい？」

「あのね、私身分証明書もってないの……でも、どうしても李仙道通りたいの……」

少女はそう言うのと俯いてしまった。男は少女を見る。大きな瞳のかわいらしい少女は、桃色の服を着ていた。服の感じを見る限り、武器を持っている様子はなく、怪しい様子はない。どこからどうみても無害なこの少女なら、通しても良いような気はしたが、青年が襲われたのだ。——少なくとも表向きは。その事実を作った以上、無害に見えるとはいえ、簡単に少女を通してしまえば、周りから怪しまれるかもしれない。些細なことでも、隙を見せるわけにはいかないのだ。

「ごめんね、お譲ちゃん。ここの近くで人が襲われてね、そう簡単に通すわけにはいかないんだ。すぐにおわるから、中でお話を聞いてからでも良いかい？」

「うん、おじさんありがとう」

少しの時間だけ、少女を中で引き留める。そういう形を作れば、周りから怪しまれることもないだろう。少女には簡単な質問をし、すぐに通してやれば良いだろう。少女が、こちらの事情を知るはずもないのだから。少女は嬉しそうにっこりと笑った。

第二章 旅の始まり 4

紅貴が煌李宮を発った日の昼——その頃、煌李宮近くの路面に面した屋台で、二人の男が昼食をとっていた。

「遥玄様が俺を呼ぶのは久しぶりですね」

駿は、横に座る50代半ばにしかみえない男を見てそう言う。

「たまには上司の悪口を一緒に言おうと思ってね」

遥玄はそういうと、これからいたずらしようとしている子供のように楽しげにいつと笑った。本当に子供みたいな人だと駿は思うが、そんなことを思ったら失礼だろうと思い、笑うのをこらえる。

「遥玄様が上司の悪口を言うためだけに俺を呼ぶはずないじゃないですか。そもそも、あんなに可愛がっている鳳華様の悪口を遥玄様が言うとは思えませんし」

「本当はね、駿にお願いがあつてきたんだ。師匠のお願い聞けるよね？」

にっこりと笑う遥玄の笑顔は、駿が幼い時からまったく変わっていないように見えた。笑い方も、そして、外見年齢も。駿が幼少期に師である遥玄に剣を教わっていた時から、何もかも変わっていない。当時から、遥玄の実年齢は謎だった。どんなに聞いても遥玄がそれを教えることはなく、周りの大人に聞いても知らないという。ただ、一つわかっているのは、その大人たちが子供の時も、遥玄は同じ外見だったということだ。

「駿話きいてるか？」

「すみません。つい……。お願いというのは？」

「お願はね、鳳華様のことなんだ」

「桃華ちゃんですか？」

駿は少し驚く。遥玄の直接の上司でもある桃華のことを駿に頼むなどこれまでになかったことだ。

「そんなに驚くことじゃないよ。鳳華様に頼まれた仕事を俺の代わ

りに駿にやってほしいんだ。見ればわかると思うけど、駿の方が適任だと思っただけ」

駿は、遙玄に渡された紙を開いた。

「確かに、俺の方が向いてますね。油断を作りやすいだろうし。それにしても、これ、翡翠と桃華ちゃんの役を交換した方が良さそうのですが……。桃華ちゃんはいったい何を考えているんだろう」

「さあ……。でも、鳳華様には彼女なりの考えがあるんじゃないかなとにかく頼むよ」

「わかりました」

「それから、この件が片付いたら、王から俺たちが受けた命、弄国関係のことで気になることがある。調べるの付き合ってくれないか？」

遙玄が、いつになく、静かな、微かに張りつめた声で言いつた。

駿は、いつもの師らしくないことを不思議に思いながらも、頷いた。

関所内部に連れて来られた少女は不安そうに辺りを見回していた。明かりは灯っているとはいえ、何もない殺風景な建物は、まだ幼い少女には、どこか冷たく、不安な気持ちにさせているのだろう。

「お譲ちゃん、大丈夫だよ。いくつか質問したら、すぐ終わるから」
表向きは関所内部の担当になっている男は、少女を椅子に座らせる。向かい合い、目の前に座った少女は、木でできた机を見てうつむいていた。窓から入る微かに冷たい風が、少女のくるくるとした黒髪を揺らしている。

「お譲ちゃんのお名前は？」

男はできるだけ優しい声で話しかける。目的を果たした今、後は、本当の役人がやるべき仕事を代わりにやり、今日を乗り過ごす。少女をわざわざ怖がらせる必要もないだろう。

「……張 楊花^{じやうば}って言います」

少女は相変わらず俯いたままだ。身分証明書を持たないために、尋問を受けることになってしまった少女を不憫に思いながらも、男

は質問を続ける。今、自分は役人なのだ。

「楊花ちゃんはどこから来たのかな？」

「李から」

「これからどこに何をしに行くのかな？」

楊花と名乗った少女は急に顔を上げた。まっすぐにとこちらを見た少女の黒い眼には鋭い光のようなものが射しているように感じられる。笑うのでも、悲しむのでもなく、無表情でこちらを見る少女は、少女が発する気配にしては、ずいぶんと鋭い気配を纏っている。鋭い氷のようなそれへと変わり、先ほどまでの、不安な様子の少女と同一人物だとは思えない。やがて少女が口を開く。

「紅貴はどこ？ 私は、紅貴を助けに来たの」

少女はびしやりと、そう言った。少女の言葉が反芻する。この少女はあの赤い髪の少年のことを知っているのだ。

「……いったい何のことかな」

男は、そう言いながら、少女に気付かれないように隠し持っていた短刀を取り出す。とても子供の威圧感とは思えない少女の気配に圧倒され手から汗が噴き出ていたが、落とさずに取り出すことができた。それを知ってか知らずか少女は言葉を続けていた。

「洩だか恵だかしらないけど、紅貴を使っていったい何をするつもりだったのかしら」

「それはお譲ちゃんが知らなくて良いことなんだよ……！」

男はそう言いながら短刀を少女に突き刺そうとする。しかし、パシッという音とともに、刀が弾かれていた。少女は武器を持っていなかったはずだ。――状況を理解するのに、数秒かかるが、やがて目の前の状況を理解した男は目を見開いた。刀を弾いたものは扇子だった。少女の口元にはわずかに笑みが広がっていた。

「関所にいれば、簡単に紅貴を捕まえられると思ったんでしょ？ 偽物の身分証明書を持った紅貴を連れ込んだら取り調べだっていえずむものね。それなら紅貴と一緒にいるはずの二將軍と戦わなくてすむ。あなたたちは、そのために、関所で働く役人を襲った。違

う？」

少女の言葉は当たっていた。ドクンドクンという心臓の音が全身に響いている。しかし、なんとか平静を装う。そんな男の感情を無視するかのように少女は声をあげて笑った。

「漣があなたたちを待つてるわ。ああ、漣っていうのは、あなたたちが襲った役人。あなたたちを捕まえるために、わざわざ関所の役人やることになったのよ、彼。知ってるとは思っけど、漣は文官のわりには武道にも通じるのよ。だから選ばれたわけなんだけど……。その漣を倒したことは褒めてあげる。でも、私を倒すのは無理だと思うわ。そう、煌李宮に、何かたくらんでる人がいるのは分かってたわ。あなたたちはその人に雇われたか、もともとその人の下で働いていたんでしょう？ちよつと心当たりがあつてね。私は、その人を完全にあぶりだすために、紅貴を利用したの。そんなことも知らずに、ごくろうさま。それから最後に……私がわざわざ話さなくていいことまであなたに話すのはあなたを捕まえられる自信があるからよ」

少女はにっこりと笑った。その笑みが消えると同時に少女が動き出す。武道に長けているのだろう。少女の素早い動きに対応できないだろう——そう思うと同時に、男は落ちた。

人体の急所の一つを突かれた男は気絶している。その男を、少女——桃華は見下ろした。

「入口の偽役人は、今頃、兵が押さえているだろうし、あとは紅貴を助ければ終りね」

桃華はそうつぶやき、男が落とした短刀を拾いあげた。そして、懷から、関所内部の図が描かれた紙を取り出した。漣が描いてくれたものだ。

「紅貴がいるのはこの辺かしらね」

桃華は、一人そうつぶやくと、紅貴のもとへ駆け出した。

「紅貴く起きて〜！」

聞き覚えがある少女の声。ゆっくりと目をあけると、目の前には桃色の服を着た少女がいる。桃華に似ているが髪の色と目の色が少し違う。桃華は黒髪黒目ではなく、茶髪茶目だ。しかも桃華は紅貴の知っている限り、髪をお団子にしていたが、目の前にいる少女は髪をおろしている。

「紅貴起きた？行くわよ」

少女はそういった。紅貴は完全には覚醒していない頭で紅貴は声を出す。

「あなたは……」

「紅貴何言ってるの？私は桃華！紅貴の口に噛まされていた布にしみ込んでいた睡眠薬のせいでボケてるの？」

一度目が覚めたのにまた寝てしまったのはそういうわけかと、紅貴は妙に納得するが、目の前にいる少女が桃華だとは、紅貴には思えなかった。しかし、声はまぎれもなく桃華だ。

「……もしかして、髪と瞳の色に驚いてるの？これは、関所に侵入するのに、万が一二將軍だつてばれたらまずいから色を変えたの。二將軍の鳳華は若い女で目と髪が茶色つて知られてるみたいだから髪は染め粉でそめて、目は特殊な目薬で変えたのよ。似合うでしょ？」

「特殊な目薬……？」

桃華らしき人物はこくりとくなく。子供っぽくおおきく頷く様子、たしかに桃華だ。

「数時間しかもたない上に貴重だからなかなか手に入らないんだけど、その目薬を使えば目の色を変えることができるの。それはそうと、行くわよ。天テンが外で待っているわ」

「紅貴がつかつていた馬は先に瑠璃たちのところに向かったわ。その代わり天テンが外で待っているはずだからそれに乗って今夜の宿に行くわ。天テンに乗って飛べばすぐよ」

「ちよつとまって天テンって……まさか空飛ぶの！？」

「当然でしょ？とんだほうが速いもの」

紅貴は思わず、手をぎゅっと握った。飛ぶということはつまり、高い所に行くということだ。そんな紅貴の様子に気づいたのか、桃華が言う。

「もしかして紅貴って高所恐怖症？」

「うん……実は」

紅貴が小声で言うと、桃華は柔らかい声で言う。

「大丈夫よ。天テンは飛ぶのじょうずだから。行きましょう」

紅貴は頷くと、桃華の髪を見る。桃華は自分を助けるためにわざわざ髪の色や目の色まで変えたのだ。

「桃華、ありがとうな」

桃華は中途半端な笑みを浮かべただけだった。いわゆる苦笑いというやつだ。そんな桃華を不思議に思いながらも、桃華の後について行き、外に出た。日は沈みかけ、青かった空も茜色になっていた。紅貴達が外に出たところ、茜色の空の彼方から白いふわふわとした天馬が飛んできた。天馬は静かに桃華の横に着地すると、キュンと鳴いた。桃華は天テンを撫でながら話しかけている。

「……刀があると、二將軍って疑われる可能性があったから預けなきゃいけなかったの。天テン、ありがとう」

桃華は紅貴のほうを振り返りにっこりと笑う。

「紅貴、前に乗って」

紅貴はおそるおそる天テンに跨った。そして、それに続き桃華も飛び乗る。二人が天テンの背に跨ると、天テンはフワリと飛んだ。あつという間に、関所を見下ろす高さに飛翔した。大きいと感じていた李仙道の門も小さく見える。そしてあつという間に関所は見えなくなった。

——靖郭桜亭。その内部に入っすぐのところでは、瑠璃と白琳が待っていた。紅貴の顔を見るなり、笑顔で駆けつけてきた

「紅貴、無事だったのね」

瑠璃が本当に嬉しそうに言った。紅貴もつられて笑う。

「うん、桃華が助けてくれたんだ」

「良かったですわ。ところで桃華様は？」

「うん、なんか着いた瞬間、翡翠のところに行くとか言っつて、ものすごい勢いで階段降りていったけど」

紅貴がそう言つと、白琳がそれまで以上に柔らかい表情になったように紅貴には感じられた。

「じゃあ桃華様は翡翠様のところへ行つたんですね？」

「うん」

「それにしても紅貴が捕まったのに、うちの馬鹿兄がほつとくつていった時はどうなるかと思っただけど、桃華が助けてくれて良かったわ」

「……翡翠、そんなこと言っただ。いや、そういう奴だとは思ってからべつにいいんだけどさ……」

「とにかく、助かってよかったです。一日目から大変でしたけど、とにかく全員揃ってよかったですね」

紅貴は最後にもう一度頷いた。

「翡翠、お待たせ」

桜亭の地下深くに掘られた道場の戸をあけると、翡翠が腕を組んだまま座っていた。翡翠の前には桃華の刀がある。龍のぬいぐるみが括りつけられた脇差は鞘から抜かれることなく、そのまま置いてあったが、もう一つの刀は不思議なことに、僅かに鞘から刀が抜けていた。桃華は急いで刀の前に行くと、二本の刀を脇に差した。

「……翡翠ごめん。ありがとう」

「いや。紅貴は助かったのか？」

「うん、助けたよ」

「そうか」

翡翠はゆっくりと立ち上がった。僅かに青白い翡翠の顔が桃華を見下ろす。

「俺は疲れたから寝る」

「うん……。あの……。白琳呼ぶ？」

「いや、いい」

翡翠はそれだけ言うと、桃華に背を向けて道場を出て行った。一人残った道場で、桃華は座りこむ。

（翡翠、ごめん……）

桃華は心の中で静かに謝った。

（でも、……の可能性があったから翡翠にやらせるわけにはいかなくて……）

桃華は、珍しく、もう一度深いため息をついた。

第二章 旅の始まり 5

「ねえ可憐、知ってる？この煌李宮に他国の刺客が送り込まれてるんですって」

煌李宮の中庭にある回廊を渡る途中、可憐の友人香月かづきは恐れる様子はなく、そう言った。月明かりに照らされた香月の表情は、どこか楽しそうだ。

「香月は怖くないの？」

可憐がそういうと、香月は首を横に振って言う。

「怖いわけではないでしょう」

「そうよ、恐れる必要なんかないわ。ここには駿様がいるのよ。きつと私たちを守ってくれるわ」

香月の言葉に、怜れいのはつきりした声が続いた。二人の自信満々な様子に可憐は笑む。

「そうね。駿様がいるから大丈夫よね」

「ねえ、あそこにいるの駿様じゃない？」

香月に言われ、中庭を見ると、たしかにそこには駿がいた。遠くて表情は良く見えないが、駿は、庭を行ったり来たりしていた。

「駿様どうしたんでしょう」

可憐がつぶやくと、怜の言葉が続く。

「可憐、香月、行ってみましょう」

可憐、香月、怜の三人は中庭に降りた。先程までは遠くにいてよく見えなかったが、今は駿の表情がはっきりと見える。どうやら困っているようだった。

「あの、駿様、どうしたんですか？何かお困りのようですけど」

香月が、静かな声でそう言うと、駿は困ったように笑った。

「実は愛犬がどこかへ行ってしまったね。仕事が中々終わらないから、気分転換に愛犬と遊ぼうとしたら、一緒に飼っていたトカゲが

部屋から逃げて、犬もそれを追いかけてどこかにいつてしまったんだ」

駿はそう言うのと、僅かに下を向いて俯いてしまった。可憐は不覚にもそんな駿をかわいいと思ってしまった。もともと中性的な印象の駿が困っているのと、それはまるで子犬のようだと、可憐は思った。そんなことを思っていると、香月がきつぱりとした口調で言う。「あの、よろしければ私も駿様の犬を探すの手伝います」

「私も」

怜の声もそれに続く。二人の言葉を聞いた駿は顔を上げると、優しい笑顔を見せた。その笑顔を見た可憐は思わず、顔が火照るのを感じる。

「ありがとう。じゃあ、一緒に犬を探してもらっていいかな？」

「もちろんです。あ、私たちの名前言っていないでしたね。私の名前は可憐。横にいるのは香月で、その隣が怜です」

「可憐ちゃんに香月ちゃんに怜ちゃんか。みんな可愛い名前だね。じゃあ、香月ちゃんと怜ちゃんは、東側を探してくれるかな？可憐ちゃんと俺で西側を探そう」

「はい。あの、駿様の子犬の特徴を教えてくださいてもよろしいでしょうか」

怜がそう言うと、駿は柔らかい声で言う。

「黒い子犬だよ。まだ本当に小さい子犬で、名前は黒助くろすけっていうんだ」

「……黒助ですか？」

「少し変わった名前だと思っただろう？実は鳳華様がつけてくれた名前なんだ」

「あの、駿様、トカゲの方も探しますか？」

「いや、トカゲはいいよ。特徴がないトカゲだし、見つからないと思うんだ。……実は、そのトカゲは友人から預かったものなんだけどね。……でも、トカゲについては俺が謝るから大丈夫だよ。黒助を探してもらえるかな？」

「はい」

三人の声が重なった。それを聞いた駿は、三人を可笑しそうにみると、明るい声で言う。

「みんなありがとだね。じゃあ、30分後にもう一度ここに集まる」

可憐は駿の後について行く。不思議なことに、先ほどまでうるうろとしていたのに、可憐と二人きりになってからは、迷うことなくまっすぐに歩いていた。まるで目的地が決まっているかのような駿のそんな様子を可憐は不思議に思う。やがて、可憐が知らない池の前に着き、駿は止まった。駿はそこで振り返った。口元にはわずかに笑みが浮かんでいる。月を背景に佇む駿は、美しいといっても間違いはないはずなのだが、そんな駿を見た可憐はなぜか、背中に悪寒が走るのを感じた。

「可憐ちゃん、実は君に話したいことあるんだ」

静かな声だった。しかし、人気のないこの場所ではよく響く。

「何でしょうか」

「君、煌李宮に何しに来たのかな？」

ざわりと二人の間を風が通り抜けた。夜の煌李宮は静かだ。風が通り抜けた後は、夜の静寂が辺りを包んだ。しかし、音がほとんど聞こえないはずのこの場所で、可憐は、大きな音を聞いていた。それは、可憐の心臓が刻む鼓動だった。

「……何のことですか」

何も考えることができず、可憐は無意識にそう言った。

「女の子の荷物を勝手に見るのは悪いと思ったんだけどね、たまたまこんな物を君の荷から見つけてしまっただけ」

駿はそういうと、懐から紙を取り出した。可憐は、一歩前に出てそれを見た。

「それは……」

「紅貴君の身分証明書だよ。なんで君が持っているの？」

「……煌李宮に紅貴殿が身分証明書を忘れていつてしまったので、私が持っていたんです」

「まあどうでも良いんだけどね。実は、紅貴君が、偽物の身分証明書を持っていたことで、関所の役人に捕まってしまったんだ。でも、その役人も偽物の役人だったんだけどね。誰かが、紅貴君の身分証明書を書物にすり替えて、それをきっかけに関所で紅貴君を捕まえられるように仕組んだんだろうな。俺が思うにそれは可憐ちゃんだと思っただけ違う？」

可憐は何を言ったらよいか分からなかった。悪寒を感じる。それは冷たい夜風のせいだろうか。それとも――

「偽役人が倒した本物の役人んだけどね、鳳華様があらかじめ用意した役人なんだ。彼、文官なんだけど、武道の心得もあるから、簡単には倒されないだろうからって。まあ結局彼は倒されちゃったわけだけど、どちらにしても、鳳華様は君が紅貴君の身分証明書を偽物と取り替えたって知ったら捕えるつもりだったみたいだよ」

可憐は何も言うことができなかった。

「君の荷物に入っていた紅貴君の身分証明書を見て」

駿はそう言くと、身分証明書の上の部分を外し始めた。しかし、そこで可憐は思い当たる。身分証明書はそんな簡単に外れたり破れたりするような作りになっていないはずなのだ。しかし、紅貴の身分証明書の上の部分は簡単に外れてしまった。外れた部分からあらわれた物を見て可憐は、あ、と声をあげる。

「それは……！」

「見ての通り、鳳凰の印。知つての通り、この印を使えるのは鳳華様だけだよ。本来の使い方は、重要な書類に押したりするのに使うんだけど、今回は少し違う使い方をしてるみたいだよ。つまり、鳳華様は君が紅貴君の身分証明書をすり替えることを予測して、あらかじめ紅貴君に渡される身分証明書に細工していたんだよ。君がこれをもっているということは、やっぱり今回のことに君が関わっていたということだよ」

もはや、言い逃れはできなかった。ここから逃げようにも、あの、若き天才といわれる駿の前から逃げ出せるはずもなかった。だとすれば、今、やるべきことは一つだと、可憐は思う。

「そうよ、お察しの通り、私は洸国の刺客」

「……君、紅貴君がどういう人物か知ってるの？」

「どういつて……」

予想外の言葉だった。

「まあいいんだけどね。これから、君は嘉国の文官に引き渡されることになる。……念のため忠告しておく、本当に洸国の刺客だったら自分から洸国の刺客とは思わないと思うんだ。紅貴君のことは洸国出身ということ以外は知らないみたいだし、きつと、誰かに煌李宮に来る洸国出身の少年を捕まえるようにとだけいわれたんだろう？ ……それじゃあ、君が洸国の出身ということは信じてもらえないと思うよ」

可憐は、へたりと座り込んだ。もう駄目だと思うが、どうしたら良いかが分からなかった。目の前の池に映る月が歪んだ。それは、目から溢れる涙のせいだった。

「……可憐ちゃん、君がやろうとしたことは許される事じゃない。でも、正直に話してくれたら、俺は怒らないよ。だから、俺にだけは可憐ちゃんのこと教えてくれるかな」

先ほどよりも暖かい声だった。ゆっくりと顔をあげると、駿は優しい笑顔を浮かべていた。その笑顔の前で嘘をつくのは申し訳ない不思議と、可憐をそういう気持ちにさせた。

「わたし、洸から来たんじゃないんです……恵からきました……」

「つまり、どういうことだ？」

靖郭の食堂で、紅貴、瑠璃、桃華の三人は夕食を食べていた。そこで、紅貴が関所に捕まる経緯を 桃華に聞いていたのだが、紅貴はよく理解できなかったのだ。

「桃華、そんないいかげんな説明じゃわかるわけないでしょう。も

う少しわかりやすく説明しなさい」

「うん。あのね、たまたまある国に行つて、煌李宮に刺客が送り込まれていることを知つたの。その時はよく分らなかつただけで、後から、その狙いの一つが紅貴だつてわかつたの。でね、少し前から私や翡翠に仲良くしようとしている女官の子がいてね、今思うと、紅貴の情報を探ろうとしていたんだと思うんだ。本名で呼び始めたから、余計に怪しいなつて思つたの」

「どういうことだ？」

「紅貴、二將軍には本名とは別にもう一つの名前が与えられるの、私や白琳、駿なんかは本名で呼んでるけど、それは異例中の異例なの。普通はもう一つの名前で呼ぶわ。どんなに親しくてもね。多分、そのこが、本名で呼んだことで、桃華はその子を睨んだのよ」

桃華は、こくりとうなずいた。

「でね、煌李宮でこそそそやられるなんて嫌でしょう。だから私はその子に、わざと紅貴が洸国出身だつてばらしたの。そしたら何か動き出すんじゃないかと思つて。でね、考えたんだけど、紅貴を捕まえるためにはいえ、翡翠を真正面から相手にするはずはないと思つたの。そんなことやつてたら命がいくつあつても足りないし。関所だつたら紅貴を簡単に捕まえられるんじゃないかなつて思つたの。きっとそのために紅貴の身分証明書を偽物に入れ替えるはずだつて」

「もしかして、桃華は、おれが関所で捕まるのを知つてたのか？」

桃華はこれには答えずに、話を続けた。

「でもね、私、紅貴が最初にわたされた身分証明書を改造しておいたの。だから、改造された身分証明書を持っていれば、その子が、つてことになるわ」

「つまり、まとめると桃華は紅貴を利用したつてことね」

紅貴は、瑠璃のその言葉に少し落胆した。そんな紅貴のことを知つてか知らずか、桃華はいつもどおりにつこり笑つて言う。

「紅貴、その杏仁豆腐もらうね」

桃華がそついうとあつという間に紅貴の皿から杏仁豆腐が消えた。

「なんか俺、疲れちゃった。先に宿戻ってるよ」
紅貴は軽いため息をついて席を立った。

桜亭に戻り、紅貴は部屋に向かった。引き戸を開けると、聞いたことがある声が紅貴の耳に飛び込んできた。

「まったく世話が焼けるんですから」

白琳が寝台の横に腰かけていた。寝台で寝ている翡翠に話しかけているようだった。しかし、驚いたのはその後だった。白琳の手が輝きだした。見張り台でも似た光景をみた紅貴だったが、次に繰り広げられたことに、紅貴は目を見開く。寝ている翡翠の体から、紫色の光のようなものが出てきた。それは白琳の輝く手によって吸い込まれていく。不気味な光景に紅貴は動くことができなかった。やがて、紫色の光が消えると、白琳の手も元に戻った。紅貴は部屋を出ようとするが、白琳が紅貴に話しかけてきた。

「紅貴さん戻ってたんですね」

「あ、うん。忘れ物をしちゃって」

白琳は柔らかい笑みを浮かべていたが、今の紅貴にとっては、白琳の笑顔ですら恐ろしい。

「翡翠様、連日の仕事で疲れているようで、熟睡しているみたいなんです。できるだけ邪魔はしないであげてくださいね」

「う、うん」

白琳はそう言うつと部屋を出て行った。白琳が去った後も先ほどの光景が頭から離れなかった。

第二章 旅の始まり 6

靖郭に着いた日の翌日、紅貴はゆつくりと寝台から起き上がった。地下に掘られた桜亭には窓がないため、現在の時刻は分からなかったが、たいして肉体的な疲労を感じないことを考えると、結構眠っていたのかもしれない。朝弱い紅貴は、朝起きてすぐは二度寝をはじめ癖があるのだが、二度寝をする程眠くもない。そんなことを考えばんやりとしていると、紅貴のお腹がギュルッと鳴った。

（そういえばお腹すいたな。今は昼ごろかな？）

なにか食べ物はないかと辺りを見回す。しかし、この部屋に食べ物はない。仕方ないと思いながら紅貴は立ち上がって部屋を出ようとした。そして、同時に 気づく。

（翡翠がまだ寝ている……？）

おそらく今は昼ごろなはずだ。昨日も早朝にもかかわらず、張り台の異変にいち早く気づいていた翡翠だ。こんな時間まで翡翠が寝ているのは、紅貴には意外だった。

（やっぱり白琳に何かやられたのかな……）

白琳は翡翠に手を翳した。すると、不気味な何かが翡翠から出てきたのだ。紫色のそれは、なぜか禍々しいものに感じられたことを、紅貴ははつきりと覚えていた。そして、それを行った白琳はもっと恐ろしかった。

（翡翠……）

紅貴は、白琳が何をやったかを誰かに聞きたい衝動にかられた。しかし、聞いた相手が何も知らなかった場合、逆に相手を傷つけてしまうのではないかとも思う。やっぱり白琳に直接聞くしかないのだろうか。

グー

そんなことを考えていると、またお腹がなった。紅貴はとりあえず食事をしようと、部屋を出た。

桜亭の食堂に行くと、白琳、瑠璃、桃華の三人が食事をしていた。その三人のほかには誰もいなかった。

「紅貴さんおはようございます」

紅貴に最初に気付いたのは白琳だった。紅貴は思わず、肩をぴくりと震わせた。

「紅貴おはよう。もう、昼過ぎよ」

紅貴が何も言えずにいると、瑠璃の声が続いた。そして、桃華がにっこり笑いながら言う。

「普段の日にこんな時間まで寝てたら、多分翡翠に怒られちゃうよ」
「そういえば何で翡翠はこんな時間まで寝てるんだ？」

紅貴はできるだけ何事もない口調でたずねた。答えたのは桃華だった。

「だってお休みだもん」

「だからそれじゃわからないでしょう。もっとわかりやすく説明しなさいって」

桃華はこくりとうなずくと続けた。

「あのね、翡翠は今日この街を発つつもりだったみたいんだけど、この街で買いたいものがあつたから、今日一日だけ靖郭に居られるようにお願いしたの。でね、今日は靖郭に留まることになったんだけど…… 翡翠って、仕事がある時はちゃんと起きるんだけど、何もない日はとことん寝るんだよ。ね、瑠璃」

「昔からそうなの。翡翠は何も予定がない日は昼過ぎまで寝てるのよ。お母さんが呆れて起こしにいくんだけど、そういう日に起こすとすごく不機嫌になってね。まったく迷惑な馬鹿兄よね」

「翡翠はね、私がお願ひしたあと、二度寝始めちゃった。でね、買い物するって言ったでしょう。それ、実は紅貴のやつなんだ。だから、ごはん食べたら私と一緒に買い物しよう。私はもうご飯食べ終わったから瑠璃に可愛い髪にしてもらってくるね」

「ちよつとそんな話聞いてないわよ」

「だって可愛い髪にしたい気分なんだもん。瑠璃く可愛いのにして」

瑠璃は腕をくんだまま言う。

「仕方ないわね。じゃあちよつと桃華の髪を結ってくるわ」

瑠璃はそう言うのと立ち上がり、すたすたと歩いて食堂を出て行く。そして、桃華もひよこひよこことび跳ねながら瑠璃の後について行った。紅貴は食堂に白琳と二人、残されてしまった。

「紅貴さん座ったらどうですか」

ぼんやりと立っていると、そう言われた。

「うん」

紅貴は白琳の正面の椅子に腰かける。ちらりと白琳の方を見ると、白琳が話しかけてきた。

「紅貴さんもしかして私のこと怖がってますか？」

「いや、そんなことは……」

「隠さなくて良いんですよ」

白琳はそう言うのと、にっこりと笑った。

「多分、昨日のことですよ？あれ、見てしまったんですよ？」

「……」

紅貴が何も言えずにいると、白琳が穏やかな声で言う。

「いきなりあんなところを見せられたら、びっくりしますよね。驚かせてしまってごめんなさい」

白琳の穏やかな声に、紅貴は思わず頷く。

「昨日のあれはいつたい何だったんだ？」

聞かれた白琳は困ったように笑って言う。

「申し訳ありません。それは私からは何も言えません。……もしかしたら翡翠様でしたら、詳しく話せるかもしれませんので、翡翠様に聞いてもらえますか？」

「翡翠……？」

「曖昧な説明になることを最初に謝っておきます。私は当事者じゃないので、私が言うわけにはいかないんです。驚かせてしまったの

に、詳しく説明できなくてすみません」

「うん……」

「では、この話はここまでにしましょう。紅貴さんおなか空いたでしょう？お食事召し上がってください」

昨日のあれが何だったのか、まだ聞きたかったが、紅貴はこれ以上は聞けないと察した。

食事を終え、桜亭をでた紅貴は桃華と共に靖郭の街にいた。小路に色とりどりの露店が並び、商人が道行く人々を呼びとめる様子は、李京とは違った賑やかさがある。

「なあ、いったい何を買うんだ？」

「紅貴の刀だよ」

「刀！？」

驚く紅貴に対し、桃華は、当たり前というようにうなずいた。

「だって紅貴は武器もってないでしょう？これから旅するのに武器のひとつくらいもってたほうが良いと思うの。紅貴は洸国にとっては厄介な存在でしょう？いつ襲われるかわからないわ。武器ないと抵抗もできないでしょう。そういえば、武器もないのによく嘉まで無事にこれたね」

「うん、俺もどうしてここまでこれたか分からないんだ。俺さ、最初、刀持ってたんだよ。でも、どうせ刀持っていても使えないから友達に預けたんだ。その後、洸国を発とうとしたんだけど、洸国を出る前にいきなり洸の軍に襲われちゃって……。気づいたらどこかの牢にいて、途方にくれてたんだ。でも、ある日、寝て目が覚めたら李京にいた。最初は、夢かとも思ったんだけど、夢じゃなかったみたいで。その後、地図を拾ったから、その地図を見て煌李宮に行こうとしたんだけど、道に迷ったんだ。その時翡翠に会って、翡翠に連れて いったもらったんだ」

「すごいね。運だけで嘉に來たんだね。で・も・ね」

桃華は人差し指を立てたてを紅貴の目の前に突き立て、はつきりと

言う。

「これからはそんなにうまくいかないわ。刀の使い方は私が教えてあげるから、刀買おう。でも、その前に銀行にお金をおろしに行こう」

「銀行……？」

紅貴は銀行という言葉聞いたことがなかった。

「そっか、洸に銀行ないもんね」。嘉には色々な場所に銀行つていう場所があるんだけど、銀行にはお金が預けられるんだよ。でね、預けたお金は、銀行ならどこでもお金を引き出すことができるの。紅貴、これ見て」

見せられたのは紙よりは硬い素材だが、硝子よりは軽い不思議な素材でできた、二つ折りの身分証明書のようなものだった。

「これね、中開くと、銀行に預けた額が特殊な墨で書かれていて、消せないようになってるの。これを持って、銀行に持っていくと、各自決められた暗号を聞かれるよ。決められた暗号を答えると、お金を引き出せるんだけど、そうすると、預けた額が減るでしょう？だから、引き出した後は、特殊な墨で書かれた数字が書きなおされるんだよ。ちなみに、銀行で働いてるのは、嘉でも特に信頼されている文官だけで、特殊な墨の修正方法とか、銀行のお仕事の詳しい内容はその文官だけにしか知らされていないんだよ」

「嘉には便利な制度があるんだな」

「ほら、あそこ」

桃華が指をさした方向を見ると、建物の前に武官らしき人物が立っていた。

「武官？」

「銀行のお金盗まれたら大変でしょう？銀行の前には必ず武官が配置される決まりになっているの。じゃあ、私はお金おろしてくるから、紅貴は兵士さんの前で待ってて」

桃華はそう言うと、銀行の中に入っていった。紅貴は改めて辺りを見回した。これだけ店が多く、人が集まる街を、洸では見たこと

がない。幼い頃、初めて連れられた洸の街の様子を、紅貴は、今でもはつきりと覚えていた。

「もうすぐで街に着きますよ」

ある春のことだった。馬に乗せられていた紅貴は、紅貴のすぐ後ろにぴったり付き馬を操る男の声を聞いた。

「街ってどんなところなんだろう。曉貴は知ってる？」

紅貴の隣で馬を操る大柄の男に紅貴は尋ねた。その時は理由が分からなかったが、男はため息を付き、紅貴の後ろに座って馬を操る男に言った。

「紅翔様、本当に行くんですか。あそこは王を倒そうとしている人々が住んでいると聞いておりますが……」

「だから行くんだよ。さあ、あの門の向こうが街ですよ」

紅翔はそう言って馬を止めると、紅貴を降ろした。洸国は寒い国だ。春とはいえまだ僅かに雪が残る地面は、歩くたびに足跡が付けられる。

「紅翔様、おかしいと思いませんか？いくらなんでも馬の足跡の数が多すぎる。それに、この鉄のような臭い……。先に街に行つて様子を見てきます」

「ねえ紅翔、街、まだ入れないの？あの門のむこうなんだろう」

紅貴が紅翔の顔を見上げて言うと、紅翔はしゃがみ、紅貴に視線を合わせた。

「曉貴が戻つてくるまで待っていてくださいね」

「雪もほとんどなくて雪だるまも作れないし、退屈だよ。曉貴まだかな」

「大変です！」

曉貴が大慌てで戻ってきた。曉貴を見た紅翔はすっと立ち上がった。曉貴を見る紅翔の横顔は、少し怖い無表情だと、その時紅貴は思った。

「……が、……ろしにしたようです」

「思ったより……の動きが……やかっただか」

小声で話す紅翔と曉貴の会話ははつきりとは聞き取ることができなかったが、何か良くないことが起こっているというのは本能的に感じていた。

「やはりここは引き返した方が」

「……は撤退していたか？」

「一応全軍撤退しているようですが」

「なら、街に行こう」

「ちよつと本気ですか！？あんな光景を見せるなんて！」

「それが現実なのだからしかたないでしょう」

紅翔は紅貴の方を向いた。

「街にいきますよ。私の傍を離れなくてくださいね」

紅貴は怖くなり、紅翔の服を握りながら歩いて行った。そして、ゆつくりと門をくぐる。そこで見た光景に、紅貴は思わず、手で顔を覆った。しかし、一瞬しか見なかった光景は何度も頭の中で繰り返し、浮かんできた。僅かに残った雪の上を人が歩けば、土の色が混ざった水たまりができる。しかし、この街にあるのは土の色をした水たまりではなかった。赤い液体——それが血だまりを作っていた。そして、その上に、幾人もの人が倒れていた。男、女、老人。そして、紅貴と同じ年頃の子供もいた。彼らは自分からは一切動かず、時々吹く風が彼らの髪や来ている貧しい着物を揺らすだけだった。直視できずに、目を瞑って歩いていると、抑揚のない紅翔の声が降ってきた。

「目を開けてください」

「紅翔様、何を言うんですか！こんなところ早く出ましょう」

紅翔は曉貴の言葉を無視して続けた。

「子供だからと甘やかすつもりはありません。あなたはこの国に生まれました。そして、これがこの国の現実なんです。こういうことが起こっているのはここだけではないのです。今は洗であれば『どこでも』起こりうることでしょ」

紅貴は恐る恐る目を開けた。どこまでも続く人の山と、血の跡。紅翔の服をつかむ紅貴の手は、細かく震えていた。そして、急に何か紅貴の足をつかんだ。

「なんで、なんでみんな死ななきゃいけなかったの……」

紅貴の足をつかんだ血だらけの少女は、か細い声でそう言っていると、動かなくなってしまった。

「しっかりしろよ!」

少女は何も言わない。紅翔はしゃがんだ。右手を少女の胸にあてると、首を横に振る。

「もう死んでいます」

紅貴は胸の奥から何かが込み上げてくるのを感じ手を口にあてた。

「大丈夫ですか!？」

曉貴があわてて尋ねるが、紅貴はそのまま座り込む。

「……気持ち悪い」

――街をでた後、泣き続ける紅貴に紅翔は言った。

「これ以上こんなことが起こるの嫌なのであればこの国を変えるしかないません」

「いつたい、いつたいだれがあんなひどいことをやったんだよ」

「洸の禁軍です。なぜ、こんなことを起こったかはまた後ほどお話します。今は、いつかはこの国を変えるしかないということだけを覚えておいてください」

「紅貴、お金下ろしてきたよ、刀買いにいこつ」

桃華が戻ってきた。右手に持つ桃色のがま口の財布が膨れているところを見ると、かなりの額を下ろしたのだろう。満面の笑みを浮かべ、楽しそうだ。そんな桃華を見た紅貴もつられて笑った。

第二章 旅の始まり 7

桃華に連れられて着いたのは靖郭の中では静かな場所にある鍛冶屋だった。

「すみませ〜ん」

桃華が声をかけて出てきたのは、筋肉質な腕を持った女性だった。髪は短く切りそろえられ、着物の色は黒。男勝りな女性に見えた。

「鳳華、久しぶりだね。今日は何の用？」

「あのね、横にいるの紅貴って言うんだけど、紅貴に刀売って欲しいの」

「刀ねえ」

「でね、本当は一から造って貰いたいんだけど、わけあって待つている時間が無いから今ある刀で、紅貴にぴったりなやつを売って欲しいの」

女はフツと笑うと言う。

「紅貴君、ちょっと手を見せて」

紅貴は不思議に思いながらも、手を差し出した。女は紅貴の手を触る。

「いいよ、しまつて。君、剣を使ったことほとんどないんじゃない？」

「え」

「手を見ればわかるさ。鳳華や駿の手はああ見えて、剣ダコだらけの堅い手なんだけど、君の手はそういうの一つもないもんね」

「はい。実は最近ハマったく剣を握っていません。でも、手を見るだけでわかるなんてすごいですね」

「そりゃそうさ。私は、伝説の鍛冶師、頑信の弟子だった女なんだからね」

「ねえ珠花、紅貴に刀売ってもらえる？」

珠花はまじまじと紅貴を見た。見つめられた紅貴は喉をぐくりと鳴

らした。やがて、珠花はニツと笑った。

「いいよ。売ってやるさ」

「わぁーい！ありがとう！珠花大好きっ」

桃華はそう言って珠花に抱きついた。

「あゝもう、くつつくなって」

紅貴思わず啞然とする。そんな紅貴に珠花が笑いかけると、はつきりとした明るい声で言った。

「本当は剣をまともに扱えない奴にうる刀はうちの店には無いんだけどね、あんたは特別だよ。鳳華の頼みでもあるしね」

「ありがとうございます」

「そうだ、大事なことを言い忘れていたわ。お代はリュウセイに請求してね」

「リュウセイって……鳳華は相変わらずなんだね」

「さつき下ろしたお金で払うんじゃないのか？俺、あとで桃華にお金を返すつもりでいたんだけど」

「私が？まさか。あのお金は、あとで、靖郭名物フカヒレ饅頭を買うために下ろしたんだよ。わざわざ刀を買うために下したりしないわ」

「でもリュウセイっていう人が可哀そうじゃ……」

「大丈夫よ。リュウセイだし。ね、珠花」

「……ま、リュウセイ様も可哀想だし、今回は特別にただで譲ってあげるよ。ちょうど紅貴にぴったりの刀もあるしね」

「俺にぴったりの刀？」

「ちよつと待ってて。刀持ってくるから」

桃華は紅貴の方を向き、にっこり笑った。

「良かったね。このお店、本当に初心者には売ってくれないお店なんだよ」

「うん。でも、そんなお店なのに本当にタダで刀貰っちゃって良いのかな？」

「珠花が良いって言うんだから良いんだよ。『紅貴』だしね」

「俺??？」

桃華は嬉しそうに頷く。

「うん、紅貴だから」

「??」

「おまたせ」

珠花は黒い鞘に入った刀を紅貴に渡した。黒に赤い龍の装飾。彫刻の一本一本がつぶれておらず、優美な曲線を描かれている。紅貴は刀の美しさに、思わずため息をついた。

「わあゝすごく綺麗だね」

「これは、先代が残した刀の一つ、『国土無双』っていう刀さ」

「紅貴よかったね」

「俺……何とお礼言ったら良いか」

「礼なんて良いさ。その代わり、目的を絶対果たすんだよ」

「じゃあ私達そろそろ行くね」

「あんまり無茶するんじゃないよ」

紅貴と桃華が去った後の加治屋。珠花は紅貴と桃華の後ろ姿を見ながら静かにつぶやいた。

「まさか先代の予言があたるとはね」

日が僅かに西に傾きかけた時刻、翡翠は目を覚まし、馬小屋に向かった。そこで翡翠は白琳に会う。

「翡翠様おはようございます。よく眠れました？」

「こんなところで何してるんだ？」

「翡翠様と同じですよ。馬に餌をやりにきました」

「俺はこいつらに餌をやるなんて不本意なんだがな。特に天テンは好き嫌が多いから面倒だ」

「でも、そこが可愛いじゃないですか」

「……そうか？」

「甘い物を見つけた時の天テンなんて、とっても可愛いですし」
翡翠はこれには何も答えなかった。

「……日が西に傾きかけてるな。今からこの街を発つても次の街の閉門の時刻には間に合わないそうだな」

翡翠はそう言って腕を組んだまま溜息をつく。

「あら、私は、桃華様が買ひ物のために、今日一日だけ靖郭に居られるように、翡翠様にお願ひしたって聞きましたけど」

「それを桃華から？」

「はい」

「……あいつそんなこと言ったのか」

「実際、桃華様は紅貴様と一緒に買ひ物に行きましたよ。瑠璃も、その後で、せつかくだからって言って買ひ物に出かけました」

それを聞き、翡翠がため息をついた直後だった。翡翠は上空の羽音を聞いた。上を見ると、知らせ鳥がいた。紫の部分が濃いあの知らせ鳥は王の鳥だ。知らせ鳥は、翡翠と白琳の真上で二三回旋回すると、巻物を落とした。翡翠は巻物を受け取り、開く。目を通した翡翠はため息をつく。

「面倒なことになったな。……桃華の力は最近は少し弱まってるから俺が行くしかないか」

「桃華様の力が弱まってるって？」

「いや、こつちの話だから気にするな」

「翡翠！白琳！この刀見てくれ」

突然だった。桜亭に紅貴が帰ってきたのだ。

「綺麗な刀ですね。それ、どうしたんですか？」

「桃華と一緒に行った鍛冶屋でタダでもらったんだ」

紅貴は本当に嬉しそうに言う。そんな紅貴を見た翡翠は、呟くように言った。

「お前、桃華に少し似てきたな」

「そうだ。丁度よかったですわ。紅貴さん、これ、お願いします」

白琳は綺麗な笑顔を紅貴に向け、馬の餌を手渡した。

「これって」

「馬に餌をやりに来たんですけど、気が変わりましたわ。紅貴さん、

それから翡翠様、お願いしますね」

そう言って去っていく白琳を見た翡翠は再び溜息をついた。

紅貴は馬一頭一頭の前に餌を置いて行く。元々動物が好きな紅貴にはそれほど苦になる作業ではない。嬉しそうに餌を食べる馬の様子は、見ていて嬉しくなるぐらいだった。

「天テンは餌に砂糖を混ぜないと食べないから、砂糖を入れてやれ」
翡翠が投げた砂糖の袋を受け取り、さっそく天テンの餌に混ぜてみる。すると、先ほどまであまり餌を食べていなかった天テンの食が進んでいた。そして、紅貴の顔をなめ始めた。

「天テン、くすぐつたいよ」

そう言いながらも、そんな天テンが可愛いと紅貴は思った。

「お前一人で大丈夫そうだな。俺は先に部屋に戻ってるからあとは頼む」

「あ、ちよつと待って！翡翠に聞きたいことがあるんだ」

紅貴は馬小屋の柵に腰かけている翡翠の前に行く。

「その……昨日のあれはいつたい何だったんだ？」

「何の話だ？」

首をかしげる翡翠は知らない振りをしている様子ではなかった。

本当に分からないようだ。

「えっと、昨日の夜部屋に戻ったら寝てる翡翠の横に白琳が居て、不思議なことをやったんだ。白琳が手を当てると、翡翠の身体から紫色の光みたいのが出てきて……。正直言って、不気味だった……」

でも、どうして気になったから白琳に聞きに行ったんだけど、白琳は言えないらしくて翡翠に聞いてって言ってたんだ」

「……ああ、そういうことか。悪いが俺にも言えないな」

「どうして？」

「どうしてって言われてもなあ。唯一話せるとすれば桃華だろうが

……」

「桃華？」

「ああ。だから話は桃華に聞けつて言いたところだが、多分桃華話さなと思うぞ。このことはとりあえずは忘れるんだな」

「うん……」

「そついや、あの刀見せてくれるか」

紅貴は翡翠に刀を渡した。翡翠は刀を少し抜き、刃をじつと見つめた。鞘に刀を納め、紅貴に刀を手渡した翡翠は言う。

「良い刀だな」

「ありがとう」

「お前にはもつたない刀だな」

「国土無双っていう刀なんだって」

「国土無双……。それもお前にはもつたないな」

「国土無双ってどういう意味なんだ？」

「古くからある童話で『幻相記』『史記』……っていうのがあるんだが、そこに、劉邦っていう登場人物がでてくるんだ。その劉邦に仕えた韓信の才能を、「国に二人としない、得難い人材」と讃えたのが由来だな。つまり国土無双は国中で比べる者がいないほど、優秀な人物って意味だ。お前にはもつたないだろう？」

「そんなすごい意味なんだ。ところで、翡翠は頑信って知ってる？」

「あの伝説の鍛冶師の流れをくむやつか。確か今ある各国の王家の剣や刀を打つのを任される程の腕だと聞いているが。じゃ、俺は部屋に戻るから餌やりは任せた」

馬小屋に一人残された紅貴は天テンを撫でながらつぶやく。

「やつぱり昨日のことは聞いちゃいけないかったんだ……」

天テンはそんな紅貴を励ますように顔を舐めるのだった。

「ただいま」

食堂で翡翠と白琳と共にお茶を飲んでいると、刀を買った後で紅貴と別れた桃華が戻ってきた。

「これ見て」

桃華はそう言って、紙に入った何かを見せた。満面の笑みで見せ

る桃華は本当に嬉しそうだ。

「靖郭名物フカヒレ饅買ってきたよ」

「靖郭名物フカヒレ饅といえ、翡翠様の好物ですね」

「ちよつと桃華そんなところで立ってたら邪魔よ」

桃華がフカヒレ饅を自慢している時だった。食堂の戸が開き、瑠璃が現れた。

「あ、瑠璃お帰り」

桃華がそう言うと、瑠璃の後ろから子供が出てきた。

「瑠璃、その餓鬼は何だ」

「この子、清風って言うんだけど、みんなに話を聞いてほしいの。とくに馬鹿兄にね」

「湖北村が危ないんだ！」

清風と呼ばれた少年は突然、そう言った。

第二章 旅の始まり 8

桃華と紅貴はどこかへ出かけてしまった。白琳は薬の調合をするらしい。馬鹿兄翡翠は当分起きないだろう。せつかくの休日なのだ。一人で宿でのんびりしているのももったいないと瑠璃は思う。靖郭に来るのも久しぶりだったので、瑠璃は街に買い物に行くことにした。街を歩けば、いたるところから客を呼び込む声が聞こえる。李京でもそれは同じだが、李京と違うのは、露店の数が多いところだ。売り子と客の直接のやり取りが李京以上に多く、腕が鳴る。瑠璃は、値下げ交渉に自信があつたのだ。ちらりと前方を見れば、色とりどりの髪飾りが飾つてある露店があつた。

（桃華に買つていたら喜ぶかな）

なんとなく、楽しい気分になり、店の前に行こうとしたその時だった。後ろから少年が走ってきた。そして、偶然にも瑠璃の目の前で少年がこけた。瑠璃は手を差し出そうとしたが、少年はそれに気付かない様子で走り去ってしまった。

「大丈夫かしら」

そう、呟いて下を見ると、黒い布の固まりが落ちていた。それを拾うとチャラチャラと音が鳴った。金属同士がぶつかり合う軽い音はおそらくお金だろう。

「あの子のかしら」

瑠璃は財布を届けるために、少年が向かった方に向って歩き始めた。ちらちらと辺りを見回すが、少年は見当たらない。走っていたからだいぶん先に行ってしまったのかもしれない。いつの間にか瑠璃は露店が並ぶ小路を抜けていた。

（まったく、あの子どこにいったのかしら）

仕方ない、とため息をついた瑠璃は、財布を役人にあずけようと決めた。

「二將軍の力が必要なんだ！知らせ鳥で二將軍を呼んでくれよ！」

子供の声だ。声がした方を見ると、数人の人だかりが出来ていた。

（そういえば二將軍って……？）

瑠璃は、人だかりができている場所へいった。人だかりの中心にいる人物を見た瑠璃はあ、と声を上げる。偶然にも先ほど財布を落とした少年だったのだ。

「清風君といったかね。二將軍はそんな簡単に呼べる御方じゃないんだよ。二將軍は呼べないけど、代わりにこの街の兵が行くのじやだめかな？」

「駄目だつて言ってるだろう！普通の兵じゃやられちゃうんだ！村にいた兵もみんなやられちゃったし……」

少年は震える拳を握っていた。清風と呼ばれた少年は本当に悔しそうだった。

「しかし、二將軍は、ただ会うことも難しい御方なんだよ。その二將軍の力を借りたいというのは難しいことなんだ。だから、私たちが……」

「相手は妖獣なんだぞ！普通の兵じゃやられちゃう！妖獣を相手にできるのは、この辺りだと二將軍だけだつて、亮先生が言ってたんだ！」

妖獣という単語に辺りがざわつく。

「妖獣なんて伝説の生き物じやろう。どうせ凶暴な獣と間違えたとかそんなだろうに。そんなことで二將軍様を呼べとは何事じゃ」

隣にいた老人が小声でつぶやく声が聞こえた。老人が言うことはもつともだ。妖獣とは、龍や朱雀などの特別な力をもった生き物のことをいう。洗嘉十二小国戦国期には妖獣を使う妖獣使いがいたというが、伝説でしかない。そもそも妖獣が本当に居たかも怪しいというのが、一般的な認識なのだ。しかし、清風の目は真剣そのものだった。だが、それに対し、周りの大人は、子供の言うことだと、信じていない様子だ。大人たちの考えももつともだが、信じてもらえない清風がだんだんかわいそうになった瑠璃は輪の中心に飛び込んだ。

「清風君？さつきお財布落としたわよ」

瑠璃はできるだけ自然に笑って清風に財布を渡した。

「ところでさつき二將軍がどうとかって言ってたけど、どうして二將軍なんか呼びたいの？」

「湖北村に妖獣が出たんだ。村中を暴れまわって、けが人がたくさん出て、村人を守ろうとした兵もやられちゃって、けが人を助けようとしたお医者さんもやられちゃった……。変な話なんだけど、怪我はしてないのに、急に倒れる村人もいて……。俺たちはその人たちも連れて山のふもとに避難したんだ」

「事情はわかったわ。その妖獣を倒すために二將軍の力が必要なのね」

「亮先生が、妖獣を倒すことができるのは二將軍だけだって言うてたんだ。だからそこにいる兵士に二將軍を呼んでもらおうとしたんだけど、よんでくれなくて……」

「そうだったの。私の知り合いに無駄につよい軍人がいるの。多分、あれなら妖獣を倒せると思うわ。その人、今この街に来てるから、その人に倒してもらおうのじゃダメかしら」

「本当に！？」

「お嬢さん、しかし……。私が清風君に同伴します。北湖村でなにが起こっているかわからない以上、一般の方が行かれるのは危険かと」

兵士が瑠璃に話しかけてきた。

「大丈夫だと思います。私の知り合いは、本当に強いですから。ところで清風君、そんなに大変なことが起こっているなら、李京には知らせたの？」

「亮先生が知らせ鳥で李京に知らしてた。でも、俺、じっとしてられなくて……」

知らせ鳥を扱えるということは、その亮という人物はそれなりにすごい人物なのだろう。湖北村で何かが起こっているとして、最善の策は李京に知らせることだ。あとは待つしかないのだが、待つこ

としかできずに、いてもたってもいられなくなる清風の気持ちで、瑠璃にはなんとなくわかる気がした。

「清風君、もう大丈夫よ。とりあえず私たちが泊まっている宿に行きましょう」

「じゃあその妖獣さんを倒せば良いの？」

瑠璃の話を聞いていた桃華は嬉しそうに言った。

「そう。桃華ならできるんじゃないかと思って」

「うん、多分大丈夫だよ」

「なあ瑠璃、強い人ってこの女の人？」

紅貴が桃華と初めて出会った時と同じことを思ったのだろう。清風は瑠璃に尋ねた。

「そうよ。あと、そこにいる茶髪のやついるでしょう？翡翠っていうんだけど、あの馬鹿兄も真面目になれば使えると思うわ。ちなみに赤い髪が紅貴。となりにいるのは白琳よ」

紅貴は瑠璃の話を聞いていて疑問に思ったことがある。それを聞いて良いか少し迷ったが、やはり確認する必要がある。

「清風、湖北村で見たのは本当に妖獣なのか？」

紅貴がそう言うと、清風が睨みつけてきた。

「俺が子供だから信じてないのか！？」

「違うよ！清風が子供だとかそんなことじゃなくて、清風は『史書』創世の巻きは知ってるか？」

「ああそつちのことか。知ってるぞ。ええと……人々は、この世界の秩序を作り出した……で、なんだっけ」

「……人々は、この世界の秩序を作り出した。秩序の世界と混沌の世界の線引きをしたのは妖術使いだった。神龍の体より生まれし世界に人間の秩序の世界と、混沌の世界の境界を作った、だな。つまり、門の内が秩序の世界で、外は違う。門と郭壁が、かつて妖術使いがひいた境目の名残だと考えると、門の内……湖北村で勝手に妖獣が現れるはずはないって言いたいんだろう？もし、本当に湖北

村で妖獣が暴れまわってるって言うなら、今はいないはずの妖獣使いが関わってるってことになる」

紅貴が言いたかったことを翡翠がまとめた。今では妖獣そのものの存在が疑われているが、かつては確かに存在していた。しかし妖獣が存在する場所は、門の外、つまり街の外のだった。そんな妖獣を門の内側で使うことができる一族がかつては存在しており、妖獣使いと呼ばれていた。だが、妖獣使いは今では存在しないことになっている。

「でも、本当に妖獣なんだ。亮先生も、妖獣だって断言していたんだから間違いないさ」

「それは大変ですね。……ところで話は変わりますが清風君お疲れなんじゃありませんか？」

「うん、寝ずにこの街に来たんだ。俺、少し疲れちゃった……」

白琳はいつも通りやわらかく笑って清風に言う。

「妖獣は私たちでなんとかしますから安心してください。今はお休みにしてください。翡翠様、清風君を部屋に案内してください」

翡翠はため息をつく、紅貴と翡翠が泊まっている部屋へ清風を案内した。

「紅貴って意外と妖獣に詳しいのね。なんか意外だわ」

瑠璃にそう言われ、紅貴は曖昧に笑うことしかできない。

「なあ瑠璃、湖北村に本当に妖獣が出たのかな」

「正直、妖獣が本当にいるなんて私には信じられないわ。でも、清風が嘘ついているようには思えないし…… 紅貴はどうなの？」

「俺はあり得ないことではないと思う。あ、翡翠が戻ってきたな」

「清風君はどうですか？」

白琳が翡翠に尋ねると、翡翠は淡々と答えた。

「よっぽど疲れてたのかすぐ寝始めた。紅貴は今晚は床で寝るんだな」

「寝たっておれの寝台でか？」

「当たり前だろう。俺の寝床を誰に譲るか」

翡翠と知り合ってわずか数日だったがなんとなく翡翠の性格をわかっていた紅貴は反論するのも面倒になり、代わりに話を変えた。

「翡翠は湖北村のことどう思うんだ？」

「どうも何もさっき、王からの命令が書かれた巻物が届いてな、そこに湖北村のことが書かれてたんだ。妖獣が出たからなんとかしろださ」

「じゃあ、どう思うも何もないな」

紅貴がそう言うのと翡翠は腕をくんだまま、また溜息をついた。

「妖獣とかなら、私の方が得意だから、私、一人で湖北村に行くねみんなは先に慶に行って待って。慶で待ち合わせしよう」

「……桃華、今のお前より俺が行った方が早いと思うぞ」

「なんで？」

桃華は首をかしげて不思議そうに翡翠を見ていた。

「……自覚ないのか。まあいい。とにかく、妖獣には俺が行く。

あの偽役人に、俺たちの消息を絶つために念のために嘘をついたんだが、その嘘が目的地を湖北村だと偽る嘘なんだ。目的地と真逆の場所を言う嘘だとばれた時に怪しまれる可能性があるから、それなりに外れた場所にあっていく予定がなかった湖北村は丁度よかったんだが……役人は捕まったから大丈夫だとは思うが、追手がもしいたとして、行く可能性があるとすれば湖北村の可能性は高い」

「馬鹿兄でも頭使ってるのね」

瑠璃を無視して言葉を続けている。

「それから、悪いが白琳にも一緒に来てもらう。もし、本当に妖獣がでたとして……あとは分るだろう？」

「ええ」

「っていうか、みんなで湖北村に行けば良いんじゃない？私が行っても足手まといかもしれないけど白琳が妖獣にやられた人の手当をするのを手伝うことぐらいはできるだろうし。あ、もちろん紅貴がそれで良かったらんだけど……」

瑠璃が紅貴の方を見た。紅貴は湖北村に行くことに迷いはなかった。

もちろん、洗にはできるだけ急いで戻る必要がある。だが、湖北村をほっとけるはずがなかった。妖獣がでているというならなおさらだ。――なぜなら……

瑠璃、翡翠、白琳、桃華。みんな紅貴の方を見ていた。紅貴の答えを待っているようだ。

「うん、みんなで湖北村に行こう。湖北村に妖獣が出たならなおさら俺が行かなきゃダメだと思っただ。みんなにはまだ言っただけだ、おれ、実は、その……まだ半人前だけど……妖獣使いなんだ」

桃華は目を見開いていた。瑠璃と白琳は、え、と声をあげ、普段は無表情の翡翠ですら驚いたようで、眉をぴくりと動かしていた。

第三章 妖獣 1

——巔という世界

かつて世界最強の龍と謳われた神龍と妖龍は争っていた。神龍の牙が妖龍の喉を食いちぎり、妖龍の爪が神龍の心臓を突き刺した。二つの龍は雌雄を決することなく、互いに死んだ。妖龍の体より生まれし妖力が世界を包み込んだ。——混沌。その世界に生きるのは異形の獣と妖獣だけだった。

やがて長い時間をかけて神龍の体は地上になり、血が海を作った。そして、人間が生まれる。まだ妖力が支配する世界だった。それゆえ、人間は妖力に侵され生きていくことが出来なかった。また、異形の獣や妖獣に殺される人間も多かった。しかし、やがて自ら独特の妖力を生み出し、世界を包み込む妖力を制し、異形の獣と、下位の妖獣を倒せる人間が現れた。人はその一族を巔を制する妖拳士『巔一族』と呼んだ。また、倒した妖獣の牙を媒体とする者が現れた。しかし、その牙には妖獣の恨みがこもっていた。人はその暴走する刀を妖刀と呼んだ。その際たるものが、妖龍の牙で作られた桜玉だ。桜玉の暴走を止める為に作られたのが神龍の牙で作られた、聖刀煌玉だった。そのどちらの刀も並みの人間では扱うことが出来なかった。二つの刀を使う一族、妖刀使い、人は『煌桜家』と呼んだ。そしてついに、自らの独特の力で、妖獣を直接使役するものが現れた。

やがて、人々は、この世界の秩序を作り出した。秩序の世界と混沌の世界の線引きをしたのは妖術使いだった。神龍の体より生まれし世界に人間の秩序の世界と、混沌の世界の境界を作った。妖拳士、妖刀使い、妖獣使い、妖術使いこの四つを四つの妖と呼ぶ。場所を失っていた妖獣は、ついにこの世界を去り、新たな別世界へと旅立っていた。だが、この世界でも、秩序の外では、夜には、かつての世界を模写するかのようにかすかな妖力が働く。秩序の中には入れ

ないが、その気配を感じ、別世界に行った獣と妖獣は夜だけこの世界に戻る。そして、夜、秩序の外では巔、煌桜、妖獣使いの力は増し、時に周囲の妖力に共鳴する――

『史書』創世の巻より

「なあ翡翠、そんな難しい顔してどうしたんだ？」

紅貴は、横で天馬を走らせている翡翠に尋ねた。清風がいるため、いつもよりはゆっくりと走らせる翡翠はどこか険しい表情をしていた。もつとも、これから行く場所では、今となつては伝説となつて、いる妖獣が暴れまわっているというのだから、そうなつても当然なのだが、紅貴にはどうしても翡翠が妖獣を怖がるようには思えなかった。何か他のことを考えているのかもしれないと思つたのだ。

「創世の巻のことを考えていた」

翡翠がぼつりと言う。

「もし本当に村で妖獣が暴れまわっているとしたら、妖獣使いが村にいてつてことになる」

「ああ、俺もそれは疑問だった。俺が知っている限り、自由に動き周れる妖獣使いは俺だけのはずなんだ。妖獣使いは今はいないつていうのは本当だし。でも、清風は真剣な様子だったし信じてあげようよ」

翡翠はしばらく何も言わなかった。やがて、翡翠はまっすぐ前を向いたまま静かに言った。

「考えたんだが、妖獣使いがいなくても村に妖獣が現れる条件が一つだけつある。もし、湖北村がそつちの状況だったら面倒だ」

「妖獣使いがいなくても村に妖獣が現れる条件……？」

紅貴にはそれが何なのか検討できなかった。妖獣は妖獣使いがいなければ現れない。それは、改めて考えるまでもなく、紅貴の中では慣れしたんだ常識だった。翡翠の言うその条件がなんなのか、紅貴には検討がつかなかった。

「わからないならいい。……そつちじゃないことを願うしかないな。ところで、もう一度聞くがお前は本当に妖獣使いなのか？」

「本当だよ。ま、世間では妖獣使いはもういなくなっているらしいから信じてもらえなくてもしかたないと思うけどさ」

「それもあるが、まさかこんなくそ餓鬼が妖獣使いだとはどうしても思えない」

「なんだよそれ。そんなこと言っただって仕方ないだろう。誰が何と言おうと俺は妖獣使いなんだから。湖北村に着いたら俺の力見せてやるから待ってるよ……多分」

「期待はしないでおく」

「紅貴、翡翠、もう少しで湖北村の村人が避難している場所にもう少しで着くって」

紅貴が翡翠と話していると紅貴と翡翠の後ろで馬を走らせていた瑠璃がやってきた。

「みんな湖山の麓の神社に避難しているんだ」

瑠璃の横で馬を走らせていた清風の声が続いた。

紅貴は前方を見る。雲がかかっただけは見えない湖山の麓に、うつすらとそれは見えた。白い石でできた鳥居が緑の山を背景に堂々と立っている。晴れていたなら、綺麗なのにと、紅貴は少し残念に思う。

「聖刀神社っていうんだ」

「ずいぶんと単純な名前の神社なんだな」

「あの神社には聖刀が祀ってあるらしいんだ。ほら、聖刀って本当は煌桜家にしか扱えないだろう？でも、肝心な煌桜家がどこにいるのかわからない。その辺に放置しているのも悪用される可能性があるってことで、何世代にも渡って聖刀神社の神主さんが、刀を守ってるんだ」

「本当に聖刀なのか？」

翡翠が疑わしいというように言った。

「神主さんが言うには本物らしいよ。誰も鞘から刀を抜くことができなかったって。そんな刀は聖刀と妖刀以外にないだろう？それに、妖刀だったら周囲に災いを引き起こすらしいけど、それもない。と

なると聖刀だろうつて神主さんが言つてた。銘は不明らしいけどね」
「いったい煌桜家の奴はなにをしているんだろつな」

鳥居を前に、翡翠が天馬から降りながらつぶやいた。その声をききながら紅貴も馬から降りた。紅貴は鳥居を見上げる。近くで見ると大きな鳥居だと、紅貴は思った。笠木と呼ばれる、二本の柱に支えられている部分はどんなに手を延ばしても届くはずもない高さにある。それどころか、この場で一番背が高い翡翠の身長も優に越えている。洸国では見られない光景だ。茫然と立っていると、紅貴は後ろから声をかけられた。

「紅貴、ぼおつとしてないでいくよ。この先に村人のみんな避難しているんでしょ？」

瑠璃がそう言つと、清風が頷く。

「うん、この先にみんないるんだ。……その……」

先ほどまで、一見元気な様子で話していた清風が下を向いて俯く。

「けつこうすごい光景かもしれないけどお兄さんたち大丈夫？」

清風は拳をぎゅっと握っていた。どこか怯えているように静かにそう言つた清風の声が、不思議と昔の記憶と重り、なんとなく清風の気持ちかわかる気がした。

「大丈夫だよ。怪我人がいるんだろう？急いで手当をしなきゃな」

紅貴は、かつて、身近にいた人がそうしたように清風に視線を合わせて言つた。

「お前にそんなことできるのか？」

翡翠が腕を組んだままそう言つと、瑠璃の声が続く。

「そうよね。紅貴ってなんとなく不器用そう」

「大丈夫だって！俺にだってけが人の手当てぐらいできるって！」

「どうかしらね」

「とりあえず急いで参りましょう」

村人が避難しているという建物の引き戸を開けると、幾人もの村人が寝ていた。腕や足が布で巻かれているところを見ると、応急処

置はしたのだろうが、村人たちは苦しそうにうなり声をあげ、時折うわごとのようなものも言っている。大人も子供もみんな息が荒く、苦しそうに胸が上下していた。高熱にうなされている状況に似ているとも思ったが、なぜかそれよりも不気味な光景に感じられる。――何かがおかしい。紅貴は口には出さなかったが、目に見えない何かを怖いと思った。なぜか、靖郭の宿での白琳と翡翠を見かけたときの感覚と似ているとも思った。じわじわと広がる寒気は、何か別の場所でも感じたことがあるような気もした。――あの、幼かった頃に。

「……これは、本当に妖獣にやられたみたいだな」
横にいる翡翠がつぶやいた。

「みなさん、助けに来てくださってありがとうございます」
部屋の奥から、作務衣を着た初老の男がやってきた。

「清風、薬は買ってきてくれたかね」

「うん」
「ありがとう。ご苦労だったね。疲れているところ悪いが、隣の部屋に買った薬を置いてきてくれるか？」

清風が部屋を出るのを見送ったあと、初老の男はこちらを見て言う。
「私は亮と言います。湖北村で孤児院の親をやりながら寺子屋で先生をやっている者です」

「私はここで神主をやっております、覚信かくしんです。湖北村の方たちがこちらへこられ、無事だった亮先生と共に応急処置はしたのですが見ての通り……」

覚信は苦しむ村人をちらりと見た。

「私は壮　白琳です」

紅貴の後ろにいた、白琳が言う。

「応急処置の様子を見る限り、お二人とも医療の心得はあるようですね」

「はい。ですが、私たち、いや、普通の人間では、これ以上は手に負えないです」

そう言った覚信は本当に悲しそうだ。

「ご安心ください。そのために私がきたのですから」

「それは心強いです。本当にありがとうございます。それにしても麒麟様、大きくなりましたね」

「あれ、翡翠この方の知り合いなの？」

瑠璃がそう言うと、翡翠が答えた。

「……少しな。ああ、妖獣は希望みどり、俺が引き受けることになりました。この様子を見る限り村は本当に妖獣にやられたらしいですね。ついでに妖獣が現れた原因も調べておきます」

「頼りにしてますよ。鳳華様も元気にしていましたか？」

桃華はこくりとうなずいた。

「そちらの蒼い瞳のお嬢さんは麒麟様の妹ですか？」

「はい。芳 瑠璃と言います。何かできることがあったら気軽に言ってくださいね」

「ありがとう。赤い髪の君は何て言うのかな？」

「紅貴っていいいます」

「村人を見る限り、村人の皆さん、昨日から食事をしてないようですね」

「あの状態ですから、食欲がわかないようです」

「瑠璃、私が村人の皆さんを治します。ですから瑠璃は村人の皆さんのために食事を作ってくれるかしら」

「わかったわ。覚信さん、台所借りますね」

瑠璃はそう言って腕まくりをすると部屋を出て行った。

「じゃあ、紅貴、私たちも行こー」

桃華がにっこりと笑ってそう言うのをきいた紅貴が頷こうとしたその時だった。翡翠が淡々と言う。

「いや、桃華は留守番している」

桃華はなんで？と、声をあげていたがそんな桃華に気を止める様子もなく、翡翠は言葉を続けていた。

「紅貴、行くぞ。湖北村は山のうえだから今から山登りだ」

「桃華は？」

「あいつがいると面倒だから置いていく」

「ひつどゝい！私もいくんだから！！どっちがさきに妖獣を捕まえられるか競争よ！」

桃華は軽やかに駆け出し、部屋を出て行った。翡翠はなぜかため息をつき、疲れているようだ。桃華と一緒にいくことを、なぜ翡翠が嫌がるのかを不思議に思いながらも、紅貴は翡翠について部屋を出て行った。

第三章 妖獣 2

「いやああ!!」

湖山の中腹で、今日、何度目かの少女の悲鳴が上がった。

紅貴、翡翠、桃華は湖北村へ向かうために、湖山を登っていたのだが、途中で、桃華は何度も悲鳴をあげていたのだ。

湖山は木々が生い茂っており、多少歩きずらかったが、それを除けば綺麗は森だと紅貴は思っていた。先程までは曇っていたが、ようやく晴れ間が見え、日の光が木々の間から溢れている。春の色とりどりの花は日の光を浴び、鮮やかに咲き誇っていた。その、一つ、小さな白い花の愛らしさにつられ、紅貴が花を手にとろうとすると、翡翠にとめられた。

「その花は毒がある。下手に触るな」

毒があるなんて信じられないあと、もう一度花を見ていた時だ。桃華が最初に悲鳴をあげたのは。

「桃華どうしたんだ？」

「あ、あれ……」

桃華が今にも泣きそうな声で指さした方向を見る。しかし、紅貴には、桃華が何をそんなに怖がっているのかわからなかった。桃華が指をさした方角には、花畑のようなものがあつた。大木などがなく、日の光を邪魔する存在がないせいなのか、他の場所よりもたくさんの花が咲いている。その上をひらひらと飛ぶ物体は蝶だろうか。妖獣を倒しに来たということを忘れてしまいそうになるのどかな光景だ。

「花綺麗だな。それがどうかしたのか？」

「違う……!!その上、飛んでるの……!!」

「飛んでるの?ああ、蝶か」

綺麗だよな、と続けようとしたが、桃華の悲鳴のようなものが遮った。

「蝶！蜂！あそこにいるのは虫！虫なんて大つきらい！！」

その時花畑からこちらへ蜂が一匹飛んできた。桃華は半分涙目になりながら、紅貴の服にしがみついたのだ。

「小さい蜂だし、おとなしくしていれば何もしないよ」

紅貴がそう言っても桃華は紅貴の服を掴んだまま震えている。それ以来、桃華は虫が現れるたびに悲鳴をあげるのだった。

「いやああ！！」

何度目かになる悲鳴をあげ、桃華が翡翠の服にしがみついた時だった。ずっと黙っていた翡翠が口を開いた。

「だからお前は来るなって言ったんだ。騒ぐなら神社に戻ってろ」
翡翠の声に紅貴は喉をぐくりと鳴らす。恐る恐る翡翠を見あげると、明らかに不機嫌だという表情で、静かに怒っていた。

「こんな虫だらけの山を一人で降りろって言うの！？無理に決まってるでしょう！」

桃華が翡翠から離れ、叫びにも似た声で言う。

「虫ごときでいちいち騒ぐな。山に一人で置いていかれなくなったら黙ってろ」

翡翠は静かに言うとすたすたと歩きだしてしまった。紅貴は先に歩いて行った翡翠の後ろ姿と、少し泣きそうになって俯く桃華を交互に見た。紅貴は、桃華の傍に行つて言う。

「桃華とりあえず、村まで一緒にいこう。な？」

桃華はこくりと頷く。しかし、その直後、木の上から毛虫が落ちてきた。

「もうこんな場所いやあああ！」

紅貴は叫ぶ桃華と翡翠が行った先を再び交互に見て、溜息をつく。この調子で本当に湖北村に着くのだろうか。

「その人で最後？」

白琳はふわりと笑うと、村人の胸のあたりに輝く手をあてた。するとついさっきまで、まるで悪夢でも見ているかのようにうなされ

ていた村人は、気持ち良さそうに寝言を立てながら、安らかに眠り始めた。

「みなさんこれで大丈夫です」

白琳がきつぱりとそう言うのを聞いて、瑠璃はほつと息を吐く。初めてこの部屋に入ったとき、正直に言ってしまえば怖かったのだ。多少の大怪我などは、將軍位に就く兄と、友人の桃華で見慣れていたが、怖かったのは別のことだった。村人たちの、うわ言、苦しそうな表情。それら一つ一つが何か尋常ではないと瑠璃は感じ、それがとても怖かったのだ。

「白琳、いったい村人に何が起きてたの？」

「おそらく妖力にやられたんだと思います」

先ほどまでの笑顔が消え、白琳に一切の表情が無くなった。どことなくピリピリとした気配を白琳がまとっているようにも感じられる。――妖力って何？その言葉を飲み、瑠璃は話題を変える。

「さつきご飯を作ってた時に、亮さんが手伝ってくれたの。でも、亮さんは意外にも料理が苦手だったのよ」

「そうなんですか？」

「普段は奥さんを手伝おうとしても手をだすなつて言われるんだつて。奥さんの朔姫さくひさんと亮さんは、湖北村の孤児院で親代わりになつてるんだつて。そうそう清風いたでしょ？あの子その孤児院の子みたいよ。亮さんが清風は母親代わりの朔姫さんを心配しているはずだつて言つてた。白琳がみんな治してくれたから、亮さんも清風もきつと安心してゐるわね」

瑠璃がそう言うと白琳は笑顔を見せた。

「少しでも役に立てたなら良かったですわ」

白琳がそう言っただちようどその時、瑠璃の背後から足音が聞こえてきた。振り返ると清風がやってきていた。

「みんな治つたのか？」

清風が不安げに白琳に問いかけた。

「みんな治りましたよ」

白琳が明るい声で、にっこりと笑って言うと、その笑顔を真正面で見たいだろうか。清風の顔が真っ赤になっていた。

「あら、清風君照れてるの？まあ白琳は綺麗だからね」

「別にそんなんじゃないよ」

「清風ってませてるのね」

「だから違うって言うてるだろう！」

そう、むきになって言う様子を見た瑠璃は内心ほつとする。今までの清風は、どこか余裕がなかった。と瑠璃は思う。きっと清風は村が妖獣が襲われて以来ずっと不安だったはずなのだ。18の自分でも怖いと怖いと思ったのだ。まだ12歳の、それも襲われたのは一緒に生活してきた同じ村人だとすれば、どんなに怖かっただろうか。こうして無邪気に騒いでいる清風を見て、瑠璃も嬉しくなる。清風の声が聞こえたのかもしれない。白琳の横で寝ていた男が起き上がった。

「師匠！」

起き上がった男を見て清風は声を上げる。

「清風師匠って？」

「冬梅師匠は俺に剣を教えてくれるんだ。その辺の兵士とは比べ物にならないくらい強いんだぜ。師匠は、妖獣が出た時、村人を逃がすために最後まで戦ってたんだ。俺も早く師匠見たいに強くなりたい！」

冬梅と呼ばれた男は立ち上がると、清風の髪をぐしゃぐしゃと撫でた。

「師匠やめてくださいよ」

清風はそういうが、きつと嬉しいに違いない。やがて、冬梅は筋肉がついた太い腕で清風をひょいと持ち上げた。大柄の冬梅が清風を持ち上げると、清風が小さく見える。

「清風心配かけたな。もう大丈夫だから安心しろ」

「武道に携わっている方だったんですね。道理で妖力の影響をあまり受けていないと思いました」

白琳が軽く微笑みながら言うと、冬梅は清風を降ろし、ワッハハと、豪快に笑う。

「少しやられたがな。それを治してくれたのはあなたのような心から礼を言う。ありがとう」

冬梅は武道家としてはかなり恵まれた体格に見える。実際、瑠璃が知ってる武人の駿や翡翠よりも、ずっと太い腕を持っている。背は駿と同じくらいだろうか。しかし、冬梅は駿に比べて全体的にがっちりとした体格だ。そのせいか、駿とはずいぶんと違う印象に感じられる。冬梅の体格だけ見ていれば、怖いと思われるかもしれないが、冬梅の話を聞いていると不思議とそうは思わなかった。気持のいい性格の人物だと、瑠璃は思う。瑠璃が知っている武人は癖がある人物が多かったため、武人にもこんな人もいるんだと、瑠璃は感心する。

「馬鹿兄に爪の垢を煎じてのましてやりたいわ」

「清風、俺も治ったんだ。明日からまた剣の稽古をつけてやる。今年はいよいよお前の匠院義塾の受験なんだこうはしちゃいられねえ」

「匠院義塾!？」

瑠璃は思わず声を上げる。

「こいつは、禁軍兵士になりたがっているからな」

冬梅はそう言って、まるで何かを企んでいるかのようにニツと笑う。

嘉国で兵士といえば、男の子であれば誰もが憧れる職業の一つだ。子供が大人に何に成りたいかを聞かれ、「兵士」と言えば、大人は笑いながら子供の頭を撫でる、そんな職業なのだ。だが、それと実際になるのとは別の話だ。嘉国の兵になるためにはそれなりの地位を持った人物に認められるか、試験に受かる必要がある。

もつとも、前者の可能性はほとんどないと言っているだけで、ほとんどの者は後者になるだろう。その試験を受ける資格は、嘉国にあるいくつかの武官を育てるための学校から卒業することが条件であるため、兵になりたければ、必ずどこかの学校に入らなければなら

ない。特に禁軍兵になるための武科挙に通るには、匠院義塾を卒業していることが暗黙の了解となる。というより、毎年、武科挙合格者のほとんどが匠院義塾の卒業生なのだ。匠院義塾は、嘉国唯一の国立の武官を目指す者の学校であり、そこに合格すれば、授業料は一切取られない。その代わり、入学試験の内容も入学後の授業も他の学校よりも数段上だというのだ。

剣術がある程度でき、近所で少し評判になる程度では匠院義塾に受かるのは厳しいという。学問もできなければならず、武道においても、だれからもうまいと言われる位でなければまず匠院義塾には受からない。それでも落ちる者もいるという。13歳から18歳の間であれば誰でも入学できるものの、その5年間ずっと受け続けても受からないものがほとんどだという。例外はあるかもしれないがよっぽど才能がなければまず受からない。匠院義塾とはそういう場所だ。

「俺、どうしても兵士になりたいんだ！」

子供がにこにこ笑いながら兵士になりたい、というのはだいぶ様子が違っていた。清風は自分の夢には責任を持つというように、力強く言った。その瞳も、言葉同様に力強い。瑠璃はそんな清風に感心した。——次の言葉を聞くまでは。

「俺、若くして二將軍に就かれた麒麟様や鳳華様、それから、あの歳で麒麟軍に入られた駿様のような立派な軍人になりたいんだ」

そう、目を輝かせて言う清風に、瑠璃は何も言うことができない。駿はいいだろう。文字どおり若き天才であり、優秀な軍人なのだから。頭に浮かんだのは、いつも、面倒だ、しか言わない翡翠と歳の割に幼い桃華。いくらなんでも子供の夢を壊すことはできない。横にいる白琳も同じこと思っているのか、珍しく苦笑いをしていた。

——知らないって幸せね。せめて、この子のために妖獣くらいはちゃんと始末しなさいよ

瑠璃は、自分の兄と友人のことを心の中で詫びた。そして、馬鹿兄と桃華、それから紅貴が妖獣を倒すのを心のそこから願うのだっ

た。

第三章 妖獣 3

冬梅の回復は早かった。先ほどまでうなされていたとは思えないほどしつかりとした足取りで瑠璃の前を歩いている。冬梅の横を歩く清風はそれを嬉しく思っているのだろう。瑠璃の頬を撫でる軽やかな風のように嬉しそうな足取りだ。そんな冬梅と清風の後ろ姿を見た瑠璃は嬉しくなり、思わず微笑んだ。

「一日休んだただけだけど、師匠と打ち合うのがすごく久しぶりに感じますよ」

「久しぶりだろうと容赦はしないからな」

瑠璃が聞いた冬梅と清風の会話はわずかだったが、それでも二人の言葉の端々から二人の仲の良さがうかがえる。清風は師である冬梅を尊敬しているようだったし、冬梅の方も清風を本当に可愛がっているようだ。やがて、神社の境内の東の道場に着いた。道場に着いた瑠璃は、改めて胸が高鳴る自分の心臓の音を聞いた。

冬梅が起き上がってしばらくし、清風が言った。

「俺、やっぱり今すぐ師匠に剣の相手をしてもらいたいです」

「じゃあ、今からやろう」

そう言って、楽しげにガハハと笑う冬梅だったが、仮にも病み上がりのはずだ。心配になった瑠璃は、ちらりと横にいた白琳を見た。すると、瑠璃の意図を察したのか、白琳は、僅かにほほ笑みながらささやくように言った。

「これだけ元気なら大丈夫でしょう」

瑠璃がほつと肩を撫でおろしていると、清風が声をかけてきた。

「お姉ちゃんも見に来ないか？」

清風はそう言っただけに終わった。瑠璃はもとも剣の打ち合いを見るのが好きだ。それに――瑠璃は、禁軍になりたいと言った時の清風の強い瞳を思い出す。単純に剣を見るのが好きだというのもあつ

だが、あの強いまなざしをもつ子供の剣を見たいと瑠璃は思ったのだ。

もう少し村人の様子を見ているという白琳に見送られ、瑠璃、冬梅、清風の三人は道場に向かったのだった。

道場の中央で向かい合う二人を瑠璃は見る。双方笑顔は消えている。冬梅が、まっすぐに清風を見、冬梅の視線を受けた清風は、微かに睨みつけるようにして冬梅の視線を受けていた。清風の木刀、少年の背丈に対して少し大きいそれは、しっかりと正眼に構えられている。瑠璃が喉をごくりと鳴らし——最初に動いたのは清風だった。

——速い

冬梅が清風の剣を受けて音を立てていた。あつという間に冬梅との距離を縮めた清風に瑠璃は驚いた。合わさる二人の木刀を見た瑠璃は、思わず自分の服を握る。よく見ると、清風の木刀がぎりぎりと震えている。おそらく、師である冬梅の力の方が勝っているのだろつ。しかし、清風はいつまでも木刀を合わせてはいなかった。再び、あつという間に冬梅との距離をとると、今度は次々と鋭い突きを繰り出した。

——やっぱり速いわ

なんとか目で追っては行けるが、気を抜けば一瞬木刀の動きを見失いそうになるほどに、清風の繰り出す剣は速かった。瑠璃とて、剣術に関してまったくの素人というわけではない。幼いころは、近所に住む同年代の男の子には剣で負けたことはなく、あの翡翠にチャンバラの相手をしてもらっていたのだ。もちろん当時の翡翠が本気で瑠璃の相手をしていたはずはないが、その経験がなければ、目の前で見せられる清風の激しい突きを目で追うことはできなかった

だろう。まったくの素人では目の前で何が起こっているかさえわからなかったかもしれない。

だが、そんな清風の突きを、冬梅はさほど苦も無さそうに防いでいる。カキンカキンという木刀が合わさる音を聞きながら、ふと冬梅の顔見ると、子を愛しそうに見る父親のような表情だった。やがて、冬梅の口元がわずかに緩むのを瑠璃は見た。その直後だった。清風の木刀が弾かれたのは。清風は一瞬、悔しそうに表情をゆがませたがすぐにニヤリと笑うと、弾かれた木刀を拾いあげて言う。

「今日こそは師匠に勝てそうな気がしたのに。やっぱり師匠は強いですね」

冬梅は口を大きく開けて笑う。心から嬉しそうだ。そして、清風の癖のある黒髪をぐしゃぐしゃと撫でながら言う。

「俺がもつと強くしてやるから安心しろ」

そんな師弟を見た瑠璃は思わず口から笑みが零れるのを感じた。

「桃華いいかげんにしろ」

「虫は嫌いな！」

「虫よりてめえの叫び声の方がよっぽど迷惑だ」

「何言ってるのよ！虫の方が気持ち悪いじゃない！」

目の前で繰り広げられる口喧嘩に、紅貴はそつと溜息をついた。桃華が虫を見るたびに叫び声をあげ、それに翡翠が小言を言い、口喧嘩になる。先程からその繰り返しなのだ。最初は二人の口喧嘩を止めようとしていたのだが、いいかげんそれも面倒になった紅貴は二人をほつとくことにした。

（たかが虫でなんでこんな口喧嘩になるんだよ……）

そんなことを思いながら紅貴は再び溜息をつく。それにしても、と紅貴は腕を組む。目の前にいる二將軍と呼ばれる武官二人は緊張感がなさすぎるのではないだろうか。二人の喧嘩を聞いていると、今、自分たちが妖獣を倒しに行こうとしていることも忘れそうになる。やがて、目の前に木でできた門が現れた。いや、門だったもの

か。門はその形を崩しかけ、おそらく閉じられていたであろう門の中心には穴があき、屋根は完全に落ちていた。

「ひどいな」

紅貴がそうつぶやくと、桃華場違いなのんびりとした声が返ってきた。

「あの穴から村の中に入れるかな」

紅貴は、さすがに一人が通るのは無理だろうと、思う。翡翠も同様に思ったらしく、呆れたというように桃華を見ていた。

「よし登るわけにはいかないよな」

紅貴がそう言うと、翡翠は鞘と柄に布が巻かれた刀を静かに抜いた。ちょうど視界に翡翠の抜き身の刀が入り、刃を見ると、何やら彫刻が入っていた。しかし、何の彫刻かを見る前に、翡翠は門の目の前に歩いて行ってしまった。翡翠の行動を不思議に思いながら見てみると、シュツツと音が聞こえた。それが、翡翠が扉を斬る音だと気付いたのは。扉がガコンと音をたてて崩れた後だった。翡翠は何事もなかったかのように刀をしまつと、崩れた門の先から村の中へ入っていった。紅貴もあわてて村に入り、後から桃華も付いてきた。

「ひどい」

紅貴は村の様子をみてそうつぶやく。門の様子からも想像できていたことだが、村の様子はひどい有様だった。畑が無残に荒らされ、土の中で育つべき野菜は掘り起こされていた。家は崩れ、道には馬の死体が転がっている。村の外から聞こえる鳥の鳴き声がどこか虚しく感じられた。

「最悪ね」

そういう桃華の声色は桃華のものとは思えない程に冷たい。そつと桃華を見ると、わずかに顔が青ざめているようにも見える。それもそうだろう。武官とはいえ、若い少女が普通はこの光景を直視はできないだろう。

「嫌な予想が当たるとはな」

紅貴は翡翠の言葉に違和感を覚えた。翡翠の性格ならこの状況を予想しているはずではないだろうか。だとしたら、翡翠の言う嫌な予想は別のことではないだろうか、紅貴は思った。

「翡翠、嫌な予想って？」

「靖郭から神社に向かう途中、俺が、妖獣使いがいなくても村に妖獣が現れる条件が一だけつあると言ったことを覚えているか？」

紅貴はこくりとうなずく。あの時、翡翠はいつも以上に陰しい表情をしていたのだ。

「その条件を誰かが満たしたらしい。……って、紅貴は妖獣使いだったな。現状があるんだ。ここまでいえばわかるだろう」

「まったく最悪よね」

桃華のその言葉を聞いて、紅貴は桃華の言う最悪の意味を取り違えていたことに気づいた。桃華の言う最悪とは、翡翠が言う妖獣使いがいなくても村に妖獣が現れる条件のことだったのだ。

（考えてみれば、桃華だって仮にも二將軍だ。これぐらいのことで動揺するはずないよな）

しかし、その二將軍の鳳華が動揺する最悪なこととはいったいなんなのか、紅貴にはわからなかった。翡翠に現状があるといわれても、紅貴にとつての現状とは畑と家屋が荒らされることであつた。しかし、それは妖獣が現れた結果であり、原因ではない。

「ところで、さっきから言っている……」

最悪な状況って何？そう言おうとして紅貴は言い直す。ここで使う最悪の意味が違くとも、村人たちにとつて畑と家屋が荒らされることは最悪に違いない。

「さっきから言ってる妖獣使いがいなくても村に妖獣が現れる条件って何？」

「え、紅貴わからないの？」

桃華が少し驚いた様子でそう言う。そんなに驚かれるようなことを言った自覚がない紅貴は逆に驚く。しかし、翡翠を見ると翡翠も桃華と同じような表情をしていた。

「お前、本当に妖獣使いか？」

「信じられないかもしれないけど本当だよ！」

「でも、現状がわからないんだろ。妖獣使いだったらわかるはず……」

翡翠はそこで言葉をとめた。桃華がその直前で目くばせをした気がしたが、紅貴にはその意味を深く考えなかった。

「門の内が秩序の世界で、外は違うっていうのは知ってるよね」

考えるまでもなく常識だ。普通であれば、それは伝説として深く意識しないのかもしれないが、かつての師に、そればかりは疑ってはいけない理だと教えられたのだ。それが事実であるという証拠はなかったが、紅貴にとっては、血が赤いことや、子は母親から生まれるということと同じように、当たり前のことだ。

「夜、秩序の外では野生の妖獣さんが現れることもしってるよね」

紅貴は野生の妖獣という言葉に、思わず吹き出しそうになった。

桃華はおそらく、秩序の外では、夜には、かつての世界を模写するかのようにかすかな妖力が働く。秩序の中には入れないが、その気配を感じ、別世界に行った獣と妖獣は夜だけこの世界に戻る。という『史書』創世の巻きの一節のことを言ってるのだろ。あんなに堅苦しい文なのに、桃華がいうと何か別のもののように聞こえてしまっておかしい。だが、翡翠の低い声が紅貴を現実に取り戻した。

「紅貴、この村には秩序の外と、内との境界がない。つまり、この村は秩序の外だ」

紅貴は驚いて翡翠を見上げた。そう言った翡翠の表情は真剣であり、嘘をいっているようには見えない。だが、秩序の外と、内との境界がないとは紅貴にとってはありえないことだった。村や街の周りにある壁や門が、境界の名残であると師に教わり、疑ったこともなかった。いまさらそれを覆すことはできなかった。もちろん、ここが秩序の外になってしまっているというなら、桃華がいうところの野生の妖獣が入ることも可能だろう。確かに筋は通っている。通ってはいるのだが、信じられなかった。

「普通、街や村の外と、内、つまり秩序の外と内では空気が変わる。だが、この村は門の外と空気が同じだ。つまり、何者かが境界を破壊した」

「その証拠がどこにあるんだよ。境界を破壊するなんて聞いたことないぞ。だいたい、空気が変わるっていうけど、翡翠はその違いがわかるって言うのかよ」

「ああ」

「まさか桃華も？」

桃華うん、とうなずくと言う。

「信じられないかもしれないけど、ね。私も紅貴が妖獣使いだってことは信じるから、紅貴も私たちのこと信じてくれる？」

そう言われれば信じないわけにはいかないと、紅貴は思った。

「秩序の内と外の違いがわかるなんて、そんな人間いるんだな」

「……仮にも二將軍だからな」

それもそうか、と紅貴はそれで納得することにした。紅貴がこれまでにあった武官で、秩序の内と外の違いがわかる人間はいなかったが、それを言えば翡翠と桃華も妖獣使いに会ったことがあるはずはないのだ。お互いさまだと思うことにして、そのことを深く考えるのはやめた。

「ところで、紅貴、妖獣使いが妖獣を使うにしても、秩序の外の方が、当然、その影響を受けて妖獣の力が大きくなるよね？」

「うん、当然な」

桃華は考え込むようにして腕をくんだ。表情が一層険しくなり、いつもの桃華の面影はほとんどなくなっている。

「どうした桃華？」

「もしかして、境界を破壊したうえで、紅貴以外の妖獣使いが妖獣を呼んだんじゃないかって。可能性の話ではあるけど」

「たしかに可能性としてはありえるな」

三人は一斉に溜息をついた。考えれば考えるほど最悪な状況だと、紅貴は思う。幸い、二將軍がおり、自分自身は妖獣使いである。こ

れ以上にない戦力だとも思うのは確かだが、同時に自分たちで何と
かなければ誰にもこの問題を解決できないだろうとも思う。

――後には引けない。

紅貴は、ぐつと拳に力をいれた。

「……夜までに何とかしないと厄介だな」

翡翠が小声でつぶやいたその言葉の意味を、この時、紅貴は、正
確には理解していなかった。その意味を理解するのは先の話である。

第三章 妖獣 4

瑠璃は神社の台所を借りて食事を作っていた。先ほど昼食を作ったばかりだったが、村人全員分の食事となれば、作るのに時間がかかる。瑠璃は早めに夕飯作りに取り掛かっていたのだ。台所中にだしの香りが漂い、我ながら上出来だと、瑠璃はほほ笑んだ。

「白琳に味見してもらおう」と

そうつぶやくと、丁度白琳が台所に入ってきた。

「白琳どうしたの？」

「少し困ったことがあります」

瑠璃がわずかに首をかしげると、白琳が言葉を続けた。

「村人のみなさんの様子もおちついて、時間ができたことですし、これからの旅に役に立ちそうな薬の調合をしようと思ったんですが、材料を切らしてしまいました」

「ここにはないの？」

嘉国で神社といえば、何かを祀っているだけではなく、そこに住む人々の生活に役立つ物を置いてあることが多い。書物や薬が置いてあることも珍しくないのだ。ましてやこの神主は医学の心得がある。薬房はないのだろうか。

「この神社の薬房にはないと思います。というより、普通の薬房には絶対に置きません」

「普通の薬房にはない……？それってまさか！」

「はい。いつもは芳家、つまり瑠璃と瑠璃のお父様に発注を頼んでるあれです。さすがに今すぐには手に入れられませんよね」

「あら、大丈夫よ。むしろちょうど良かったわ。でも、今すぐここを出ないと取引に間に合わないから、ここをすぐ出発するわ。」

「ありがとうございます」

「ご飯できてるから、夕飯の時間になったら温めてみんなで食べてね」

白琳がうなずくのを見て、瑠璃は台所を出た。

「俺はいったん神社に戻る」

「何でだよ！せつかくここまで来たのに！妖獣はどうするんだよ！」

紅貴が翡翠を見上げてそういうと、翡翠はいつものように腕を組んだまま言う。

「さっきも言ったが、ここには秩序の外と、内との境界がないといっただろう。境界がないということは、夜、妖獣が自然発生する可能性がある。あとは、紅貴以外の妖獣使いが、妖獣の力が一番強くなる夜に呼ぶ可能性……妖獣使いだったら、夜じゃなくても妖獣を呼び出すことはできるだろうが、もしこの村を破壊したのが自然発生 of 妖獣じゃなく、妖獣使いが呼んだ妖獣だとしても、夜が一番妖獣の力が強くなる夜に妖獣を呼ぶのが普通だろう。だが、さっきも言ったように、夜になればこっちは不利になる」

「確かに」

紅貴は翡翠の話を理解し頷いたが、その話と、翡翠が神社に戻ることは話がつながっていないと思った。翡翠が神社に戻ってどうするのだろう。

「でも翡翠、昼間に俺以外の妖獣使いが来て、妖獣呼んだらどうするんだ？夜の妖獣よりは弱いといっても、妖獣は妖獣だぞ！俺と桃華だけじゃ……」

紅貴は早口でそう言い、同意を求めようと、横に立つ桃華を見た。しかし、桃華はわずかに首をかしげただけだった。やがて、のんびりと、まるで今晚のおかずでも話すかのように言う。

「大丈夫だよ。よっぽど強い妖獣さんならともかく、普通の妖獣さん……うーん、並の竜さんとかなら私一人でも大丈夫だよ。夜になったら別だけど」

紅貴はそう言うてにつこりと笑う桃華の言葉が信じられなかった。いくら桃華が二將軍で強いとはいっても桃華は人間の女の子だ。普通の人間が一人で妖獣に対抗する話など聞いたことがない。しかし、

紅貴のそんな気持ちなど気づいていないかのように翡翠が言う。

「昼間に妖獣がやってきても桃華にまかせておけば大丈夫だろう。問題はやっぱり夜だ。まあ、一応境界を何とかできそうな奴を一人知ってるから、神社に戻る」

「――夜、境界が壊されたままだと大惨事になるもんね」

翡翠に続いてぼつりとつぶやいた桃華の声が少し低く、わずかに震えていることに紅貴は気づいた。同時に、夜の妖獣がどれだけ恐ろしいかを分かっているのにもかかわらず、昼間の妖獣なら平気だという桃華の態度が不思議だった。

「桃華一人だとそんなに不安か？」

「そんなことはないけど……」

「安心しろ。桃華なら、お前よりは確実に妖獣を仕留められるだろう」

翡翠はそういうと、ほとんど笑みとは分からない程度に、わずかにニヤリとわらった。とはいっても、紅貴が気付いたということは、確信的な笑みだろう。

「じゃあ翡翠、ここは私と紅貴に任せて行ってきて」

「ああ行ってくる、夜までには戻るが、俺が戻ってくる前に妖獣が来たら頼む」

そう言って翡翠は紅貴と桃華に背を向けて歩きだしてしまった。

「ちよつと待ってよ！翡翠が戻ってくる前に本当に妖獣がやって来たらどうするんだよ！」

紅貴がそういうと、桃華がこちらを見て言う。

「だから大丈夫だって」

結託のない可愛らしい桃華の笑顔には、不思議と紅貴は逆らうことができない。まだ数日の付き合いだが、桃華の最大の武器は笑顔なんじゃないかと思いはじめていた。

（こうして笑っていると、可愛らしい女の子だよなあ……。まったく敵わない）

紅貴はそんなことを思っている自分がなんとなく情けなくなり、

そつと溜息をついた。

白琳は瑠璃があらかじめ淹れていったお茶を湯呑に注ぎ、台所の椅子に腰かけた。ほつと息をつき、お茶を飲むとほのかな茶葉の香りが口に広がった。

「村人を助けてくれたのはお前さんかい？」

「あなたは？」

「亮の妻の朔姫だよ」

それを聞いた白琳は、瑠璃が朔姫のことを話していたのを思い出した。村を助けようと必死だったあの清風の母親代わりの人物だ。目の前にいる朔姫はいかにも面倒見がよさそうだ。どことなく、白琳の母親代わりだった人にも似ており、白琳の口からは自然と笑みが零れた。

「お体はもう大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫。あんたのおかげさ。でもまさか、あのたくさん村人を助けたのがこんなに綺麗な娘さんだとはねえ。若いのにすごいねえ」

「私はこれでも医者ですから助けるのは当然です。助けられるのに助けないのは職務怠慢です」

「あんた、綺麗な顔してその辺の男よりよっぽどかっこいいね」

「ありがとうございます」

白琳がそう言うつと朔姫は棚から湯呑を出して、瑠璃が予め淹れておいたお茶を湯呑に注いだ。

「あ、すみません。気がきかなくて」

「気にすることはないさ。今まで仕事をやってたんだ。のんびりしな」

朔姫はお茶を一口含むと朗らかに笑った。

「このお茶はお前さんが淹れたのかい？」

「いえ、私は、その……お茶を淹れられないことはないんですが、瑠璃みたいにくまく淹れられなくて」

白琳は恥ずかしくなり、思わずうつむいたが朔姫は豪快に笑っただけだった。

「気にすることはないさ」

「私、料理だけはどうしてもできなくて」

「まだ若いんだ。気にすることはないよ。将来の旦那だって、妻のおいしい手料理を食いたいだろうし。なああんただってそう思うだろう」
「そうですね、と答えようとして白琳はやめた。朔姫の顔が白琳ではなく、台所の入口に向けられていたのだ。」

「何がだ？」

答えたのは、急いで戻ってきたのか、髪をわずかに乱した翡翠だった。

「あんたもこの娘さんが作ったご飯を食べてみたいだろう？」

「いや……悪いが白琳の飯だけは無理だ」

翡翠はいつものように淡々とそう言った。

「あんたそういうこと言うと女の子に嫌われるよ。顔だけじゃ男はだめってことわかってるのかい？」

「翡翠様、そんなに私が作った料理は食べられませんか？」

白琳の声を聞いた瞬間、翡翠は明らかに動揺した。一見、いつもと変わらないように見えるが、白琳と翡翠の付き合いは長い。たとえわずかな変化でも白琳が気付かないなど、あり得ないことだった。白琳は動揺する翡翠をちらりと上目遣いで見ると、翡翠にだけわかるようにくすりと笑った。——付き合いが長い、というより何度も過ちを犯してきた翡翠が白琳の微笑みの意味を理解できないはずがない。実際、白琳が笑った瞬間、翡翠の指がぴくりと動いた。
「えっと、白琳、その……」

「別にかまいませんよ」

今度はきちんとした笑顔を作っていた。

「ところで急に帰ってきてどうしたんですか？妖獣はもう倒したんですか？」

「いや、まだだ。少しまずいことになつてな、瑠璃はいるか？」

「瑠璃なら私が頼んだ買い物に行きましたよ。瑠璃にしか頼めないもので、どこで買うのかはわからないので正確な瑠璃の居場所はわかりません」

白琳がそう言うと、翡翠はわずかに顔をしかめた。朔姫は白琳と翡翠の間に流れる空気が気まずいと思ったのか、台所を出て行ってしまった。

「瑠璃は裏の取引に行つたんだろう？」

「ええ。翡翠様は裏の取引をどこでやってるか知らないんですか？」
「商人の中には表の商売——芳家の場合は呉服屋だが、知つての通り、それとは別に裏取引をやっているやるもいる。一応裏取引だから人に知られちゃまずいだろう？取引方法や、その物、場所を知つてるのはどこの家でもだいたい店主とその後継ぎぐらいだ。芳家も例外じゃない。俺は芳家を継がないから、継ぐのは瑠璃だ。つまり、取引の詳細を知っているのは瑠璃と銀だけだな」

「そうですか。それは困りましたね。瑠璃がいないとまずいですか？」

「ああ。まあ瑠璃が戻るまでは俺達で何とかするが、瑠璃が戻ってきたら村に来るように言つてくれ」

「気を付けてくださいね。くれぐれも無茶はしないでくださいね？」

翡翠は白琳に背を向けると左手を軽く振って返事をした。

「早かつたな」

日が傾きかけ、もうじき夜になるという頃だった。ばさばさという大きな羽音が聞こえ、上を見上げると、天の助に乗った翡翠がいた。翡翠は、天の助が着地する前に地面に飛び降りると、桃華に言った。

「しばらくはこの状態でなんとかする必要がありそうだ」

「そっか、仕方ないね」

「ああ……？」

翡翠が返事をした直後だった。翡翠と桃華の視線が一斉に紅貴の背後に集まった。

「おい、どうしたんだ？」

「妖獣の気配よ！小物だとは思うけど、急いで行くわよ！」

桃華は脇差を抜いて走りさってしまった。

「紅貴、ぼんやりするな！俺たちも行くぞ！」

「うん！」

しばらくすると桃華が立ち止った。桃華の細い肩が細かく震えているのが紅貴にはわかった。

「桃華！大丈夫か？」

紅貴が声をかけると桃華が振り返った。その桃華の表情を見て、紅貴は言葉を失った。紅貴の予想に反し、桃華は、お気に入りの玩具を与えられた子供のような満面の笑顔だったのだ。

「見てみて！あのこ！かわい〜！」

本当に嬉しそうに桃華が言った。桃華が指をさした方向を見ると、そこにいたのは、確かに桃華が好きそうな生き物だった。

「あれは狐か？」

紅貴は翡翠のつぶやきを聞きながら狐のような生き物を見た。秩序の外では日が暮れ始めると妖獣が現れると言われているが、日が完全に沈む前に現れる妖獣は、下位の妖獣だという。日が暮れ始めたとはいえ、完全には暮れていない世界では夜ほど妖力が働いていないのだ。実際、今、目の前にいる妖獣のような生き物は、竜や朱雀といった上位の妖獣からはかけ離れた可愛らしい姿だ。

「ねえねえ、あの子欲しい！捕まえてよ！」

大きさは小型の犬くらいだろうか。フサフサの黄金の毛をもつそれは手足はなく、長い胴があるだけだった。ただし、顔は狐そっくりで、とても可愛い。

「おたく管狐か」

「妖獣を倒さずに捕まえられるのは紅貴だけだが、あんな弱そうなやつ捕まえる意味あるのか？」

「あるよ！だつて可愛いもん！ねえお願い、あの子捕まえて」

紅貴はもう一度管狐を見た。妖獣の中では小物だが、はたして今の紅貴に捕まえられるだろうか。

（まあ、あれぐらい楽につかまえられないと、妖獣使いとしてまずいつちやまずいんだけどな）

だが、『あの時』以来、妖獣使いの力を使っていない。

「紅貴なにしてるの？早くしてよ」

「……はい。」

紅貴は桃華に逆らわずに、返事をした

第三章 妖獣 5

妖獣使いは自分の力で妖獣を秩序の世界に縛り、その間にこちらの世界での名を与える。そうして初めて妖獣は妖獣使いのものになるのだ。

——名前って大切な意味を持つてるのよ。かつて紅貴にそう言った女性の声は真剣だった。透き通るような声で、淀みなくはつきりとした口調は今でもはつきりと覚えていいる。例えば、人。名を与え、その名を呼ぶことは、その人を支配することだという。どの国であれ、高貴な身分の人物に字が与えられるのは、元をたどれば、本名を呼ばれ、誰かに支配されるのを防ぐためという考えに基づいてのことだ。字を持つ者を字で呼ぶのが礼儀とされているのはその為である。ただし、人と妖獣ではわけがちがう。もともと秩序の外に住む者を力で縛るのは相手が小物であっても簡単なことではない。こちらの世界での名さえ与えられれば妖獣を使役できるようになるが、果たして今の紅貴にそれができるだろうか。

紅貴は翡翠と桃華の前に出て、管狐と対峙した。つぶらな瞳でこちらを見ているが、纏う気配は妖獣だ。日も沈みかけ、秩序の世界が、秩序の外の世界に浸食されかかっている。秩序の外の世界に住む管狐に有利だ——。

紅貴はその場から動くことができなかった。目の前で、洸国にとって大切な人が倒れている。最後に会った時よりも、更に顔色が悪くなっている。その人の死期が近いことを悟り、紅貴は必死に名を呼んだ。

死なないでくれ！

倒れたまま大切な人の口が動く。もはや声は出ていなかったが、何を言おうとしているか、紅貴には痛いほど伝わった。そう、それはきつと、紅貴の死を望む言葉だ。だが、この人が生きていなければ、

その望みを叶えることはできない。この人に生きていて貰わなければ望みを叶えることはできない……。洸国の想いを背負える人がいなくなったらこの先……

「紅貴、しっかりしろ！」

聞いたことがある声。そう、これは翡翠の声だ。紅貴は翡翠の鋭い声を聞いて、自分が膝をついたまま動けなくなっていることに気づいた。気づいた瞬間、洸国にとってかけがえない人の痛々しい姿が消えた。

（あれは幻覚か）

管狐は妖獣の中では下位に位置する。そんな管狐に喰われそうになっていた……。そして、今もこうして紅貴が何かを考えるだけで管狐が持つ妖気にのまれそうになる。

管狐をこちらの世界に縛ることに集中しなきゃ……！

紅貴は一瞬、軽く眼を閉じると、カツと目を見開いた。

「わあ！すごい！紅貴がきれい……！」

桃華は、紅貴の姿に感心してそう言った。さっきまでは確かに紅貴は力に圧倒されていた。管狐と対峙してすぐに膝をつき、その場から動かず、桃華がいくら声をかけても、その声が紅貴に届くことはなかった。まるで、桃華の声など聞こえていないかのように、いくら桃華が紅貴を呼んでも何の反応も示さなかったのだ。それが、翡翠がたつたひとこと言葉を発しただけで、紅貴は立ち上がった。

桃華は、横で腕を組んで立つ翡翠を見た。あの、翡翠の翠色の瞳には桃華と同じように紅貴の姿が映っているはずだ。比喻などではなく、黄金の光が狐に伸びている様子が。日が傾きかけた今、まるで月の光を纏っているようにも見える。紅貴の赤い髪と相まって、いつもの紅貴からは考えられないほど紅貴は綺麗だ。そして、その紅貴を引き出したのは翡翠の声だと思うと、桃華は考えるのを止められなかった。

（やっぱり、翡翠は『血筋』には逆らえないんだよね。本人は否定

するだろうけど)

そのことを知ったのは偶然だった。おそらく翡翠は桃華が知っているとということを知らないだろう。そのことをこれからも言いつもりはないが、桃華は翡翠が置かれた境遇を現実的に思い知らされた気分だった。

自分の力で無理やり管狐を縛ってはいいるが、限界が近かった。まるで、細い糸が今にも千切れそうになるような頼りない感覚に、意識を手放したくなる。

——名を与えなきゃ

だが、秩序の世界での名を与えようとすると、管狐は抵抗してくる。しかし、そのまま管狐にされるがままにされるわけにはいかなかった。管狐の一匹も捕まれないとあつては、妖獣使い失格だと感じていた。たとえ、『あの時』以来力を使っていないとしても、管狐を捕まえる動機を桃華の強引さのせいにしても、本当のところ、管狐に対峙した動機は紅貴の妖獣使いとしての矜持だった。

(汝に名を与える『——』)

名を与えられたかはわからない。紅貴の意識はそこで途切れた。

「紅貴！」

紅貴が倒れ、桃華が心配そうな声をあげた。そんな桃華をみて、翡翠はふうつと息を吐くと口笛を吹く。すると、いつものように黒天馬が翡翠の横にやってきた。なんとなくだが、不機嫌そうな顔をしていると翡翠は思った。

(やれやれ)

翡翠は天馬の首の辺りを撫でた。桃華のテンテンもそうだが、天馬は首を撫でられるのを喜ぶのだ。案の定、首を撫でられた黒天馬は、キューと気持ちよさそうな声を出した。翡翠は黒天馬の期限が直ったことを確認すると、倒れている紅貴の横にしゃがみ、紅貴を抱えた。

「こいつ、以外と重いな」

「そんなこと言ったら紅貴が可哀想だよ」

「んなこと知るか。運んでやってるだけ感謝して欲しいくらいだ」

「それもそうだけど……」

「俺はこいつを白琳のところ連れていくから桃華はここで待つてろ」

翡翠は紅貴を前に抱えて天馬に乗ると、桃華にそう言った。

「もうじき日が沈む。気をつけろよ」

「うん、翡翠もね。念のため確認するけどこの村を襲ったのはさっきのかわいい狐さんじゃないよね？」

「ああ多分な。あの狐の力では村を破壊できない」

「今日、来るかな？村を襲った怖い妖獣さん」

「どうだろうな。でも、あれだけ騒いだんだ。もし紅貴以外の妖獣使いが呼んだ妖獣が村を襲ったなら、来るんじゃないか？もしそうなら、あつちにしてみれば邪魔者はさっさと排除したいだろう」

「……いざとなったら修理費は半分ずつだよ？」

桃華がわずかに首をかしげてそういうのを聞き、翡翠は思わず軽く笑った。ここに他の者がいたところで、桃華が言った言葉の意味はわからなかっただろうが、翡翠にはわかりすぎるほどわかってしまったのだ。もっとも、実際に『修理費』を半分ずつ出さなければならぬ状況になれば、金銭的な問題を抜きにしても、こんな風に笑ってはいられないだろうが。

「じゃあ行ってくる」

「うん、紅貴を落とさないように気をつけてね」

天馬が飛ぶとあっという間に桃華の姿が小さくなった。ここにもう一度戻る頃には完全に日が沈んでいるだろう。それまでに瑠璃が戻らなければ覚悟しなければならない。

第三章 妖獣 6

馬に揺られながら、少年はぼんやりと考えごとをしていた。旅を始めてどれくらいの日日経っただろうか。最初は絶望的だと思っていた、知らなかったの現実にも慣れてきていた。悲しい、ひどいと思うことには変わらなかったが、どこか冷淡な自分がいる。毎日のように非情な現実を見た。洸の民が食うに困り、幾人もの人が死んでいくのを見た。それも、ただこの国が貧しくて民が困っているのではない。

少年、この時紅貴と名乗っていた少年は、同時に、この国の貴族は食うに困るところか、一般的な洸の民では名前も知らないような高級食材を食べていることを知っていた。いったい誰がこんな国にしたのだろうか。それを思うと、紅貴は誰にもぶつけられない怒りと苦しみで気が狂いそうになった。そんな時、見守っていてくれたのは暁貴という男だった。大柄で、一見すると、その体格だけで圧倒されそうだが、人懐っこそうな柔らかい笑みは、紅貴の心の支えだった。

「寒くはありませんか」

暁貴が優しい声で聞いてきて、紅貴は頷く。

「うん、大丈夫」

本当は嘘だった。手をぎゅっと握って、寒さに耐えるのが精いっぱいだったのだ。だが、紅貴が今着ている服だって、洸国に住む他の人に比べればましだった。温かい厚手の上着を着ているなど、洸国では考えられないことだ。薄っぺらい布を服の上に巻きつけて、それで寒さをしのぐのが精一杯。それすらもない人もいるのだ。それなのに、わがままを言うことはできない。

「着きましたよ」

スラリと背の高い男、紅翔が紅貴にそう言った。暁貴に馬から降ろされ、紅貴は紅翔を見上げた。元々、背の割には細身で肌が白か

つたが、旅を始めてからは病的なまでに更に青白くなっているのではないかと紅貴は思っていた。心なしか、以前よりも痩せたような気がする。

「どうしました？お菓子が欲しいと言ってもここにはありませんよ」
「そんなこと言っていないだろう！お前は暁貴の性格を見習ったらどうだ！」

「お言葉ですが、その言葉はあなたにふさわしいかと」

そうにつこり笑った紅翔を見て、先ほどまで、この男を心配していたことを紅貴は後悔した。

「紅翔の馬鹿野郎」

「その馬鹿野郎に、以前泣きついたのは誰でしたっけ」

「二人ともおやめください。こんなくだらないことで喧嘩など恥ずかしい。紅翔様、目的地はここで良いんですか？」

暁貴はそう言つて、目の前の家、というよりは木片と石を重ねてきただけのような小屋を見た。

「ああ。ここに私の息子がいるんだ」

「本当か？紅翔、良かったな！」

紅貴がはしゃいでそう言つと、紅翔は静かに笑っただけだった。

実際、紅翔が息子の顔を見たのはこれが最後だった。

（夢？）

紅貴はぼんやりと目を開けた。はつきりと内容を覚えていたわけではないが、なつかしい夢を見ていた気がする。懐かしい夢なのに、なんとなく気分が悪いのは、きっと、あの頃の夢だったからだろう。紅貴は体を起こそうとしたが、なぜか力が入らなかった。

「お目覚めですね」

「白琳」

「無理に起き上がらなくて結構ですよ。必要なものがあれば持ってきますから」

「うん、ありがとう。俺いたいどうしてこんなことになったんだ

？」

管狐を捕まえようとしたところまでは覚えている。名を与えようとして、……果たして名をあたえられたかどうかは覚えていなかった。ただ、いますぐ意識を手放してしまいたいような、頼りない感覚だけははっきりと覚えていた。いったい何がおこったんだろう。しかし、それを考えようとすると頭が痛くなつた。まるで全身で何かをやるうとする、たとえそれが、ただ何かを考えるとただけでも拒否しているようだった。ただ眠ってしまいたい……。どうしようもなくダルい、そんな感覚だった。まるで幼いころに熱に浮かされた時のようだ、紅貴は思った。

「翡翠様がここまで運んだんですよ」

「翡翠が？」

「ええ。翡翠様は妖獣使いの力を使いすぎたんだろって言うてました。私の医者としての見解もその通りです。まだ疲れているようですし、ゆっくり眠ってください。まだ瑠璃は帰ってきていませんが、私は隣の部屋にいたので何かあったら呼んでくださいね。ではおやすみなさい」

「うん。おやすみ」

紅貴が再び目を閉じると、あつという間に眠りに落ちた。

日が沈み、夜になった。予想はしていたが、昂揚感にも似た力の高ぶりを翡翠は感じた。それを無理やり抑えようと歯を食いしばるが、ほとんど無意味だった。

バキッ

突然のことだった。翡翠の後ろに立っていた気がまっぴたつに割れた。翡翠は思わず舌打ちをした。少し離れた所に立つ桃華を見ると桃華は右手で、いつもより強く刀を握っている。

（あいつも多分余裕無いな）

現に、桃華を中心に風が渦巻いていた。花びらも一緒に舞い、一見するときれいな光景だが、翡翠にも桃華にも『必要な物』がない

今、喜べる要素はまったくない。

その時だった、翡翠は何かを感じた。気を抜くと凍らされてしまいそうな、禍々しい何か。人でないものの気配。

「来る」「来るわ」

翡翠と桃華の声が重なり、二人は同時に空を見た。暗い夜の闇に、白い煙が現れた。その中心から出てきたのは……

「竜？」

桃華はそう言って、妖艶な、と言ってさしつかない笑みを浮かべた。すでに、天真爛漫という言葉が似合う16歳の少女の姿はない。夜の闇に混ざりそうな黒く堅そうな皮膚を持つ竜を見る桃華の姿は、普段の桃華とは似ても似つかない。顔の造形は変わっていないはずなのだが、表情には、普段の桃華のカケラすら残っていないように見える。普段の桃華はあんな笑みは浮かべはしないし、いつもの桃華には妖艶などという言葉は当てはまらない

（面白い）

翡翠は力の高ぶりに身を任せ、竜を睨みつけた。刺すような冷たい妖気を感じたが、それがなぜか心地良い。

「面白そうだな」

「フフ……そうね。」

桃華はクスリと、不気味な笑みを浮かべると、脇差ではない刀を勢いよく引き抜いた。刀を縛っていた赤い紐が解け、はらりと地に落ちた。と同時に、桃華が持つ刀からは、まるで炎の揺らめきのような紫色の光が発せられた。その光に共鳴するかのように、村にわずかに残っていた民家が、音をたててガラガラと崩れ落ちた。

「桃華、修理費は割り勘ってこと忘れるなよ」

「フフ……分かってるわ」

翡翠は舌舐めずりをし、拳をならした。バキバキと音をたてて、木が倒れる音がしたが、どうでも良かった。理性では、このまま行くとは大変なことになると分かっていたが、翡翠の中で湧き出る感情

を抑えるには至らなかった。

（この先どうなるうとするか。あいつを殺ればそれでいい）
翡翠はにやりと笑い、竜に向って駆け出した。

トントン

扉をたたく音が聞こえた。こんな夜に来る人物は限られている。きっと、あの店の主人か娘だろう、と思っていると、女の声が聞こえた。

「月が輝く夜に取引を」

決められた日に、戸を2回叩き、決められた言葉を言う。これは、取引相手が来たことを示していた。この若い娘の声は芳家の娘だろう。男は煙管を置いて、戸をあけた。

「入れ」

「失礼します」

予想通りだった。大きな青い瞳の快活そうな綺麗な女は、芳家の長女、芳 瑠璃だった。

「取引か？」

「はい。草を買いに来ました」

草とは、この店で取り扱っている、羅雪ろせつという名の花の別称だった。羅雪は麻薬の原料になり、嘉国では、それを育てることも、販売することも禁止されている。ただし、羅雪は薬の材料にもなるのだ。扱いを間違えればただの麻薬だが、非常に高度だが、たたく扱えば、薬になる。男は羅雪を麻薬として扱うような者に売る気はなかった。きちんと薬として扱ってくれる人物に渡す商人にしか売る気はない。つまり、よっぽど信頼できる商人にしか売らるつもりはないのだ。男と芳家は長い付き合いだ。何代にも渡る付き合いがあるが、芳家は店を継ぐ者にしかこの店の存在を知らせていない。そういった決まりを守り、しかも代々守らなければいけない倫理観も一緒に伝えられるからこそ、男は芳家を信頼することができる。

「いくつ欲しいんだ？」

「袋3つ分お願いします」

明瞭な声でそう返ってきた。男は羅雪を袋に詰めながら、もう一度瑠璃を見た。芳家の長女、瑠璃は、商人にしては純粋な娘だと男は思っている。街の噂を聞く限りでは、子供のころから両親の手伝いをし、利発な子だと言われていた。今では、綺麗に成長し、嫁に欲しいという声が多数あるという。ただし、実際は瑠璃が店を継ぐため、瑠璃が嫁ぐのではなく婿に来てもらうことになるだろう。

（銀も、瑠璃がこんなに綺麗な娘に成長して喜んでいるだろうな）

最近では会っていない、現芳家の店主、銀のことを思って笑っていると、男は瑠璃に不思議そうな顔で見られた。

「おっと、すまないね。女だてらに家業を継いで偉いと思ってたんだ」

「これは私が望んだことです。本当は長男が継ぐのが普通だと思いますが、家の馬鹿兄は子供のころから家を継がないって言うたので、私しかないと思ってたんです」

そう、にっこりと笑う瑠璃を見て、この娘は本当に良い子だと、男は思った。確かに、瑠璃には一人の兄がいる。普通は長男が家を継ぐものだが、おそらくその兄は、好きなことをやって過ごしているのだろう。その兄の代わりに家を継ぐとは、本当によくできた娘だ。

「支払いいつもの方法でいいですか？」

「ああ。気をつけて宿にもどるんだよ。今日はこの街の宿に泊まるんだろう？」

「はい。もう門は閉まっていると思いますので」

おじさんも体に気をつけて元気で行ってくださいね、と言い軽やかに笑うと、瑠璃は店を出て行った。

店を出た瑠璃は羅雪を大きな袋に詰めた。もうすっかり夜だ。気持ちの良い夜風が吹いているが、瑠璃はなぜか不安な思いにかられ

た。

（何か嫌な予感がするのよね）

といつても、この街の門は閉まっており、今からでは紅貴たちがいる神社に戻ることはできない。

（仕方ないわ。開門したらすぐこの街を出ようつと）

白琳は何となく夜風に当たりたくなり、外に出た。外では夕食を食べたばかりの冬梅と清風が剣の打ち合いをしている。本当に剣が好きなのだろう。いや、好きというよりはそれだけ真剣だというべきか。白琳がまだ寺子屋に通っていたころ、同級生の男の子は、休み時間になると剣の打ち合いをしていたが、それとは比べられない技量だと、剣をやらない白琳にもはつきりとわかった。

「思わず見とれてしまいますね」

白琳の横で座って見ていた亮がそう言う。

「はい。なんだか綺麗です。きつと素敵な武官になりますね」

そんなことを思っていると、上空からバサバサという翼の音が聞こえた。見上げると、見慣れた黒い天馬がいた。翡翠の天馬、天の助だ。天の助が下に降りてくるにつれて、そこに乗る翡翠と桃華の姿がはつきりと見えた。いや、正確には乗っているのは翡翠で、桃華は片手で翡翠に抱えられていた。白琳は、思わず手を口に当てた。見ただけでわかる。――まずい……！

天の助は白琳の前に着地すると、膝を折った。わずかな振動だったが、翡翠に抱えられた桃華は意識がないのか、人形のように揺れた。「怪我はないようですけどあれは……」

翡翠は桃華を抱えながらゆっくりと天の助から降りたが、その直後、翡翠は膝をついた。

「翡翠様……！」

「俺は……途……中で……気付いたが……桃華はだめだった。止められなくて……済まない」

翡翠は自分の刀で体を支えてそう言った。翡翠も桃華も怪我はし

てない。それなのに、あの、翡翠が息も絶え絶えになり、桃華が意識を失う状況。何が原因か、大体想像つく。いままでそれに気付かなかった自分が憎い。助けられる自信はあるが、もっと早く気づいていれば……。

「翡翠様、無理して喋らないください！桃華様は必ず助けますから！それと、翡翠様もおとなしく休んでください！」

しかし、そんな白琳を無視し、翡翠は桃華を白琳に預けると再び天の助に乗ろうとした。しかし、刀を支えになんとか立っている今の状態の翡翠では落馬するだろう。それに、それ以前に今の翡翠と桃華の状況はまずい。だいたい、こうして会話できる状況も奇跡だと、白琳は思った。

「無意味な傷を増やす気ですか！？おとなしくしてください！神社に戻りますよ！言うことかかないなら、どんな手段を使っても言うことを言ってもらいますよ！」

「駄目だ！……刀が……桃華のか……たなが、村に置き去りになって……うつ」

突然、翡翠が倒れたかと思うと、気絶した翡翠が横にいた亮に抱えられていた。白琳自身も良くやることだが、翡翠を無理やり気絶させたのだろう。

「ご無礼をお許ください、麒麟様。麒麟様の扱い方は覇玄様から聞きましたので責めるならそちらをどうぞ」

亮はどこか困った笑みでそう言った。剣の打ち合いをしていた冬梅と清風も異変に気づいたのか、やってきた。

「このお兄ちゃん、あの、麒麟様なの？俺、どうしよう……」

清風の気持ちを察したのか、亮が優しい声で言う。

「麒麟様に頼んだのが清風でも、麒麟様がこうなったのは清風のせいじゃない。それに、こうなった原因は正確には妖獣のせいでもないよ。君の知っている通り、二將軍は妖獣にやられたりしない。それよりも、尊敬する二將軍様を助けたいなら、白琳の言うことをよく聞いて、手伝ってあげなさい」

亮はそう言つて翡翠を、冬梅に預けた。

「冬梅、麒麟様を連れて白琳殿を、聖刀がある部屋にご案内しろ。状況が状況だから、覚信も部屋を勝手に使つても許してくれるはずだ」

「亮さん、ありがとうございます」

白琳はお礼を言つた。

「鳳華様の刀は、霸玄に私から連絡して何とかしてもらいましょう」
白琳が頷こうとしたその時だった。突然、白琳が聞いたことのない声が聞こえた。低く、貫禄のある声は、不思議とよく通る。

《心配はいらない。そなたの背に背負うその娘が覚めるまで、刀は私が預かつていよう。主人が世話になつてゐる礼だ》

声のした方を見た白琳は、言葉を失つた。そこにいたのは、黄金の目をもつ、深紅の竜だった。

第三章 妖獣 7

白琳は空を見上げた。暗い夜の闇のなかで、紅く輝く竜を、綺麗だと白琳は思った。僅かにあいた口からは鋭い牙が覗き、鋭利な爪はなんでも引き裂いてしまいそうだったが、それでも決して怖いとは感じなかった。人の瞳ではありえない黄金の瞳も、どこか優しいと白琳は思う。

「優しい竜さんなんですね。きっとあなたの主人も素敵な方ですね」
《とんでもない！！私の主人は、私が力を貸すに値しない人物だ！本来は！でも、私の父上が、あれをわが主としたから仕方なく……！》

姿は美しくとも、急に子供っぽい態度を取った竜に対し、白琳は思わず笑った。

「あなたの主は一体どなたなんですか？」

《そなたたちが紅貴と呼ぶ餓鬼だ！まったく……あれはまだ私を使うには力が足りないというのに！あんな餓鬼が私の主など、世も末だ！》

「それでも、その紅貴さんの友人の私を助けてくれたあなたはやっぱり優しいですね。ありがとうございます。紅貴さんが早くあなたの主として恥じない方になってくれると良いですね」

そう、にっこりと笑顔を作って白琳が言くと、竜は慌てたように言う。

《そんなこと、私は望んでいない！それより、そなたが背負っている娘、早く何とかしないと大変なことになる！それから、翠の眼のあの男もな！》

そう言って竜は去ってしまった。竜が去ったあとには光が残り、それだけがそこに竜がいたことを示していた。竜そのものの姿はあつという間に消えてしまった。その光を見ながら白琳は 背中に背負う桃華の重さを感じていた。体重が軽いはずの桃華だったが、意

識をなくしている桃華は重く感じる。怪我をしていない桃華がそうなる原因など、白琳は一つしか思いつかない。白琳にしてみれば、怪我や病気よりも厄介なあれだ。おそらく、翡翠も同じ状態だろう。

「……紅貴さんは助けました。桃華様も翡翠様も絶対助けますから、桃華様の刀お願いしますね？」

白琳は笑顔を消して、今はいない竜に語りかけた。

白琳は横たわる桃華を見ながら、壮家に伝わる書物の中身を思い出していた。あまり知られていないが、人は何も心臓や肺といった物理的な機能だけで生きているわけではない。一般で知られているところの生命力のようなものがあり、それもあって人ははじめて生きていくことができる。個人差はあれど、生命力はどんな病、怪我があろうとも誰もが持つている。生きている限りは。怪我や病は治せても、生命力に関しては、医者であってもどうしようもない領域である。壮家の本『壮家解体書』にはそのようなことがもっと難しい単語で複雑に書かれていたが、白琳にしてみればそういうことだった。

本来、ここでいうところの生命力は 弱まることはない。医者であっても生命力を強めることはできないが、代わりに普通に生活していれば弱まることもないため、本来気にしなくて良い領域である。そもそも、その生命力のようなものに関しては、まだ分からない部分が多いのだ。ただ、一つはつきりしてるのは、本来、死なない限り、もしくは死ぬ直前以外弱まることのないはずの生命力が削り取られる例外があるということだ。

（こうなるまで力を使うなんて……）

桃華と翡翠は本来、人の 力では使えないはずの力を使うことができる。もちろん、桃華と翡翠の二將軍としての強さはそんなものに頼ったものではなく、表向きは武術においてもあらゆる戦略においても他の武官よりも抜きん出た才によるものだ。白琳は思ってい

るが、それでも力があることは事実である。桃華も翡翠も、特に桃華は、そのことを公にするのを嫌っているため、白琳はそのことは特定の人物にしかはなしてはいないが、白琳はその力のことをよく知っていた。そうでなければ、いざという時に桃華と翡翠を助けられないからだ。

桃華と翡翠の力は正確には同じではないが、似たものだ。その力は本来人が使える力ではない。力を人が使いすぎると、その見返りは生命力に来る。ある一定の範囲を超えると、力は人の生命力を削り取ってしまうのだ。白琳はそれが怖いと思う。紅貴のように、少し力を使いすぎた程度であれば問題ないが、生命力が減ることが怪我や病より怖いのは、それが尽きれば確実に死ぬからだ。更に、生命力が大幅に減り始めると、人が使えないはずの、桃華や翡翠が持つ力は、人の物理的な機能、例えば臓器などもをも傷つける。幸い桃華は人の物理的な機能を傷つけるほどには力を使っていないようだ。それでも、こうして横たわる桃華を見ると、初めて桃華に出会った時のことを思い出してしまう…… 白琳は、軽くため息をつく、気持ちを切り替えようとした。あのさっき診た馬鹿な男とは違い、生命力が減っているだけだ……と、白琳は自分に言い聞かせた。あの、かつての絶望的な状況の桃華を助けたのだから、それに比べれば助けられないはずはないと。白琳は、桃華の手を握った。人の生命力を補う唯一の力、癒しの力を使うために。

本来、特定の国の王位継承者しかつかえないはずの力を白琳は使う。王位継承者ではない白琳がその力を使えるのは、素質を持つていたのと、ある犠牲を払ったから。その素質と犠牲のおかげで、現在王位を継承している嘉国の王、龍孫や、恵国の帝よりも強い癒しの力を白琳は得た。白琳は桃華の手を握りながら淡い笑みを浮かべる。

（……あの時の私の決断間違ってなかったわ。それで今もこうして人が救えるのなら）

女に自覚はなかったが、そこに人がいれば思わず息をのんだだろう。女の美貌に。肩より少し上で切りそろえられた艶やかな黒髪は、もし触れることができるのならそのまま手から滑り落ちてしまいそうだったし、切れ長な瞳は知性を感じさせ、何よりも特徴的なのはその瞳の色だった。深海のような深い蒼の瞳はどんなものであれ見通してしまいそうな力強さがあつた。ただし、その女が人であるかは疑問である。白い着物をきたその女は半透明だったのだ。女は湖北村の麓の神社にいた。そこで眠る嘉国の二將軍の一人、桃華の寝顔を見て、今度は、文字通り壁を通り抜けて、女にしてみれば糞餓鬼、もとい翡翠の顔を見にやってきたのだ。

「香蘭……？」

寝台の上で体を起こしていた翡翠がつぶやくように言った。その声にいつもの覇気はなく、どこか弱々しかった。もともと、香蘭が翡翠に会う時は、こういうときばかりのような気もするが。

「嫌な予感がしたから来てみれば、散々だな、馬鹿者」

「馬鹿者って俺のことか？」

「他にだれがいる」

香蘭は普通に話しているつもりでも、他社には冷たい印象をもたられることを自覚していたが、特に意に介さず、女性にしては低い声で言う。それに対し翡翠はいつものように溜息をついていた。

「で、なんでお前がここにいるんだ？」

「年長者にお前なんて、なんて言い草だ。私に実体があつたら殴つてるところだな。幽体離脱してきたんだ。嫌な予感がしたからな。直接様子を見に行けば大体のことはわかる」

「……相変わらず、とんでもない術者だな。あんたがかつて人だったとは思えない」

「言っておくが瑠璃も嫌な予感がしたらしいぞ。さすがは私の後継者と言ったところか？明日朝一番で、村に戻るらしいな」

「瑠璃が……な……ゴホッ」

翡翠は言葉を言い切る前に、咳きこんだ。口に当てられた手を見

ると指の隙間から鮮やかな赤い鮮血が溢れ出ていた。どうやら喀血したらしいが、香蘭は驚かなかった。翡翠が何をやったか分かった香蘭にしてみれば、これぐらいは当然だろうと思っていた。

「……くそ……。これじゃ……。ゴホッ、ガキの頃と……。一緒じゃねーか」

そう言う翡翠は、彼にしては珍しく本当に悔しそうだったが、香蘭にしてみれば、翡翠の言うガキの頃の方がよっぽど現実を見ていたのではないかと思う。もっとも、あの頃を否定したくなる気持ちもわからなくはないのだが。

「今回は調子に乗りすぎたな？馬鹿者」

少しだけ笑ってそういうと、しばらくは黙っていた翡翠がバツが悪そうな表情で言う。

「……否定はしないが、桃華はもっと調子にのってたぞ。あいつはどうなった」

香蘭は呆れてため息をついた。

「あの娘も調子に乗ってたが、お前よりは無事だ」

「……あれだけ調子に乗ってたのに無事って……」

「あの娘の血筋を知ってるだろう？あの娘の力が弱まっているといっても、お前とは違う。あの娘ならあれだけやって無事でも不思議ではないな。……血筋は否定できないものだ。そう思わないか？」

「……それは俺に対する当て付けか？厭味か？」

「お前がそう思うなら両方じゃないか？」

香蘭は笑みを浮かべてそう言った。

「……ひとつ言わせてもらえば、俺は今となっちゃ血筋なんて関係ないと思っている」

「ふん」

翡翠が言ったことが本心だとすれば、翡翠に限って言えば無責任な発言だと、香蘭は思う。しかし香蘭は翡翠の何倍もの時を生きていた。厳密には生きてきたのとは違うが、似たようなものだ。そん

な香蘭にしてみれば、翡翠の言葉が明確には本心ではなく、本心を隠すための言い訳だということは明白だった。そこを抉っても良かったのだが、さすがに可愛いそうだと思い、辞めた。

「それはそうと、あんたに聞きたい…… ことがある。…… 内と外の境界…… ゴホッ」

一度は落ち着いた翡翠だったが、再び激しくせき込み始めた。

「やっぱり、力を使いすぎだな」

「う…… るせえ、ごほっ」

「こつちでも内と外の境界の破壊については調べておく。お前とあってほしいの事情はわかったが、気になることがあるからな行動範囲は限られてるが、ほっておける問題でもないからできる限りで調べる。で、そろそろ戻らないと私の存在が消えるから戻るが、白琳だけは呼んでおく。せいぜい休むんだな」

「おい……！」

「白琳がいなかったらどうなってたんだろうな。あと、ここが嘉国でよかったな。医療が進んでいない国、例えばここが…… これから行く洸だったらお前は死ぬかもな」

嘉国では、どんな硬さ、形にも変えられる貴重な石、軽玉をすべて、注射や点滴といった医療用具の材料として使っている。軽玉でしかできないからだ。隣国、恵でもそれは同じだが、洸国では違う。わずかな軽玉は洸国の官吏や貴族が私腹を肥やすために使われているという。そのため、洸国の医療は崩壊しているといっても良い。まともな治療を受けられるのは所謂上流階級と呼ばれる人々だけだ。香蘭はふわりと宙に浮いて、翡翠を見下ろす。言いたいことを遠まわしにいったただだが翡翠なら多分察するだろう。こちらの忠告を聞くか分らないが。香蘭はそのまま帰るべきところに戻ろうとしたが、ふと言いたいことを思い出し、言葉を付け足す。

「あと、惚れてる女を心配させるもんじゃない。ましてや命の恩人でもある女をな」

戻る直前に、呆然とする翡翠の姿が見えたが、それは香蘭の予想

通りの姿だった。

第三章 妖獣 8

紅貴が目を覚ました頃、日が高く上り、昼近くになっていた。昨日は体に力が入らず、起きているのも辛かったが、よく眠ったせい、すつきりとした気分だった。まるで昨日のことは嘘のようだ。井戸の冷たい水で顔をあらった紅貴は、すっかり目が覚めたていた。外との仕切りがない回廊を歩いていると、春の温かい風が通り抜け、気持ちが良い。

「紅貴さん、おはようございます。といつてももう昼近いですけど」
「ああ白琳おはよう。昨日はありがとうな」

「いえ。ところで紅貴さん朝食まだですよ？良かったら私とどうですか？」

「うん、食べる。丁度お腹がすいてたんだ」

「朔姫さん……ええと、湖北村の孤児院で清風君の母親代わりになつていてる人が作ってくれた残りがあるはずです」

白琳と話しながら 回廊を歩いていると、外に向かって足を投げ出して座っている清風がいた。

「清風、おはよう」

「おはよう」

外では大きな男が、元気になった子供たちの剣の稽古をつけていた。幼い子供たちの剣筋はまだ未熟だったが、それでもとても楽しそうだった。それを教える男も嬉しそうだった。しかし、それを見る清風の表情はどこか暗かった。

「清風元気ないな、何かあったのか」

「別になんでもないよ。ただ、麒麟様と鳳華様が心配なんだ」

「翡翠と桃華……？」

清風はこくりと頷く。

「あの二人なら大丈夫ですよ。頑丈ですし」

白琳はにっこり笑って言うが、清風の表情は暗いままだった。

「二將軍に来てほしいと思って、本当に来てくれたことには感謝してるんだけど、それでもし……」

「何ごちゃごちゃ言ってるんだい」

突然大きな声がし振り返ると、腰に手を当てた中年の女がいた。

「朔姫さん」

清風は驚いた様子で言った。紅貴もびっくりしていると、朔姫は笑った。温かい笑顔だ。

「清風が麒麟様と鳳華さまのことを心配するのも分かるけどね、そんな暗い顔してたって仕方ないだろう？お医者様も大丈夫って言うてるんだ。あんたはそんな落ち込んでいないでほかの子供たちと一緒に冬梅に稽古付けてもらったらどうだ」

稽古をつけていた男の名前は冬梅というらしい。清風に気づいたのか、冬梅は手を振る。

「おい、清風も来い」

「そうだよ、清風も来いよ！何なら剣の勝負、俺とするか？負けるのが嫌なら逃げたっていいんだぜ」

冬梅に続いて、清風と同じ年頃の少年の言葉も続く。

「だれが負けるかよ！俺、お前なんかに負けたことねえぞ！今行くから待ってる」

清風は、ひょいっと回廊を降りると、軽やかに駆けだした。

「さてと、私は洗濯でもやりに行こうかね」

朔姫はそう言うと、歩いて行った。

「ところで、白琳、翡翠と桃華に何かあったのか？」

「あの二人は少し調子に乗りすぎたので、今は寝込んでます」

「え！？大丈夫なのか？」

詳しくはわからないが、翡翠と桃華が寝込むぐらいだ。大変な状態のはずだ。しかし、驚く紅貴に対して白琳は淡々と言う。

「昨日、私が二人を助けましたから心配しないでください。ただ、

あの二人、特に翡翠様は当分の間使い物になりませんが」

「使い物にならないって……」

「本当は慶とかの、設備が整った都市で休ませたいんですが、あの二人が馬に乗るなんて絶対に無理ですし、仕方ありませんね。あ、あの、翡翠様は使い物になりませんし、桃華様も寝たままでですが、大丈夫ですから安心して下さいね」

「うん、わかった白琳がそう言うなら信じるよ。でも、二人がそんな状態になるなんて、俺が昨日、寝た後何があっただ？」

「妖獣のせい……いえ、わざとらしい嘘は良くないですね。……何があつたか、本人からは聞いていませんが、想像はできます。でも、もしその想像が当たっていたら、私からは言えません。……知られることを嫌がるでしょうから」

そう、無表情で言う白琳の姿を以前、見たことがある気がした。最近のこと、そう、それは靖郭の宿で、紫色の光が白琳の手に吸い込まれるのを見て、それを白琳に聞いた時の表情だ。だとしたら、聞いてはまずい、そんな気が紅貴はした。気まずい沈黙が流れ、どうしようかと困っている、聞きなれた明るい声が聞こえた。

「白琳、紅貴、おはよう。さっき村の人から、あの馬鹿兄と桃華が倒れたって聞いたんだけど、大丈夫なの？」

「瑠璃、おはようございます。帰ってきたんですね」

「うん、開門と同時に馬に乗って戻ってきたの」

「あの二人でしたら大丈夫です。私が助けたから」

瑠璃は声をあげて、楽しげに笑った。

「アハハそうでしょうね。白琳に助けられない人なんていないもんね。それ聞いて安心した」

「それはそうと、翡翠様が、瑠璃が戻ったらすぐに湖北村に来てほしいって言ってましたから、村で何かあるのかもしれない」

「そっか、じゃあとりあえず村に行ってくるね」

「一人で大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫。じゃあ、さっそく行ってくるわ」

「気をつけるよ」

紅貴がいうと、瑠璃がにっこりと笑ってそれに答えた。

「さてと、さつき朝食を一緒につて言っただんですが、実は今、覚信さんに翡翠様と桃華様を看てもらってるんです。いつまでも任せられるわけにいきませんし、私は翡翠様と桃華様のところに戻ります」
「じゃあご飯持っていくよ。どこにいるんだ？」
「この建物を出ると、この建物に後ろにもう一つ建物があるんです。そこにいますから、お願いしますね」
「うん、わかった」

紅貴は白琳の言われた建物に、白琳の分の朝食を運んでいた。食べやすくおにぎりにしたご飯と、朔姫が朝作ったという味噌汁。それに、紅貴が作った卵焼きだ。おにぎりも卵焼きも我ながら上出来だと、紅貴は思う。小さな建物ははいるとすぐに寝台の横で、布を絞る白琳がいた。

「紅貴さんありがとうございます」

「そこで寝てるのは桃華？翡翠は？」

「隣の部屋にいますよ」

絞った布を眠っている桃華の額に乗せた白琳が紅貴の横にやってきた。

「あら、おいしそうですね」

「おにぎりとお焼きは、俺が作ったんだ」

「紅貴さん料理できたんですか？」

白琳が驚いた様子で言う。そんなに、意外なのだろうか、一瞬思ったが、男のくせに料理をやるのは確かに変わっているのかもしれない。

「昔、厨房をのぞいていたら料理人の下働きに間違えられたことがあってさ、そのまま働いてたんだ。その後も、昔旅していた時に、料理する機会がある時は全部俺が作ってたんだ。一緒に旅してた人が料理まったくできなくてな」

そう、あの頃一緒に洗を見て回った二人は、料理がまったくできなかった。腕つぶしも強く、今思えば、賢い人物だったのだが、料

理は無理だった。鍋で何かを煮れば必ず焦がし、食材の原型を留めていないことも珍しくなかった。そんな二人に呆れて、料理は紅貴がやっていたのだが、普段滅多に褒めない男が、紅貴の料理を褒めていた。紅貴は当たり前のことを普通にやっただけだったのだが、野菜を切る紅貴の姿を見ながらすごいすごいと、子供のようにはいでいた。

「桃華と翡翠、ごはん食べるかな？食べれそうなら俺がお粥作ってくるけど」

「お二人ともまだ起きれないと思います。でも、二人が起きた時にはお願いします」

「うん、まかせて。あと、俺に手伝えそうなのが他にもあったら呼んで」

「はい」

と、白琳が頷いた時だった。外が急に騒がしくなった。村人の声、多分さっき聞いた冬梅の声が聞こえてきた。

「お前たち！この村にいったい何の用だ！」

「渡して欲しい子がいるんですよ」

「子供だと！？この村の子は絶対に渡さないぞ」

「白琳、俺、様子見てくるよ」

「ええ」

急いで建物を出て、声がしたほうを見ると、先ほどまで子供たちが剣を振っていた場所に、人ばかりができていた。剣をもった何人かの男をこの村の大人が囲っているのだ。その中には亮と冬梅の姿も見える。

「すぐに出せ」

剣をもった男がそう、喚いた。

「勝手にずかずか神社に入ってきて、人を渡せとは、ずいぶんとわかりやすい人攫いが居たもんですね」

こんな状況だというのに、穏やかな口調でそう言う亮の言葉を聞いていると、急に後ろに引きずられた。びっくりして振り返ると、

ひばったのは朔姫だった。

「私についてきな」

朔姫が小声で言う。ここは、朔姫の言うことを聞いた方が良いのかもしれない。

「あの、何があつたんですか？」

「あの礼儀知らずの男たちの狙いは、多分あんただよ。赤い髪の子供を探してるって言つてたからね。亮と冬梅がなんとかするまであんたは隠れなきゃ」

それを聞いて、思わず紅貴は立ち止った。靖郭で、翡翠が言ったことを思い出したのだ。翡翠は関所で紅貴を捕まえた偽役人には、本来行くはずがなかった湖北村に行くと嘘をついたのだ。結局湖北村に本当に行くことになり、その嘘は無意味になってしまったが、今この神社に来たのは、おそらく、紅貴を捕まえようとした偽役人の仲間だろう。

「朔姫さん、俺、あいつら倒しに行くよ」

「ちよつと待ちな！」

紅貴を捕まえようとする朔姫の手を紅貴は振り切る。

「俺のせいで神社が襲われるなんてやだよ！俺のせいなら、俺がなんとかするのが筋だろう」

紅貴は靖郭でもらった刀をぎゅっと握り、駆け出した。

「赤い髪の子供の子が欲しいっていいいますが、そんな子いませんよ。それに剣をそんな風に振りかざすなんて、恥ずかしいですね」

亮は喉元に剣を向けられいたが、腕をくんだまま朗らかに言った。さらに、頭の中では他のことを考えていた。

（麒麟様が湖北村を嘘に利用したって言つてましたけど、こういうことですか。まったく、人使いが荒い）

「じい！この村にいるのは分かつてるんだ！赤い髪の子供を渡せ」（まったく、もしこの村で妖獣騒動がなかったら本当に麒麟様はこの村に来なかったというのに……どうやら本当に麒麟様の単純な嘘

をに騙されているようですね。典型的な体力馬鹿が相手とは、面倒
だなあ)

「じじい、話聞してるのか!？」

「ああすみません、年ですからねえ。人の話を聞くのは苦手なんですよ」

亮がそう言つと、横にいた冬梅から苦笑いが聞こえたような気がした。

(それよりも、あの二將軍が珍しく計画的に動いている事件ということは、とりあえずは捕まえて、李京に送った方が良くかもしれないね。)

「申し訳ありませんがあなた方を捕まえていいですか？」

「何ほざいてるんだ! ! じじい! 状況分かつてるのか？」

「お前ら、亮さんを離せ! お前らの目的は俺だろう!」

突然紅貴の声が聞こえた。まるで、活劇の主人公のような台詞だ。さらに紅貴はその言葉を言った後、刀を抜いた。なかなかその姿も決まっており、本当にどこかのよくある話のようだ。亮はそんなことを思い敵に気付かれないように笑った。

(まあ、言葉に伴った実力があるかが問題なんですけどねえ。でも、やる気はあるようだし、やらせるだけやらせてみましょうか)

亮は、物語の英雄や主人公ではなく、助けられる村人の役を演じることに決めた。

第三章 妖獣 9

李京、煌李宮の中では、一目がつきにくい建物のひとつ、灰色の石で出来た建物の一室に漣はいた。主に煌李宮で働く官吏が法を犯した時に、尋問する部屋だ。官吏どうしの癒着を防ぐため、官吏の尋問をできる役人は、官吏の中でも優秀、かつ、誰がその権限を持っているかは他の官吏には知らされないものだった。本来、顔を隠して尋問をするものだが、恐らく、その必要は無いと踏んで、漣は顔を隠さなかった。

こういう尋問の際、不正の防止と尋問する管理の身を守るために、見張りとして、武官、それも鳳軍、麒麟軍の誰かが着く。鳳軍、麒麟軍は他の機関よりも独立性が強く、武官の中でも優秀な人物が選ばれているため、情報の漏洩が防げると考えられていたのだ。それに、もしも武官を尋問する際、尋問される武官より、こちらが強くなければ危険なのだ。

今回見張りをしているのは、駿だ。一応、可憐を文官に引き渡した時点でこの件に関しての駿の仕事は終わっているはずなのだが、わざわざ自分から見張りに名乗り出たのだ。それも、駿は確か、弄国関係のことを詳しく調べなければならず、その準備に追われているのにもかかわらず、だ。

（まあ、国益を損ねるような悪用はしないだろうが誰かを個人的にいじめる材料には使いそうだな。っていうか見張りやりたいって言ったのは絶対そのためだよな）

「漣、どうしたんだい？ ため息なんかついて」

「いや、駿だけは敵に回したくないなあっと思って」

駿は微かに笑みを浮かべて言う。

「俺より上手なんていくらでもいるよ」

「どうだかな」

「さて、そろそろ来るみたいだよ」

駿がそう言っていると本当にやってきた。

「可憐を連れてきました」

「ありがとう」

可憐を連れてきた武官——これも麒麟だ——から可憐を引き取り、駿はにこやかに答えた。

「可憐、そこに座ってくれるかい？」

「はい」

机を挟んで漣の前にすわる可憐の顔は青白かった。緊張と恐れが伝わってくる。駿はというと、それだけ言うと漣と可憐の間に立った。武官の官服をきて、彼愛用の、普通より大きい大剣を腰にさし、しっかりとした姿勢で立つ駿は見た目だけは職務に専念している。

（やっぱり、駿がいるとやりづらいよなあ……今日吐かせることがいじめの材料になるかもしれないと思うと……しかも、吐き出させる相手がこんな若い女の子だとなあ）

もちろん、漣は感情と職務を割り切ることができる。ましてや目の前の彼女はやってはいけないことをやろうとしたのだ。しかし、こういう、駆け引きに慣れていなそうな少女が目の前だと逆にやりづらい。漣は相手がそれなりにやり手で、そんな相手の矛盾を突いたりする方が、ずっと気が楽な気がしていた。

「えっと、まず、姓を教えてくださいるか？」

「姓ですか？……私は、孤児なので姓なんてありません。あつたかもしれないませんが、忘れました」

「本当に？君は確か能力を見込まれて煌李宮にやってきたんだよね？鳳華様の身の回りの世話が仕事だけど、煌李宮で仕事をするにはいろいろ礼儀作法をしないといけないだろう。鳳華様はああいうお方だから気にしないって言っても、やっぱり街で暮らすのとは違って作法とかあるし。そういうのをこんな短時間で、普通の孤児だった子ができるとは思えない。そういう学校に行ったらって言う経歴もないようだし」

「それは……」

可憐はさっそく言葉に詰まってしまった。

（なんとなく適当に言っただけなんだけどな）

漣はなんとなく、可憐を一方的に責めているような気になる。やりにくさを感じ、漣は軽いため息をついた。

（無意味なことをずっと言い続けても仕方ないし、さっそく鳳華にもらった情報を使わせて貰うか）

「……隣の恵国の華族、月宮家の人間だろう？月宮家の月宮可憐つきみやかれん」
「え……」

まさかばれているとは思わなかったのだろう。可憐は本当に驚いた様子で、言うべき言葉を見失っていた。

「華族っていえば一般的に言う貴族みたいなもんだけど、恵国のそれはちよつと違うよな。双竜国でもっとも古い歴史を持つ国でその皇族と近い中にある、恵国の中でも名家と呼ばれる月宮家の出身、そんな君がいたいなんて紅貴を捕まえようとしたのかな？君の仕事は恵国の皇族を助けることだろう。そんなことしたら、恵国の皇族の権威はどうなるの？」

月宮家は恵国の華族の中でも特に皇族を慕っている。漣にはわからない感情だったが、恵の皇族を守るとするのが月宮家が月宮家たる所以であり、誇りであるというのだ。それを知っていた漣は、そこを言えば可憐が自分の出身を否定することを忘れるのではないかと思ったのだ。そして、ていめいりよう実際その通りになった。

「私は挺兄……いえ、挺明稜様のためにやっただんです！それだけは誰にも否定させません……！これが挺明稜様のためだって言われたから！」

今にも泣きそうな顔だった。少し落ち着けさせようと声をかけようとしたが、可憐の声が続く。

「洸国の赤い髪の子供が、嘉国と手を組むために嘉に行くって……。もし、手を組んだら恵国に攻めて来るからって！」

「わかったよ。……少し、落ち着こうか」

挺明稜と言えば、恵国の皇子である。元々は第二皇子だったが、

何年か前に、皇位継承者だった第一皇子とその母親、祥玲しょうれいが亡くなり、今では事実上第一皇子と言っているいい人物だ。その母親、明汐めいせきは現在の皇后であり、元々は月宮家の出身だ。冷静に考えると、可憐は挺明稜の従兄妹にあたる。

「……可憐に紅貴を捕まえたら明稜様の為になるって言ったのは誰なんだ？」

「言えません！どんな罰でも受けるから……だから！！」

「そんなわけにいかないよ……そうだなあ、嘉国は洸と手を組んで、恵を襲うなんてことは起こらない。嘉国の王、龍孫様がやりもしないことを言われたとあつてはこつちも黙ってられないよ。可憐は、恵国の皇族を心から慕ってると思う。……だったら、俺に気持ちもわかるよな。誰が言ったか教えてくれないか」

漣は、そういうことに多少、罪悪感を感じた。恵国の皇族に対するそれと、嘉の王族にたいしてのそれは少し違う。恵国は、双竜国の中で最も歴史が古い国であり、皇族こそがその歴史の証である。一方で、嘉国ではそういった意識は薄い。もちろん尊敬している民は多いだろうが、恵とは事情が違つと、漣は感じていた。恵国では、誰よりも超越した存在であるが、嘉では必ずしもそうではない。元々の、何事もゆるい国民性と相まって、嘉では、王族は、超越した存在という意識は薄い。その代わり、嘉の民は、王族が幼少の頃より、この国のあらゆることを学び、文化、歴史、法に誰よりも精通しており、きちんと与えられた重い役目を果たしている点は尊敬していた。漣にとつては、王の性格を知っていることもあり、共に働く同志……は言いすぎだとしても、一緒に職場の、上司と部下のような関係に近いと感じていた。嘉と恵の違いを分かっているながら、恵国にとって、皇族がいかに大切な、を理解しているからこそ、ああ発言した。だが、そこまで考えて、漣は気づく。

（でも、話聞いていると、一般的な恵国の 民の感情というより、親しい兄弟に対しての感情に似てるのかな。さつき、挺兄って言いそうになつてたし）

「可憐、教えてくれないかな」

「……言えません。私に紅貴を捕まえるといった方も大切な方なんです。私が罰を受けますから、どうか……」

漣は再び溜息をついた。鳳華が、証拠はないが可能性が高い予想だと言っていたことを思い出す。漣も鳳華の予想であれば、話の筋が通ると思っていた。それをこちらから言うことは何となく気が引けたのだが、そうも言っていられないのかもしれない。可憐は嘘がつかないようだし、鳳華の予想が外れていれば分かりやすい形で否定するだろう。逆に、本当であれば可憐はわかりやすい形で動揺するはずだと予想し、少し気が重くなりながらも、そんな考えを悟られないように、静かに言う。

「間違えてたら謝るけど、それを言ったのって恵国の皇子で挺明稜様の弟君、檜悠様？」

「……何で……」

ぼつりと、そう漏らした可憐の声は、掠れていた。そんな可憐が少し可哀想だと、漣は思う。だが、可憐が紅貴にやろうとしたことはいけないことだ。そうは思っても、目の前にいるのは儚い少女の可憐だった。この状態の可憐にこれ以上話を聞こうとしても多分無理だろう。漣は、駿に目配せをするすると駿はこくりと頷いた。

「可憐、今日はこれでおしまいだ。……とりあえず、俺が言うのもなんだけどゆっくり休めよ」

駿が外で待機していた武官を呼び、可憐は部屋の外へ連れて行かれた。部屋には漣と駿だけが残る。

「厄介だねえ。檜悠様の母親って光宮家出身の遥春様だろ？」

「ああ」

光宮家は月宮家と同じ華族である。皇子の母親が同じ華族どうし、しかも本来継ぐはずだった皇子は、すでに死んでしまっている。双竜国では嘉であれ、恵であろうと洸だろうと、皇子の中で『証』があるものが王位を継承するものだ。漣はその証がどういうものであるかは知らなかったが、亡くなった恵国の皇子が、その証をもって

いたことは確かである。一応現時点での皇位継承権第一位は挺明稜らしいが、残された皇子でどうして皇位継承争いが起きても不思議ではない。残された皇子の母親の出自を考えると、余計にその可能性が高いような気がする。可憐は気づいていないだろうが、可憐は、皇位継承争いの道具にされた可能性がある。煌李宮での可憐の行動や発言を見る限り、月宮家の末っ子として大事に育てられたのだろう。ああいう場所の裏を知らないような危うさがあるように漣には感じられるのだ。檜悠に言われ、可憐がやったことは、月宮家の家名を貶める行為だ。可憐がやったことが知られば、月宮家出身の挺明稜の地位は危うくなるだろう。それに可憐が気づいて、檜悠のことを言ったとしても、檜悠が、もし本当に皇位継承争いをするような人物なら、可憐の言葉を証拠がないと言い、切り捨てるかもしれない。しかし問題はそれではない。

「俺はこれでも嘉国の官吏だから、恵のことを考える義理なんてない。だから、あっちの皇位継承争いがどうなるうと関係ない。普通にこっちで刑を受けてもらった後、恵に返せば良い」

「そう言いながら心配そうだけど……？」

漣は駿の言葉には答えずに話し続けた。

「……ただ、檜悠様のことも含めて恵に事情説明して、それが檜悠本人に否定されたら、嘉国が嘘を言ってるって言われるだろう。無理に恵と仲良くする必要もないと思うけど、それでも色々と面倒なことになる」

「そうだね。もっと色々調べて、慎重に動く必要があるそうだね。」

あとは、龍清様がもってくる情報に期待かな？桃華ちゃんは、他に何か知らないのかな」

「鳳華は知らないって言ってたな。あと、鳳華は、この件に関しては、翡翠は使い物にならないって言ってた。あんなきっぱり言うの珍しいから、驚いたよ」

「優しい桃華ちゃんならそう言うだろうねえ。まあ俺も、翡翠はこの件に関しては、使い物にならないと思うから、そこは桃華ちゃん

と同じかな。……俺は、桃華ちゃんほどやさしくないけどね。」
漣は駿の言った言葉の意味が理解できなかったが、聞いたところで駿は答えないだろうと思った。ただ、はっきりしているのは、駿が忙しく、二將軍も自由に動けないのなら、自分がこの問題を何とかしなきゃいけないということだった。

——同じ頃、湖北村の麓の神社では、紅貴が刀を抜いたところだった。

「亮さんを離せ！」

紅貴はそう、今の精一杯の子を張り上げて言い、亮のところへ向かおうとした。紅貴とて、剣に自信はないが、まったく使えないわけではない。一応、子供のころに稽古は付けてもらっているのだ。

紅貴は亮に刀を突き付けている男に刀を振り上げようとした。しかし、キンという、刃物と刃物がぶつかり合う音がしたかと思うと、亮に刀を突き立てている男とは別の男が紅貴の前に塞がった。

「うわぁ!？」

男は紅貴に向かって次々と剣を突き出す。なんとか動きを読んで、剣を防ぐが、攻撃する隙がない。男の顔をちらりと見ると、口元にはわずかに笑みを浮かべていた。これは、戦いを楽しむというより、弱い者いじめをする時の馬鹿にしたような笑みに近いと、紅貴は思った。一方紅貴の方は余裕がない。剣を追うので精いっぱいだ。

（やばい!!手がしびれてきた!）

紅貴がそう思った丁度その時、紅貴は小石に躓き、尻もちをついてしまった、同時に持っていた刀も手から離れる。

（やばい!!）

紅貴は思わず目をぎゅっと瞑るが何も起こらなかった。ドサツという音が聞こえ、恐る恐る目をあけると、剣をもった男たちは全員倒れていた。

「あの……」

紅貴が戸惑っていると、清風の声が聞こえた。

「亮先生も師匠も、さすがですね。お兄ちゃん大丈夫？」

紅貴は打った腰を押さえながらのろのろ立ち上がる。情けない姿だと自覚していたがどうしようもない。

「これ、亮さんと冬梅がやったの？」

紅貴はあたりを見回す。剣を持った5人の男たちは、全員、見事に気絶している。

「うん。お兄ちゃんがこけてすぐに、亮先生が隙を作って亮先生に剣を向けていた男に肘鉄喰らわせたんだ。それと同時に師匠が、他の男たちに峰打ちくらわせたんだ。峰打ちだけど、力が強かったみたいで、みんな気絶しちゃった」

「紅貴君、君は剣の筋は悪くないけど、実戦が足りないようだね。」

……どんなに思いが強くて、誰かを助けたいと思っても実力が伴わなければ、それはできない。思いの力だけじゃだめなこともある。今のうちに強くならなきゃね」

亮はにっこり笑ってそう言った。優しい口調だったのだが、今の紅貴の状態をはつきり言い当てていると、紅貴は思う。紅貴は、亮が言った言葉を心の中で繰り返した。そして思う。

——自分がどんな決意をしようとして、強くなって、その力を使う期間が僅かだとしても、今は強くなければいけない……。そうでなければ、洸の王はともじやないが倒せない。そして、倒せないということは、かけがえのない人物の願いも叶えることができるかということなのだから。

第三章 妖獣 10

湖北村の門の前についた瑠璃は思わず口を手にあてた。門は崩れ落ち、村の家には柱一つ原型をとどめていない。しかし、かつて家を形造っていた木材の下から、衣類や、食器が覗いており、つい最近までそこで普通に生活が営まれたいたことを、瑠璃は実感した。

「ひどい……妖獣がこれを……？」

誰に言うでもなく、無意識にこぼれた声にこたえたのは、急に瑠璃の目の前に現れた香蘭だった。

「ここまで村が破壊されたのは妖獣のせいだけではないだろうな」

瑠璃の体から現れた半透明の体を持つ香蘭は淡々と言った。

「妖獣のせいだけではないって……？」

香蘭はそれに、はつきりとは答えなかった。その代わり、瑠璃には香蘭が少しだけ笑ったように見えた。しかし、それは一瞬のことで、抑揚のない言葉が聞こえる。

「あの二人が暴れまわったせいだが、暴れなかったらもつとひどいことになっていただろう」

そう言うつと、香蘭はふわりと浮き、瑠璃に背を向けた。

（あの二人って翡翠と桃華？）

「いくらなんでも暴れすぎだとは思うが、この村を襲った妖獣を倒さなければもつとひどいことになっていただろう。瑠璃は、暴れなくてもできることがある。だから、できることをやるんだ」

村の内側に入っていた香蘭に手招きされる。瑠璃は、崩れ落ち、すでに門と呼べなくなっている木片の山を跨ぎ、香蘭の横に並んだ。「秩序の内と外の境界が失われているのがわかるか？」

瑠璃は首を振る。村の内が秩序のうちであり、門の外は秩序の外だということは知識としては知っていたが、瑠璃はその違いを肌で感じることはできない。それがなくなっていると言われても、瑠璃が実感できるはずもなかった。

「境界を再び引かなければならないな」

香蘭は軽く眼を閉じ、手を合わせた。何かを祈っているようだ。瑠璃は思う。しばらくし、香蘭は門の外側に体を向けた。ゆったりとした動作で片膝をつく、右手を地面に当てた。何も起きなかったように瑠璃には見えた。

「これで再び境界が引かれた」

「でも、何も起きなかった気が…」

「いずれ、何が起こったのかわかるようになる。…それよりも、感謝の気持ちを忘れないことだ」

「感謝？」

——境界の話と、感謝にいったい何の関係があるのだろうか

「あらゆるものへの感謝の気持ちが必要なんだ。目に見えぬものへも含めてな。それがこの力の本質だ」

瑠璃が不思議に思っていると、香蘭の体がフワリと浮き、瑠璃の体に吸い込まれたといった。

「神社へ戻ろう」

いつものように、頭の中から声が聞こえた。それに頷き、瑠璃は村を後にした。

桃華は目を覚ますと、いつもそうしているように、布団に入ったまま、利き手の右側におかれた刀に手を伸ばす。体を起こすより先に刀に手を伸ばすのは桃華の癖だ。しかし、触りなれたそれを手に取ったものの、一本足りない。桃華は立ち上がり、辺りを見回す

「白琳、私の刀は？」

桃華はいつも使っている脇差を腰にさしながら問う。

「桃華様、おはようございます。刀でしたら紅貴さんの龍が持っています」

白琳にそう言われた直後、天井から桃華の刀が落ちてきた。桃華はそれを反射的に右手で取った。鯉口が赤い紐で結ばれていることを確認し、もう一度天井を見るが、そこには何もいなかった。

（紅貴のところに戻ったのかな）

桃華は刀の鞘をぎゅっと握る。

（ありがとう）

心の中で紅貴の龍に礼を言う。桃華にとってその刀はなくてはならないものだ。一部除いて自分以外の誰かに触らせることはできないのだ。絶対に。

「紅貴と翡翠は？」

紅貴は多分無事だろうと桃華は思っていた。力を使いすぎたとはいえ、本来、あの程度なら、倒れるほどでもなく、当然命にかかわることもない。おそらく、紅貴が気絶したのは、力を使うのに慣れていないのが大きだろう。それに、白琳が紅貴を看たのだから、今頃は回復しているだろうというのも予想がついていた。だが、翡翠のことだけ聞くのは不自然な気がしていた桃華はできるだけ自然に聞こえるように、紅貴のこともきいたのだ。

「紅貴さんはもう大丈夫です。翡翠様は…まだ寝ています。戦えるようになるには少し時間がかかるでしょう。本当は、慶などの、設備が整った大きい街で休ませたいのですが…」

——ああ、やっぱり。

桃華はその言葉を聞いても特に驚かなかった。あれだけ暴れて翡翠が無事ではないというのは、今となってはなんとなく分かっていた。しかも、桃華をここまで運んだのも翡翠のはずだ。

——もっとも、こうなったのはどうしようもないことだというのも、桃華には分かっていた。最初は、自分ひとりで妖獣をなんとかして、慶で待ち合わせをするつもりだったが、あの状況で、それは無理だっただろうと、今なら分かる。翡翠も桃華と似たようなことを考えていたようだが、どちらか一人で妖獣をなんとかしようとしていたらもっと悲惨なことになっていただろう。そのため、この状況はある程度仕方のないことなのだが、申し訳ないと思う。

「ここからだ、慶には、馬で一日で出れるね」

「そうなんです？ 私、てっきりもっとかかると思っていました…」

日だったらなんとか翡翠様も持つでしょう。できるだけ早く慶で休ませたいのですが」

「うん。慶で星の皇子様と待ち合わせしてるから私もできるだけ早く慶に行きたいな。明日にでも出発しよう」

翡翠は当分戦えないが、桃華は白琳のおかげで今は何ともない。

もし、万が一慶に行く途中で誰かに襲われても、何とかなるだろう。桃華は刀ではなく、普段使っている脇差の柄を握った。いつも通りの感触に安心する。

「紅貴と瑠璃はどこにいるの？」

「瑠璃は湖北村にいましたよ。紅貴さんは、清風君の剣の稽古を見てます」

言い終えた白琳はなんとなく、表情が陰しなっているような気がする。

「何かあったの？」

少し首をかしげて、尋ねた。

「あとで言おうと思っていたんですが、紅貴さんを狙っている方たちが現れて…亮さんと、冬梅さんが倒してくれましたが…」

紅貴を襲ったのはおそらく可憐に雇われたか、元々月宮家に仕えていた者だろう。

「紅貴を襲った人たちはどこにいるの？」

「亮さんが、睡眠薬を飲ませて、鍵をかけた倉で捕まえてます」

ということは、あとは李京に送るだけだ。あとは亮に任せておけば良いだろう。もともとここに来るつもりはなく、湖北村に来るであろ。敵は亮に任せるつもりだった。その後李京に送られる紅貴の敵の尋問は漣にやってもらう予定だったため、わざわざ自分がここで敵を尋問する必要はない、と桃華は思った。優先すべきことは慶に行くことだ。

「亮さんっていったい何者なんですか？」

「私たちの前の二將軍のお友達だよ。とっても頼りになる方なの、それより私、紅貴呼んでくる。瑠璃も戻ってきたことだし、明日こ

こを出て慶に向かうことを伝えなきゃね」

白琳が不思議そうにこちらを見てくるが、桃華がニツと笑うと同時に、戸が開き瑠璃が入って来た。桃華はかすかに聞こえた足音と、気配で、戸に近づいてきている人物が瑠璃だと判断していた。

「あ、桃華起きたの？もう、大丈夫なの？」

「うん、もう平気。おなかすいてペコペコ」

少し拗ねたようにそう言うと、瑠璃は優しい笑顔を浮かべた。まるで実の姉のようだと、桃華は思った。桃華は、瑠璃が見せる、そんな笑みが好きだった

「もう大丈夫みたいね」

「私、紅貴よんでくる。瑠璃と白琳はちょっとこの部屋で待ってて」
桃華は、そう、いつも通り無邪気に言って部屋を出た。

紅貴は同情の入口の近くに座り、冬梅と清風の剣の打ち合いをずっと見ていた。清風は紅貴よりも年下だったが、紅貴よりも遥かに強い。剣の腕もさることながら、冬梅に何度やられても立ち上がる清風が素直にすごいと思う。同時に、紅貴は昔のことを思い出していた。もう何年も前のことだ。

——それじゃあいつまでたっても私には勝てませんよ

紅翔が楽しそうに言う。当時の紅貴はそれが憎たらしかった。

「うるさい！子供相手に本気になるなんて大人げないぞ！ちよっとは手を抜けよ」

「この程度で私が本気だと思っていたんですか？まったく情けない。ほら立つてください」

紅翔は紅貴に手を貸すことなく、紅貴を見下ろしていた。紅貴はそれが本当にくやしかった。手にできた豆はつぶれて痛くなっていたが紅翔にまた厭味を言われるのが悔しくて再び立ち上がった。

——あの頃は紅翔が悔しがる顔を見たくてひたすら剣を振っていた。紅貴は今の自分の手を見る。ここ数年剣を握っていない手は、靖郭の鍛冶屋に言われたとおり、豆一つできていない。紅貴は、あ

の頃の自分とずいぶん変わったな、と思う。もつとも、あの頃は自分に課せられた責任を知らず、毎日を楽しく生きていれば良かったが今は違う。

「あ、紅貴いた〜」

紅貴は後ろから聞こえてきた声に驚いて振り向く

「桃華！もう、大丈夫なのか？」

「うん、もう大丈夫」

桃華のいつも通りの笑顔に安心していると、桃華の声を聞いたのか、清風が駆け寄ってきた

「鳳華様！もう、体の方は大丈夫なんですか？」

清風にそう呼ばれた桃華は、一瞬驚いた顔をしたが、すぐににっこり笑った。

「大丈夫だよ。」

「あの、すみませんでした……！こんな無茶なこと頼んで……！それに二將軍の鳳華様とは知らず」

清風はそう言っただけで頭を下げた。

「顔あげて？あんなの倒せる生身の人間なんて、多分私たちくらいだし、気にしないでいいよ。ね？この通り元気だから」

清風はしぶしぶ顔を上げた。そんな清風を見て、桃華は嬉しそうに笑っている。こうして見ていると、桃華は案外面倒看が良いのかもしれない。まだ出会ってから数日だが、桃華は色々な顔をもっているなあ、と紅貴は思う。だが、まだ桃華が闘っているところは見たことがない、

（いったいどんなふうに闘うんだろうな。妖獣を倒すぐらいだから、すごいんだろうな……そんな子が俺に剣を教えてくれるっていったんだよな）

「紅貴、話したいことがあるからちょっと良い？」

紅貴は頷いて、道場を出て、桃華の後について行く。

「なあ、桃華本当に俺なんかには剣教えてくれるのか？」

靖郭で桃華にそう言われたが、よく考えるとすごいことだ。桃華

は一見普通の少女でも嘉国の二將軍だ。桃華が妖獸を倒したことで、紅貴はそれを実感した。

（そんな桃華に教えてもらって良いのかな）

そんなことを紅貴が思っていると、桃華が言う。

「だって、紅貴まともに闘えないじゃん。そのままだったら、紅貴も悔しいでしょう？何かをしたいと思っててもその力がないんじゃない？」

この少女は、心を読めるのではないかと思った。何気ない口調で桃華は言うが、紅貴が感じていることそのものだ。

「……ありがとう」

紅貴は静かに礼をいったが、桃華は言葉を続けていた。

「……それに、このままだと、紅貴、無駄死にしそうだしね」

一瞬声が暗くなったような気がしたが、すぐに元の明るい口調に戻る。

「さてと、ついたよ。瑠璃も戻って来たから、この部屋に入って」

桃華に促され、先ほどまで桃華が寝ていた部屋に、紅貴は入った。部屋に入ると、湖北村から戻って来たらしい瑠璃と、ずっと看病をつづけていただろう白琳が床に座っていた。翡翠はいなかった。まだ目が覚めていないのだろう。白琳は大丈夫だと言っていたが、紅貴は心配になった。

「あのね、白琳と話したんだけど、明日にでも、ここをでて慶に向かおうと思うの」

「翡翠は？まだ起きてないんだろう」

「はい。ですが、もうじき目は覚めると思います。桃華様からここから慶へは一日で着くと聞いたので、それでしたら、早めに設備が整った慶に行って休んでもらったほうが良いと思ひまして。ここだと、やれることは限られてますし、戦えるまでに回復するのは時間がかかってしまいますから。翡翠様もそれは嫌でしょうし」

「一日といっても馬に乗らなきゃいけないだろう？それは大丈夫なのか？」

「翡翠様でしたら、一日程度なら持つでしょう。大丈夫です、慶に

着いたらおとなしくしてもらいますから」

「白琳がそう言うならそれが一番良いのかもね」

「……じゃあ、決まりだな」

医者である白琳が、設備が整った慶に行くべきだというのはその通りなのだろう。だが、それにしても、瑠璃はずいぶん和白琳を信頼していると、ここ数日の瑠璃を見て思っていた。

第三章 妖獣 11

白琳は寝ている翡翠の額に手をあてる。普段は平熱が低い翡翠であるが、触れたその手はじんわりと熱い。熱があるようだ。白琳が桶にはった水で布を濡らして、しばっている、翡翠の切れ長の目がうつすらと開いた。翡翠という名前の通り、まるで宝石のような綺麗な翠色の瞳が白琳を見たが、いつもの強い光はない。客観的に見て、綺麗な目だがそれだけだ。普段の彼は、もっと強い眼をしているのだ。翡翠は白琳に気づいたのか、ゆったりとした動作で上半身を起きあがらせた。いつもは、下の方で縛っている長い髪が、今はほどけてしまってる。それだけでずいぶん印象が違くと、白琳は思った。翡翠は髪が邪魔なのか、軽やかきあげてつぶやく。

「白琳……」

翡翠の声は微かに掠れていた。

「明日、慶に出発することになりました」

「…それが良いだろうな。会わなきゃならないやつもいるしな」

「それもそうですが、翡翠様はかなり力を使っています。ここでやれることは限界がありますから、設備が整った慶に言った方が良いと思います——死なない程度に応急処置はしましたが、肺と胃…あらゆる臓器がやられてます。あなたが翡翠様ではなく、それから治療したのが私でなかったら死んでたでしょうね」

「……それ、瑠璃と紅貴に言ったのか？」

「言ってます。瑠璃は心配症ですから」

もちろんそれは本当のことだったが、瑠璃と紅貴に言わなかったのは、どちらかというと、翡翠が心配されるのが苦手だということを白琳が知っていたからだ。白琳にしてみれば、瑠璃が心配するのは当たり前だと思う。それを素直に受け取れば良いと白琳は思うのだが、翡翠はそれをいつも拒む。

「桃華は気づいているだろうな……」

「桃華様にも詳しいことは言ってますが、気づいているでしょうね。桃華はあれで、結構鋭いような気がしますから。といっても、翡翠様を気にかけるというよりは、慶名物の羊羹を早く食べたいとか言ってますよ」

「あいつらしいな」

そういうと、翡翠は微かに笑った。桃華も心配していないわけではないだろう。ただ、翡翠が心配されるのが苦手というのを桃華は知っているのではないかと、白琳は思っていた。それに、桃華は意外と現実的だ。心配しても何の解決にもならないと考えているような気がする、白琳は思う。あれで案外現実的な解決策を考える性格だと、白琳は考えていた。そんなことを考えていると、翡翠が急に咳き込み始めた。反射的に口元を覆った左手の指の隙間から、紅い鮮血がぼたぼたと落ち、身に付けていた深緑色の着流しを濡らした。鮮やかな鮮血は、着流しの上では、黒い染みを作る。震える翡翠の背をなでた。

「くそ……」

やがて、落ち着いた翡翠はバツが悪いのか、白琳から目をそむけてしまった。白琳は何か声をかけようとして手を伸ばしたが、なんと声をかけて良いか分からず、代わりに、床に置いてある盆を手にとった。盆上には湯のみと、薬が乗っている

「これ、飲んでください」

翡翠は湯呑を手にとったが、口はきゅっと結ばれたままだった。

おそらく、薬を飲みたくないのだろうと、白琳は思った。

「変なものはいっていませんから」

「だが薬が紫色って明らかにあやしいだろう」

その紫色の薬は、瑠璃がもらってきた羅雪から作った壮家の秘薬だ。

「その薬は、使いすぎると、死にいたりますが、一回なら大丈夫です。一時的に喀血を抑えることができます。このままだと、慶までもたないでしょう？それを飲めば、慶に着くまでは持つでしょうか

ら飲んでください」

翡翠は仕方ないというように、右手で紫色の薬をつまむと、そのまま水で流しこんだ。

「今はゆっくり眠ってください。明日は一日馬の上ですから」

「それぐらいなんともない」

そう言つて白琳から視線を外す。翡翠のことだ。弱っている姿を見られたくないのだろう。しかし、白琳が気になったのは、光のない瞳だった。鋭さが無い翡翠はまるで翡翠ではないみたいだと、白琳は思う。

（そんなにこの状態が嫌なのかしら）

もちろん、弱っている状態を見られて嫌なのは当たり前なのだが、何となくそれだけではないような気がする。しかし、そんな翡翠にちゃんと声をかけて良いか、白琳はわからない。

「ゆっくり寝てくださいね？」

白琳はなんとかそれだけ言つと、お盆を持ち、部屋を出た。

翌朝、紅貴が繋ぎ止めてあつた馬の前に行くと、先客がいた。

「翡翠！大丈夫なのか？」

今日、慶に向かうことは決まっていたが、昨晚翡翠のところへ行った時も、青白い顔で眠っており、今朝の朝食の席にも翡翠は姿を見せなかったため、紅貴は翡翠のことを心配していた。紅貴はどきどきしながら、翡翠の答えを待っていたが、口をきゅつと結んだまま、何も答えない。不機嫌な様子を隠そうともしていない。

「おやおや、そんなあからさまに不機嫌だと、紅貴君が困つてしまいますよ」

穏やかな亮の声に紅貴は救われたような気がした。

「余計なお世話だ」

「子供の頃のことでも思い出していましたか？ いけませんね。そんなことで周りに八つ当たりするなんて」

「……あのくそじじいから何かきいたんですか？」

ずっと目を細めて亮を睨みつける翡翠を見た、紅貴はわずかに冷汗が流れるのを感じたが、亮は動じていないようだ。

「ちよつと、翡翠！お世話になった亮さんに何喧嘩売ってるのよ」
旅支度を済ませた瑠璃が腕を組んで立っていた。この状態の翡翠に怒ることができるとは、さすが翡翠の妹だと、紅貴は思った。

「早く羊羹食べに行こう」

間の抜けた少し高めの幼い声は桃華だ。まったく関係ない話をするとところが桃華らしい。だが―そんな桃華の態度が今はちょうど良いと、紅貴は思った。翡翠をちらりと見ると、翡翠は亮を睨むのをやめていた。といつても、不機嫌なのを押し殺しているだけかもしれないが。とはいえ、気まずい空気から解放され、紅貴は安心して息を吐いた。

「慶の羊羹ってそんなにおいしいのか？」

紅貴の問いに答えたのは、桃華ではなく、白琳だった。

「梅花堂の春の桜羊羹は桃華様の大好物ですよ」

白琳が朗らかに言った。

「さてと、これで全員そろったわね」

瑠璃が少量の荷をかけながら言うのと、桃華と白琳も、それぞれの馬の横に行き、出発の準備を始めた。

「ちよつと待つてください！」

子供のはつきりした声に、紅貴が振り向くと、走ってきたのか、少し息を切らした清風と、それを温かく見守る冬梅と覚信がいた。
「麒麟様目が覚めたんですね。あの、俺、お礼をみなさんにちゃんと言ってなかったから……その、本当にありがとうございました」
「少しでも約にたてたならよかったわ。もっとも、二將軍は、それが『仕事』だけだね。清風も禁軍兵士になってそんな存在になりたいのよね？」

清風の声に真っ先に答えたのは瑠璃だった。言った後に、翡翠と桃華を見ているということは何か言えということではないだろうか
と、紅貴は思った。それに気付いたのか、桃華がにっこりと笑って

言う。

「清風は、この村を守りたくて、私たちを呼んだんでしょ？その気持を大事にすれば大丈夫だと思う。剣の筋も良いみたいだし、がんばってね」

「俺の剣見たんですか？」

桃華が、少しだけ、というと、清風は恥ずかしそうに俯いた。

「俺もあれくらい強くなれば良いんだけどな」

「大丈夫、私が鍛えるから」

「え、お兄さん、鳳華様に剣教えてもらえるの？いいな」

清風がそう言つと、ずっと黙っていた翡翠がようやく口を開いた。

「冬梅や亮、覚信に囲まれてる方がずっと恵まれていると思うぞ。

せつかく良い師を持ったんだ。せいぜい大事にするんだな」

「はい、ありがとうございます」

そう言つた清風は本当に嬉しそつだった。

（あいつ、翡翠にあこがれていたんだな。そういえば、俺もあれくらい歳の頃、暁貴に憧れてたな）

「言い忘れていたが、李京で二將軍の名前を出して、適当に話せば湖北村の修理費と、その間の住居はなんとかなるだろう…… 妖獸

を倒すためとはいえ、少しやりすぎた」

「言われなくてもそうするつもりでしたよ」

亮にそう言われた翡翠は、チツと舌打ちをしていた。

「そつだ、最後に。この神社にある聖刀は本物だと思うの。だから大事にしてね。きつと、この刀がこの神社を守ってくれるから」

「ご忠告ありがとうございます。わたしからもすこし良いですか？

紅貴君」

まさか自分に声がかかると思っていなかった紅貴は亮に話しかけられ、少し驚く。

「昨日は少しきつく良いすぎました」

実力がなければ救えないということだろうか

「ですが、紅貴君が、人を救える力を手に入れることができると、

わたしは信じてます。だから頑張ってくださいね」

そう言って笑んだ亮の笑みは、少し、紅翔に似ており、紅貴はおもわず、こくと頷いた。

この五人で旅を始めてまだ数日だが、ずいぶん濃い数日だった。洗を救いたいという想いは本当だったが、剣一つまともに扱えない自分にはいかに無謀かということにも気付かされた。それでも、その想いが変わることはない。それが自分に課せられた責任でもあるからだ

（強くならなきゃな……でも今は）

紅貴は前を走る翡翠の背中を見遣る。天馬の手綱をもつ翡翠の背中はいつもとより頼りなく感じる

（口に出したら怒られそうだけど、翡翠、早く元気になれよ）

あたりは日が沈みかけている。もうじき慶に着くだろう。

第四章 星の願いは 1

慶に着くとすぐに、翡翠は、清院養生所と呼ばれる場所に連れて行かれた。紅貴もそれについていこうとしたのだが、桃華に止められた。

「翡翠と白琳に合流するにしても、この馬と荷物が邪魔だから置きにこう。それに、会わなきゃいけない人がいるし」

「……星の皇子様だっけ？」

紅貴は、李を発つ時に翡翠に言われたことを思い出しながら言った。

「桃華の友達なんでしょ？どこにいるの？」

瑠璃に聞かれた桃華は、こくりと頷いた。

「たぶん匠院義塾にいると思う」

「匠院義塾？」

紅貴が、聞いたことのない単語を不思議に思っていると、瑠璃が説明する。

「匠院義塾っていうのは、この国で兵士を目指す子供が通う国立の学校。ほら、湖北村であった清風いたでしょう？あの子もその学校目指してるって言ってた」

「うん、そこね、私と翡翠の母校でもあるんだけど、多分そこにいると思うの。私についてきて。ついでに、そこに泊めてもらって荷物置いてちょう」

そう言っただけで歩きだした桃華に紅貴と瑠璃はついて行く。慶の北には、大きな山があるが、その方角に向かうようだ。

「瑠璃、あの山なんて言うんだ？」

「仙修山よ。翡翠がまだ、学生だったころは、あの山で実地訓練みたいなことをやった時もあるみたいで、良い思い出が無いって言ってた。桃華も、あの山には虫がいっぱいでもう二度と行きたくないって。なんでも、桃華はその時、兵士になるのをやめようかとも思

「つたみたい」

「でも、結局、兵士どころか、二將軍にもなれたからすごいよな。まだ16歳の女の子なのに」

「なつたばかりの頃は、異例の抜擢ってこともあって、実力がないあんな子娘がとか、縁故採用なんじゃないかって言われたりもして、それなりに大変だったみたい」

「縁故採用？桃華ってこの国の貴族かなんかなのか？」

桃華の周りに、普通の少女を二將軍にできると疑われるような力を持った人物がいるのだろうか。そういったことに縁がなさそうに思っていた紅貴は桃華がそう言われていたことを意外に思う。

「私も、詳しくは知らないけど、桃華は、煌李宮で育ったからそう言われたっていうのもあると思う。わたしが初めて桃華に会ったのは、桃華が12歳の頃だったんだけど……どこに住んでるか聞いていたら、煌李宮っていうから、びっくりしたのを今でも覚えてる」

瑠璃は、そう言うのと、どこか遠くを見ように桃華を見た。

「そう言えば、瑠璃って、なんで洸と一緒に来てくれるんだ？翡翠や桃華、あと多分白琳も、たぶん命令されて俺と一緒に洸に行くことになったんだと思うんだけど、瑠璃は違うよな」

それは、紅貴が、李を発ってからずっと疑問に思っていたことだった。なかなか、瑠璃と話す機会がなく、かといって、こんなことを聞くために、わざわざ瑠璃を呼ぶのも大げさな気がし、紅貴は、ずっと聞けずにいたのだ。

「……洸国でやることがあるの」

その真剣な声に、不思議と不意を突かれた気がした。何を、と聞きたかったが、何となく聞きにくい。

「……そっか。なんか、俺の国の問題に、巻きこんだみたいになつて悪いな……俺に、できることが何かあったら言えよ」

紅貴が、そういうと瑠璃は慌てたように首を振った。

「違うの！これは私の問題だから。だから、そんな気にしないで。ね？」

「うん。でも、できるだけ力になれるように頑張るよ」

翡翠も桃華も、何かを隠していると、紅貴は感じていた。白琳は、その二人が隠していることを知っているのではないかと、紅貴は思っている。そんな中で、瑠璃だけは、隠し事がないかもしれないと思っていたが、違ったようだ。

（でも、それは、俺も同じだ……いや、俺はもつと……）

紅貴は、左手をぎゅっと握る。

知られたらまずいことの一つや二つ、誰にだってあるだろう。

（これで良いんだ。あいつらだって、俺のことを知らない方が良いに絶対に決まってる。翡翠と桃華が隠していることもきつと……）

それが、正しいことのはずなのに、少し寂しいきがするのはなぜだろうか？

「着いたよ」

紅貴と、瑠璃の少し前を歩いていた桃華が振り返ってそう言う。

目の前にある門は、閉じられている。一般的な建物の二階建てのようなその門の内側は窺い知ることができず、門の横に立つ、腰に刀を差している門兵らしき人物がこちらをちらちらと見ていた。

「なんか、俺達怪しまれてないか？」

「確かに、私たちは、どう考えても、ここの関係者には見えないわよね」

「大丈夫だよ。説明すればわかってもらえるって」

桃華はそう言うと、紅貴と瑠璃の心配をよそに、門兵に話しかけた。「すみません、ここに入れてもらって良いですか？」

なんとも気の抜けた返事が聞こえた。ここに翡翠がいたら、溜息をついていたことだろうと、紅貴は思った。

「すみませんが、ここの関係者以外お通ししてません」
門兵は事務的にそう言った。

「でも、わたしの知り合いがここにいるはずなの。ね、通して」

「……申し訳ありませんが、お通しできません」

「わかったわ。じゃあ、これでお願い」

桃華がそう言っでとりだしたのは身分証明書だった。

「二將軍として、お願いするわ。通してくれる？」

そう言う桃華の声は、不思議とどこか楽しそうに聞こえる。

（たしかに、二將軍って言えば通してもらえらるだろうな。でも、これで良いのか……？）

しかし、次に紅貴に聞こえた声は予想に反したものだった。

「お通しできません。それに、あなた方の身分証明書が本物かどうか確認する必要があります」

門兵がそういった直後、門の上部の櫓に立つ兵が、笛を鳴らした。すると、門の内側から、数人の兵が出てきた。紅貴、桃華、瑠璃はあつというまに兵に囲まれてしまった。

「ちよつと、桃華、これ、どうするの？」

「うーん…刀を抜くわけにもいかないし…」

「なんか、俺達よく捕まりそうになるよな」

危機的状況なのに、あまり危機感を感じないのは、ここ数日でこういったことに慣れてしまったからかもしれない。

「二將軍の鳳華様が、今日、ここに来るという報告はつけていませんし、あなたが鳳華様だとは思えません。鳳華様が若い方だということは聞いておりますが、いくらなんでもあなたのような子供が二將軍だとは思えません」

そう言った兵士は、兵士としては、若い方だろう。だが、若いと言つても、紅貴と一緒に旅をしている最年長の二人、翡翠と白琳よりは年上に見える。二十代半ばといったところだろうか。そんな兵士にしてみれば、10歳近く離れた桃華は確かに子供だろう。「本当なのに」。身分証明書に、ちゃんと、鳳凰の印押してあるでしょう？」

桃華が頬を膨らませてそう言ったが、兵は取り合おうとしなかった。

「偽物の可能性もありますから、あなた方を官吏に引き渡します」可能性がありますが、といいながらも、偽物だと確信した言い方だと

紅貴は思った。

（もしかして、本当にまずいか？でも、桃華は本当に二將軍だし……
……なんとかなるかな）

そう、たいして、緊張感もなく紅貴が諦めていると、鋭い女性の
声が聞こえてきた。

「待つてください。その方は本当に二將軍の鳳華様です」

声の主は、背が高い女性だった。歳は瑠璃と同じくらいに見える
が、瑠璃のような年頃の娘が好む、鮮やかな着物ではなく、黒一色
の着物を着ている。こちらを見た瞳も着物と、同じ、いや、心なし
かそれよりも深い黒に見える。高い位置で一つに結んだ髪は、下ろ
しても、肩より少し長いくらいだろう。

（なんか気が強そうな子だな）

兵士が、なかなか、紅貴、桃華、瑠璃の三人から離れないでいる
と、先ほどより、少し穏やかな声で、女が言う。

「鳳華様は、今日、本来お忍びで来られることになっていたんです。
ご無礼をお許してください」

そう、頭を下げた女を見た兵士は慌てたように、跪いた。どうや
ら、桃華が本物の二將軍だと、やっと気づいたらしい。

「あ、あの大丈夫ですから、とりあえず、中に通してもらえますか
？」

桃華が何も言わずにいると、代わりに瑠璃がそう言った。

（なんとというか……いつも思うけど、まるで保護者だよな）

そんなことを紅貴が思っていると、桃華が何も言わずに歩きだし
た。どうやら、助けてくれたらしい黒髪の女が門を開け、桃華がそ
のまま中に入った。紅貴と瑠璃もそれに続く。

「……お待ちの方のもとへご案内します」

助けてくれた女がそう言っても、桃華は黙ったままだ。

（何か変だな……二將軍だと信じてもらえなかったのがそんな嫌だ
ったのか？）

「あ、あの助けてくださってありがとうございます」

瑠璃が気まずい空気に耐えかねたように言うが、後に続いた桃華の言葉は一見、この事件とは関係のないようなことだった。

「なんであんたが来るのよ！」

あんた、が誰を指しているのか紅貴は一瞬理解できなかった。急に声を上げた桃華の様子を呆然と見ていると、黒髪の女が、桃華に対峙するように、桃華の目の前に立った。

「あんた、お礼も言えないの？」

先ほどまでの『鳳華』に対する言葉づかいは消えうせている。黒髪の女に自然、見下ろされる形になる桃華だったが、それで臆する桃華ではないことは、紅貴には分かっていた。ちらりと、桃華を盗む見た紅貴は思わず声をあげそうになった。桃華の茶色い瞳は、黒髪の女を射抜くように見ていた。敵を圧倒させようと、わざと殺気を作りだしたように、紅貴には感じられた。こんな表情の桃華を見たら、先ほどの兵たちも、桃華が二將軍だと信じたかもしれない。

「あんたに、助けてなんか頼んでないわ」

「それでも、あんたは助けられたの！どうせ何も考えてなかったんでしょ？」

「考えてた！いつもなんとかなってるもん！」

「それが考えてないっていうのよ！あんたを見ているとイライラするの！」

（まるで子供の喧嘩だな。この女の人、いったいどんな関係なんだろう？それにしても、この口喧嘩いつまで続くんだろう）

ちらりと、瑠璃を見ると、目があった。瑠璃は呆れたように溜息をついている。

「桃華いいかげんにしなさい！この人は私たちを助けてくれたんでしょ？お礼くらい言わなきゃだめでしょ？」

「だって！」

「だってじゃないでしょう？まったくもう……」

瑠璃は、女の方を向くと、桃華の頭を押さえて無理やり頭を下げさせた。

「せつかく助けてくれたのに、桃華がこんな態度で、本当にごめんなさい」

女は何も言わなかったが、腕を組んで、軽く息を吐いたところを見ると、これ以上言い争う気はないのだろう。

「ほほう。桃華と楊花の喧嘩を止めるとは、さすがは、あの問題児、翡翠の妹じゃな」

聞きなれない声に、紅貴が後ろを振り返ると、老人がいた。背は、翡翠よりも少し高いくらいだろうか。髪こそ、白くなっていたが、杖をついているわけではなく、腰には剣が差してあった。茶の着物から見える腕には、しっかりと筋肉がついており、武道を嗜んでいるのは明らかだった。

「覇玄！」

「え、桃華、覇玄って、あの覇玄様？」

「瑠璃、覇玄様って？」

「桃華と、翡翠の前の二將軍で、二將軍を辞めた後は、ここの教師をやっているすごい方よ。桃華と翡翠の恩師でも、あるって駿から聞いて……」

「恩師じゃないもん！」

瑠璃の言葉を遮るように桃華が言った。

「子娘が生意気なこと言うんじゃないわい。それより、翡翠の妹……瑠璃といったかの？これからどうじゃ、私と食事でも」

覇玄がそう言った直後だった。あつという間のできごとで、紅貴の眼は追いつかなかったが、桃華が脇差を抜いていた。そして、刃と刃がぶつかり合う音がしたかと思うと、桃華の剣を覇玄が受け止めていた。

「その汚い手で瑠璃を誘わないで。歳を考えてよ！」

「フン！まだ子供のお前には言われたくないわい」

「……覇玄様、さすがにお客様にあの発言はちよつと」

「な、楊花も、冷たいのお。ところで、生意気な糞餓鬼が一人足りないようじゃが？」

「翡翠のことですか？」

「そうじゃ。あの餓鬼、どうしたんじゃ？」

「よくわからないんですが、翡翠なら力を使いすぎたとかで、白琳に連れられて、清院養生所つてところに行きました」

紅貴がそう言つと、霸玄は何かを考えるように腕を組んだ。

「相変わらずじゃな、あの餓鬼は。まあ、壮家の娘と一緒にいったなら、大丈夫だろう。楊花、お前は、豹馬に、剣をみてもらいたいんじゃない？ 瑠璃と、あと二人は、わしが案内するからお前はもう言つて良いぞ」

楊花が軽く頭を下げて去っていくと、霸玄は歩き出した。

「その、赤い髪の方主、名は何と言うんじゃ？」

「紅貴つて言います」

「駄目な二將軍が二人もいたんじゃ大変じゃろう」

「はい、それはもう……」

桃華と翡翠がいたことで、助かったことも多いが、紅貴を利用されたりもした。まだ、李を発つて数日だが、ここまで濃い経験をしているのは、二將軍の行動によるところが大きいのは気のせいではないだろう

「あの、霸玄様、桃華と、あの女の人、楊花さん？ はなんであんなに仲が悪いんですか？」

瑠璃が不思議そうに問うと、霸玄は面白そうに笑う。

「桃華と張楊花は同じ歳なんじゃよ」

瑠璃と同じくらいだと思つていたが、どうやら違つたらしい。桃華と同じということは16歳ということになる。

「同じ歳で、ここに入学したのも同時。この国では女でも武官になれるとはいえ、目指す者も、実際になる者も少ない。これだけだと良い好敵手同士になれそうじゃろう？ じゃが、どういうわけか、異常なまでに性格が合わないんじゃよ。楊花は、真面目なんじゃ。じやが桃華はこんな性格じゃろう？」

紅貴は楊花を思い出す。黒く鋭い眼を持つ楊花は、凜とした姿だっ

た。見た目通りの性格なのかもしれない。一方桃華は一見子供っぽい性格だ。

「なるほど、性格が真逆でいがみ合ってるってわけね」

「今は、まだ良いじやろうが、楊花がここを卒業して、武官になったら、大変じやろうな。……ほれ、こつちじゃ」

どうやら会わなきゃいけない人物がいるという部屋に着いたらしい。霸玄が戸をあけ、中に入ると、そこは畳の部屋だった。部屋の橋、文机の前に座る、少年が、ゆっくりと振り返った。縛った黒髪がさらさらと揺れる。振り返ったその顔は、男の割には可愛い顔をしていると、紅貴は思った。少年はこちらを見ると、本当に嬉しそうににっこりと笑った。紅貴には真似できない笑みだ。

「久しぶり、桃華」

「龍清様!？」

驚いた声を出したのは、瑠璃だった。紅貴も龍清という名には聞き覚えがあつたが、思い出せない。

「なあ、瑠璃、龍清様って?」

「この国の皇子、皇太子様よ!」

(皇太子!?!なんで、そんな方がここに!?!)

紅貴が驚いて、声も出せずにいると、急に桃華が動き出し、龍清に抱きついた。

「龍清!久しぶりっ」

そう言つて抱きつくこの国の將軍と、抱きつかれて、顔を赤くする皇太子という、なんとも威厳がないこの国の最高位に限りなく近い二人を、紅貴と瑠璃は、呆然と見ていた。

第四章 星の願いは 2

怪我はないかとか、疲れてないかとか、誰にも襲われなかったかなどということ顔を赤らめて桃華に聞く龍清を、微笑ましいのを通り越して、少し暑苦しいと、紅貴は思っていた。二人ともどこか幼い容姿で、綺麗や、カッコいいという言葉より、も可愛らしいところや、似合うところや、大きな丸い瞳を持っているところなどが似ており、仲の良い双子のようだと最初は思っていたのだが、目の前で繰り広げられているそれは、どう考えても違う。

「あの、失礼ですが、龍清様と、桃華ってどのような関係なんですか」

「龍清とは仲が良いお友達だよ」

そう、桃華は、花が咲いたようににつこりと笑ったが、龍清は、両掌を、床につき、うなだれた。

（龍清様ってわかりやすい方なんだな）

「桃華、本当に友達なの？そうは見えないんだけど」

瑠璃の問いに、桃華は、大きく頷く。

「うん、だって龍清は皇子様だけど、仲良しだもん。お友達だよね？」

桃華が言ったことに対し、清風は、曖昧に頷くしかない様子だった。こんなにわかりやすい愛情表現をしているのにもかかわらず、まったくそれに気付いていない桃華に驚くと同時に、紅貴は、龍清に同情した。

（恋愛感情に疎いどころじゃないな。龍清様も可哀想に）

そんなことを外野が考えていることを、知ってかしらずか、桃華は嬉しそうに話す。

「一目ぼれした龍乃助を買ってくれたのも龍清だし、大好きっ」
そう言っ、無邪気な子供なような笑顔で、脇差の唾の部分に括りつけられた小さな縫いぐるみを見せる桃華に、紅貴はなん言っ

良いか分からなかった。もちろん、龍清に同情してだ。しかし、意外にも龍清の嬉しそうな言葉が聞こえてきた。

「桃華が喜んでくれて俺も嬉しいよ。梅っちゃんも喜んでるよ。うん！」
そういつた龍清の手のひらには、いつの間にか桃華の龍乃助とは色違いの桃色の龍が乗っている。どうやら、お揃いで買ったものらしかった。

（楽しそうだから、まあいいか）

顔の筋肉が完全に緩み、でれでれとした笑みを浮かべる龍清に対して、紅貴はそんなことを思った。仮にも皇太子がそれでも良いのだろうかとも思うが、龍清の、心から嬉しそうな笑顔を見ると、呆れるという意味で、何も言うまいという気にさせられた。

「そういえば、なんで龍清様は慶にいらっしゃるんですか？煌李宮にいらなくて良いんですか？」

瑠璃が、普通であれば当たり前前に感じる疑問を、龍清に尋ねた。

もちろん紅貴も、仮にも皇太子が、都を出て、自由に動き回るといふ話は聞いたことがない。

「俺は、できるだけ自分の目で他の国、この国の街、それから、色々な人を見るようにしてるんだ。話に聞くだけじゃ、分からないことが多いしな。王に即位したらこんなこと自由にできなくなるし、今のうちにできるだけ色々な場所を見て回ることしてるんだ。まあ、ついでに役に立ちそうな情報集めもしてるから、まったく遊びつつわけでもないけどな」

そう、まるで柔らかな春風のような笑みを浮かべた龍清からは、さきほどまでのだらしない様子は消えていた。女の子が喜びそうな憧れの皇子そのものにも見えないこともない。もしかしたら、龍清がああなるのは、桃華が絡んだ時だけなのかもしれない。

「俺は、今まで隣の国、恵に行ってたんだ。桃華たちが洸に行く前に、恵を通過するだろう？恵の様子を知った方が良いんじゃないかなって思ってたんだけど、二人足りないね」

「私も詳しくは知らないんですけど馬鹿兄翡翠は体を壊して、清院

養生所に行ってます。白琳はその付き添い、というより、どちらかという和白琳が翡翠を養成所に連れて行きました」

瑠璃の言葉に、龍清の顔が一瞬、僅かに歪んだ。一瞬歪んで、すぐに無表情になったので、気づく者はあまりいないだろう。

「翡翠、力を使いすぎたみたいなの。白琳がいるから大丈夫だと思うけど。とりあえず、私たちはここに荷物を置きにきたの。翡翠の所にはこ荷物を置いてから行くつもり」

「そうか。それに俺もついていくよ。恵のことを翡翠と白琳も知るべきだっていうのもあるけど、翡翠が心配だ」

「あんな馬鹿兄のことを皇太子様が心配してくださってありがとうございます」

瑠璃がそういうと、龍清は軽く首を振った。

「ところで、赤い髪の子、紅貴君だったかな？あとでゆっくりお話ししたいんだけど良いかな？」

はい、という声を出す前に、自然と紅貴の首はこくりと頷いていた。

茶色の髪と翠色の瞳を持つ幼い少年は、前にいる女を見据え机の前に座っていた。目の前にいる女は、特別美人というわけでもなかったが、後ろで綺麗にまとめられた黒髪のお団子や、赤い着物の間から僅かに覗く鎖骨が、色っぽいと、少年は幼いながらに思っていた。女をじつと見据えていると、紅が塗られた女の唇が僅かに動く。「史書、創世の巻の、秩序の世界の始まりの部分を読誦しなさい」声は、女の割には低く、強い響きが含まれている。しかし、それに臆して何も答えられないなんてことが起これば、何されるかわかったものではない。

「人々は、この世界の秩序を作り出した。秩序の世界と混沌の世界の線引きをしたのは妖術使いだった。神龍の体より生まれし世界に人間の秩序の世界と、混沌の世界の境界を作った」

普通であれば、5歳の少年が理解できる内容ではないのだろうが、

少年は、それをすらすらと答えた。

「それで良い。今日はこれでおしまいよ」

少年は驚いて、顔をあげる。午前中いっぱい勉強の時間だ。終わるにはまだはい。驚いているうちに、母親と同じ歳くらいの背が高い女は、少年を抱きかかえてしまった。同じ年頃の少年より、自分が背が低いことを知っていた少年は顔をゆがませる。

「何のつもりだ」

「さっき、力を使ったでしょう？」

「……っ！わざとじゃない！あんな力、使いたくて使っわけないだろう！」

「幼い身体にその力は大きすぎるわ」

女が、少し強い口調でそう言うと、同時に、急に襲ってきた胸の違和感に少年は小さな手で胸を押さえる。ぜいぜいと嫌な呼吸がこぼれ、そんな情けない自分に、少年は、空いている左手で、身に付けている深い緑色の、絹で出来た着物を握った。しばらくしてたどり着いた自室には、布団が敷かれていた。起きてすぐには、畳まれていたはずなのだが、再び敷かれているということは、こうなることを、少年を抱きかかえる女が見越していたのかもしれない。布団の上に降ろされた少年の目の前に、女の顔が迫った。女の黒い瞳と目が合う。

——優しい瞳だ

少年のことをこんな風に温かい目で見るのは目の前にいる 女——萩と、数人だけだった。こうして、力を使いすぎ、それに耐えきれないということを度々起こしていた少年は、周囲の自分に対する評価を、幼いながらも正確に把握していた。

多くの人が少年にかける声は、身を案じるものや、心配を表す言葉を使っていたが、その目はいつも少年を見下し、侮っているように感じられた。しかし、それをそのまま受け入れる気はなかった。単純に、悔しいというのもあったが、それ以上に、自分の側に就く人物に辛い思いはさせたくはなかったし、そうでなくても、もとも

と、侮られて、それを甘んじて受け入れるなんてことができる立場だとも思わない。力を抑える術を持たず、思うように行かない身体が齒がゆく、本当に悔しかったが、かといって何もしなくて良いとおもっていなかった。――まだ、他にできることがあるのだから。「萩、俺はやっぱり、誰にも負けない知恵と知識を得るつもりだ。だから、これからも頼む」

胸が苦しみを感じながらも、最後まで言い切ると、萩は柔らかく笑んだ。目を細めて、こちらを見る萩はどこまでも温かく、そして萩自身がどこか満足気だと、少年は思った。やがて、額に当てられた、萩の柔らかい手に誘われるようにして、少年は眠りについた。

翡翠は、急に眼を覚まし、勢いよく体を起き上がらせた。背中に冷たい汗が伝っているのを感じる。幸い、部屋に人の気配はない。動揺している自分を、白琳にだけは見られたくないと思っていたが、白琳がいないことに、翡翠は、ほおっと息をついた。右腕に違和感を感じ、ちらりとそちらを見ると、点滴につながれていた。

（仕事の成果か）

そう、一見、場違いなことを翡翠は思う。嘉国にある、医療品、点滴や、注射などといったものは軽玉と呼ばれる、特殊な玉で作られており、それは、主に弄国で取れる。嘉では、そのあらゆる硬さ、形に加工できるその玉を、嘉国の兵と交換で手に入れており、その交渉と、兵の手配は、翡翠が武官になってからは翡翠の仕事だった。――誰にも負けない知恵と知識を得るつもりだ

急に、声変わり前の自分の幼く、しかも弱々しい声が翡翠の頭に響いた。翡翠はそれを振り払うように、軽く頭を振る。そして、自分に言い聞かせるつもりで、声に出す。

「馬鹿らしい……！ 結局、餓鬼の頃のあれは悪あがきだったじゃないか。あの頃は、自分の立場を勘違いしていたんだ……」

声に出すことで、無理矢理現実に戻る。しばらくし、落ち着いた翡翠は、慶に着いてからのことを考える。白琳に連れられて、清院

養生所に向かったことまでは覚えていたが、清院養生所に着いてからの記憶がない。無理やり意識を失わされたか、そうでなければ、勝手に意識を失ったのだろう。どちらにしても、最悪だ。翡翠は、急に自分が情けなくなり、息を吐いた。

（……本当に、今も昔も、何もできないな）

翡翠は、そんなことを思いながら、再び横になり、目を閉じた。

第四章 星の願いは 3

日が沈みかけ、低い位置に白い月が覗くころ、紅貴らは、清院養生所と呼ばれる、慶最大の療養所に着いた。ここの医者らしい、白衣着物を着た女に案内され、紅貴、桃華、瑠璃、龍清の4人は翡翠がいるという部屋に向かった。

（一人で行こうとしたら、迷いそうだな）

案内されている途中、そんなことを思いながら、紅貴はあたりを見渡す。六畳ほどの患者二人くらいで使うことが多いという部屋は、同じ形の障子を紅貴達が歩く廊下に向けていた。その障子を開けて、医者らしき人物が出入りする以外は、静かだ。自然、紅貴たちも言葉を交わさず、静かになる。

「ここです」

そう、静かに声をかけられ、ここまで案内してくれた女を見ると、女は、それ以上何も言わずに、軽く一礼し、紅貴たちに背を向けた。目の前にある障子を開けてよいものだろうかと迷っていると、瑠璃がそれに手をかけ、そっと開けた。部屋は、二間続きで広い。その部屋の奥、見慣れた女らしき、後ろ姿がある。一緒に旅をし、見慣れているはずだったが、様子がいつもと異なっていた。いつもは下ろしている、腰まで届くか届かないかの長い髪を、白い花の簪で止めていた。普段は見えない白いうなじが露わになり、零れ落ちた一筋の後れ毛が、ひどく色っぽい。

「ひす……」

桃華が、いつもの明るくよく通る、可愛い声で、翡翠を呼ばうとするが、ゆっくりと振り返った白琳が、それをやんわりと止める。

しー、と、白琳の赤い口の上に、白く細い人差し指が軽く載せられた。しばらくし、手を下すと、白琳は、ほとんど音を立てずに、ゆっくりと、紅貴たちの前にやってきた。

「翡翠様、寝てますから静かに」

「これは、起きたら、翡翠、大変だな」

龍清がいった言葉に、紅貴は思わずうなずく。白琳はというと、首をわずかに傾け、不思議そうに龍清を見ていた。

「白琳その髪型似合うね」

「長い髪が邪魔だったものですから」

「翡翠は大丈夫なのか？」

白琳は、やわらか笑みを浮かべる。

「馬に乗ってお疲れのようですけど、大丈夫です。目ならすぐに覚めるでしょうしただ……」

暗いとまでいかないまでも、少し困ったような表情になり、微かに浮かんでいた、優しい笑顔が消えた。

「できたら、ここで5日はおとなしくしてもらいたいんですが、紅貴さんとしては、できるだけ早く洗に行きたいですね？」

紅貴は軽く頭を振る。

「どちらにしても、洗が冬の間は何もできないから、急いでばかりいても仕方ないよ」

それは、本当のことだった。一年の大半、雪で覆われている間は、身動きは取れない。今、急いで洗に行ったところで、雪解けには遠く、今は何もできないだろう。紅貴が幼い頃、洗を旅したことがあったが、馬を自由に使って、動き回ることが出来たのは、雪解けの時期だけだった。

——李京に並ぶ、色とりどりの店や、当たり前のように咲く桜。それを洗の人々が見たらどう感じるだろう。

ふと、そんなことを思っていると、ぐーという、気が抜ける音が響いた。音がしたほうを見ると、桃華がお腹を押さえ、上目遣いで、こちらを見ていた。

「お腹すいた」

そんな桃華に、瑠璃が自分の額に手をあて、やれやれというように首を振る。

「仕方ないわ。翡翠も寝ているようだし、夕飯食べましょう」

「白琳はどうするんだ？」

「私はもう少し、翡翠様のそばにいます」

「じゃあ、白琳、翡翠が起きたら言っておいてほしいことがあるの」

「何でしょうか？」

「煌李宮に、湖北村の報告所を出したんだけど、その返事に多分、5日くらいかかると思うの。慶の私宛に返事を送ってくれるように書いておいたから、返事が返ってくるまでは、慶から出発できないって」

桃華が、そう言つと、白琳の目が、わずかに丸くなった気がしたが、白琳が一度瞬きをすると、包み混むような温かい笑みを浮かべていた。

「わかりました。伝えておきます」

「じゃあ、みんなご飯食べよう」

養生所を出ると、日が沈み、夜になっていた。紅貴は空を見る。

薄い雲の間から、半月が淡い光を放ち、それが、ここの唯一の明かりだった。養生所の前に立つ門番が、提灯を持っていたが、それは数に入らないと紅貴は思う。辺りに、建物はなく、人の気配はここにいる四人だけだ。時々吹く風の音と、虫の声が聞こえるだけで静かだ。

「この辺りは静かだな」

「この辺りと学校の周りはいつもこうだよ。慶の東に行くと、にぎやかになるんだけど行ってみる？」

つい、皇太子であることを忘れそうになるような軽い口調で龍清に言われる。

「え、でも慶の東にある店は、私たち一般庶民が行くような場所で、龍清様のような方が行くのは……」

瑠璃の言葉に龍清は声を出して笑いだした。年相応の、無邪気な笑顔は、楽しそうだ。

「今まで、色々なところを旅してきたけど、貴族が使うような料亭で食えることなんてめったにないよ。そうだ、ちょうど良いから言っておくよ。俺に対して敬語は使わなくて良いよ。名前も、流れ星って書いて、流星、親父が考えた対して意味のない偽名で呼び出すくらいに、軽いのりで、呼んでよ」

「それはちよつと」

瑠璃が困ったように言うと、龍清は、にっこりと、親しみやすい笑顔を浮かべ、それを紅貴に向けた。

「紅貴は、俺と歳も近いようだし、頼むよ」

紅貴は、龍清の笑顔に、つられるようにして、こくりと頷いた。

慶の東、辺りに店が並ぶ一角に着くと、そこは、先ほどまでいた場所とは別世界だった。小さいながらも、いくつもの店が並び、入口に付けられた灯りは、呼び込みを行う、店の売り子の顔を照らしている。人通りも多く、夜だというのに、人の間を縫うように歩かなければ、前に進むことはできなかった。

「夜なのになぜいぶんにぎやかなんだな」

「慶では、夜市をやっているからね」

龍清がいった言葉を不思議に思っていると、横にいる、幼い顔がうん、と頷く。頷くと、龍清の柔らかそうな髪がふわふわと揺れた。

「この時間になると、今日の売れ残りが出るだろう？ それを安い価格で売り始めるんだよ。酒場も開くから、ここは、この時間が一番にぎわうんだ」

龍清の知識に感心していると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。「お譲さん、わしといっしょに食事でもどうじゃ？」

「何このおじいさん！こないで！」

聞き違いでなければ、元二將軍で、桃華と翡翠の学生時代の先生だという霸玄の声だ。

「ちよつと霸玄！ 何やってるの？」

「何じゃ子娘か」

霸玄の、心底がっかりとしたというような口調に、桃華は口を膨らませた。

「それはそうと、瑠璃、どうじゃ、わしと酒でも……」

「瑠璃に触らないで！」

霸玄の手を払い、桃華が高い声でそう言う。

「まったくうるさい小娘じゃのう。まあよいわ。こうしてここで会ったんじゃ。わしが飯をおごってやる。今日は、あの大食らいの生意気な餓鬼もいないようじゃから、食事代も、そんなにかからんじやろう」

霸玄がそうして、指を刺したのは、酒と食事、両方置いてありそうな店だった。入口は赤い提灯の灯りで明るい。

店に入ると、割烹着を着た短い髪の女が、霸玄に話しかけてきた。どうやら、霸玄はこの常連らしい。

「霸玄先生、今日はずいぶん沢山の方を連れてきたんですね。奥の座敷が空いてますよ」

女に勧められた座敷に座る。座敷には3つの角型のちゃぶ台が置かれ、向って一番左側のちゃぶ台はすでに、何人かの男たちがすわって、酒を飲みかわしていた。その中の男の一人、着物袖をめくった太い腕の男が、霸玄に言う。

「霸玄先生じゃねえか。今日は翠色の目の、いやに整った顔の坊主と一緒にゃねえんだな」

「たまには、生意気な糞ガキ以外と来てもよからう」

「それもそうだなあ。なんだ、周りにいるのは教え子かあ？」

霸玄はくくつと笑った。

「匠院義塾の学生は、こんな時間に出歩いたりせんよ。あそこは、あれで、規則が結構きびしいからのお。まあ、例外はいたがなあ」
直後、霸玄は、にやりと笑い、桃華を見た。

「あそこの学生が、決められた日の警備以外で、夜、外に出れるの

は、春の終わりに行われる慶誕祭りの時だけですよね？ 翡翠が言っていました」

「ほほう。よくっしとるのお」

「なんだ、それ」

「そのまんまの意味で、慶が作られた日を祝うお祭りよ。もっとも慶を祝うというよりは、自分達が楽しむことに目的が変わってきてるんだけどね」

瑠璃の説明に、隣のちゃぶ台に座る男たちが豪快に笑った。

「いつもは厳しい、匠院義塾も、その日だけは一日休みになって、夜まで遊ぶことができるんだよな。昼間は、兵についていない人だったら、誰でも参加できる制限なしの武術大会をやって、夜は夜で音楽を鳴らしたりして楽しい祭りだって聞いた」

紅貴は祭りというものに行ったことがなかった。儀式としての祭りなら、知識としては知っていたが、龍清の言葉を聞く限り、それとはずいぶん違うようだ。

「ちょうど五日後じゃな。祭りの前は餓鬼どもも気が緩むから、厳しくせんとな」

「そうだ！ 武術大会に紅貴も出てみたら？」

心なしが弾んでいる桃華の声に驚いて桃華を見ると、新しい玩具を与えられた子供のような無邪気な笑み浮かべている。そんな桃華に、紅貴はおずおずと言う。

「いや、おれ、剣使えな……」

「大丈夫、この五日間でみっちり私が鍛えるから」

有無を言わさぬ楽しそうな笑顔で言われた紅貴は、頷くしかなかった。

第四章 星の願いは 4

今、ここにはいないはずの気配に、翡翠は目を開けた。体を起き上がらせ、気配のする方——さきほどまで閉じられていたはずの硝子の窓の前をみると、そこに立っているのは、翡翠の部下でありながら、親友でもある駿だった。

「將軍が情けない醜態をさらしているって聞いたんだけど、本当だったんだね」

「てめえ喧嘩うつてるのか？」

辺りは夜の闇で支配されていたが、部屋に差し込むわずかな月明かりが、駿の姿を浮かびあがらせていた。窓から入ってくる夜風が、遊ぶように駿の黒髪をなびかせていたが、それをさして気に留める様子はない。代わりに、月明かりは、駿の別の表情を映していた。翡翠にとっては、意地の悪い、別の見方をすれば不敵な笑みともいえる表情だ。

やがて、駿は、窓を閉め、音を立てずに翡翠に近づいてきた。翡翠が寝ている寝台の横に座ると、意地の悪い笑みをいつそう濃くした。

「喧嘩売ってるのって質問だったけど、翡翠に喧嘩を売るのは俺の趣味みたいなものだからね」

駿の答えに、翡翠は思はず溜息をつく。疲れた時に出る種のものだった。

「まあ、今の翡翠が情けないと思うのは事実だけどね」

「……てめえ」

「冗談だよ。……よくわからないけど、気にしない方が良いよ。誰にだってこんなことはあるんだからさ。それに、翡翠はこんなこと初めてじゃないだろう？ 学生時代にも確かこんなことあったよな？ 今更気になることはないよ」

「お前、やっぱり喧嘩売ってるだろう」

駿はただ笑うばかりだ。意地の悪い笑みは消えていたが、楽しそうに見えるのはなぜだろう。そんな駿を見て、翡翠は再び溜息を吐いた。

「だいたい、なんでお前がここにいるんだよ」

「少し気になることがあってね。今まで恵国に行ってた龍清様に、話を聞きたかったんだ。龍清様が、慶にいるっ聞いてねえ、俺はこれから弄国に行くんだけど、その前にここに寄ったんだ。ああ、そうだ、漣も連れてきたよ。龍清様の話を一番聞きたがっていたのは、漣だからね」

「漣は？」

「天馬で、李を弔ってから、一度も休まずにここまで来たから、今は疲れたみたいで宿で寝てるよ。漣、運動不足なのかな」

翡翠は呆れてため息をついた。たとえ武官であっても、李京から一度も休まずに、ここまで来たとしたら、疲労は溜まるはずだ。文官の中では、珍しく、天馬に乗れる漣だが、普段は天馬に乗らない連なら余計にそうだろう。翡翠にしてみれば、一度も休まずに、おそらく一度も寝ることもなく天馬に乗り続け、疲労の色ひとつ浮かんでいない駿の方が異常だった。だが、この男は昔からそうだった。どういうわけか、いくら徹夜しようと、どんな訓練をうけようと、常に涼しげともいえる表情でいられるやつだ。

（そういえば、こいつの体力には覇玄も驚いていたなあ）

そんなことを考え、異常なのは駿の体力なのだと再確認する

「瑠璃……瑠璃ちゃんは元気？」

不自然に変えられた話題に、一瞬驚いたが、駿がわざわざこの部屋まで来た目的は、これなのかもしれないと、翡翠は思った。

「元気だ」

「それなら、良かった。——ちゃんと危険から守ってくれてるみたいだね」

「……そんなに気になるなら、直接会いに行けば良いだろうが」
「会わないよ」

「は？」

「会うと決意が揺らぎそうだからね」

外から僅かに入る夜風にかき消されてしまいそうな小さな声だった。

「お前一体何考えて……」

「邪魔したね。ゆっくり休めよ」

翡翠の言葉を遮るようにそう言うと、駿は窓から、外へ出て行ってしまった。駿がさったこの部屋は、静寂と闇が包み、わずかな月明かりがかろうじて、部屋を灯すだけだ。

——あいつは、やっぱり光より闇のほうが似合うな。

世間では若き天才などと呼ばれ、その容姿なども手伝い、何かと目立つ華やかな存在だが、本質は闇に近いのではないかと、翡翠は思う。そう、ちょうどこの部屋のような。具体的にどういうことだと聞かれても、答えられないだろうが、ただ、なんとなく、そう感じるのだ。——その駿が何かを企んでいる。

（やっかいなことにならなければ良いが……）

再び落ちたため息は、静かに闇に溶けていった。

駿が、宿、正確には宿として借りている部屋の一階の食堂に着くと、客がいた。

「久しぶりだね。桃華ちゃん」

駿が声をかけたのは、ちょうど、漣が桃華の湯のみに茶を注いだ時だった。桃華は、湯呑を両手で大事そうに持ち、駿の方を見た。

「駿、久しぶりっ」

そう、無邪気に見える笑みで言った。同じ地位に就きながら、先ほど会ったもう一人の二將軍、翡翠とは大違いだと、駿は思った。

「俺たちの居場所よくわかったね」

「天テンが見つけてくれたの。今ね、ちょうど漣から可憐の話を聞こうと思ってたところ」

駿も、桃華と漣が囲む円卓に着く。それを待っていたかのように、

漣が話し始めた。

「可憐はやっぱり恵から来た子だ。全部鳳華の言った通りで、可憐は恵の華族、月宮家の出身だった」

「やっぱりそうか」

口調はのんびりしているが、桃華の顔からは笑顔が消えていた。

「可憐ちゃんに、紅貴君を捕まえるように言っただけは檜悠様だつてね」

駿の言葉に、桃華は、湯呑を置くと、考え事をするように、手を顎の下に当てた。

「可憐は、やっぱり、恵国の皇位継承争いに巻き込まれちゃったんだね。……皇位継承の『証』を持って生まれた第一皇子灑碧様が亡くなちゃって恵国も大変だよ。実質、あそこには皇位継承者がいないんだもん」

「でも、皇子ならあと二人いるだろう？月宮家から嫁いだ妃の子供、第二皇子のていめいりょう挺明稜様と、同じ華族の光宮家出身の妃の子供、第三皇子のかいゆう檜悠様。いや、同じ華族出身の妃から生まれた皇子同士で、歳もそう変わらないから、継承者争いが起こるんだろうけど」

「正確には、本来、そのどちらにも皇位継承権はないわ」

桃華のきっぱりとした口調に、漣は驚いたように、桃華を見ていた。「本来、『証』が無いものに、継承権はないわ。理由はどうであれね」

「でも、『証』をもった皇子が亡くなった以上、どうしようもないんじゃないか？嘉国がそこまで気にする必要ないだろう。可憐に紅貴を捕まえるように命じたのは確かに檜悠様で、それが月宮家の地位を貶めるのが目的なのは明らかだ。だけど、本来それだって、嘉が気にする必要はない。気にしなきゃいけないのは、可憐を引き渡す時のことだ。こっちで、可憐が刑を受けた後、当然、可憐を恵に引き渡すことになるけど、その時に、可憐が言っただけを恵側に言わなきゃいけない。つまり、可憐が紅貴を狙ったのは、檜悠様に命じられちゃったってことを。でも、可憐を利用して、皇位継承を狙

うような皇子が、それを素直に認めるとは思えない。当然、皇族大事の恵国では、檜悠様のことを信じるだろう。そしたら、大変なことになるよな。檜悠様が本当のことを言ってくれば良いんだけど……」

漣は、一旦言葉を切り、お茶を飲むと、再び言葉を続ける。漣がお茶を飲んでいる間も、桃華の表情は硬かった。何か難しいことを考えているようなその表情は、剣を振り回す武官というよりは、朝廷における文官のようだと駿は思う。

「……中丞としての俺の役目はほとんど終わったようなものだけど、この後、法の執行を司る廷尉に引き渡して、それと並行して典客に檜悠様が本当のことを言ってもらうように頼んでもらう……本当にそれで良いのになって気はする」

「……この件はもつとややこしいと思うわ。まず、法の執行を司る廷尉が、刑罰を行うのは良いわ。ただ、典客に、恵国、いえ、檜悠様の交渉を頼むのはどうかしら。たしかに、本来外の国から来た人の相手や、外交一般をするのは、典客って役職の仕事だけど、それは一般的な場合。典客は檜悠様……恵皇室の皇子相手に何かいえる地位ではないわ。そもそも、国の成り立ち、歴史を見ると、恵と嘉の関係は……これは、この話には関係ないわね。とにかく、嘉の典客では恵国の皇室に物は言えないわ。それから、漣は、檜悠様が本当のことを言えば良いって言ったけど、そうでもないの。たとえば、檜悠様が本当のことを言ったとしても、嘉に良いことはないわ」

「どういうことだ？」

「逆に聞くけど、檜悠様が可憐に命じたことを認めたらどうなるの？」

「第二皇子挺明稜様の地位が確立して、檜悠様は地位を失うんだろう。ある程度仕方無いんじゃないか。どちらにしても恵国の民にしてみれば、皇位継承者がはっきり定まった方が良いだろう」

「うっん。そういうことじゃないの。確かに、皇位継承者ははっきり決まった方が良いだろうけど、証を持った人物が、皇位を継承し

ないと意味ないのよ」

「でも、証を持った皇子はいないんだろう？」

「極端なことを言えば、もし、檜悠様が本当のことを言わないで、それを理由に嘉に何か言ってきた……例えば、戦をしかけてきても、嘉が負けることはまずないから、そう言う意味ではまず問題ないわ。どうして、嘉が負けることはないかって話は今は置いておくけど……」

桃華が出した戦という単語に、漣は少し驚いたようだった。

「話を戻すわ。檜悠様が可憐に、紅貴を捕まえるように命じたことを認めたら、結果的には、間接的とはいえ、挺明稜様の皇位継承権の確立は、嘉がきっかけでことにならない？ 檜悠様のことを暴いて、結果的に、檜悠様の地位を失わせたのは嘉だから」

「確かに。でも、それがなんの問題があるんだ？」

「嘉が、証を持たない皇子を認めたことになるのが問題なの。……」

「歴史を見る限り、『証』を持たない者が、王位に就いた国は、荒れるか、時には滅びることさえあるわ。『証』もたない挺明稜様が皇位を継承して、恵が荒れれば、それは、嘉が、『証』を持たない皇子を継承者として認めたのがきっかけだった……なんて、あとの歴史書に書かれかねないわ」

「でも、証を持たなくても、うまくいくかもしれないだろう？」

桃華は、ゆっくりと首を振った。

「言い方を変えれば、うまくいくかいかんなんて関係ない……皇位継承者は、『証』を持ったものじゃなきゃいけないのは、この世界の理なの」

駿から見て、円卓の右と左、向かい合う桃華と漣を見ながら、駿は思う。桃華の思考は16歳のものではないと。漣は、駿と同じく、21歳だが、これだけ若ければ、『理』といわれて、納得する者の方が少ないだろう。顔立ちは幼く、精神年齢も一見幼いのもかもしれないが、その思考は16歳のものではない。ふと、「それが理だからね」そういつて笑う師、遙玄の顔を思い出し、駿は、二人に気づ

かれないように、心の中で笑った。

「じゃあ、俺はどうすれば良いんだよ」

悟られないようにしているつもりだろうが、漣の声はわずかに低くなっており、桃華に対し、少し棘があるのを駿は感じた。

「可憐を廷尉にも引き渡さないで、恵に渡すこともないように、引き止めてほしいの。この件に関しては、私ができるだけなんとかしてみるから、お願いっ」

漣は、府に落ちないといった様子で腕を組んで桃華を見ている。

漣の黒い眼は、細められ、桃華が言ったことに納得していないことは明らかだった。

「……武官は、だいたい、文官の決定に従って動くんだよね。武官に、あらゆる決定権を持たせちゃうと、暴走するから」

駿が、言葉を発すると、漣の眉が潜められた。

「武力を有するとともに、あらゆる文官がもっている決定権までもつてる唯一の官ってなんだっけ？」

「……二將軍？」

あまり、その単語を出したくないというように、漣が言葉を発するまでに一瞬の間があった。

「そう。二將軍。二將軍は、決定権と、実際に動くための武力があるから、緊急性があつてすぐ動かなきゃいけない時とか、どこの官の管轄か分からない問題なんかで動くのに便利だね。ようするに、何でも屋みたいなもんなんだから、こういう面倒な問題は押し付けちゃおうよ」

「わかったよ。鳳華に任せれば良いんだろう」

「ありがとう、漣。龍清からの報告によってはどうなるか分からないけど、これから恵国に行くから、その時に、なんとかしてみる。」

……嘉に悪いようにはしないから、安心してね」

先ほどまで無表情だったはずだが、桃華は笑顔になっている。いつもの、無邪気に見える、可愛い笑顔だ。しかし、無邪気に見えるだけだ。本当の無邪気な笑みというのは、瑠璃が見せる笑顔の

ことだろうな、と駿は思った。

（あの笑顔は見たいけど見たら決意が揺らぐんだろうな……）

「駿、どうしたの？ 急にぼんやりしちゃって」

桃華の言葉に、駿は、何ごともなかったかのように、にこりと笑顔を作る。ふと、桃華の見せる笑顔と、自分が作る笑顔は、似ているのではないだろうか、と、駿は思った。

（桃華ちゃんと俺は、やっぱり似たものどうしなのかな？）

再び見た桃華は、やはり楽しそうで、16歳の年相応の少女そのものだった。

第四章 星の願いは 5

ええーと……俺はなんでこんなところにいるんだろう

数歩分先に対峙する少女、桃華を見ながら、紅貴はそんなことを考える。昨夜は、瑠璃、桃華、龍清、霸玄と食事をした後、匠院義塾に戻り、そのままそこに泊まったのだが、夕食後、桃華はどこかにいってしまい、その後、姿を見ることがなかった。もしかしたら紅貴が寝た後にここに帰ってきたのかもしれない。今日はその桃華に起こされたのだ。しかし、その時刻が問題だった。紅貴が起きた時、起きている生き物の気配は、鳥だけだった。桃華に無理やり連れて行かれるような形で、外に出ると、辺りはやわらかな朝もやに包まれていた。春とはいえ、日が覗いてから、そう時間がたっていない早朝は、少し肌寒かった。

この場で起きているのは紅貴と桃華だけなのか、辺りは鳥の鳴き声を除けば、静かだった。もっと、辺りを見渡せば、綺麗な光景が見られたかもしれないが、とにかく眠い紅貴は、眠たい眼をこすりながら桃華についていくので精いっぱいだった。しばらく歩いて着いたのは、匠院義塾の敷地内にある道場だった。かつては、真っ黒だったであろう灰色の瓦の屋根が歴史を感じさせた。桃華が道場の木でできた戸を引き、紅貴は促されるようにして、中に入った。桃華は、立てかけてあった木刀を桃華に投げてよこして、にっと笑った。そうして今に至る。

開け放たれた道場の戸から入る、早朝の鈍い光が桃華を照らしている。いつもはお団子の髪は、今は高い位置で、ひもで括られているだけだ。髪はくるくると丸くなっており、桃華の幼さをより強調しているようにも見える。着ているのは、上下でつながった淡い桃色の服で、袖はふんわりと丸い。とても、武官には見えないが、その手には少女の見た目には不似合いな木刀が握られている。

「あの……桃華？」

「剣教えるっていったでしょう？」

眠い紅貴とは違い、桃華の明るい澄んだ声が言った。

「でも、いくらなんでも朝早すぎないか」

現に、紅貴と桃華以外の人影はない。

「こういう誰もいない時間に剣で汗をかいて、井戸の水をかぶるのが気持ちいんでしょう？ってことでいくよっ！」

（早い！）

正確には、そう思ったのが先か、紅貴が、かろうじて桃華の剣を受けたのが先か分らない。気づいた時には、桃華の剣を受けざる得ない状況に陥っていた。剣にびりびりと震動が伝わり、握りしめた剣の向こう側の桃華と視線が交わる。大きな茶色の瞳は、可愛らしいはずなのだが、その鋭い視線に射抜かれた。木刀を持った手からは汗が吹き出す。視線の先の桃華の桃色の口が笑顔を作ると、姿が消えた——ように見えた。その一瞬の隙、紅貴の心は恐怖に支配された。背からのぞくりとした気配に、後ろを振り返るが、桃華の姿を捉える前に、木刀が飛んでくる。紅貴がとらえられたのは、左耳を掠めるヒュッという鋭い音だけだった。なんとか、態勢を整えようとするが、間に合わず、木でできた床に押し倒される。ひんやりとした床の冷たさを背で感じながら、視線だけ動かして、左を見ると、木刀が首の横に当てられていた。

「本物の刀だったらいつでも首取れるね」

桃華の声が降ってくる。桃華が、木刀を外し、仰向けに倒れる紅貴を見下ろしてくる。紅貴は、なんとか起き上がるが、何も言うことができない。どきどきと脈打つ、いつもより早い心臓の鼓動を聞きながら、木刀を持って立ち上がると、背を冷たい汗がつつた。しかし、なにも今紅貴が感じている寒気は、汗のせいというわけではないだろう。紅貴は、木刀の先に見た桃華を思い出す。床に倒れる前に、紅貴の視線の先に見た桃華の鋭い視線に、捕らわれて、時すでにあの時負けていたのかもしれない。

「紅貴ってまったく剣の素人ってわけじゃないんだね」

紅貴にとっては場違いな明るい声に不意をつかれ、桃華を見る。先ほど、恐れた鋭い視線はなく、どこにでもいる16歳の少女の瞳に戻っていた。

「子供の頃は剣をちゃんと教えてもらってたんだ。もう何年もちゃんとした稽古はしてないけど」

「紅貴に剣を教えた人って結構強かったんじゃない？」

「……うん。見た目は全然そう見えないんだけど、すごく強かった」
「紅貴、その人のこと本当に尊敬してたんだね」

「わかる？」

桃華はにこりと笑って頷いた。

「なんか、紅貴嬉しそうだもん。紅貴が弱いのは、経験不足だからみたいだね。実戦が足りないっていうのかな？」

「そうかもな……」

実際紅貴は自分自身が敵と闘うことはなかった。旅をしている時も、守られていたのだから。いや、その後もか。

「というわけで、わたしが毎日剣の相手してあげる」

「毎日……？」

「実戦がたりないんだから、私が毎日剣の相手すれば、剣を使えるようになるんじゃないかな？」

それは正論なのだが、毎日あの剣を受けると思うと、恐ろしい。

「え、でも桃華毎日……それに、おれはどちらかっていうと型とかを教えてもらえたら……」

「剣の型なら、その尊敬してた方に教えてもらったんでしょ？それは、紅貴一人でも確認できるだろうし、戦った方がいいわ。ってことで毎日試合ね」

桃華は笑う。一見可愛らしい笑顔だが、その笑顔は、強制力を持っていると紅貴は思っていた。

紅貴が朝食を食べ終わった頃、白琳が匠院義塾に覇玄に連れられてやってきた。

「あれ？白琳、髪下ろしちゃったんだな」

昨夜、簪で止められていた黒髪は下ろされていた。髪が肩にかかり、白い着物との対比が綺麗だったが、紅貴は少し残念に思った。

「翡翠は白琳が髪型変えた所見たの？」

桃華の質問に、白琳は、考えるようにして答える。

「見ていないと思いますけど」

「それは翡翠……惜しいことをしたな」

龍清がつぶやいた言葉に、白琳は不思議そうに首をかしげている。
「ところで龍清様、翡翠も交えて話したいことがあるのですよね？」
瑠璃の言葉に、龍清が頷く。

「翡翠様でしたら、今は起きてますからお話できると思いますよ」

「じゃあ、翡翠のところへ行くこうか。これから恵に行くなら、どうしても知ってもらいたいことがあるんだ」

昨夜、翡翠が寝ていた部屋に着くと、翡翠は寝台で体を起き上がらせ、巻物を読んでいた。

「翡翠、大丈夫か？」

紅貴が翡翠に尋ねると、翡翠は巻物を置き、こちらを見る。

「別にお前に心配される必要はない。ところで紅貴、その怪我どうしたんだ？」

一瞬、なんのことだろうと、紅貴は思ったが、桃華と剣を打ち合った時、木刀が頬をかすめ、避け方を失敗し、少し切ってしまったのを思い出した。本当に大した怪我ではない。

「今日、桃華に剣の相手をしてもらった時に、一回目は剣を受けることができたんだけど、二回目は失敗しちゃって」

「……お前が、一回でも受けることができたなんて、桃華は相当手を抜いたんだな」

「本気でやるわけにいかないでしょう？」

どうやら、朝のあれは本気ではなかったらしい。紅貴にしてみれば、本気ではない桃華でもずいぶん恐ろしかったのだ。桃華の本気

はいったいどんなものなのだろうと、興味が沸いたが、それが見た
いか見たくないかどつちかと問われれば、どつちとも言えない気が
する。想像はできないが、きっと物すごく恐いだろう。

「で、龍清様、俺達に何の話があるんですか？」

翡翠は龍清にたいして敬語を使っているが、なんとなくぎこちな
いと紅貴は思った。

「恵国に行ったら、大変な噂を聞いたんだよ。妖獣がたくさんいて、
恵国の街や、村が襲われているらしいんだ」

龍清の言葉に、紅貴は耳を疑った。湖北村の妖獣だけでも十分あ
り得ない話だったのだが、恵国にはそれがたくさんいる。それはい
いたいということだろうか。

「その原因についても噂が流れてたよ。『呪い』だって」

——呪い。紅貴は、そんな曖昧な事象で、妖獣がたくさん発生す
るはずはないと思っていたが、不思議と、龍清の話の続きに引き込
まれていった。

第四章 星の願いは 6

「灑碧皇子さいへきって知ってる？」

紅貴は、灑碧という名を聞いたことがなかった。横にいる瑠璃を見るが、瑠璃も知らないようで首を振っている。

「恵国の、亡くなった第一皇子でしょ？」

桃華が答えると、龍清が嬉しそうに笑う。

「さすが桃華だな。そう、灑碧皇子は恵国での皇位継承権を持った第一皇子だ」

清風から、桃華に向けられていた笑顔が消え、口調も、淡々とした静かなものになる。

「灑碧皇子は、今から14年前に、火事が原因で亡くなった」

「火事？」

瑠璃が驚いたように問うた。

「王宮の一部、灑碧皇子が生活する屋敷が焼けて、それが原因で亡くなったんだ。ものすごい火事だったらしくて、まだ子供だった灑碧皇子は助からなかったらしいんだ。恵で今、妖獣が大量に発生してるのはその灑碧皇子の呪いだって噂が流れていたよ」

「……亡くなったとはいえ皇子様ですよ？そんなことが起こるんでしょうか？それに私は呪いで妖獣が現れるとはどうしても……」

紅貴も、白琳と同意見だった。

「なくなった灑碧皇子というのは、人間離れた容姿だったらしいんだ。目とかが人間のものじゃないみたいだったって噂をきいた。それに、その皇子、まだ幼かったらしいんだけど、皇子の周りでは物が壊れたり、それに、人もたくさん死んだらしいんだ。そういうこともあって、恵国の人々に、灑碧皇子は恐れられてきたんだ」

「……でも、それ噂ですよ？」

白琳の言葉に、龍清は頷く。

「一般の恵国の民が、灑碧皇子を見れるわけではないから噂だよ。で

も、それがいくら噂でも、恵国での灑碧皇子の認識はそういうものだったんだ。その灑碧皇子、火事で亡くなっただっていいだろう。その火事を起こしたのは明汐様らしい」

「明汐様って？」

瑠璃の疑問には桃華が答えた。

「恵国にはね、灑碧皇子の下に、ていめいりょう挺明稜様っていう皇子様がいるの。その皇子の母親が明汐様」

「そう、その方だ。その方が、火事を起こしたって噂をきいた。明汐様が灑碧皇子を殺したって」

紅貴の背を冷たいものがつたる。灑碧皇子は皇位継承権を持っていたといった。ということは……。紅貴は唾をぐくりと飲み、龍清に尋ねる。

「皇位継承者ってことはその『証』を持っていた？」

たずねた声は紅貴自身でもわかるくらいに少し震えていた。それに、たずねるといふよりは、確認するといったものに近い。

「双龍国にある国——それも一番歴史が古い国の皇位継承者だったんだから、当然『証』をもっていただろうな」

「『証』をもっていた皇子を殺した……？」

「そういう噂だな。灑碧皇子は明汐の子じゃないんだ。『証』を持つ第一皇子を殺したら、挺明稜様が皇位を継承するからって話だ。自分の子供に皇位継承して欲し……」

「そんな馬鹿なことがなんで起きるんだよ！」

龍清の言葉を遮るように、反射的にでた言葉は、紅貴自身も驚くような大きな声だった。握った右手は怒りで震え、熱を持っている。『証』を持った者を殺すなど何事だろうか。——失った後に後悔しても遅いというのに。自分の国のことではないのだが、なぜか余計に悔しく感じる。怒りのあまり、息がわずかに荒くなっていたが、紅貴はそれに気付かなかった。

「……噂だろ？明汐様が殺したとは限らない」

翡翠の、冷静な声が言った。寝台の上で体を起き上がらせ、腕を

組んでこちらを見る翡翠を見た紅貴ははつと我に返った。辺りを見回し、瑠璃、龍清、白琳が驚いたようにこちらを見ていることに、紅貴は気づいた。

「それに……たとえば、灑碧皇子が『証』を持っていたとしても、証をもっていない皇子より良い帝——王になったとは限らないだろう」翡翠の言葉に、再び、怒りが湧き上がるのを感じたが、かろうじて、押しとどめる。

「あの、双竜国では『証』を持つ方が王位を継承するというのは良く聞きます。その『証』って、いったいどういうものなんですか？」「そういえば、『証』が具体的にどういうものかはあまり知られていないんだったな。継承者の『証』は刺青みたいな感じで、体に現れるんだ。体のどの部分かは、その王家によって違うけど、それぞれの王家の紋章がね。うちだったら、剣を背景に、嘉という字に絡みつく龍がそうだし、恵国だったら、月の中に竹、それを背景に天に昇る龍の様子が描かれているんだよ。ちなみに、嘉の後継者は、胸、ちょうど心臓の上辺りに現れるんだ」

現れる場所が顔じゃなくて良かったと、龍清は息をついていた。「明汐様が恵国の、そういう証をもった皇子を殺したって噂がながれていて、亡くなった皇子のそれに対する恨みが呪いになった……それが原因で、妖獣が現れたって話だ。元々、灑碧皇子に関しては何となく妙な噂がながれてたから、それと結び付けられちゃったんだろうな」

「でも、やっぱり呪いで妖獣が現れるなんて、そんなことありえない！それ以外の原因があるはずなんだ！考えたくもないけど、俺以外の妖獣使いが、妖獣を呼んだって話の方がまだ現実的だよ！」

紅貴は、着ている服を握る。そう、自分以外の妖獣使いがいるなど考えたくもない。実際には、一人いるのだが、彼女はすでにほとんど力を失っている。紅貴の脳裏を過ぎったのは別の人物の顔だった。奴ならば、妖獣を大量に呼ぶこともできるかもしれない。自分と同じ色の髪を持ち、獣のような黄金の瞳の男。自分を見下ろすそ

の姿は、男でありながら、女のように整った容姿をしていたが、女のような優しい空気は持っていなかった。獣、いや、自身が妖獣のような男だ。わずかに笑みを浮かべる赤い唇は、まるで、獲物の血のようだと思ったのを今でも覚えている。思い出すだけで、寒気がする。――だが、あの男は、もうこの世にはいないはずだ。

「紅貴、大丈夫？」

ふいに声をかけられた方を見ると、瑠璃の優しい青い瞳が心配そうにこちらを見ていた。

「うん、大丈夫だ」

なんとかそう言い、現実に戻る。――昔の記憶に囚われそうになっていたらしい。気持ちを切り替えようと、息を吸うと、少し心が落ち着いた。

「というわけで、これから恵に行くなら、妖獣は注意して欲しいんだけど、二將軍にお願いがあるんだ」

「なんだ？」

龍清に対する敬語が消えている。どうやら、これが龍清に対する、素の翡翠の態度らしい。

「恵国と嘉国の約束で、どちらかの国に災害とかが起きたら、もう一方の国に報告することになっているんだけど、その報告が嘉にきていないよな？ 嘉国の皇子の代わりとして、正式な形で恵の王宮に訪問して、事情を聞いてきて欲しいんだ。そうすれば恵国を助けることができるから」

「わかったわ。皇子……嘉国の皇太子の代わりね。ねえ、それに紅貴も連れて行って良い？」

「俺！？」

紅貴が驚いて声をあげると、桃華が、なんでもないことのように頷いていた。驚く紅貴をよそに、嘉国の皇子の言葉が続く。

「かまわないよ。というより、瑠璃と白琳にも使者としてついていってもらおうと思ってたから」

「ちよつと待ってください！ 私が他国の王宮にいくなんで！」

瑠璃が慌てて声を上げている。

「瑠璃と白琳も行った方が見栄えが良いだろう？そんな心配しなくても大丈夫だよ。何か発言しろってわけじゃないんだから。そういうのは、俺の代わりにいってもらう二將軍に任せて、楽しんできなよ」

そういう問題なのだろうかと紅貴は思うが、龍清は、問題はないというように笑っている。

「これで、話は終わりだけど、実際のところ、恵国がどの程度妖獣の被害を受けているか分からないんだ。だから、気を付けてな。もっとちゃんと調べたかったんだけど、豹馬に止められちゃって……」
「当たり前です」

聞いたことのない、太い低音がそう言った。障子戸を開けて入って来たのは、見たことのない男だった。背が高く、自然と見上げるようにな形になった男は、いかにも、というような武官らしき男だった。短く刈りあげられた黒髪は堅そうで、切れ長な黒い瞳は怜悯な印象だ。立襟の黒い服からのぞく腕は、太く、鍛えられていた。闘ったら強いんだろうな。

見た目は、二將軍の桃華と、翡翠よりもはるかに強そうだ。腰にさしてある大きな白い剣の鞘には、鷹の模様が入っており、それがそのままこの男を表しているようだと思っただ。紅貴は思った。

「固いこというなよ。豹馬」

「どんなに遊び歩いているとはいえ、仮にも、皇子であるあなたを妖獣が出るとされてる場所に留まらせるわけにはいきません。……ご挨拶が遅れました。私は、ここにいる駄目な皇子、龍清様の護衛役を務めています、豹馬です。麒麟様と、鳳華様はお久しぶりですね」

「久しぶり」

桃華がいつもの口調でそういうと、豹馬は軽く頭を下げた。

「どこかの皇子のせいで嘉に戻るのは久しぶり何じゃないか？」

翡翠に聞かれた豹馬は頷く。

「さんざん連れまわされましたから。……身体の方は大丈夫ですか？」

「……ああ」

「で、何の用だよ、豹馬」

「龍清様にお客様がいらしゃってます。皆様とお話が終わりましたら、わたしと一緒にいらしゃってください」

「仕方ないな。ちょうど話も終わったところだし、今行くよ」

「最後にいいか、龍清。……なんでそんなに恵にこだわるんだ？」

もう、完全に翡翠は敬語ではなかったが、龍清は気にしていないようだった。

「この街、慶はもともと恵国からの学問の先生を招いて作った都市だ。この街が、恵国と同じ響きを持っているのは、そのためだな。そもそも、嘉国ができたのも、恵国があったからだ。翡翠も知っているだろう？」

翡翠は何も答えなかった。

「嘉国は慶国に恩がある。だから、助けるのは当たり前だろう？ 何より、今後の嘉と恵のためにもな」

そう言って、翡翠を見る龍清からは、強い意思が感じられた。紅貴自身も、その強い意志に、心が温かくなるのを感じた。しかし、なぜか翡翠の表情は少し険しかった。そんな翡翠を、桃華が無表情で見つめていることに紅貴は気づいた。

「……わたしたちもそろそろここ、出ましようか」

瑠璃の言葉に、白琳と桃華が動き始める。

「桃華、ちよつと待て。匠院義塾から、弄国関係の資料を、できるだけたくさん借りてきて欲しい。本当は俺が取りに行きたいんだが……」

「最低でも5日はおとなしくしてくださいね？」

白琳がにこりと笑って言う。綺麗な声だった、どこか強い印象の声に、翡翠は黙ってしまっていた。

「わかった。持ってくる。でも、調べものも良いけど、あまり無理

しないでね？」

桃華にそう言われた翡翠は、溜息をついていた。桃華の言葉にとどめを刺されたようだ、紅貴は思った。

翡翠がいる養生所を出た瑠璃は、街中を歩くことにした。慶の東が一番にぎやかになるのは、夜だが、昼間のこの時間も十分人が多かった。

「お譲さん、簪はいかがかね。瞳の色にぴったりだよ」

店の主人の手に握られた簪は、青い花があしらわれ、日の光をうけて輝いていた。主人が手を動かすと、反射してまぶしい。瑠璃が、簪を見ていると、その店に見たことがある後姿があることに気づいた。

「楊花さん？」

瑠璃の声に振り返った女は、やはり、楊花だった。桃華と同じ歳だというその女は、桃華よりも歳上に見える。——ひょっとしたらわたしより大人っぽいんじゃないかしら、と瑠璃は思った。こうして見ると、綺麗な子だ。まっつすぐな黒い瞳は、黒曜石のようで、そこだけは年相応の純粋さがあるような気がする。髪は括つてあるだけだったが、日の光をうけて、つやつやと輝く髪は、とても綺麗な。白琳が、花のような美しさをもっているとしたら、楊花は日の光を受けた緑の葉のような美しさがある、と瑠璃は感じた。絶世の美女というわけではなかったが、まっつすぐな心がそのまま表れたような、綺麗な子だと、瑠璃は思う。

（こうしてみると、桃華と喧嘩していたなんて信じられない）

「何か御用ですか？桃華と一緒にいた方ですよね？」

癖なのだろうか。腰にさした剣に手を乗せたまま訊ねてくる。

「わたし、瑠璃っていうの」

名を名乗った瞬間、なぜか楊花は驚いた表情を見せた。

「あなたが？」

「わたしのこと知ってるの？」

「ええ」

「ねえ、良かったらこれから私と食事でもどう？」

楊花はこくりと頷いていた。

食堂に入り、案内された席は、路に面した場所だった。壁がほとんどなく、開放たれている場所は、春の風がおだやかに吹き、気持ちが良い。運ばれてきた、炒飯と、餃子が、赤い卓の上に並べられたが、それに手をつけることなく、楊花が話し始める。

「駿から、あなたのことを聞いたことがあります。駿が、あなたのことを話す時はいつも嬉しそうでしたよ」

「楊花は、駿の知り合いなの？」

「子供の頃、同じ孤児院で育ちましたから」

「孤児院？」

駿が孤児院で育ったなど、聞いたことがなかった。

「はい。わたしも、駿も、それから、駿の弟の豹馬も両親がいまさんから、孤児院で育ったんです。だから、兄弟みたいなものだと思います。……駿は自分のことをあまり話したがりませんからね」

そういえば、そうだと瑠璃は思った。瑠璃と一緒にいる時、駿は、常ににこやかに笑っているし、色々面白い話をしてくれるのだが、駿自身について話すことはあまりない。だから、駿が幼い頃の様子など、瑠璃が知るはずがなかった。だが、目の前にいる少女は、一緒に生活していたのだから、当然知っているだろう。

「駿が子供の頃ってどんなだったの？」

「今とそんな変わりませんよ。昔は、憧れの兄のような存在でした。勉強も教えてくれました。剣も強かったですし……それに、畑を耕すのもうまかったんです」

畑を耕す駿というのは、なんとなく意外な気がし、瑠璃は思わず笑った。李京では、駿は、少女たちの憧れの存在である。それは、物語に登場する皇子に対する憧れのようなものに近いと、瑠璃は思っていた。そんな駿が畑を耕していたなどと知ったら、少女たちはさ

ぞかし驚くだろう。

「それに、優しい人です。昔、孤児院があつた村が、盗賊たちに襲われたんです。駿は、剣が使えましたから、郷兵が来るまでの間、大人たちと一緒に、戦いにいったんです。その時、わたしも行こうとしたんですけど、駿に止められて……帰って来た駿は、返り血を浴びて血だらけで……。せつかく私たちを助けてくれたのに、怖くなくて、私、駿のところから逃げちゃったんです。それでも駿は、笑みを浮かべるだけで。拒絶されても、温かく接してくれる駿は優しい人だと思います」

「そう……昔から駿は優しかったのね」

「それと同じくらい黒い部分も……いえ、なんでもありません」

「そういえば、桃華とは仲が悪いみたいだけど、どうして？」

「……あの子と、仲良くなることは一生ありません。あのへらへらしている態度、何も考えずに、思いつくままに動く姿……！どうしても、相容れることができません」

「そういう楊花は、きつと見た目通りの、真面目な性格なのだろう。」

「でも、楊花から見ても、やっぱり桃華って強いんでしょう？」

「……剣の腕だけなら、天才と呼んでも良いでしょうね」

瑠璃はふと、翡翠が言っていたことを思い出す。何年か前のことだ。瑠璃は桃華が武道に長けているとは信じられず、翡翠に今楊花に尋ねたことと同じことを聞いたことがあるのだ。

——若い女だと、見下してるやつも多いが、あいつは、剣に関して天才だ。……あんまり、天才という言葉は使いたくないが、そうとしか言いようがない

そう言つて、珍しく笑つた翡翠を不思議に思つたものだ。

「やっぱり、桃華って強いよね。本気で闘っているところを見たことがないけど」

「そういうところも腹たつのよ！……でも、それで良いと思つてます。剣の腕はたしかで、でも腹が立つわがままな女。あの子を認めるのは剣の腕だけで十分です。剣以外も認めなくなるような性格の

あの子なんて見たくありません」

他は意地でもみとめないというように、楊花は首を振っていた。

「そういうもののなの？ 仲良くすれば良いのに」

瑠璃が聞くと、なぜか楊花は噴き出すように笑った。

「本当にまつすぐな方なんですネ、あなたは。駿が大切にすることもわかります。駿は、心が綺麗な方が好きですから……ただ……」

笑顔が消え、目が伏し目がちになる。

「駿は、駿にとって大切なものを守るためだったら、どんなこともやる人です。返り血を浴びた駿を見て、わたしはそう思いました。たとえ駿がどんなことをやっても、もし駿を大切に思うなら見守ってあげてください」

瑠璃は、思わずこくりと頷く。路に面したこの場所は、路を歩人々の話声が聞こえ、にぎやかだった。しかし、今の瑠璃に、街の声は聞こえていなかった。瑠璃は、楊花の言葉の意味を考えていたのだった。

第四章 星の願いは 7

「久しぶりじゃの、翡翠」

口調こそ、歳を感じさせるが、それとは逆の、張りのある声に、翡翠は顔を上げた。いつもの癖で、何の用かと問おうとしたが、覇玄の言葉が続いた。

「桃華から、お前が弄国の資料を欲しがっているときいてのう。仕方ないから匠院義塾の書庫からもってきてやったぞ」

覇玄は、そう言つと、手に持っていた桐の箱を床に置いた。どす、という音は思いのほか、重かった。

「何でも良い。取ってくれ」

「学生時代の恩師に敬語も使えないのは相変わらずじゃのう」

そう言いながらも、覇玄は、桐の箱の蓋をあけて、書物を取り出した。手渡されたそれは、元々は綺麗な紺色だったのだろうが、色褪せていた。翡翠は、そっと、渡された書物を開いた。慎重に扱わなければ、すぐに破れてしまいそうなほどに、年代を感じさせる物だったのだ。

「今更弄国関係について調べるなんてどうしたんじゃ？お前のことだ、弄国のことならほとんど頭に入ってるじゃろ」

「……そのつもりだが、見落としているかもしれないからな」

そう言い、翡翠は書物に目を落とすが、溜息を着く。予想はしていたが、書物の内容が期待外れだったのだ。

「やっぱり、古語では書かれていないんだな」

「武官を育てる匠院義塾じゃあ、古語を読めるやつはほとんどいないからのう」

もつとも匠院義塾以外でも、文官以外で古語を読めるものはいないが。そう言つて、覇玄は笑った。

「だから古語が良いんだ」

かつて、嘉国や、恵国があるこの地、双龍国では、今は古語とよ

ばれる言語が使われていた。しかし、古語で使われていた文字は、難解で、一般に周知させるのは困難だったという。そこで新しく考えられたのが、今、双龍国で使われている現代語である。古語が使われていた時代の書物は、現代語に訳されている物もあるが、それが必ずしも正確に訳されているとは言えなかった。一般に古語が広まっていないことを良いことに、訳者にいとつて都合の悪い部分の情報は訳さないこともあるという。それになにより、一文も訳されていない古語の書物も多い。そういうわけで、現代語よりも古語で書かれた書物の方が、多少正確な情報が得られるはずだと、翡翠は考えていた。

「そこまでして、いったい何を調べるつもりじゃ？」

「駿に頼んで、弄国に行ってもらうことにしたんだが、あいつは何か良くないことを企んでる気がする」

「汐家の役目に関することじゃないか？」

「……もしそうなら、あいつは真っ先に俺を殺すはずだ。……俺がやったことを知ったら、だがな」

翡翠が、独り事のようにそう言うと、覇玄は、少し怒ったように睨むようにして翡翠を見た。覇玄が何か言ったら、分が悪そうだと思う、翡翠は慌てては言葉を付け足す。

「龍孫様に恩があるからそう簡単にあいつに殺られるつもりは無いがな」

「武官になったのは、龍孫様の力になるため、とでもいうつもりかのう」

いつもよりわずかに低い覇玄の声は、深いため息のようなものが混ざっている気がする。

「何が言いたい」

翡翠は確かに、龍孫の力になるために武官になった。嘉国の王妃、清織に、文官になることを勧められたこともあるが、体を動かす方が好きだったし、なにより、できるだけ嘉国の政まつりごとに関わりたくなかったため、武官になることを選んだ。武官になって、一兵士として

多少なりとも役に立てれば良いと。——もつとも、嘉国の王、龍孫の命により、二將軍なんていうものになってしまい、政にも、関わるざる得ない状況になってしまったが。

翡翠がそんなことを考えていると、覇玄の乾いた笑みが聞こえる。——呆れられているようだ、と、翡翠は思った。

「それはおまけじゃろう。お前が、武官になったのは、別の理由だと思っっていたが？」

翡翠が武官になったのは、龍孫に恩を感じ、その力になるためだった。確かにそのはずなのに、翡翠は、自分が動揺しているのを感じた。鼓動が、いつもより大きく聞こえる。まるで、知られたくないことを知られた時のようだ。

「……他に何の理由があるんだよ。まあ、商人に向かないから、武官になったっていうのもあるが」

動揺しているのを悟られないように注意しながら、できるだけいつも通りの口調に聞こえるようにそう言った。しかし、覇玄は声を上げて笑う。

「自分でも武官になった本当の理由を把握しておらんのか。こりゃ、傑作じゃ」

「俺は本当に、龍孫様のために……！」

声を荒げて言うが、覇玄はいっそう大きな声で笑い、どこからかうような口調で言う。

「わしの知ってる翡翠は、誰かの為にとか、素直に口に出して言うようなやつじゃなかったと記憶していたが、勘違いじゃったかのう」
「覇玄……！」

いい加減にしろ、と翡翠にしては珍しく大きな声で、言おうとしたが、自分の咳に阻まれた。どうやら、少し調子に乗り過ぎたらしい。しばらくし、落ち着くが、なんとなくきまりが悪くなり、溜息をついた。

「そうなったのも、お前が今ここにいるのも、力を使い過ぎたからじゃろう。力を使わないと、妖獣を倒せないほど、お前が弱かった

とはのう」

「好きで使ったわけじゃない。押さえが効かなかったんだよ」

「せいぜい、それで身を滅ぼさないことじゃな。周りが迷惑する」
それには何も言い返すことができず、翡翠は思わず押し黙る。

「もうすぐ慶誕祭じゃのう」

先ほどより、穏やかな口調で、語りかけるように覇玄が言った。

「それがどうした」

「ああいう祭りは、男女で行きたいものじゃのう。わしは、若くて綺麗な娘を誘って、一緒にいくつもりじゃ。若い娘は、ああいう祭りに、わしのような良い男と行きたがるもんじゃろう?」

「歳を考えろ、じじい」

「お前は行かないのか?」

「……余計なお世話だ」

いいかげん帰れと、覇玄を下がらせ、部屋は再び翡翠一人になる。

「慶誕祭か……」

翡翠は、窓をぼんやりと見ながら、つぶやいた。

「紅貴、入るぞ」

匠院義塾の紅貴が泊まるために借りた、畳が敷き詰められた一室。そこで紅貴は昼寝をしていたが、龍清の声に起こされる。

「龍清か。起こしてくれてありがとう」

紅貴がそういうと、龍清が不思議そうに首をかしげた。

「いや、桃華に木刀で襲われる夢を見ていたんだ」

龍清は目を細めて、声をあげて笑う。

「桃華は強いからな。まあそんなところも良いんだけど」

「龍清は本当に桃華のことが好きなんだな」

龍清は、嬉しそうに頷いた。もう慣れた反応だが、につこりと笑う龍清は、本当に幸せそうだ。

「桃華のどこがそんなに好きなんだ?」

確かに、桃華は可愛らしい。見た目は。人の好みはそれぞれだと

思うが、龍清の桃華にたいする気持ちは、少々異常ではないかと紅貴は思う。

「もちろん全部好きだよ。かわいい所も、剣が強いところも、意外としっかりしているところも。それに、部屋の掃除ができないところもな」

「部屋の掃除ができないところも好きなのか？」

龍清は、うん、と頷くと、少し落ち着いた声で言葉を続けた。

「それから、時々危なっかしいところもね。全部ひっくるめて桃華が好きだ。初めて会った時……」

龍清の視線が変わったような気がした。龍清の目は、紅貴を見ているはずなのだが、視線は、その先ずっと遠く。まるでどこか遠い過去を見ているようだ。

「初めて会った時、どうしても桃華を守りたいと思ったんだ」

そう言って、龍清は再び、にこりと笑顔を作った。

「そうだ紅貴。紅貴って洸国を救うんだってな」

「うん。今の洸はひどすぎる。あの国では、生きていくのが大変だから……」

紅貴は手をぎゅっと握る。ただでさえ、一年の大半が雪で覆われる国なのに、洸国の皇帝、紫淵は、それ以上に洸国の民を苦しめている。——紫淵。その名前を思い浮かべるだけで、紅貴はやり場のない怒りを感じる。そいつのせいで——そいつがいるから洸国の民も、それに、紅貴にとってかけがえのない人も死んだ。ひたすら悲しみにくれる日々は当に過ぎ去った。ふつふつと湧き上がる怒りは、出口を失ったように心を震わせている。

「紅貴？」

「いや、悪い」

「『凜河の盟』ってあるだろう？」

「ああ」

「俺はいつかそれを破棄したいと思っている」

「え……？」

龍清が言った常識では考えられない言葉に、紅貴は呆然とする。

「『凜河の盟』。それは、嘉と洸の間で結ばれた盟約で、それがあ
るから、今は、嘉と洸は今争っていない。ただ、変だと思わない
か？こんなことを洸で生まれた紅貴に言うのもおかしいと思うんだ
けど、嘉と、洸が戦争していた時、洸の方が有利だったんだ。そ
れが、互いの国に互いの軍を入れるのを禁止して、実質、国交を一
切なくするような形で戦争をやめたなんて。洸国には何の益もないよ
な」

「……嘉国の何かと引き換えに、洸国は戦うのをやめて、今の国境
で落ち着いたって聞くけど」

「そう、それだよ紅貴。戦いに遥かに有利だった洸が、戦うことを
やめるくらいの物を嘉は渡した。多分、相当大事な物だったんだ。
だけど、それだけの物なら、嘉はそれを取り返さなきゃいけない。
そんな気がするんだ」

紅貴は、再び声をあげそうになった。

「ごめん……やっぱり、洸で生まれた紅貴に言うことじゃないよな」
「違うんだ！」

紅貴は、慌てて龍清が言った言葉を否定する。

「俺も同じことを考えていたんだ！」

今度は龍清が驚く番だった。もともと大きな瞳がさらに丸くなる。

紅貴は、そんな龍清を見ながら、言葉を続ける。

「洸国が凜河の盟を結ぶために得たそれはぜったい嘉に、返さなき
やいけないんだ」

——紅貴は、嘉国の王に、奏上した時のことを思い出す。

「……龍清、俺は、理由があって洸が凜河の盟と引き換えに得たも
のが何かを知ってるんだ。今一緒に旅をしているみんなが洸に行く
ことを許されたのは、洸が救われた時には、嘉にとってかけがえの
ないそれを返す……それを嘉国の王、龍孫様に約束したからなんだ」
龍清は、信じられない、というようにこちらを見ている。

「そうだな。龍清はこの国の皇子だよな。嘉国にとって大切なもの

を取り戻すのは龍清の願いだろうか？」

「うん」

「その願いを叶えるって、約束するよ」

紅貴は再び、洸国に思いを馳せる。紅貴がまだ幼く、何も知らなかった頃、洸国で珍しく太陽が覗き、外で遊んでいたことがある。冬も終わりがかけていたその日、咲きかけの椿の花を見つけた。少しまぶしいくらいの光を受けて、雪に映える鮮やかな赤い花を見た。紅貴は、幼いながらに、綺麗だと思ったのを覚えている。――洸国では生きることについて、そういつたことに時間を割ける人間などほとんどいない。いつか、洸国に住む誰もがそんなことを感じられるような国になれば良いと、紅貴は思った。

そんな国になれば、きっと、龍清の願いも叶えられるだろう

第四章 星の願いは 8

慶に来てから数日、慶誕祭の朝、紅貴は桃華について行くようにして歩いていた。

「すごいな」

辺りを見回しながらつぶやいた紅貴に、横を歩いていた龍清が弾んだ声で言う。

「このあたりは、いつも静かなのにな」

紅貴が数日間滞在していた匠院義塾の周りは、慶の東に比べ、人通りも少なく、静かだった。しかし、祭りの日が近づくに連れて、次第に辺りの様子は変わっていった。祭りの今日、笛や太鼓の楽しげな音楽が聞こえ、路にはぎっしりと露店が並び、通りを歩く人々はそれを嬉しそうに見ている。金魚すくいに、りんご飴。そのどれもが、見たことないものばかりだった。紅貴が、何も知らなかった頃――まだ、何も知らず、紅翔のことを純粋に尊敬していた頃の話だ。紅翔は、綺麗な花が咲くところや、幻想的な氷が見られる場所へ連れて行ってくれた。連れて行かれた場所で見える景色はいつも初めて見るものばかりで、子供だった紅貴は素直に嬉しかった。まるでその頃のように、はやる気持ちをおさえられない。

「龍清、店に飾ってある花、あれなんだ？」

どの店にも飾ってある、白や赤の小さな花を指して聞く。

「あれは月蛩って言うんだよ」

「つきほたる？変わった名前の花なんだな」

「蛩……ああ、洸じゃあんまり見ないかな？ 嘉では、夏になると蛩っていう虫を見ることができるんだけど、この花はその蛩に似てるからそう呼ぶんだ」

「この花が虫？」

丸い花びらをつけた可愛らしいこの花が虫に似ていると言われても、信じられない。そんな紅貴の気持ちを察したように、瑠璃が後

るを振り返って言う。

「蛭っていうのはね、夜になると光る、とってもきれいな虫よ。この花は、夜になると、蛭みたいに光るからそう呼ばれるの。とってもきれいだから、夜を楽しみにしていると良いわ」

「うん」

「そういえば、龍清様もこれから始まる武術大会にでるんですよ」
瑠璃に言われた龍清は頷く。

「豹馬に反対されたけど、どうしても出たかったんだ。たまには桃華にいいとこみせようと思ってさ」

紅貴は、これから始まる武術大会のことを考え、息を吐く。桃華に初めて稽古をつけてもらった日から、毎朝桃華と打ち合ってきた。我ながら、よく耐えてきたと思うが、桃華以外と剣を交えるのは初めてだ。それを思うと気が重い。

「緊張してるのか？」

「龍清はしないのか？」

「俺はあんまり。それより、どんな奴と闘えるのか楽しみだ」

そう言って、白い歯をのぞかせ、いたずらっぽい表情で笑う龍清が剣を扱えるのはなんとなく意外な気がしていた。もちろん、王族の嗜みたしなみとして、剣を扱えるのは当然なのだろうが、それでも龍清が剣を使うところは想像できなかった。

（でも俺よりは強いんだろうな）

「紅貴と闘うこともあるかな？」

「そういえばそうだな。そうならやだな」

「俺は楽しみだけだな」

そう、好戦的な笑みを浮かべる龍清に、紅貴は何と言っていいかわからない。だが、ちょうどその時、瑠璃の声が聞こえた。

「武術大会の会場に着くわ」

瑠璃の声を聞いて、一瞬、身をこわばらせた紅貴だったが、毎日木刀を握って来た手を軽く握って気持ちを切り替える。武術会場の広場を映す紅貴の瞳には、静かな闘志が宿っていた。

祭りの朝、ようやく養生所を出た翡翠だったが、あいさつもそこそこに、匠院義塾の書庫に籠ってしまった。白琳は、そんな翡翠が気になり、書庫に向かった。

（そいえば、ここ数日ずっと何か調べてましたわ）

養生所にいる間ずっと、寝台の横に積まれた書物を読んでいた翡翠だったが、どこか険しい表情をしていた気がする。翡翠は、基本的にあまり表情が顔に出ず、常に不機嫌そうにみえると言われればそれまでなのだが、それとは違っていると、確信に近い形で白琳は感じていた。そんなことを考えながら書庫の戸を開けると、そこは一面、書籍と巻物の山だった。棚と棚の間を縫うようにして奥に進むと、そこに翡翠はいた。椅子に腰かけ、左手で巻物を開き、筆を持つ右手は、さらさらと字を綴っていた。白琳は、翡翠にそっと近づき、翡翠が字を綴る紙に視線を落とした。いつもは剣を持つ手は流れるように動き、書かれた字は流麗で、書の手本のようなだった。

「紅貴の剣術大会を見にいかないのか？」

視線を変えず、手を動かしたままで聞かれる。

「行くつもりですけど、まだ少し時間がありますから。翡翠様は？」
「俺は、調べたいことがあるからな」

祭りで人は出払っているのだろう。今、この場所にいるのは白琳と翡翠だけだった。外から、わずかに笛や太鼓の音が聞こえるが、ここの書庫だけ、祭りから切り取られたように静かだ。けれども、不思議とその静けさに悪い気はしなかった。

「白琳」

翡翠に話しかけられ、少しだけ首を傾げる。翡翠の視線は相変わらず巻物に向けられていたが、筆を動かす手は止まっていた。

「夜になったら、調べものも片付いていると思う。良かったら祭りに一緒にいかないか？……花火とかそういうの好きだろう？」

白琳は、嬉しくなり、にこりと微笑もうとした。——喜んで。そう言おとしたのだが、翡翠の言葉が続く。

「……紅貴は……たまにはあいつと離れたいからな。桃華は龍清一緒に行くだろう？妹の瑠璃と一緒に行くのもな。だから……」

なぜだか、まるで、翡翠が言い訳する子供のように思えて、おかしかった。笑みは声になって零れた。

「いいですよ。翡翠様と二人でどこかに行くなんて久しぶりですし」それに、と、白琳は、再び筆を動かし始めた、翡翠を見て笑みを浮かべる。

——それに、翡翠と出かけようとする時に誘うのは、大抵白琳からで、翡翠からどこかに誘うことはめったになかった。だから、翡翠から誘ってくれたのが嬉しかった。

「ではまた夜に」
そう言い残して、心に広がる温かいものを感じながら、書庫を出た。

翡翠の頬がわずかに珠に染まっていたのだが、幸い、当の本人も、そして白琳も気づかなかった。

武術大会の会場は、大いに賑わっていた。武器をもって対峙する男を老若男女問わずに囲み、歓声やら野次やらが、混ざり合うように飛び交っていた。剣と剣がぶつかり合う音は、人々の声に混ざるように響いていた。人々の間を縫うに歩いていると、知っている人物を見つけた。

「亮さん？」

湖北村で世話になったあの人物がいた。紅貴を見た亮は親しげな笑みを向けた。

「みなさんお元気でしたか？麒麟様はご無事ですか？」

「元気です。翡翠ももう大丈夫みたいです」

「それは良かったです。おや、そちらにいらっしゃるのは龍清様ですか？」

「お久しぶりです。亮先生」

「あの失礼ですが先生って……」

「亮先生は、子供の頃、俺に学問を教えてくれていたんだ。でも良いんですか？軍関係者はこの大会に出られないんじゃない？」

「大丈夫ですよ。わたしはとうの昔に軍は引退してますから」

「亮さんって軍関係者だったんですか？」

紅貴が驚いて聞くと、代わりに龍清が答える。

「亮先生は俺に学問を教えるずっと前は鳳軍にいたんだ。霸玄と同期だよ」

道理で強かったわけだと、紅貴は納得する。湖北村で、亮に助けられたことがあったが、鳳軍に入れるくらいの実力を持っていたなら納得である。

（そつえばあの桃華も亮さんには敬語使ってたしな）

もっとも、桃華も翡翠も元二將軍の霸玄には敬語を使っていないのだが。

「ではわたしは失礼します」

そう言い、去って行った亮の後姿を見ながら、龍清がため息をつく。

「亮先生がいるんじゃない優勝は無理かな。いや、だめだ。もしかしたら奇跡がおきるかもしれない、うん」

龍清が自分を励ますように言う。

「俺も頑張るよ」

話しているうちに、剣術大会の受付の幕まで着いた。少しどきどきしながら他の三人の一步前に出て名を名乗った。

「紅貴くんだね。ええーっと君の第一回目の対戦者は、と。ああ流星君って方だよ」

紅貴と龍清は思わず顔を見合わせた。

紅貴は刀を抜いた。靖郭でもらったあの刀だ。初めて触った時は、少し重かったそれは、今では少し手になじんだ気がする。紅貴は顔をあげ、紅貴の前から歩いてくる人物の顔を見る。周囲の歓声にも

動じず、風になびく黒い髪を振り払おうともせず、まっすぐに歩いてくる龍清は、たしかに強いのだと、肌で感じた。先ほどまで緊張していたが、今はそれよりも、龍清と闘いたいと思う気持ちが勝っていた。紅貴は深く息を吸って、武器を構えた。

「始め！」

声がかかり、動き出したのは二人同時だった。

紅貴が剣を繰り出そうとすれば、龍清はそれを防ぐ。逆に、龍清の剣も紅貴は全て防いでいた。毎朝、あの、動きが速い桃華の剣を受けていたのだ。目がそれに慣らされたせいか、龍清の動きを正確に捕えることができた。だからこそ分かる。龍清が強いと。吹き抜ける風のようなしなやかな動きで剣が繰り出され、細いと思っていた腕が持つ剣は、思いのほか力強かった。

キン！

金属と金属がぶつかる音が響き、紅貴と龍清の剣が交わる。かたかたと、振動を伝える紅貴の剣が、龍清の力強さを示していた。

（力じゃかなわない……！）

紅貴は、慌てて後ろに跳び、龍清と距離をとる。荒い息を吐きながら龍清を見ると、龍清は、大きく剣を振りかぶり、技を出そうとしているようだった。その隙について、胴を狙おうとするが――

「そこまで！ 勝者、流星！」

そう、高らかに宣言されるが、状況を把握するのに、数秒時間がかかった。やがてゆっくりと目線を上げると、脇に、龍清の剣がぴたりと当てられていた。どうやら、紅貴が龍清に剣を当てようとするより早く、龍清が動いたらしい。日の光を受け、二匹の龍が絡み合う彫刻が入った龍清の剣が、光を反射するのを見て、ようやく勝負がついたことを実感する。龍清の剣が紅貴の脇から外され、鞘にしまわれるのを見た紅貴は、無意識に止めていた息を吐きだした。紅貴も剣をしまい、先ほどまで紅貴と龍清が対峙していた場所をあとにした。

「紅貴、お疲れ様」

瑠璃の明るい声に迎えられる。

「負けちゃったけどな」

「でも、紅貴、強かったじゃない」

「ありがとう」

紅貴は素直に頷く。確かに負けた。負けて悔しいという気持ちも確かにあったが、それ以上に、嬉しさと、安心が混ざった不思議な心境だった。

——自分の剣が、少しは通用するようになったって分かったからかな。

「大会上位の常連の龍清様とあそこまで戦えるなんてすごいですね」

「白琳来てくれたんだ」

「始まる少し前に。かつこ良かったですよ」

「うん、紅貴すごかった。紅貴が負けた原因の半分は私のせいだし、これからまた特訓だね」

「桃華のせい？」

「あー……ええと、龍清は、わざと隙を作って、紅貴の攻撃をさそってたけど、毎朝の稽古の時、そういうこと教えてなかったなって」

「でも、龍清の動きを読めなかったのは俺だし」

紅貴はそう言ったが、桃華は紅貴の言葉を聞いていなかったかのように、明るい声で言う。

「だから、これからは、いろんな動きで攻撃してあげるねっ」

そう、無邪気な声で言われるが、声には、無邪気な子供にはない強さがあつた。

結局、剣術大会で優勝したのは、亮だった。優勝賞金は、湖北村の復興の足しにすると、嬉しそうに言う亮を見た紅貴は、これよかったかもしれないと思った。二回戦で亮に当たり、悔しがってた龍清だったが、桃華に励まされ、すぐに立ち直っていた。剣術大会が終わり、先ほどより落ち着いた熱気を肌で感じながら、紅貴は空を見た。日は、空の一番高い位置から大きく傾いていた。もうじき

日が沈むだろう。

第四章 星の願いは 9

匠院義塾の一室。翡翠は、筆を硯に立て掛けるように置いた。

（もうこんな時間か）

書庫から出た翡翠は、匠院義塾の一室を借りて、書き物をしていた。始めた頃、まだ昼間だったはずだが、窓から空を見ると、茜色をしていた。こんなに長い時間書き物をするのはずいぶん久しぶりだったためか、少し、肩がこっているような気がする。翡翠はゆっくりと立ち上がり、軽く伸びをした。刀掛けに置いてあった自分の刀を腰に差し、慣れしたんだ刀の重さにそつと安堵する。

——こんな格好だと呆れられてしまうだろうか。

深い緑の着流しに、刀を差し、しかもその刀の柄と鞘には布が巻かれている。見た目に気を使っているとは言えない格好に、我ながら苦笑する。

「翡翠様、入ってよろしいでしょうか」

聞きなれた、白琳の柔らかい声に、翡翠は答えようとする。

「ああ、かまわな——」

振り返って、翠色の瞳が写した白琳の姿に、声が奪われ、時が止まった。

いつもは下ろしている長い黒髪が優美な形に結いあげられていた。露わになった白い首筋に、わずかに残った黒髪が零れおち、それが余計に、白琳の肌の白さを際立たせている。窓から入ってくる茜色の夕日が、白琳の白い肌を照らしていたが、それすらも、白琳の美しさを際立てる一部でしかない。無意識なのだろうか。わずかに下げられた目線は、睫毛の長さを強調し、切れ長の瞳は、磨かれた黒珊瑚のような気品をたずさえていた。普段の白琳が着ないような、黒い着物は、白琳の白い肌に映えていた。派手すぎず、それでいて、優美な、赤や白の花が黒い着物に咲いている。しかし、それだけ美

しい着物であっても、それ以上に、白琳自身が、綺麗だった。ほんのりと紅が塗られたやわらかそうな唇が動き、耳に心地良い優しい声が言葉をつむいだ。

「やっぱり、私には似合わないでしょうか？」

上目遣いで問われ、翡翠は、口を開く。

「……………白琳にしては似合ってるんじゃないか？」

たったそれだけの言葉だったのだが、どこかうつとりとした表情で、優しい笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

それは、心なしか、いつもより暖かい声に、翡翠には聞こえた。

「……………祭り、行くか」

「はい」

そう、今度はにつこりと笑う白琳の笑顔には、綺麗さのなかにも愛らしさが含まれていた。

「翡翠たち、というか翡翠今頃どうしてるかな」

「びつくりしてるでしょうね。まあ私と桃華の手にかかればこんなもんよ」

瑠璃に、自信たっぷりに言われた紅貴は、数刻前のことを回想する。

「翡翠と一緒にお祭りに行くの？」

瑠璃がそう言くと、白琳はおだやかな笑みを浮かべて頷いた。

「これは、本気でやるしかないわね」

「そうだね」

紅貴は、最初、瑠璃と桃華が何をしようとしているのか分からなかった。

「白琳、とびつきり綺麗にしてあげるわ」

そう、口の端だけで笑みを作った瑠璃に本気をみたと紅貴は思った。

それからしばらくし、瑠璃と桃華に呼ばれ、白琳を見た紅貴は言うべき言葉を失っていた。

髪型を変え、化粧をし、着物を変えた白琳があまりにも綺麗だったのだ。

驚いている紅貴を見た瑠璃が、嬉しそうに言った。

「紅貴がこれだけ驚いているんだもん。あの馬鹿兄も喜ぶと思うわ。自信をもって行ってきて」

「ありがとうございます」

そう、少し照れたように、でもどこか嬉しそうに言う白琳は、紅貴にその気がなくても——もし、その気があるなんて思われたら、翡翠に何をされるか分かったものじゃないが。……そこだけ空気が変わったような、惚れ惚れする美しさだった。

「これで、馬鹿兄が、たまには良い所を見せられれば良いんだけどね。……白琳と翡翠はもちろんだけど、桃華も龍清様に連れられていっちゃうし、なんだかみんなが少しだけ羨ましい」

口調はいつも通り、紅貴にとってはしっかり者の瑠璃だったのだが、まっすぐに前を見る青い瞳は、少し憂いを含んでいるような気がした。

「ねえ、紅貴には好きな人ってっていないの？」

言った声は不自然に明るい。

「うーん……大切な人はいるけど、好きな人っていうのはよくわからないや。瑠璃は？」

瑠璃の瞳の憂いがいつそう濃くなったようだ。それを見るとすこしせつない気分にはせられる気がする。

「……一応、いる、かな？ でも、最近、その人が考えていることが分からなくなちゃって」

吐いた吐息は、重たい空気を含んでいた気がした。

自嘲気味な笑みっていうんだろ。僅かに笑っているはずなのに、そんな瑠璃の笑顔を見ていて、なぜだか、すこし心が痛い。

「……ねえ紅貴、大切な人のために、どんなことだってやるってどういうことだと思う？」

思い浮かんだのは、今はこの世にはいない、かけがえの無いあの人。憎らしくもあつたが、紅翔のあの手はいつだって紅貴を守ってくれていた。

「急に、こんなこといつてごめん！でも、翡翠や桃華にはなんとなく言いくくって」

その言葉を聞いて、瑠璃が紅貴に相談したわけがわかった気がした。——翡翠も桃華もいつだって守る側の人間だから……守られる側の気持ちは想像しにくいのではないだろうか。

「分かってほしいよな。こっちも大事に思っていることを」

「……うん、本当に。愚痴ばかり言つてごめん。少し、すっきりしたわ。紅貴つて、月蛭見たことないんでしょ？私が案内してあげるから、一緒にお祭りいこう」

そう言つて、笑顔を作つた瑠璃からは、憂いの表情が消えていた。

道に並ぶ露店には、月蛭と呼ばれる花が飾つてあつた。夜になり、月蛭が、淡い光を発している。いたるところに月蛭が飾つてあるものだから、まるで星の中を歩いているようだと、白琳は思う。

ちらりと、横に並ぶ翡翠を見る。月蛭に照らされ、こちら側を見ることなくまっすぐに前を見つめる翠色の瞳は本当に綺麗だ。初めて会ったとき、もうずいぶんと昔のことだが、子供ながらに、翡翠の翠色の目が好きだった。どこか強い力も含まれた瞳。ある時から、その強い光は少し弱くなつてしまつたけれど、今でも好きだ。……できることなら、またあの頃のような強い瞳をもう一度見たいと思つていた。

いつもは早足の翡翠が、自然に白琳の歩幅に合わせている。その気持が素直に嬉しい。

——優しい人だわ

そう、本当に優しい人だ。翡翠はその端整な顔立ちで、女官の少

女などから人気があった。しかし、同時に、近寄り難いと思われていたことも、白琳は知っていた。ある程度親しい人からは、良いのは見た目だけだなどと言われているが、白琳にとってはその見た目よりも、あまり気付かれない翡翠の不器用な優しさのほうがずっと、魅力的だった。その優しさと、もともと持っていた強さゆえに、大変な思いをしたことがあることも、白琳は知っていた。

「お姉さん、簪はどうかね」

露店から声がかかり、そちらを見ると、店の主人の手の上に簪が乗せられていた。赤い花と白い花が、艶やかに咲き、花からは小さな真珠のような珠が零れていた。けれども、決して派手すぎず、上品にまとめられていた。瑠璃がどこからか持ってきてくれた今着ている着物に合いそうだと、白琳は思った。

「綺麗ですね」

「欲しいのか？」

他意はなく、簪の感想を口にしたただけなのだが、翡翠は露店の前に行くと、店の主人に言う。

「それ、包んでくれないか？」

翡翠がそう言うと、店の主人はにやにやと笑って言う。

「そんな綺麗な姉さんと一緒に祭りだなんて良いね」

「おやおや。そうだ兄さん、その簪、お兄さんが差してやつたら？」

店の主人の横にいたおばあさんが、楽しそうに言い、簪を包まずに渡した。翡翠はぎこちなく、それを受け取った。

「……白琳、良いか？」

白琳が頷く前に、翡翠が白琳の前に立った。自然と両手を胸の前に当てるようにしていると、翡翠の端整な顔が近づいてくる。その頬は少し珠に染まっていた。

「……できた」

顔をあげると、珠と球が当たり、涼やかな音がした。

「あの、ありがとうございます」

「いや、いい」

そう、目を合わさずにそう言った。白琳は、急に歩きだしてしまつた翡翠について行くように横に並ぶ。

「もうすぐ花火が始まるな」

「はい。翡翠様、子供の頃一緒に花火を見たのを覚えてますか？」
たしかあれは寺子屋に通っていたころだから白琳が12歳だった時だ。李京の桜祭の最後、当時寺子屋に通っていた同年代の子供たちと一緒に花火を見た。そこに、子供だった翡翠もいて、一緒に並んで見たのだ。翡翠の返事をまっていたが、翡翠の手に、肩を寄せられる。翡翠の手が当たる肩は少しだけ痛い。目線だけ動かして翡翠の横顔を見ると、先ほどよりも険しい表情をしていた。

「白琳、来い！」

翡翠の固い手に、無理やり引かれ、人と人の間を縫うようにして走っていく。着いたのは、人が腰掛けことができる石が並ぶ、広場だった。そこにいた、見知った人物の元へ、白琳は連れていかれた。
「あれ？翡翠に白琳どうしたの？」

林檎飴を頬張りながら、聞いた桃華に、翡翠は抑揚のない声で一言だけ言う。

「桃華、白琳を頼む」

桃華の目が、武人のそれへと変わるのと、翡翠が白琳の手を放し、背を向けて走り去るのは同時だった。首の下の方で結ばれた、翡翠の長い茶髪が踊るように揺れ、着流しの後姿は人ごみにまぎれてあつという間に消え去つた。

「白琳、大丈夫か？」

桃華と一緒にいた龍清に心配そうに声をかけられる。

「……ええ」

そうは言つたものの、翡翠の険しい顔が忘れられない。白琳の手を引いていた、固い手と、それが離れる時の感触がまだ残っているようだった。やがて、夜空に咲いた華やかな花火に、辺りから歓声上がる。白琳は、その歓声をどこか他人事のように聞いていた。

翡翠と一緒に見るはずだった花火を見ながら、その目は別のもの

を見ていた。綺麗な翠色の瞳が見せた、険しい色。なんだか嫌な予感がすると、白琳は思っていた。――あの人は優しい人だから……どうか、何も悪いことが起きませんように。白琳は、心の内で強くそう願った。

第四章 星の願いは 10

翡翠は人がいない方へ人がいない方へと走って行く。花火が上が
る音が聞こえたが、翡翠はそれを他人事のように聞いていた。

先程まで、祭りの熱気の中にいて、それにゆだねるように歩いて
いたが、今となってはそれがだいぶ前のことのように感じられる。

翡翠は、そんなことを思いながら、立ち止まる。溜息をついて、左
手の人差し指と中指の間に挟まれた針を、布でふいた。

あの時——白琳と一緒に歩きながら、白琳が、子供の頃の話をし
た時だ。殺気を感じ、とつさに白琳の細い肩を寄せた。寄せた手の
指先で、掴んだのが この針だった。そのまま飛んでいたら、白琳
の白い首筋に刺さっていたかもしれない。おそらく、この針には毒
が塗ってあるはずだ。どんな種類の毒かは知らないが、もしも、
あの白琳の細い首に、針が刺さったら、と思うと、怖ろしい。

(……考えが甘かったな)

翡翠は、右手を握る。白琳の手を引いていた、その手だ。祭りで、
月蛸が照らす露店の間を、白琳と一緒に歩いていた時のことは、だ
いぶ前のことのように感じるが、白琳の手の感触はまだ残っている
ようだ、翡翠は思う。力を入れたら、折れてしまいそうな手。け
れども、その優しく、温かい手は、翡翠の手を包みこむようだった。
あの、やわらかい手を持つ白琳に何かあったらと思うと、底知れな
い喪失感を感じる。

しかし、そんなことが起こるとすれば、間違えなく自分が原因だ。
翡翠は歩を進める。進めると同時に、殺気を持った影も動く。後
ろに二人、左右に二人、前に一人。自分を狙って、動いていること
は明らかだ。翡翠は、再び立ち止まり、溜息をついた。

「いいかげん姿を見せたらどうだ」

自分でも驚くような低い声が言葉を言い終えたのが先か、影が
動いたのが先か——翡翠は、振り向かずに、気配だけで人影を捉え、

鳩尾に肘鉄を喰らわせ、刀を抜いた。振り向き様、そのまま、人影を斬り伏せ、左手に持った鞘で、人体急所を突く。

残った二人の男が、刀の柄に手を当てて、翡翠に歩み寄ろうとしていたが、翡翠は視線だけで、それを止める。

「……俺を狙う首謀者の名を言え」

二人の男は、翡翠の言葉に、刀を抜こうとするが、それより速く、翡翠は、一人の男の元へ距離を詰める。柄を男の胸に突き、もう一人の男の首に、一瞬で刀の刃を当てた。

「……言う気になったか？」

男は無言だった。翡翠は、首に当てる刃をさらに強く押しあてた。薄く皮が切れ、うつすらと血が出た。

「俺が当ててやってもいいが。俺を狙った首謀者は……」

「て、挺明様です！」

男が、震える声で、叫ぶように言った。翡翠はため息をつき、つぶやくように言う。

「……恵国の第一皇子、挺明様か」

翡翠は、首から刀を外し、男を正面から見る。

「こいつら全員、致命傷は与えていない。しばらくしたら目が覚めるだろう」

男は、驚いたように翡翠を見ている。

「こつちも、色々と面倒なんだ。こいつらを連れて、恵国に帰れ」

翡翠はそれだけ言い、男に背を向けた。翡翠は、心のどこかで、ここにいる者たちはもう、襲ってこないことを感じていた。

桃華は、翡翠が昼間、書き物をしていた匠院義塾の一室に向かった。戸を開けると、翡翠は、腰に刀を差しているところだった。夜の間に佇む翡翠は、先程まで着流しを着ていたはずだが、今は着替えていた。黒い立襟の服に、深い緑の上着。翡翠が普段、仕事で出かける時や、旅の道中身に付けているものだ。

「独りで慶を出るつもり？」

「俺を殺そうと狙っている奴がいる。俺と一緒にいたら周りが危険だ」

独り発とうとするのを止めるべきか……。しかし、桃華は、翡翠が独りになるのを止める言葉を持っていなかった。この場合、翡翠が独りで行動した方が、確かに安全だと、桃華にも分かっていた。もしも、桃華が翡翠と同じ立場だったら、同じ行動を取るだろうし、何より、翡翠は自分の身を守るくらいの实力は当然ある。

「白琳は？」

「覇玄の家へ預けたわ。今はそこが一番安全だから。しばらくしたら、匠院義塾に戻ってくると思うけど」

そうか、と頷く翡翠の声からは何の感情も読み取れなかった。

「桃華」

目線を外し、遠くを見るようにして、聞かれる。こういう時の翡翠は、決まって、答えにくいことを聞いてくる。けれども、そんなことを考えているとは悟られないように、無邪気に、何？ と、桃華は言った。

「……お前は、俺のことをどこまで知ってる」

一見、何の感情もこもっていない淡々とした声だった。だが、桃華には、翡翠が、動揺しているのを必死に隠そうとしているような気がしていた。不自然な冷静さが、何よりも翡翠の心情を表しているようだと思う。

「李仙道の入口で、お前が紅貴を助けて、俺が靖郭に他の奴らを送ったが、本来、逆の方が良かったはずだ。だが、その時紅貴を狙ってたやつら……それが恵国の奴らって言うなら説明がつく。奴らが俺のことを知ったら、俺を殺そうとするだろう。桃華はそれを防ぐために、紅貴を助ける役割を引き受けた。……おまえが俺のことを知っているとしたかと思えない。……お前は俺のことをどこまで——」

「巔家のこと？」

翡翠にこれ以上喋らせたなら、良くない方向に話が行くような気がし、桃華は、翡翠の言葉を遮るようにして言った。

「お前……」

「私が翡翠の質問に答えて、翡翠はどうするつもりだったの？……誰にも言うなって言うつもりだった？」

「いや……」

翡翠の否定の言葉が、肯定を意味していると、桃華は思った。

「……誰にも言わないよ。でも、駿ほど極端な考えは持っていないにしても、わたしも、駿と同じような考えを持ってるわ」

きっと、翡翠ならば、言葉の意味が分かるだろう。納得はしないだろう。

「翡翠、どうしてそこまで……」

「他の奴らには、俺が勝手に、一人で行動した、とでも言っておけ。俺の命を狙っている奴がいるなんて言ったら、多分、心配するだろう」

今度は翡翠が、桃華の言葉を遮り、この話はもう終わりだというように、翡翠が言った。

「文机の上に、手紙を用意した。それを渡しておけ……多分、恵国の都を過ぎたあたりで合流できるだろう。それまで、他の奴らを頼む」

翡翠は、もう話すことは無いというように、桃華の横を通り抜けるようにする。

——すまない

桃華の横を翡翠が通り抜ける時、小さな声でそう言われる。

それを一番言わなきゃいけないのは、白琳に対してでしょう？

桃華はそう言いたかったのだが、言葉にできなかった。

桃華は、翡翠がいなくなった部屋を見て、珍しくため息をついた。きっと、白琳と瑠璃は心配するだろう。紅貴も、顔には出さないだろうが、翡翠のことを気にするはずだ。けれど、そんな資格は自分にはないと、桃華は思う。白琳と瑠璃と紅貴がどう思つかを知って

いながら、翡翠が独りで発つことを許してしまっているのだから。（実際、翡翠が独りで行動した方が、みんなは安全だよ……）ならばせめて、翡翠を信用し、無事合流できることを願うしかないだろう。これではまるで、共犯者のようではないかと、桃華は思った。

「大変なの！」

紅貴が、瑠璃と共に、匠院義塾に戻ると、慌てた様子で桃華が駆け寄って来た。

「どうしたんですか？」

紅貴と瑠璃の後から、やって来た白琳が、桃華に問う。そんな白琳を見て、紅貴は違和感を感じる。白琳の横にいるはずのあいつがない。

「白琳、翡翠はどうしたんだ？」

白琳は、悲しそうに笑って言う。とても、綺麗な笑みなのだが、それ以上に、見ているこちらの心が痛くなる。

「翡翠様と一緒に歩いていたんですけど、何かあったみたいで、私を桃華に預けてどこかへ行ってしまった」

「うん、それでね。しばらく私と一緒に花火を見てただけど、翡翠の様子がおかしいと思ったのね。白琳は綺麗な格好してるから、変な男に絡まれちゃいけないと思って、霸玄に預けて、龍清は、豹馬に預けて翡翠を探すことにしたの！ そしたら、翡翠が書き物をしていた部屋にこれがあった！」

桃華が、手に持っていた紙を白琳に渡した。紙を見ていた白琳の目が僅かに、悲しげに伏せられていく。

「白琳、何て書いてあったんだ？」

「やることができたから、一足先に、慶を発つと。……恵国で合流できるはずって」

紅貴は、瑠璃と桃華に選んでもらった着物を着て、白琳が嬉しそうに微笑んでいた時のことを思い出す。これから、翡翠とお祭りに

行くという白琳は、見ているこちらでも嬉しくなるよな、幸せそうな笑みを浮かべていた。あの笑みはまぎれもなく、翡翠に向けられていたものだったのに、その翡翠が勝手に一人でいなくなるとはどういうことだろう。それに、翡翠は一応、病み上がりのはずだ。そんな翡翠が一人で慶を発つなんて……

翡翠へ対しての怒りと、心配という気持ちが複雑に絡み合っているのを、紅貴は感じた。

「ねえ、まだ夜で、街の門も閉まっているから、翡翠はまだ街の中にいるんじゃない？」

瑠璃がそう言うが桃華は首を振った。

「門が閉まっていると、門兵に気づかれないように、門を飛び越えて、街を出るなんて、翡翠は簡単にできるわ。天之助もいなくなつてたからもう街を出てると思う。今から私が天テンに乗って、翡翠を探すって手もあるけど、翡翠相手じゃ追いつけるかわからない

……」

「……夜の門の外は危険です。ですから、私たちは明日出発しましょう。翡翠様の言う通りなら、恵国に早くつけばそれだけ早く、翡翠様と合流できるでしょう」

「白琳、それで良いのか？」

白琳が、紅貴を安心させようとするように、やわらかい笑みを浮かべた。いつもだったら、そんな白琳の気持ちをありがたく受け取るだろうが、今は、申し訳なく思ってしまう。

「……夜、翡翠様が門の外に出たことは、正直心配ですが……」

白琳の声が、少し震えていた。翡翠に対しての、心配な気持ちを抑えられないようだ、紅貴は思った。しかし、その言葉を良い終えると、いつもの優しい口調に戻る。

「翡翠様を信じましょう」

「まったく、あの馬鹿兄、何考えているのよ！ まあいいわ。とりあえず、今は明日に備えて休みましょう」

瑠璃の言葉に、桃華、白琳が動き、慶に来てから宿として借りて

きた部屋に戻っていく。一人残された紅貴は、声を出す。

「おい」

もちろん、話しかける相手は、瑠璃、桃華、白琳の三人ではない。やがて、紅貴の声が届いたのか、目の前に管狐が姿を見せた。湖北村で出会った、あの管狐だ。管狐は、紅貴につぶらな瞳を向けている。

「気付かれないように、翡翠を探して追ってくれないか」

紅貴がそう言うと、管狐は紅貴の指を手加減なしで噛んだ。

「痛い！ 噛むなって！」

この管狐の主人は紅貴のはずなのだが、紅貴は完全に管狐に振り回されていた。しかし、そうも言っていられない。

「頼む！ 翡翠のことが心配なんだよ！」

紅貴がそう言うと、管狐は紅貴の指から口を離した。しかし、今度は紅貴の目の前であくびをしだす。

「ああー！ もうっ！ 俺が心配してるのもあるけど、白琳や瑠璃、桃華はもっと心配してるんだよ！ お前はあの三人が 悲しむ所を見たいのか？ 見たくないだろう？」

しばらくは身をくねらせるだけだったが、やがて、諦めたように紅貴をじつと見ると、姿が消えた。ようやく翡翠を追い始めたらしい。

翌朝、紅貴と、瑠璃、桃華、そして白琳の四人は翌朝、慶を發つた。いつもの神経を逆なでさせるような冷淡な声が聞こえない。見慣れた茶髪の後ろ姿が見えない。たったそれだけのことはずなのに、見慣れない光景に不安を感じる。

（白琳はもっと翡翠のことを心配しているんだろうなあ……）

翡翠に会ったらまっさきに殴ってやりたい。そんなことを思いながら、紅貴はため息をついた。

桜の花弁は散り、色が緑に変わりかけている。もう、春も終わろう

と
し
て
い
た。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2812ba/>

史書

2012年1月10日00時50分発行